

博士学位論文（東京外国語大学）  
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	鳥越慎太郎
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 205 号
学位授与の日付	2016 年 1 月 20 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	ポルトガル語の接続法とその習得

Name	Torigoe, Shintaro
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 205
Date	January 20, 2016
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	The Portuguese Subjunctive and Its Acquisition by L2 Learners

博士学位論文

# ポルトガル語の接続法とその習得

---

鳥越慎太郎

# 目次

序章.....	11
0.1. 本論文の目的 .....	11
0.2. 本論文の構成 .....	11
0.3. 本研究で扱う先行研究や例文について .....	13
第1章 接続法 .....	14
1. 接続法 .....	14
1.1. ポルトガル語動詞形態論における接続法 .....	15
1.2. 接続法の形態的特徴 .....	18
1.2.1. ポルトガル語接続法各形式の形態変化 .....	18
1.2.2. 接続法各形式の機能 .....	22
1.2.2.1. 接続法現在 .....	23
1.2.2.2. 接続法未来 .....	26
1.2.2.3. 接続法未完了過去 .....	33
1.2.2.4. 接続法完了過去、未来完了、過去完了 .....	37
1.3. 接続法が現れる統語構造 .....	40
1.3.1. 動詞の補語となる名詞節内 .....	40
1.3.2. 非人称評価表現において主語となる名詞節内 .....	41
1.3.3. 時間や条件、状況の副詞節や前置詞句節内 .....	41
1.3.4. 非指示先行詞を修飾する関係詞節内 .....	42
1.3.5. 一部の主節表現 .....	44
1.3.6. その他定型表現 .....	46
1.4. 接続法が現れる意味機能 .....	48
1.4.1. 多元的アプローチ: 接続法が現われる表現 .....	49
1.4.1.1. 願望、強制、依頼、禁止の表現 .....	49
1.4.1.2. 蓋然性、可能性、疑い、正当性の表現 .....	50
1.4.1.3. 驚き、後悔、喜び、感謝など感情の表現 .....	51
1.4.1.4. 不特定の、非指示的な人物を表す表現 .....	52
1.4.1.5. 譲歩の表現 .....	54
1.4.1.6. 条件、反実仮想の表現 .....	55
1.4.1.7. 目的の表現 .....	56
1.4.1.8. 時間の表現 .....	58
1.4.1.9. 程度、様態の表現 .....	59
1.4.1.10. 多元的アプローチ: まとめ .....	59
1.4.2. 一元的アプローチ: 叙法選択の決定に関する各仮説理論 .....	60

1.4.2.1.	Terrell & Hooper (1974) の assertion / non-assertion (presupposed) .....	60
1.4.2.2.	出口 (1981) の陰否法.....	64
1.4.2.3.	高垣 (1982, 1984)の独立文性と従属文性 .....	66
1.4.2.4.	福寫 (1990) の陳述性と命題性.....	69
1.4.2.5.	Maeda の Processamento Cognitivo 1, 2, 3 .....	72
1.4.3.	一元的アプローチのまとめ、概観.....	76
1.5.	まとめ.....	77
	第2章 叙法とモダリティ研究から見る接続法.....	78
2.	接続法とモダリティ論 .....	78
2.1.	叙法とモダリティ .....	78
2.2.	命題とモダリティ .....	80
2.3.	Realis と irrealis.....	83
2.4.	モダリティの意味的カテゴリー.....	85
2.4.1.	真偽判断のモダリティと当為判断のモダリティ .....	86
2.4.2.	Bybee, Pagliuca, & Perkins (1994) の分類.....	90
2.4.3.	Givón (1994) の mega-modality .....	91
2.4.4.	Palmer (2001) の分類.....	92
2.5.	モダリティと realis/irrealis.....	94
2.6.	二段構えのモダリティ.....	96
2.7.	まとめ：叙法とモダリティ論から見るポルトガル語接続法 .....	106
	第3章 第二言語接続法習得研究.....	107
3.	接続法の指導、教材.....	107
3.1.	接続法の学習、習得 .....	107
3.1.1.	動詞形態素習得研究.....	107
3.1.2.	第二言語接続法習得研究 .....	108
3.1.2.1.	Terrell, Baycott & Perone (1987) .....	109
3.1.2.2.	Stokes (1988) .....	111
3.1.2.3.	Collentine (1995).....	114
3.1.2.4.	Sanz (2003a).....	116
3.1.2.5.	Isabelli & Nishida (2005) .....	119
3.1.2.6.	Gudmestad (2006).....	122
3.1.2.7.	Howard (2008).....	125
3.1.2.8.	Bento (2013) .....	126
3.1.3.	各先行研究のまとめ.....	129
3.1.3.1.	学習環境について.....	129
3.1.3.2.	習得順序 .....	131

3.1.3.3.	矛盾点.....	132
3.1.3.4.	その他の問題点.....	133
3.2.	まとめ.....	133
第4章	直説法未来と過去未来.....	134
4.	直説法未来と過去未来.....	134
4.1.	未来とモダリティ.....	134
4.2.	ポルトガル語の直説法未来、直説法過去未来.....	135
4.2.1.	直説法未来、過去未来の語尾変化.....	136
4.2.2.	直説法未来の用法.....	137
4.2.3.	直説法過去未来の用法.....	139
4.2.4.	直説法未来と過去未来の関係.....	140
4.3.	非直説法叙法としての直説法未来・過去未来.....	142
4.3.1.	Alarcos Llorach の Modo Condicionado.....	143
4.3.2.	出口の推定法.....	144
4.3.3.	非直説法叙法の否定.....	146
4.4.	直説法未来・過去未来と接続法.....	147
4.5.	叙法とモダリティの観点から見る直説法未来・過去未来.....	148
4.6.	第二言語直説法未来・過去未来習得研究.....	149
4.7.	まとめ.....	151
第5章	研究設問.....	152
5.	研究設問.....	152
5.1.	表現別接続法習得順序の推定.....	152
5.2.	接続法未来の習得.....	152
5.3.	接続法と未来・過去未来との混同.....	152
5.4.	日本人学習者の接続法使用と習得.....	153
第6章	方法論.....	154
6.	方法論.....	154
6.1.	コーパスデータ.....	154
6.1.1.	Corpora do Português Língua Estrangeira (PLE).....	154
6.1.2.	Corpus de Produções Escritas de Aprendentes do PL2 (PEAPL2).....	156
6.1.3.	書き言葉データのまとめ.....	159
6.2.	データ分析.....	159
6.2.1.	品詞タグ付与.....	159
6.2.2.	コンコーダンサー: AntConc.....	160
6.2.3.	データ解析の手順.....	160
6.2.4.	データのコーディング.....	161

6.3. まとめ	168
第7章 分析結果	169
7. 分析結果	169
7.1. 接続法産出概観	169
7.1.1. Corpora do PLE	169
7.1.2. Corpus de PEAPL2	174
7.1.3. 両コーパスの扱いについて	179
7.2. 時制別の産出	181
7.2.1. Corpora do PLE	181
7.2.2. Corpora de PEAPL2	184
7.2.3. 両コーパスのまとめ	189
7.3. 文脈別の産出	190
7.3.1. 願望・希求表現	192
7.3.2. 許可・禁止表現	197
7.3.3. 命令・使役表現	199
7.3.4. 目的表現	203
7.3.5. 当為判断評価表現	206
7.3.6. 心配表現	208
7.3.7. 可能性表現	209
7.3.8. 疑念表現	212
7.3.9. 否定表現	215
7.3.10. 仮定想像表現	218
7.3.11. 時間表現	219
7.3.12. 条件表現	229
7.3.13. 反実仮想表現	233
7.3.14. 陳述表現	238
7.3.15. 真偽判断評価表現	243
7.3.16. Factive 感情表現	246
7.3.17. 譲歩表現	247
7.3.18. 程度・様態表現	253
7.3.19. 非指示関係詞表現	253
7.3.20. 一般関係詞表現	257
7.3.21. Ou seja	260
7.3.22. 列挙表現	263
7.3.23. その他定型表現	265
7.3.24. 主節での誤用	266

7.3.25.	指示関係詞表現 .....	270
7.3.26.	不定詞が要求される表現.....	273
7.3.27.	理由表現 .....	275
7.3.28.	比較表現 .....	277
7.3.29.	結果表現 .....	279
7.3.30.	Quer dizer que.....	280
7.4.	まとめ .....	281
第8章	研究設問に対する考察.....	283
8.	研究設問に対する考察 .....	283
8.1.	接続法習得順序 .....	283
8.1.1.	時制別接続法習得順序 .....	283
8.1.2.	表現別接続法習得順序 .....	283
8.2.	接続法未来の習得.....	293
8.3.	直説法未来・過去未来と接続法.....	300
8.4.	日本人学習者の接続法使用と習得 .....	312
8.5.	まとめ .....	317
第9章	結論にかえて .....	319
9.	結論にかえて.....	319
9.1.	本論のまとめ .....	319
9.1.1.	叙法とモダリティ論から見るポルトガル語接続法 .....	319
9.1.2.	第二言語ポルトガル語学習者の接続法習得 .....	321
9.2.	本論の課題と今後の展望.....	322
	参照文献 .....	324
	謝辞.....	334
付録1	Corpora do PLE / Corpus de PEAPL2 作文テーマ .....	336
付録2	作文テーマと接続法産出の回帰分析結果より .....	342
	残差検討 .....	342
表 1	動詞 falar (「話す」) の直説法現在と接続法現在.....	18
表 2	動詞 aparecer (「現れる」) の直説法現在と接続法現在 .....	18
表 3	動詞 vir (「来る」) の直説法現在(不規則)と接続法現在 .....	19
表 4	接続法現在の不規則動詞 .....	20
表 5	動詞 ter(「持っている」) の直説法完了過去と接続法未完了過去.....	20
表 6	動詞 falar(「話す」)の直説法完了過去(規則形)と接続法未来.....	21
表 7	動詞 vir(「来る」) の直説法完了過去と接続法未来.....	21
表 8	動詞 falar(「話す」)の接続法完了過去 .....	22

表 9 動詞 falar(「話す」)の接続法過去完了.....	22
表 10 動詞 falar(「話す」)の接続法未来完了.....	22
表 11 Bybee, Pagliuca & Parkins (1994) のモダリティ分類 (本論筆者によるまとめ、和訳).....	90
表 12 Palmer (2001) のモダリティ分類 (本論筆者によるまとめ、和訳).....	92
表 13 Terrell et al. (1987) で得られた接続法産出 (本論筆者によるまとめ).....	110
表 14 Stokes (1988, p.707, Table2) の各項目間のピアソンの積率相関係数 (和訳は本論筆者による).....	112
表 15 Stokes (1988, p.708, Table3) の口述タスクによる接続法産出の結果 (和訳は本論筆者による).....	113
表 16 Collentine (1995, appendix table 5) より、接続法要求名詞節表現における接続法の産出 (和訳は本論筆者による).....	115
表 17 Sanz (2003a) より、各表現での接続法選択 (p.70, table 6, 本論筆者による再現).....	117
表 18 Sanz (2003a) より学習者による文法性判断 (pp.78-80, table 8 より一部引用).....	118
表 19 Isabelli & Nishida (2005) より SA 環境の学習者の接続法産出結果 (p.83, table.1, 和訳は本論筆者による).....	120
表 20 Isabelli & Nishida (2005) より SA 環境学習者の接続法産出被験者数と比率 (p.86, table.8, 和訳は本論筆者による).....	121
表 21 Isabelli & Nishida (2005) より SA 環境学習者の文脈別接続法産出 (p.86, table.2-7 より本論筆者によるまとめ).....	121
表 22 Gudmestad (2006) より、各独立変数における期待値と接続法産出の有意差 (和訳は本論筆者による).....	124
表 23 Gudmestad (2006) より各独立変数の有無による接続法産出と期待値 (和訳は本論筆者による).....	124
表 24 Bento (2013) による接続法要求文脈の分類と、それらにおける接続法産出 (和訳は本論筆者による).....	127
表 25 各先行研究の方法論などのまとめ.....	129
表 26 falar(「話す」)の直説法未来.....	136
表 27 dizer(「言う」)の直説法未来.....	136
表 28 falar(「話す」)の直説法過去未来.....	136
表 29 dizer(「言う」)の直説法過去未来.....	136
表 30 Corpora do PLE の被験者の母語話者別の内訳 (PLE のウェブサイトより). 154	
表 31 Corpora do PLE の被験者の習熟度別の内訳 (PLE のウェブサイトより).....	156
表 32 Corpus de PEAPL2 の作文テーマと被験者の内訳 (PEAPL2 のウェブサイトよ	



り).....	156
表 33 Corpus de PEAPL2 の被験者の母語話者別の内訳 .....	157
表 34 Corpus de PEAPL2 の被験者の習熟度別の内訳.....	158
表 35 PLE と PEAPL2 の比較.....	159
表 36 本研究と Bento (2013) の文脈コードの比較.....	162
表 37 Corpora do PLE より被験者の母語別接続法産出 .....	169
表 38 Corpora de PLE より、被験者の習熟度別接続法産出.....	171
表 39 Corpora do PLE より、作文のテーマ別の接続法産出.....	172
表 40 Corpus de PEAPL2 より、被験者の母語別接続法産出.....	174
表 41 Corpus de PEAPL2 より、被験者の習熟度別の接続法産出.....	177
表 42 Corpus de PEAPL2 より、作文のテーマ別の接続法産出 .....	178
表 43 両コーパス間の母語別接続法産出のカイ二乗検定結果.....	179
表 44 両コーパス間の習熟度別接続法産出のカイ二乗検定結果 .....	180
表 45 Corpora do PLE より、被験者の習熟度別接続法各時制の産出 .....	181
表 46 Corpora do PLE より、被験者の母語別接続法各時制の産出.....	182
表 47 Corpora do PLE より、被験者の母語と習熟度別接続法各時制の産出 .....	183
表 48 Corpus de PEAPL2 より、被験者の習熟度別接続法各時制の産出.....	184
表 49 Corpus de PEAPL2 より、被験者の母語別接続法各時制の産出.....	185
表 50 Corpus de PEAPL2 より、被験者の母語と習熟度別接続法各時制の産出.....	186
表 51 両コーパスの文脈別の接続法産出.....	190
表 52 願望・希求表現における接続法の産出 (表現別) .....	193
表 53 願望・希求表現における接続法の産出(習熟度別) .....	196
表 54 願望・希求表現における接続法の産出 (母語別) .....	196
表 55 許可・禁止表現における接続法の産出 (表現別) .....	198
表 56 命令・使役表現における接続法の産出 (表現別) .....	199
表 57 命令・使役表現 (命令法表現) における接続法の産出 (習熟度別) .....	200
表 58 命令・使役表現 (その他表現) における接続法の産出 (習熟度別) .....	201
表 59 命令・使役表現 (その他表現) における接続法の産出 (時制形式別).....	201
表 60 命令・使役表現 (命令法表現) における接続法の産出 (母語別).....	202
表 61 命令・使役表現 (その他表現) における接続法の産出 (母語別).....	203
表 62 目的表現における接続法の産出 (表現別) .....	204
表 63 目的表現における接続法の産出 (習熟度別) .....	204
表 64 目的表現における接続法の産出 (母語別) .....	205
表 65 当為判断表現における接続法産出 (表現別) .....	207
表 66 当為判断表現における接続法産出 (習熟度別).....	207
表 67 当為判断表現における接続法産出 (母語別) .....	208

表 68	可能性表現における接続法産出 (表現別)	211
表 69	可能性表現における接続法産出 (習熟度別)	211
表 70	可能性表現における接続法産出 (母語別)	211
表 71	疑念表現における接続法産出 (表現別)	213
表 72	疑念表現における接続法産出 (習熟度別)	214
表 73	疑念表現における接続法産出 (母語別)	214
表 74	否定表現における接続法産出 (表現別)	216
表 75	否定表現における接続法産出 (習熟度別)	217
表 76	否定表現における接続法産出 (母語別)	217
表 77	時間表現における接続法産出 (表現別)	221
表 78	時間表現 ( <i>quando</i> 以外の表現) における接続法産出 (時制形式別)	222
表 79	時間表現 ( <i>quando</i> 表現) における接続法産出 (時制形式別)	225
表 80	時間表現 ( <i>quando</i> 以外の表現) における接続法産出 (習熟度別)	226
表 81	時間表現 ( <i>quando</i> 表現) における接続法産出 (習熟度別)	226
表 82	時間表現 ( <i>quando</i> 以外の表現) における接続法産出 (母語別)	227
表 83	時間表現 ( <i>quando</i> 表現) における接続法産出 (母語別)	228
表 84	条件表現における接続法産出 (表現別)	230
表 85	条件表現における接続法産出 (時制形式別)	231
表 86	条件表現における接続法産出 (習熟度別)	231
表 87	条件表現における接続法産出 (母語別)	232
表 88	反実仮想表現における接続法産出 (表現別)	234
表 89	反実仮想表現における接続法産出 (習熟度別)	235
表 90	反実仮想表現における接続法産出 (母語別)	235
表 91	反実仮想表現における接続法産出 (作文テーマ別)	237
表 92	接続法を許容する陳述表現における接続法の産出 (表現別)	239
表 93	接続法を許容しない陳述表現における接続法産出 (表現別)	240
表 94	陳述表現における接続法産出 (時制形式別)	241
表 95	陳述表現における接続法産出 (習熟度別)	241
表 96	陳述表現における接続法産出 (母語別)	242
表 97	真偽判断評価表現における接続法産出 (表現別)	244
表 98	真偽判断評価表現における接続法産出 (習熟度別)	245
表 99	真偽判断評価表現における接続法産出 (母語別)	246
表 100	譲歩表現における接続法産出 (表現別)	249
表 101	譲歩表現における接続法産出 (習熟度別)	251
表 102	譲歩表現における接続法産出 (母語別)	251
表 103	非指示関係詞表現における接続法産出 (表現別)	255

表 104	非指示関係詞表現における接続法産出 (習熟度別) .....	255
表 105	非指示関係詞表現における接続法産出 (母語別) .....	256
表 106	一般関係詞表現における接続法産出 (表現別) .....	258
表 107	一般関係詞表現における接続法産出 (習熟度別) .....	259
表 108	一般関係詞表現における接続法産出 (母語別) .....	259
表 109	<i>ou seja</i> 表現の産出 (習熟度別) .....	261
表 110	<i>ou seja</i> 表現の産出 (母語別) .....	262
表 111	列挙表現の産出 (習熟度別) .....	264
表 112	列挙表現の産出 (母語別) .....	265
表 113	主節での接続法の誤用 (習熟度別) .....	267
表 114	主節での接続法の誤用 (母語別) .....	268
表 115	指示関係詞表現における接続法誤用 (習熟度別) .....	271
表 116	指示関係詞表現における接続法誤用 (母語別) .....	272
表 117	表現別・習熟度別接続法産出 .....	284
表 118	表現別・習熟度別接続法産出 (標準化スコア) .....	286
表 119	PLE 標準化スコアのクラスター分析結果 (クラスター平均値) .....	289
表 120	PEAPL2 標準化スコアのクラスター分析結果 (クラスター平均値) .....	291
表 121	意味機能別接続法習得順序 .....	292
表 122	接続法未来の産出 (習熟度別) .....	294
表 123	接続法未来の産出(習熟度別、標準化スコア) .....	294
表 124	接続法未来の産出 (母語別) .....	295
表 125	接続法未来の産出 (表現別) .....	296
表 126	文脈別直説法未来と過去未来の産出 .....	302
表 127	直説法未来・過去未来の産出 (習熟度別) .....	309
表 128	習熟度別直説法未来・過去未来の産出 (習熟度別, 標準化スコア) .....	309
表 129	直説法未来・過去未来の産出 (母語別) .....	310
表 130	日本語母語話者学習者の接続法産出 (表現別) .....	312
表 131	日本語母語話者学習者の接続法使用 (時制形式別) .....	316
表 132	日本語母語話者学習者の接続法産出 (習熟度別) .....	317
図 1	ブラジル文法呼称法とポルトガル文法呼称法の法時制分類の比較 .....	16
図 2	Cunha & Cintra (2007, p. 395) の法時制体系図 (語尾変化例割愛、日本語訳は筆者による) .....	17
図 3	基準時と現在時、相対時の関係 (Lyons 1977, pp.818-820 に基づく、本論筆者によるまとめ) .....	36
図 4	Terrell & Hooper (1974, p.488, 本論筆者による再現) .....	63

図 5 陰否法のスケール (出口 1981, p.34).....	66
図 6 接続法各時制の及ぶ意味範囲 (Maeda 2004 より).....	76
図 7 Palmer (2001) におけるモダリティ表現形式の区分 (本論筆者による整理).....	80
図 8 仁田の言表事態 (命題) と言表態度 (モダリティ) との関係図 (仁田 1991 を元に 本論筆者による再現).....	81
図 9 益岡の命題とモダリティの階層関係図 (益岡 (1991), p.43 を元に筆者による再 現).....	83
図 10 Givón (1994) によるモダリティ分類と、スペイン語において対応する叙法 (本 論筆者による再現).....	92
図 11 モダリティのカテゴリーと <i>realis / irreali</i> の関係.....	95
図 12 Otaola Olano、仁田、益岡のそれぞれのモダリティ体系.....	97
図 13 和佐 (2005) によるモダリティの体系.....	99
図 14 命題と二段構えのモダリティの関係 (和佐 2005, p.27 より本論筆者による再 現).....	104
図 15 (205)の発話・伝達のモダリティと命題めあてのモダリティの関係.....	105
図 16 彌永 (2007) の「三段構えの時称体系」 (本論筆者による再現).....	142
図 17 出口 (1986) の法時制マトリックス (本論筆者による再現).....	145
図 18 陰否性と「推定法」(出口 1986, p.12).....	145
図 19 コーディング実例.....	162
図 20 PLE 標準化スコアのクラスター分析結果 (樹形図).....	289
図 21 PEAPL2 標準化スコアのクラスター分析結果 (樹形図).....	291

## 序章

### 0.1. 本論文の目的

本論文では以下の 2 点を目的としている。第一に学習者によるポルトガル語接続法の習得について、データに基づいて実証的に記述していくことである。ここでは被験者を長期的、質的に観察するのではなく、習熟度別大量データを用いての量的分析によって疑似的に習得を考察していく。加えて、先行研究結果などから 4 つの研究小設問を挙げて考察し、これについても考察していく。第二に、習得研究に先立ち、ポルトガル語接続法について叙法とモダリティの研究成果を反映しつつ再考していくことである。学習者が接続法を学習するに際し直面する困難の一因として考えられるのが、文法や教材における接続法の定義の曖昧さと、類似する意味を表現する他の言語形式との差異の解説の不足が考えられる。本論では、直説法と接続法の対立概念としての見方を批判的に検討し、叙法とモダリティの研究の視点から接続法をとらえ直し、直説法未来など意味的に類似する形式との関係にも着目していく。

### 0.2. 本論文の構成

第 1 章ではポルトガル語の接続法について概観する。始めに形態的特徴について接続法現在、未完了過去、未来の順にまとめていく。続いて、形態統語的観点から、接続法各時制形式が用いられる統語構造と意味機能面について説明する。次に、切り口を統語構造に変え、動詞補語名詞節、評価表現名詞節、副詞節、関係詞節、主節、そして各種定型表現における接続法各形式の用いられ方を見る。最後に意味機能の面から接続法の用法を見ていく。まず、接続法が用いられる意味機能を細かく列挙していく。続いて、これらの各意味機能に共通する一元的概念についての説明を試みる研究仮説をレビューしていく。最後に、個別言語における叙法対立の枠組みで接続法をとらえることの限界を指摘し、第 2 章へと続いていく。

第 2 章では接続法の上位概念である叙法とモダリティについての近年の研究成果を踏まえ、より広い視点から接続法をとらえていくを試みる。まずは叙法とモダリティについて定義し、命題とモダリティ、realis と irrealis、モダリティのカテゴリーの分類に関する主要な研究をレビューしていく。この中で、日本語文法で提案され、近年スペイン語文法でも導入されている「発話・伝達のモダリティ」と「命題めあてのモダリティ」からなるモダリティ理論も援用する。

第 3 章では第二言語習得研究における接続法習得研究の事例とその研究結果について、少数ではあるが手に入るものを詳細にまとめていく。各先行研究結果で見られる共通点と相違点を挙げ、そこから本論における副次的な研究設問を導いていく。

実際のデータ分析に移る前に、第 4 章では接続法と同じモダリティを表現する動詞形態素であり、学習者による接続法との混同例が報告される直説法未来と過去未来について概観する。個別言語の文法書における直説法未来と過去未来の定義や扱いを見たのち、第 2 章でまとめた叙法とモダリティの研究の見地からこれらを再考する。さらに直説法未来と過去未来の習得研究や、接続法を含めた叙法習得研究をレビューし、接続法との関係を考察していく。

第 5 章ではここまでの内容を踏まえたうえで本論における副次的な研究設問を提起していく。本論では接続法習得を記述していくほかに、意味機能別の習得順序、接続法未来の習得と誤用、接続法各形式と直説法未来・過去未来との混同、そして日本語母語話者学習者による接続法習得について確認、考察していく。

第 6 章では本論の方法論について述べていく。まずは使用した学習者コーパスデータについての概要を紹介する。続いて使用したタグ付けソフトと分析ソフト（コンコーダンスー）についての説明、そして分析結果の処理の手順について明示する。

第 7 章ではデータ分析の結果を詳細に記述していく。まずは各コーパスにおける接続法産出を被験者の母語別、習熟度別、作文テーマ別に、さらに各時制形式の習熟度別習得順

序を示す。後半は意味機能別の接続法産出と誤用を表現別、時制形式別、学習者の習熟度と母語別に詳細に記述していく。

第 8 章では第 5 章で挙げた研究設問、意味機能面での習得順序、接続法未来形式の習得と誤用、接続法各形式と直説法未来・過去未来との混同、そして日本語母語話者による接続法習得に対する考察を行う。

最後に第 9 章では結論に替えて本論の分析結果を再掲していく。また、本論の接続法研究や第二言語形態素習得研究における意義を再確認し、今後の展望などについても述べていく。

### 0.3. 本研究で扱う先行研究や例文について

本論で参照する先行研究や例文は、ポルトガル語のみならずスペイン語などの他のロマンス語のものも含まれる。各言語の接続法表現において、例えば一方では接続法のみしか認められず、他方では直説法も許容される、あるいは一方では接続法以外の有標表現に置き替えられていたり、一方に存在しない接続法形態素が用いられるなどの差異が生じる例も含まれる。本論ではこのような事例を慎重に注釈しつつ、言語間で普遍的な叙法選択やモダリティの仮説理論を考察、議論していく。また、ごく少数であるが、筆者による作例による例文はすべてネイティブスピーカーによる文法面、語用面での妥当性を確認している。

# 第1章 接続法

## 1. 接続法<sup>1</sup>

接続法 (英: subjunctive; ブラジルポルトガル語: subjuntivo; ヨーロッパポルトガル語: conjuntivo) は主にヨーロッパ言語や一部のバントゥー言語などに見られる叙法 (英: mood, 葡: modo)、すなわちモダリティを表現するための動詞の屈折形態の1つであり、多くにおいて直説法との対立概念として扱われる (Givón 1994; 亀井, 河野 & 千野 1995; Palmer 2001; etc.)。主に従属節で用いられ、人称、数、時制、アスペクト、ヴォイスとの関係性を持ち、その使用に文構造、副詞の種類及び位置といった統語構造的制約、主節の動詞の語彙やそれによって表明される命題 (従属節で表わされる事柄) への態度といった意味的制約、文脈や発話者の意図、聞き手からの関心や事前知識 (出口 1981, 高垣 1982) といった語用論的、心理学的、社会言語学的制約など様々な言語要素が複雑に関連する、「上級文法」<sup>2</sup>である。

ポルトガル語において接続法は命令法、条件法 (直説法過去未来)<sup>3</sup>、直説法未来、不定詞、法動詞や副詞などとともにモダリティを表現する文法項目のひとつとして位置づけられている (Mateus, Brito, Duarte & Faria 2003)。そのカバーする範囲は構造的にも意味的にも多様で、一元的な理論モデルで説明することが困難な文法項目である。また、同じくモダリティを表現する法動詞や副詞語彙に対して排他的ではなくしばしば共起し、動詞補語従属節では主節動詞語彙とも意味的に重複するため、冗長的な文法要素であるとされる (Collentine 1995, 2010; 彌永 2008, 2013; etc.)。特に複雑な叙法体系を持たない言語を母語とする学習者が習得するに際しては、意味や形式、語用などの多面的な理解が要求され、最も困難な文法項目のひとつとなり得るとされる (Collentine 1995, Perini 2002, 福寫

<sup>1</sup> 豊島 (1978) では直説法と接続法を指す呼称としてそれぞれ「叙実法」、「叙想法」を採用している。野村 (2007) によると、これは国内の古典的英語叙法研究の細江逸記の『英語叙法の研究』(1933) で提唱された呼称であるとされる。

<sup>2</sup> “Advanced-morphosyntactic grammar” (Isabelli & Nishida 2005)

<sup>3</sup> ポルトガルの文法呼称法では「条件法(Condiciona (Presente))」、ブラジルの文法呼称法では「直説法過去未来(Futuro do Pretérito do Indicativo)」とされている。



2005, etc.)。

以下、ポルトガル語の接続法について形態的側面、時制に関連する形態統語的側面、統語構造的側面、意味的側面から先行研究に沿ってまとめていく。各観点は独立的ではなく複雑に関連し合うため、内容的に重複するところがあることをあらかじめ注釈する。また、本論では全体を通じ、スペイン語研究における接続法に関する仮説理論も引用していく。

### 1.1. ポルトガル語動詞形態論における接続法

ポルトガル語の動詞形態論では、まず叙法で分類し、時制とアスペクトで下位区分されていくのが一般的である。ブラジルポルトガル語、ヨーロッパポルトガル語のそれぞれの文法呼称法 (Nomenclatura Gramatical Brasileira 1958, Nomenclatura Gramatical Brasileira 1967) では、階層関係とはされていないものの、序列的にまず直説法と接続法などの叙法を分類し、続いて現在、過去、未来などの時制を並べている (図 1)。

ブラジル文法呼称法 <sup>4</sup>		ポルトガル文法呼称法 <sup>5</sup>		
a 叙法	直説法	4 叙法	直説法	
	接続法		条件法	
	命令法		接続法	
b 名詞的用法	不定詞	5. 時制	命令法	
	現在分詞		人称不定詞	
	過去分詞		現在	
c 時制	現在	過去	未完了過去	
	未完了過去	単純	完了過去	単純
		複合		複合
	完了過去	単純	過去完了	単純
		複合		複合

<sup>4</sup> 以下のリンクからダウンロードした。

<http://people.ufpr.br/~borges/publicacoes/notaveis/NGB.pdf#search=%27nomenclatura+gramatical+brasileira%27> (2015年1月15日閲覧)

<sup>5</sup> Portal da Língua Portuguesa のページを参照した。

<http://www.portaldalinguaportuguesa.org/?action=nomenclatura> (2015年1月15日閲覧)

過去完了	単純		未来	単純
	複合			複合
未来	単純	6. アスペクト		
	複合			
過去未来	単純			
	複合			

図 1 ブラジル文法呼称法とポルトガル文法呼称法の法時制分類の比較

ただし、例えばブラジル文法呼称法の提示の仕方では、直説法未完了過去の複合や接続法の過去未来など存在しない形式を示唆してしまうことになる。また、両呼称法ともアスペクト面の分類が徹底されていない。特に、完了過去と未完了過去の分類はアスペクトの観点からなされるべきである。単純・複合形式の分類でも過去完了のように機能的に差異がない場合や、完了過去（単純=完了過去、複合=現在完了）のようにまったく異なる機能を有してしまう場合が考慮されていない（see also 彌永 2007）。

各文法書に目を通すと、Cunha & Cintra (2007, p.395) の法時制体系図がポルトガル語の動詞形態素を網羅している。同著では叙法を最上位として時制、相対時制、単純・複合形式の順に下位区分する階層関係を、図を用いて明示している（図 2）。

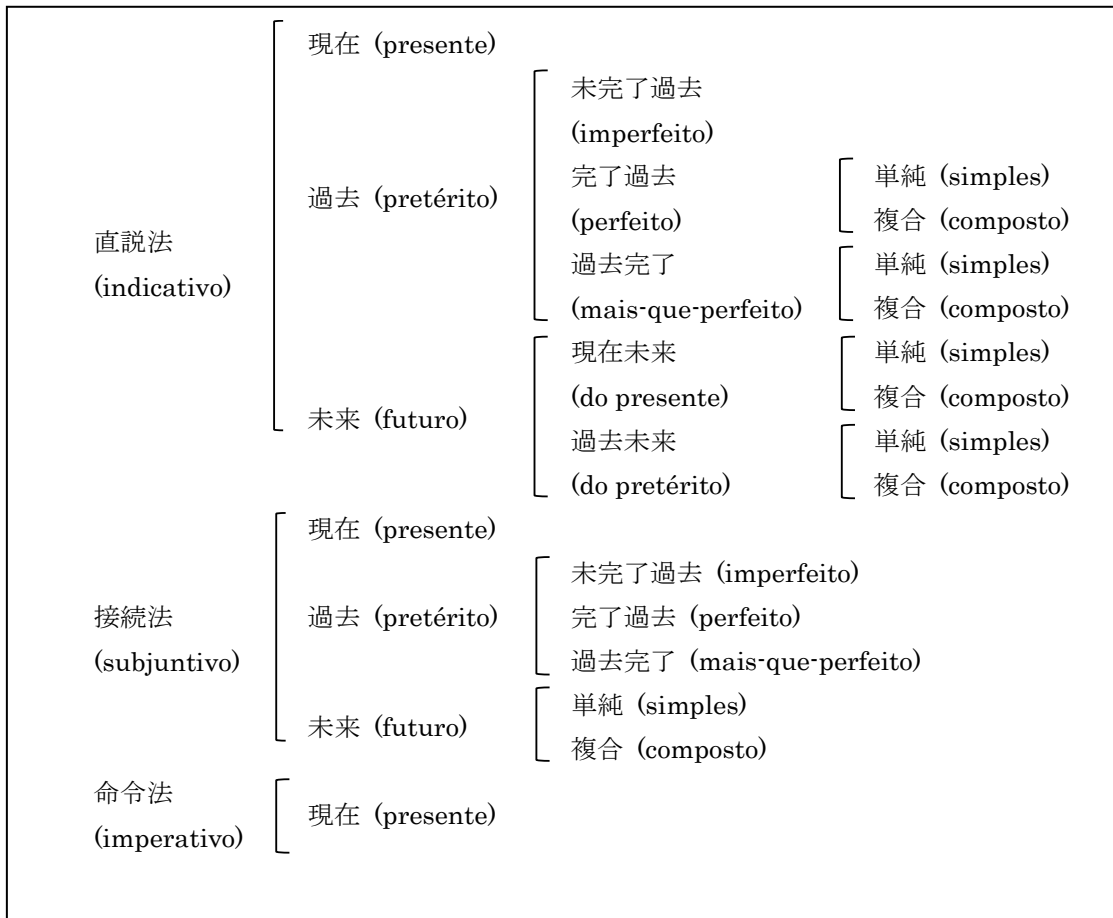


図 2 Cunha & Cintra (2007, p. 395) の法時制体系図 (語尾変化例割愛、日本語訳は筆者による)

また、Bechara (2007) では Cunha & Cintra (2007) のような明確な階層関係は主張していないが、動詞の語尾変化表の区分を叙法ごとに分類しており、叙法を上位とする法時制体系を暗示している。

なお、このように法時制体系の最上位概念を形成する対立概念として扱われるに際し、特に日本国内での文法書や教材において、直説法は「事実を客観的に表す」動詞形式、接続法は、「心の中での考え」や「主観的な意見」を表現するための動詞活用形などと定義されることが多い。ただし、定義自体が曖昧な表現であるうえ、直説法が主観的意見を表現したり、反対に、事実の表現に接続法が用いられたりするような事例もあるため、接続法

への理解を妨げ得る定義であると考えられる。

以上のように、ポルトガル語形態論では接続法は直説法とともに最上位のカテゴリのひとつとして、各時制・アスペクトの形態素を下位に束ねる階層関係で扱われることが多い。次節ではポルトガル語各形式の特徴を記述する。

## 1.2. 接続法の形態的特徴

### 1.2.1. ポルトガル語接続法各形式の形態変化

ポルトガル語の接続法形態素は現在、未完了過去、未来の 3 時制とそれぞれの完了アスペクト（完了過去、過去完了、未来完了）の 6 形式<sup>6</sup>を持つため、体系的には直説法に次いで複雑な叙法である。一方で、動詞の屈折に関して「不規則変化」とされるものは語幹レベルに留まり、語尾は全形式を通じて規則的な変化をする。以下に接続法各形式の屈折をまとめる。表中の直説法変化表での下線は接続法の語根となる部分、接続法変化表での下線は語尾である。

表 1 動詞 *falar*（「話す」）の直説法現在と接続法現在

直説法現在				接続法現在		
	単数	複数		単数	複数	
1 人称	<u>falo</u>	falamos	→	1 人称	fale <u>s</u>	fale <u>mos</u>
2 人称	falas	falais		2 人称	fale <u>s</u>	fale <u>is</u>
3 人称	fala	falam		3 人称	fale <u>s</u>	fale <u>m</u>

表 2 動詞 *aparecer*（「現れる」）の直説法現在と接続法現在

直説法現在			接続法現在	

<sup>6</sup> 呼称及びその和訳については定まっていると言えない。本論では武田, ポリート & 黒澤 (2014) の呼称を採用しているが、彌永 (2008)、彌永 et al. (2012) では用法に即したのものとして現在を「現在形」、未完了過去を「半過去形」、未来を「未来形」、完了過去を「過去形」、過去完了を「大過去形」、未来完了を「複合未来形」という呼称の採用を提案している。他に、完了過去を「現在完了」と称している例もある (富野 & 伊藤 2013)。

	単数	複数		単数	複数
1 人称	<u>apareço</u>	aparecemos	→	1 人称	apareça <u>amos</u>
2 人称	apareces	apareceis		2 人称	apareça <u>is</u>
3 人称	aparece	aparecem		3 人称	apareça <u>m</u>

表 3 動詞 *vir* (「来る」) の直説法現在(不規則)と接続法現在

直説法現在				接続法現在		
	単数	複数		単数	複数	
1 人称	<u>venho</u>	vimos	→	1 人称	venha <u>mos</u>	
2 人称	vens	vindes		2 人称	venha <u>is</u>	
3 人称	vem	vêm		3 人称	venha <u>m</u>	

ポルトガル語の動詞は不定詞の語尾がそれぞれ -ar、-er、-ir からなる 3 つのグループに分けられる<sup>7</sup>。接続法現在では、直説法現在の 1 人称単数の幹母音 (vogal temática)<sup>8</sup> を -ar 動詞 (第 1 群動詞) では -e に (表 1)、-er 動詞 (第 2 群動詞, 表 2) と -ir 動詞 (第 3 群動詞, 表 3) では -a に変化させて語幹とし、直説法現在の規則形と同様に語尾変化する。その際、音韻によっては語幹の表記が変化する語もある (表 2)。また、直説法現在において不規則変化をする動詞に関してもほとんどの場合同様に規則的に変化する (表 3)<sup>9</sup> が、*ser* (コピュラ)、*estar* (コピュラ)、*ir* (「行く」)、*dar* (「与える」)、*haver* (「ある」)、*querer* (「求める」)、*saber* (「知っている」)、*caber* (「収まる」) の 8 語彙では完全な不規則形となる (武田 et al. 2014, Bechara 2007, Cunha & Cintra 2007, etc.) (表 4)。

<sup>7</sup> なお、*pôr* とその派生語からなる -or 動詞もあるが、すべて *pôr* の活用に準じるため、本節では割愛する。

<sup>8</sup> 和訳は鳥居 (2013) より。

<sup>9</sup> Bechara (2007) では屈折によって語幹が語根から変化する動詞をすべて「不規則動詞」と呼び、語幹の変化が直説法現在のみにとどまるものを弱不規則、直説法完了過去及び接続法未完了過去、接続法未来に及ぶものを強不規則と分類している。本論では接続法現在の活用について、語幹が語根と異なっても直説法現在の 1 人称単数の語幹のまま語尾を変化させるものを不規則動詞とみなさず、接続法特有の語幹を持つ (ポルトガル語では後述の 8 例にあたる) もののみを「不規則動詞」として扱っている。また、接続法未来、未完了過去についても同様に、不規則な語尾変化が存在しないため、不規則動詞は存在しないという立場を取っている。

表 4 接続法現在の不規則動詞

	ser	estar	ir	dar	haver	querer	saber	caber
1 人称 単数	seja	esteja	vá	dê	haja	queira	saiba	caiba
2 人称 単数	sejas	estejas	vás	dês	hajas	queiras	saibas	caibas
3 人称 単数	seja	esteja	vá	dê	haja	queira	saiba	caiba
1 人称 複数	sejamos	estejamos	vamos	demos	hajamos	queiramos	saibamos	caibamos
2 人称 複数	sejais	estejais	vades	deis	hajais	queirais	saibais	caibais
3 人称 複数	sejam	estejam	vão	deem	hajam	queiram	saibam	caibam

接続法現在は規則動詞では直説法からの幹母音の入れ替えによって形成されているため、学習者にとっての学習負担は軽いものと思われる。一方、Terrell, Baycroft & Perone (1987) は、学習者にとって接続法現在の規則活用は-e と-a の間の単純な語尾の交換作業に過ぎないため、直説法形式と接続法形式、あるいは動詞語彙の原形（不定詞）を自覚を持って習得しているというよりも、確信を持たずにいずれかの語尾変化を勘で当てはめているだけである可能性を、そしてそれらを混同して化石化させてしまう危険性を指摘している。

次に接続法未完了過去と接続法未来の活用をまとめる。

表 5 動詞 *ter*（「持っている」）の直説法完了過去と接続法未完了過去

直説法完了過去				接続法未完了過去		
	単数	複数			単数	複数
1 人称	tive	tivemos	→	1 人称	tivesse	tivéssemos
2 人称	tiveste	tivesteis		2 人称	tivesses	tivésseis
3 人称	teve	tiveram		3 人称	tivesse	tivessem

表 6 動詞 *falar*(「話す」)の直説法完了過去(規則形)と接続法未来

直説法完了過去				接続法未来		
	単数	複数		単数	複数	
1 人称	falei	falámos	→	1 人称	falar	falamos
2 人称	falaste	falastes		2 人称	falares	falardes
3 人称	falou	falaram		3 人称	falar	falarem

表 7 動詞 *vir*(「来る」)の直説法完了過去と接続法未来

直説法完了過去				接続法未来		
	単数	複数		単数	複数	
1 人称	vim	viemos	→	1 人称	vier	viermos
2 人称	vieste	viestes		2 人称	vieres	vierdes
3 人称	veio	vieram		3 人称	vier	vierem

接続法未完了過去及び接続法未来では、直説法完了過去の 2 人称単数または 1 人称複数の語根 (Bechara 2007, Cunha & Cintra 2007)、あるいは 3 人称複数 (Lima & Iunes 2004) と語幹を共通して (本節では 3 人称複数を採用している)、それぞれの特有の活用語尾を後続する。なお、接続法未完了過去、接続法未来として完全に不規則な活用語尾を有するものはない。表 6 の例のように直説法完了過去の語幹が規則形の動詞は接続法未来の活用が人称不定詞<sup>10</sup>と共通になる。

前述の通り、ポルトガル語の接続法では現在、未完了過去、未来の各時制単純形式に加えて、それぞれの完了アスペクトである完了過去 (現在完了) (表 8)、過去完了(大過去) (表 9)、未来完了 (表 10)が存在する。現代ポルトガル語ではそれぞれ助動詞 *ter*<sup>11</sup>の接続法現在、接続法未完了過去、接続法未来形式に過去分詞を後続させる複合形式である。なお、過去

<sup>10</sup> 語尾を伴うことで動作主を明示または暗示することができる不定詞 (不定形) で、ロマンス諸語ではポルトガル語やガリシア語、ミランダ語に特有の形態素とされる。ただし接続法未来と人称不定詞はそれぞれ異なる起源を持つとされるため (cf. 鳥居 2000)、直接的に関係しあっているのではなく偶然の結果として同じ語尾を共有していると考えられる (Cunha & Cintra 2007)。

<sup>11</sup> 文語では *haver* が用いられることもある。

分詞には性数変化は起こらない。

表 8 動詞 *falar*(「話す」)の接続法完了過去

接続法完了過去				
	単数	複数		過去分詞
1 人称	<i>tenha</i>	<i>tenhamos</i>		
2 人称	<i>tenhas</i>	<i>tenhais</i>	+	<i>falado</i>
3 人称	<i>tenha</i>	<i>tenham</i>		

表 9 動詞 *falar*(「話す」)の接続法過去完了

接続法過去完了				
	単数	複数		過去分詞
1 人称	<i>tivesse</i>	<i>tivéssemos</i>		
2 人称	<i>tivesses</i>	<i>tivésseis</i>	+	<i>falado</i>
3 人称	<i>tivesse</i>	<i>tivessem</i>		

表 10 動詞 *falar*(「話す」)の接続法未来完了

接続法未来完了				
	単数	複数		過去分詞
1 人称	<i>tiver</i>	<i>tivermos</i>		
2 人称	<i>tiveres</i>	<i>tiverdes</i>	+	<i>falado</i>
3 人称	<i>tiver</i>	<i>tiverem</i>		

### 1.2.2. 接続法各形式の機能

本研究では時制とアスペクトについては深く考察しないが、ここでは接続法各時制形式が示す機能についてまとめる。接続法の各時制形態素は単なる現在、過去、未来の時間指示に対応するいわゆる時制一致の機能だけでなく、使用される表現や構造によって各形式独自の意味機能を持つ (cf. Maeda 2004, 彌永 2008)。



### 1.2.2.1. 接続法現在

接続法現在は基本的には接続法が要求される表現において命題内の非過去時を指示する形式である。

(1) Desejo que esteja bem.

desire-PRS-1SG that be-SBJV-PRES-3SG well

‘I hope that you are fine.’

(田所 et al. 2013, グロス及び下線は本論筆者による)

(2) A Maria espera que o Rui chegue a horas.

ART.DEF Maria hope-PRS-1SG that ART.DEF Rui arrive-SBJV-PRES-3SG in time

‘Maria hopes that Rui arrives on time.’

(3) É uma pena que escrevas essa carta.

be-PRES-3SG ART.INDF pity that write-SBJV-PRES-2SG that letter

‘It is a shame that you wrote that letter.’

(Mateus et al. 2003)

彌永 (2008) によると接続法現在は発話時 (現在時) との同時性を有するとされるが、表現によっては発話時点以降 (後時<sup>12</sup>: *posterior*, Mateus et al. 2003)、あるいは発話時以前 (前時<sup>13</sup>: *anterior*, *ibid*) の時間を指示する場合もある。すなわち、アスペクト面については無標の形式であると言える。この点については直説法現在と共通していると言えよう。

構造的側面から考察すると、接続法現在が用いられる文構造の種類は最も多く、名詞節 (動詞補語節、名詞補語節、評価文)、副詞節、関係詞 (形容詞) 節のほぼすべての接続法が要求される文脈構造で用いることができる。

<sup>12</sup> 『言語学大辞典』 (亀井 et al. 1995) では「後」と訳されている。

<sup>13</sup> 同じく『言語学大辞典』では「前」と訳されている。

- (4) É duvidoso que a Maria esteja em casa.  
 be-PRES-3SG doubtful that ART.DEF Maria be-SBJV-PRES-3SG in home  
 ‘It is doubtful that Maria is home.’
- (5) A dúvida de que ele ganhe o prémio preocupa-me.  
 ART.DEF doubt of that he-win-SBJV-PRES-3SG ART.DEF prize worry-PRES-3SG+ACC-1SG  
 ‘The uncertainty about whether he will win the prize concerns me.’
- (6) A Rita procura um livro que tenha gravuras do Porto.  
 ART.DEF Rita look.for-PRES-3SG ART.INDF book REL have-SBJV-3SG pictures of:ART.DEF Porto  
 ‘Rita is looking for a book that has some pictures of Porto.’
- (7) Ele volta para que todos fiquem contentes.  
 he return-PRES-3SG for that all.people become-SBJV-PRES-3PL content-PL  
 ‘He is returning so that everyone will be happy.’
- (8) Embora seja tarde, vou sair.  
 although be-SBJV-PRES-3SG late go-PRES-1sg go.out-INF  
 ‘Although it is late, I am going to go out.’

(Mateus et al. 2003)

ただし、接続法が要求される非過去表現において接続法現在が用いられない構造がある。例として、接続詞 *se* (if) を用いた条件表現、または *quando* (when) を用いた時間表現などが挙げられる。

- (9) Se você chegar / \*chegue, eu vou sair.  
 If you arrive-SBJV-FUT-3SG arrive-SBJV-PRES-3SG I go-PRES-1sg go.out-INF

‘If you arrive, I am going to leave.’

(Comrie & Holmback 1984)

(10) Se a Maria está em casa, então vamos visitá-la.

If ART.DEF Maria be-PRES-3SG in home then go-PRES-1PL visit-INF;ACC-3SG

‘If Maria is home, then let us visit her.’

(11) Se a Maria estiver em casa, vamos visitá-la.

If ART.DEF Maria be-FUT-3SG in home go-PRES-1PL visit-INF;ACC-3SG

‘If Maria is home, let us visit her.’

(12) Se a Maria estivesse em casa, íamos visitá-la.

If ART.DEF Maria be-IPFV-3SG in home go-PRES-1PL visit-INF;ACC-3SG

‘If Maria were home, we would visit her.’

(Mateus et al. 2003)

接続詞 *se* または *quando* を用いた条件表現や時間表現において、命題（副詞節内の内容）の実現の可能性を示唆する態度を示す場合は直説法現在(10)<sup>14</sup>、または接続法未来(11)、実現が現実的でないという態度を示す場合は接続法未完了過去(12)を節内の動詞に用いる。いずれも時間指示は非過去である。スペイン語など他のロマンス言語の同表現において、実現の度合いに関心がない場合は接続法現在が用いられるが (cf. Fleischman 1982/2009)、ポルトガル語では接続法現在は許容されない。ただし、ほとんど同様の内容を伝達する表現でも *caso* や *no caso que* (in case)、*a não ser que* (unless) などによって導入される条件表現などでは接続法現在が用いられ、接続法未来は許容されない。

---

<sup>14</sup> 特に直説法現在を用いる場合は習慣的な内容となる。

### 1.2.2.2. 接続法未来

接続法未来は接続法現在と同様に非過去時におけるモダリティを示す形態素である。接続法未来は他のロマンス語では用いられなくなっている時制形態であるため (e.g. Fleischman 1982, 寺崎 1998)、しばしばポルトガル語独特の文法現象として取り上げられることがある<sup>15</sup>。

接続法未来はその呼称から本質的に未来時制として未来時のみを指示するように解釈され、またそれを前提として解説している文法書や研究 (e.g. Bechara 2007, Cunha & Cintra 2007, 竹原 1984, 田所 & 伊藤 2004, 市之瀬 2012, 富野 & 伊藤 2013, 荒井 2013) が多く見受けられるが、接続法未来の時間指示範囲は未来のみにとどまらない。まず、接続法未来は現在時制に対する過去時制とは異なり、必ずしも現在時制に対する未来時制として機能するわけではない。

(13) Sinto muito que ele esteja ausente.

be.sorry-PRES-1SG very.much that hebe-SBJV-PRES-3SG absent

'I am very sorry that he is absent.'

(14) Sinto muito que ele tenha estado ausente.

be.sorry-PRES-1SG very.much that hehave-SBJV-PRES-3SG be-PTCP absent

'I am very sorry that he was absent.'

(15) Senti muito que ele estivesse ausente.

be.sorry-PFV-1SG very.much that hebe-SBJV-IPFV-3SG absent

'I was very sorry that he was absent.'

(16) Sentirei muito que ele \*estiver ausente.

be.sorry-FUT-1SG very.much that hebe-SBJV-FUT-3SG absent

---

<sup>15</sup> 『言語学大辞典』(亀井 et al. 1995) によると、ドイツ語にも接続法未来に相当する形式が存在するとされる。

‘I will be very sorry if he is absent.’

(17) Sentirei muito que ele vá estar ausente.

be.sorry-FUT-1SG very.much that hego-SBJV-PRES-3SG be-INF absent

‘I will be very sorry if he is absent.’

(Comrie & Holmback 1984)

(13)(14)の現時の文脈の例に対し、主節で直説法完了過去 *senti* によって文脈の過去時が指示されている(15)は従属節内の時制もこれに一致し、*estivesse* と接続法過去になっている。一方、主節で *sentirei* と直説法未来によって未来時を指示されている(16)において、従属節内では接続法未来は文法的に許容されず、接続法現在や *ir* を用いた迂言未来表現 (*go-future*: Fleischman 1982) が用いられる。すなわち、接続法未来は未来時制として機能することを文法的に許されていない。

一方で、文脈は未来ではないものの、従属節で接続法未来が用いられる例もある。

(18) José sempre dança com a mulher que tiver olhos azuis.

José always dance-PRES-3SG with ART.DEF woman REL have-SBJV-FUT-3SG eyes blue-PL

‘José always dances with the woman who has blue eyes.’

(19) A mulher que for rica não tem que ser

bonita.

ART.DEF woman REL be-SBJV-FUT-3SG rich not have-PRES-3SG that be-INF

beautiful

‘The rich woman must not be beautiful.’

(Comrie & Holmback 1984)

(18)、(19)の関係詞節表現では、Joséが踊りたがるような女性が「目が青いこと」や、必ずしも美しくないような女性が「豊かであること」は未来時における情報であるとは限らない。

このように、接続法未来は時間指示の面で接続法現在と対立しているとは言えないことがわかる (Comrie & Holmback 1984, 寺崎 1998<sup>16</sup>, 彌永 2008)。接続法未来と接続法現在をともに非過去指示時制とすると重複するようであるが、両形式はある程度の使用文脈の「棲み分け」がなされている (鳥越 2010)。すなわち、接続法未来が用いられる表現は限定的で、制限関係詞節表現や、一部の時間や条件、様態を表す副詞節表現(20-21)でのみ用いられる。

(20) Faça como você achar melhor.

do-IMP as you think-SBJV-FUT-3SG better

'Do what you think is better.'

(21) Ele precisa se comportar conforme eu disser.

he need-PRES-3SG REFL-3SG behave-INF according.as I say-SBJV-FUT-3SG

'He needs to behave as I say.'

(田所 et al. 2013)

ただし時間表現の一部と関係詞節では接続法現在と未来が共存する。多くの教材や文法書において、これらの場合二形式の使い分けによる意味的な差異についての説明はほとんどなされていない (e.g. Bechara 2007, Cunha & Cintra 2007, 田所 et al. 2013, 富野 & 伊藤 2013) が、Comrie & Holmback (1984) はこれらの場合における二形式の意味的な差

---

<sup>16</sup> スペイン語文法の事例ではあるが、寺崎 (1998) は接続法未来を「他の時制と区別すべき特別の時制的あるいは法的価値を持っていない」ととらえ、「接続法現在(V現在完了)-re 形とも呼ぶべき形式」としている。

異について解説している。

まず、時間や条件の表現であるが、Comrie & Holmback の説明によると条件の表現においては *se* に続く従属節においては接続法未来が用いられ、*a não ser que*、*menos que*、*no caso que* に続く従属節では接続法現在が用いられるとされる。時間の表現では *quando* に続く従属節では接続法未来が、*antes que* (before)、*até que* (till / until) に続く従属節では接続法現在が(21)用いられる。一方で *sempre que* (everytime)、*enquanto* (while)、*depois que* (after)、*assim que* (as soon as)、*logo que* (as soon as)、*tão logo*、*tão depressa* に続く表現では接続法未来と接続法現在が両方とも用いられるが、どちらかというと前者が好まれる傾向があるという(23)。

(22) José terá comido antes que a família saia. S > E > R

José have-FUT-3SG eat-PTCP before that ART.DEF family go.out-SBJV-PRES-3SG

‘José will have eaten before the family leaves.’

(23) Depois que José comer, a família vai sair. S > R > E

after that José eat-SBJV-FUT-3SG ART.DEF family go-PRES-3SG go.out-INF

‘After José eats, the family will leave.’

(24) Quando José estiver comendo, a família vai sair. S > E = R

when José eat-SBJV-FUT-PROG-3SG ART.DEF family go-PRES-3SG go.out-INF

‘While José is eating the family will leave.’

(25) Vamos ficar aqui fora até que chova/ \*chover. S > E > R

go-PRES-1PL stay-INF here out untilthat rain-SBJV-PRES-3SG rain-SBJV-FUT-3SG

‘Let us stay outside until it rains.’

(26) Vamos ficar aqui fora enquanto não chover. S > E = R

go-PRES-1PL stay-INF here out until not rain-SBJV-FUT-3SG

‘Let us stay outside while it is not raining.’

Comrie & Holmback は相対時制の考え方 (cf. Comrie 1985) を援用し、従属節内であらわされる参照時間における事象(R)が、発話時点(S)以降の内容であり、主節であらわされる指示時間での事象(E)と同時か、それ以前に起こる場合に従属節内の参照時間事象に接続法未来が用いられるとされる。Comrie & Holmback は時間表現における接続法未来の特徴を以下にまとめる。

(27) Future subjunctive:

$$E \left\{ \begin{array}{l} \text{before} \\ \text{simul} \end{array} \right\} R \text{ after } S$$

(Comrie & Holmback 1984)

なお、Fleischman (1982) や竹原 (1984)<sup>17</sup>、坂東 (1994) も、それぞれの引用はないが同様の考察を行っている。特に、Fleischman によるとこの接続法未来を用いる時間・条件表現における参照時と指示時の関係は、現代ポルトガル語に限らず古スペイン語においても見られたとされる (ibid, pp. 137-138)。

また、関係詞節表現においても接続法未来と接続法現在は一見混在しているようであるが、意味的、統語構造的に棲み分けがなされている。関係詞節表現においては先行詞が定冠詞などを伴うか否かの形式的な「定」・「不定」 (*definite / indefinite*) にかかわらず、意味的、文脈的に特定の人や物を「指示する」 (*referencial*) 場合は直説法、「指示しない」 (*non-referencial*) 場合は接続法を用いる (Comrie & Holmback 1984, Givón 1994)。さらにポルトガル語ではこれに加え、特定の表現によって特定の集団内における人や物一般を

<sup>17</sup> ただし、「永遠に続く進行」(p.327) や「未来に置かれた一つの完了した仮説像」(p. 329) など、定義が一貫していない。



示す場合に接続法未来が多く用いられるとされる (Comrie & Holmback ibid, Becker 2010)。

(28) José quer casar com uma mulher que tem muito dinheiro.

José want-PRES-3SG marry-INF with ART.INDF woman REL have-IND-PRES-3SG much money

‘José wants to marry a woman who has plenty of money.’

(29) José quer casar com uma mulher que tenha muito dinheiro.

José want-PRES-3SG marry-INF with ART.INDF woman REL have-SBJV-PRES-3SG much money

‘José wants to marry a woman who has plenty of money.’

(30) José quer casar com a mulher que tiver muito dinheiro.

José want-PRES-3SG marry-INF with ART.DEF woman REL have-SBJV-FUT-3SG much money

‘José wants to marry any woman who has plenty of money.’

(Comrie & Holmback 1984)

先行詞が指示する具体的な人物の存在が認識されている場合には直説法(28)、先行詞が指示する人物の存在の可能性が現実世界で想定されていない場合は接続法現在(29)、先行詞が特定集団の中における不特定の人物について言及する場合は接続法未来(30)が用いられる (see also Coimbra & Coimbra 2010)。なお、3例とも結果として人や物一般について言及

している例として解釈することができる (Comrie & Holmback 1984)。接続法未来を伴う一般的先行詞となるのは定冠詞を伴う名詞と、主節で主語となっている無冠詞名詞(31)、非語彙先行詞 (*o que*)(32)、ゼロ先行詞関係代名詞(33)であるとされる。一方、主節で目的語となっている無冠詞先行詞を一般的物として修飾する場合は関係節内の動詞は接続法現在になる傾向があるとされる(34)。

(31) Mulheres que forem ricas não têm que ser bonitas.

women REL be<sup>-</sup>SBJV-FUT-3PL rich-PL not havethat be<sup>-</sup>INF beautiful-PL

‘Rich women must not be beautiful.’

(32) Farei o que eu puder.

have<sup>-</sup>FUT-1SG what I can<sup>-</sup>SBJV-FUT-1SG

‘I do what I can.’

(33) Quem chegar atrasado fica lado de fora.

whoever arrive<sup>-</sup>SBJV-FUT-3SG late stay side of out

‘Whoever arrives late will stay outside.’

(34) José gosta de mulheres que sejam ricas.

José like<sup>-</sup>PRES-3SG of womem REL be<sup>-</sup>SBJV-PRES-3PL rich-PL

‘José likes any rich woman.’

(Comrie & Holmback 1984)

以上のように、関係詞節表現における接続法現在と未来の使い分けは、時間表現の一部を除いて、意味的、構造的に比較的明確な区分の基準があるといえる。なお、接続法現在と接続法未来は過去時制になると接続法未完了過去に「中和」される<sup>18</sup>。

<sup>18</sup> 「接続法未来は接続法ではなく直説法未来の派生である」という Perini (1978, cited in

(35) João disse que antes que você chegasse ele ia sair.  
 João say-PFV-3SG that before that you arrive-SBJV-IPFV-3SG he go-IMPF-3SG go.out-1NF  
 ‘João said that before you arrived he would leave.’

(36) João disse que depois que você chegasse ele ia sair.  
 João say-PFV-3SG that after that you arrive-SBJV-IPFV-3SG he go-IMPF-3SG go.out-1NF  
 ‘João said that after you arrived he would leave.’

(37) João disse que José queria casar com uma mulher que  
tivesse muito dinheiro.  
 João say-PFV-3SG that José want-IPFV-3SG marry-1NF with ART.IDEF woman REL  
 have-SBJV-IPFV-3SG much money  
 ‘João said that José wanted to be married to some woman who had plenty of money.’

(38) João disse que José queria casar com a mulher que  
tivesse muito dinheiro.  
 João say-PFV-3SG that José want-IPFV-3SG marry-1NF with ART.IDEF woman REL  
 have-SBJV-IPFV-3SG much money  
 ‘João said that José wanted to be married to any woman who had plenty of money.’

(Comrie & Holmback 1984)

### 1.2.2.3. 接続法未完了過去

接続法未完了過去には 2 つの機能があり、一方は接続法現在及び未来の過去時制としての過去時間の指示と、もう一方は条件表現と希求表現において非過去の反実仮想や低実現性を表現する。前者の過去時制としての時制一致の機能については本論では詳しくは扱わ

---

Comrie & Holmback 1984) による主張が存在するが、Comrie & Holmback はこの過去時制への「中和」を根拠に Perini の「接続法未来は接続法ではない」とする説を否定している。

ないが、以下のような例である。

(39) Ele duvida que os miúdos recebam o prémio.

he doubt-PRES-3SG that REL.DEF-PL kids receive-SBJV-FUT-3SG ART.DEF prize

‘He doubts that the children will receive the prize.’

(40) Ele duvidou que os miúdos recebessem o prémio.

he doubt-PFV-3SG that REL.DEF-PL kids receive-SBJV-IPFV-3SG ART.DEF prize

‘He doubted that the children received the prize.’

(Mateus et al. 2003)

(39)では疑っている時点が発話時点、疑われている内容も発話時点であり、それぞれ直説法現在 *duvida*、接続法現在 *recebam* が用いられている。一方で、(40)では疑っていたのが発話時点から見た過去の時点で、疑っている内容も過去におけるものである。そのため、それぞれ直説法完了過去 *duvidou*、接続法未完了過去 *recebessem* と、いずれも過去時制が用いられている。

ポルトガル語では非過去文脈における反実仮想表現は、接続詞 *se* (if) に導入される表現と *como se* (as if) に導入される比喩表現からなる。これらは過去の形態素が過去時を指示しない例である。

(41) Se a Maria está em casa, então vamos visitá-la.

if ART-DEF Maria be-IND-PRES-3SG in house then go-PRES-1PL visitar-INF-ACC

‘If Maria is home, then let us visit her.’

(42) Se a Maria estivesse em casa íamos visitá-la.

if ART-DEF Maria be-SBJV-PFV-3SG in house go-IPFV-1PL visitar-INF-ACC

‘If Maria were home, we would visit her.’

(43) Comporta-se        como se fosse        o        rei.  
behave<sup>˙</sup>PRES-3SG:REFL    as        if    be<sup>˙</sup>SBJV-IPFV-3SG    ART.DEF    king

‘He behaves as if he were the king.’

(Mateus et al. 2003)

(42)では反実仮定の接続法未完了過去は *se* (if) で導かれる条件節の中で用いられる。指示される時間は現在（非過去）であり、「実際にはいないのであるがもし Maria が家にいたら」という反実仮定の解釈になる。また、帰結節には条件法すなわち直説法過去未来が用いられる。こちらも過去時制としては機能しておらず、ある条件下で非過去時において起こるであろう事柄を表現する。なお、(42)では帰結節の動詞は直説法未完了過去が用いられているが、ヨーロッパのポルトガル語ではしばしば直説法過去未来が直説法未完了過去に置き換えられる。(43)は *como se* (as if) に導入される比喩の反実仮定表現である。これも「実際にはそうではないが、まるで王様のように」という解釈になる。

接続法未完了過去や帰結節の直説法過去未来のような過去時制の形式が反実仮定 (contra-factive, counter-factive) のマーカーとして用いられるのは、英語やロマンス諸語のみならず、数多くの言語で見られる現象であるとされ、Palmer (2001) ではバントゥー諸語や北米先住民諸語、太平洋諸語などが例示されている。ただし、何故未来時制ではなく過去時制が反実仮定のマーカーとして用いられるのかには決定的な根拠がない (Lyons 1977, p. 816; Palmer 2001, p.219)。最もよく見られる説明は、発話時からの距離 (*remoteness, distal, disassociative*, cf. Palmer 2001) という概念が過去では時間という点で、非現実では現実性の点で共通しているという類のものである (see also 和佐 2005, p. 85)。

Lyons (1977) は相対時制の考え方を交えて反実仮定表現の過去形式の使用を説明してい

る(図 3)。発話時(現在)  $t_0$  における世界を  $w_0$ 、発話以前の基準時  $t_i$  における世界を  $w_i$ 、さらに基準時から見た相対時を  $t_j$  として相対時制の説明を行っているが、 $t_j$  の行き先が  $w_0$  とも  $w_i$  とも異なる可能世界  $w_j$  であるような、時間ではなく法的な相対距離としてとらえることで反実仮想の説明を試みている。Lyons によるとダイクシスの区分が起こっており、 $t_i$  から  $t_0$  の繋がりには”now”であるのに対し、 $t_i$  から  $t_j$  の繋がりには”then”であると表現されている<sup>19</sup>。

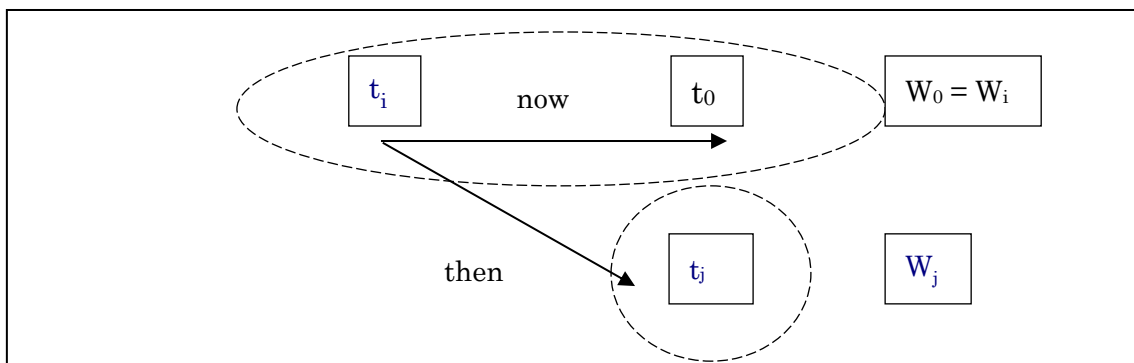


図 3 基準時と現在時、相対時の関係 (Lyons 1977, pp.818-820 に基づく。本論筆者によるまとめ)

Lyons への言及はないが、フランス語文法研究で「分岐的時間 (temps ramifié)」(e.g. Martin 1983, as cited in 渡邊 2008) と呼ばれる類似した仮説で反実仮想の説明を試みているのが渡邊 (2008) 並びに葛原 (2011, スペイン語) である。両研究によると、現在実現されている事柄は前時点における条件を満たして現在時制になる。この条件を満たさずに実現に至らなかった事柄が、過去性を保持したまま (渡邊 2008, p.27) 過去の *irrealis* の形式としてそのまま表示されている。この点より葛原 (2011) は、反実仮想の過去形式は過去形式の例外的用法ではなく、過去の本来的機能から逸脱していないとする。

<sup>19</sup> Lyons (1977) によると、内包的世界でのモダリティは”non-factive”、可能世界で起こり得る事実は”contra-factive”であるとする。

なお、過去における反実仮想を表現する場合は、接続法未完了過去の完了形式である接続法過去完了（大過去）を用いて表現する。この場合、形式的にはアスペクトの対立であるが、「非過去」を指示する接続法未完了過去と「過去」を指示する接続法過去完了が時制的な対立として扱われるのが一般的である（Bechara 2007; Cunha & Cintra 2007; Mateus et al. 2003; etc.）。

(44) Se a Maria estivesse em casa íamos visitá-la.

if ART.DEF Maria be-SBJV-IPFV-3SG in house go-IPFV-1PL visit-INF:ACC

‘If Maria were home, we would visit her.’

(45) Se a Maria tivesse estado em casa, teríamos ido visitá-la.

if ART.DEF Maria be-SBJV-PSTPFV-3SG in house go-COND-PFV-1PL visit-INF:ACC

‘If Maria had been home, we would have visited her.’

(Mateus et al. 2003)

#### 1.2.2.4. 接続法完了過去、未来完了、過去完了

接続法完了過去、未来完了、過去完了はそれぞれ現在（発話時点）、未来、過去の参照時点において完了している動作を描写する完了アスペクト形式である。それぞれ接続法現在、接続法未来、接続法未完了過去を用いるよりも参照時点との前後関係が明確に表現される。なお、直説法現在完了（*pretérito perfeito composto*）に見られるような動作の結果の現在までの継続性や反復性を表現することはできない。

(46) A Maria lamenta que perca o emprego.

ART.DEF Maria regret-PRES-3SG that lose-SBJV-PRES-3SG ART.DEF job

‘Maria regrets that she is losing her job.’

(47) A Maria lamenta que tenha perdido o emprego.

ART.DEF Maria regret-PRES-3SG that lose-SBJV-PRES PFV-3SG ART.DEF job

‘Maria regrets that she has lost her job.’

(48) A Maria lamentou que perdesse o emprego.

ART.DEF Maria regret-PFV-3SG that lose-SBJV-IPFV-3SG ART.DEF job

‘Maria regretted that she lost her job.’

(49) A Maria lamentou que tivesse perdido o emprego.

ART.DEF Maria regret-PFV-3SG that lose-SBJV-PST PFV-3SG ART.DEF job

‘Maria regretted that she had lost her job.’

(Mateus et al. 2003)

接続法現在(46)と完了過去(47)、接続法未完了過去(48)と過去完了(49)で表現されている命題の主節に対する位置関係は同じく、前時 (anterior) であるが、完了アスペクト形式(47)(49)は前時を明示し、文脈の解釈は前時に限定される。

ただし、「願望」や「目的」など「当為判断モダリティ」表現では、命題 (従属節内の内容) は主節内容時点以降の描写しかできない。そのため、命題で主節以前の時制を用いることができないこと(49)(50)(53)はもちろん、完了アスペクト形式で表現される内容は発話時点に対してではなく、明示もしくは暗示される参照時点に対しての「完了」となる(52)(55) (Mateus et al. 2003)。

(50) Exige que os concorrentes \*lessem as instruções.

demand-PRES-3SG that ART.DEF-PL candidates read-SBJV-IPFV-3PL ART.DEF instructions

‘He demands that the candidates read(past) the instructions.’

(51) Exige que os concorrentes ?tenham lido as instruções.

demand-PRES-3SG that ART.DEF-PL candidates read-SBJV-PRES PFV-3PL ART.DEF instructions



‘He demands that the candidates have read the instructions.’

- (52) Exige que os concorrentes tenham lido as instruções antes de preencherem os impressos.

demand-PRES-3SG that ART.DEF-PL candidates read-SBJV-PRES PFV-3PL ART.DEF instructions  
before of fill.in-<sub>inf</sub>-3PL ART.DEF forms

‘He demands that the candidates read the instructions before they complete the sheet.’

- (53) Ele deseja que \*telefonasses para casa.

he desire-PRES-3SG that call-SBJV-IPFV-2SG to house

‘He wants to call home.’

- (54) Ele deseja que ?tenhas telefonado para casa.

he desire-PRES-3SG that call-SBJV-PRES PFV-2SG to house

‘He wants to have called home.’

- (55) Ele deseja que tenhas telefonado para casa antes de se

encontrarem no restaurante.

he desire-PRES-3SG that call-SBJV-PRES PFV-2SG to house before of REFL-3PL  
meet-<sub>inf</sub>-3PL in;ART.DEF restaurant

‘He wants to call home before they meet at the restaurant.’

(Mateus et al. 2003)

また、過去完了は反実仮想表現において、過去における事実と反する条件（反実仮想）を表現することができる (1.2.2.3).

### 1.3. 接続法が現れる統語構造

ポルトガル語の接続法は統語構造的には主に従属節内で用いられ、主に以下のような表現構造において用いられる (Bechara 2007; Cunha & Cintra 2007; Mateus, Brito, Duarte & Faria 2003; 田所, カルヴァーリョ & アイレス 2013)。

- ① 動詞の補語となる名詞節 (補語節) 内
- ② 非人称評価表現において主語となる名詞節内
- ③ 時間や条件、状況の副詞節や前置詞句節内
- ④ 不特定名詞を修飾する関係詞節内
- ⑤ 一部の主節
- ⑥ 一部の定型表現

以下に例文と接続法が用いられ得る表現についてまとめる。

#### 1.3.1. 動詞の補語となる名詞節内

代表的な接続法の用法のひとつが、動詞の補語となる名詞節内で用いられるケースである。主節の動詞に願望や依頼、禁止、推測、疑い、否定、感情など、接続法を共起する限られた語彙が用いられた場合に接続法が用いられた従属節が後続する。

(56) Eu duvido que ele esteja a dizer a verdade.

I doubt-PRES-1SG that hesay-SBJV-PROG-3SG ART.DEF truth

'I doubt that he is telling the truth.'

(Mateus et al. 2003)

一部の初学者向け教材ではこの動詞補語名詞節内での用法のみ扱われる（香川 2007, 浜岡 2012）。なお、名詞節では接続法未来は用いられない。

### 1.3.2. 非人称評価表現において主語となる名詞節内

非人称の評価構文の主語に当たる名詞節において接続法が用いられる。ここでも主節の形容詞語彙が願望や可能性、疑い、感情などといった内容の際に従属する節内では接続法が用いられる。

(57) É            desejável que cheguemos        lá        antes de meio-dia.

be-PRES-3SG    desirable    that    arrive-SBJV-PRES-1PL    there    before of    noon

‘It is preferable that we arrive there before noon.’

(Mateus et al. 2003)

なお、意味的に確実性や真実性の評価をする場合は従属節内の動詞は直説法となる(58)。また、動詞補語名詞節同様、接続法未来は用いられない。

(58) É            claro que    ele foi        à            festa.

be-SBJV-3SG    clear    that    he    go-PFV-3SG to;ART.DEF party

‘It is clear that he went to the party.’

(Mateus et al. 2003)

### 1.3.3. 時間や条件、状況の副詞節や前置詞句節内

接続法は一部の副詞節構文においても用いられる。該当する副詞節表現は時間表現(59)、条件表現、反実仮想表現、様態表現、目的表現(60)、譲歩表現(61)など構造的にも意味的にも多岐にわたる。

(59) Logo que começar a chover, vou deixar o trabalho e vou a casa.

as.soon.as begin-SBJV-FUT-3SG to rain-INF go-PRES-1SG leave-INF ART.DEF work and  
go-PRES-1SG to house

‘As soon as it begins to rain, I am going to stop working and go home.’

(Mateus et al. 2003)

(60) Cheguei cedo para que meu pai não se zangasse.

arrive-PFV-1SG early in.order that my father not REPL make.angry

‘I arrived early so that my father would not be angry.’

(61) Iremos a Lisboa, mesmo que tenhamos de acordar bem cedo.

go-FUT-1PL to Lisbon even if have-SBJV-PRES-1PL of wake.up very early

‘We will go to Lisbon even though we have to wake up very early.’

(田所 et al. 2013)

なお、時間や条件などの表現で過去時を指示し、かつ実際に実現された事柄を指示する場合は直説法の過去時制が用いられる(次節)。また、目的表現の *de modo que* や *de maneira que* では、従属節内で直説法を用いることで文脈の意味が結果表現に変わってしまう(本論 1.4.1.7)。

#### 1.3.4. 非指示先行詞を修飾する関係詞節内

接続法は関係詞節(形容詞節)構文でも用いられる。関係詞節内で使用され得る接続法は主に現在と未来であり(本論 1.2.2.2)、接続法過去は両者の過去時制として機能する。

(62) José quer casar com uma mulher bonita.

José want-PRES-3SG marry-INF with ART.IDEF woman beautiful

‘José wants to marry a beautiful woman.’

(63) José quer casar com uma mulher que tem muito dinheiro.

José want-PRES-3SG marry-INF with ART.IDEF woman REL have-IND-PRES-3SG much money

‘José wants to marry a beautiful woman who has plenty of money.’

(64) José quer casar com uma mulher que tenha muito dinheiro.

José want-PRES-3SG marry-INF with ART.IDEF woman REL have-SUBJ-PRES-3SG much money

‘José wants to marry some woman who has plenty of money.’

(65) José que casar com a mulher que tiver muito dinheiro.

José want-PRES-3SG marry-INF with ART.DEF woman REL have-SBJV-FUT-3SG much money

‘José wants to marry any woman who has plenty of money.’

(Comrie & Holmback 1984)

なお、関係詞節内では他の接続法表現と異なり、すべての接続法時制形式に加え、直説法未来と過去未来を含めたすべての直説法形式が用いられることもあり、形態統語的に非常に複雑な表現構造となっている（鳥越 2013a）。

### 1.3.5. 一部の主節表現

主節において接続法が現れるのは副詞 *talvez* (maybe) などを用いた推測表現、副詞 *oxalá* (*que*) (I wish)を用いた希求表現、副詞などを用いない希求・推測表現、及び命令表現である。

*Talvez* を用いた表現は以下の内容に対する疑いを表現し、*é possível que* (it is possible that) などと同義である。

(66) Talvez o comboio não parta dentro das horas.

Perhaps ART.DEF train not leave within of:ART.DEF-PL hours

‘Perhaps the train will not leave for hours.’

(Mateus et al. 2003)

一方で、同様の意味を表す表現でも、*talvez* が動詞の後に置かれる場合(67)、または副詞語彙が *provavelmente* (probably)、*se calhar* (maybe) の場合(68)は動詞が直説法になる。

(67) A Maria vem talvez visitar-nos.

ART.DEF Maria come-IND-PRES-3SG perhaps visit-INF:us

‘Maybe Maria comes to visit us.’

(68) Provavelmente a Joana saiu.

probably ART.DEF Joana go.out-IND-PFV-3SG

‘Joana probably went out.’

(ibid)

このことより、*talvez* と接続法の共起は語彙文法と化しているとも考えることもできる。

*Talvez* の他にも *quicá* や *por acaso* などに続く表現で接続法現在が用いられる。

*Oxalá (que)* を用いた表現は後続の内容に対する願望を表す。すなわち、*espero que* (I hope that) などの表現と同様である。

(69) *Oxalá não chova.*

I.wish not rain~SBJV-PRES-3SG

'I hope it does not rain.'

(Mateus et al. 2003)

*Oxalá* と同様のものに *tomara que* という表現もあり、主にブラジルポルトガル語やポルトガル北部方言で用いられるとされる (Cunha & Cintra 2003)。以上の *talvez* などの推測表現や *oxalá* などの希求表現は、生成意味論的観点からの研究によると何らかの主節が省略された従属表現であると考えられる (cf. Faria 1974, as cited in Cunha & Cintra; 高垣 1982, 1984; 彌永 2013)。

なお、*oxalá (que)* を用いなくても接続法だけの文で希求を表現することができる。

(70) *Diabos te levem!*

damons you~ACC take~SBJV-PRES-3PL

'Damons will take you!'

(Mateus et al. 2003)

Bechara (2007, p.213, 222) によると、この場合の動詞は希求法という叙法であることが示唆されている<sup>20</sup>。

また、接続法形式の動詞は命令法としても用いられる。

---

<sup>20</sup> ポルトガル、ブラジル各文法呼称法では記載されていない。また、Bechara 自身も同法の表現を接続法の項目で扱っている。

(71) Diga-me que horas são.

tell-IMP:me-DAT what time be-PRES-3PL

‘Please tell me what time it is now.’

(Mateus et al. 2003)

命令法は希求法とは異なり、現代文法では個別の叙法として扱われている<sup>21</sup>。ただし、主節では接続法は現れず、従属節内でのみ現れるものを「接続法」とする考え方もある (Terrell & Hooper 1974<sup>22</sup>; Faria 1974, cited in Cunha & Cintra 2007)。

### 1.3.6. その他定型表現

その他、接続法は一部の定型表現でも用いられる。接続詞に導かれる従属節ではないが、条件表現や譲歩表現を意味する副詞句的機能の語句で接続法現在や接続法未来が用いられる(72)(73)。また、「説明」や「列挙」の接続詞句として用いられる例もある(74-76)。以下の例文の下線は筆者によるものであり、接続法を含む定形表現部分を示す。

(72) Quer queiras quer não queiras, vais para bombeiro voluntário.

either querer-SBJV-PRES-2SG or not querer-SBJV-PRES-2SG go-PRES-2SG to fire.department

voluntary

‘Whether or not you want to, you will go to fire department.’

(73) Gostes ou não gostes da sopa, vais comê-la.

<sup>21</sup> 命令法はポルトガル、ブラジルともに公式な文法呼称法で認められているが、文法書や教材によっては独立した叙法ではなく接続法の用例の一つの「命令表現」として扱っているものが見られる (e.g. 香川 2006; 富野 & 伊藤 2013)。私見ではこれについて構成概念としての「接続法」、「命令法」と形態素としての「接続法形式」が明確に区分されていない、あるいは混同されて扱われているように感じられる。

<sup>22</sup> 主節に現れる接続法形態はすべて「命令」であるとしている。



like-SBJV-PRES-2SG or not like-SBJV-PRES-2SG to:ART.DEF soup go-PRES-2SG eat-INF:it

‘Whether or not you like the soup, you will eat it.’

(Mateus et al. 2003)

- (74) O governo contradiz o programa apresentado na  
campanha eleitoral, ou seja, não está a cumprir as  
promessas da campanha.

ART.DEF government contradict-PRES-3SG ART.DEF programme presented in:ART.DEF  
campaign electoral, or be-PRES-SBJV-3SG not be-PRES-3SG to fulfill-INF ART.DEF-PL  
promises of:ART.DEF campaign

‘The government officials contradict the program presented in the campaign, in  
other words, they do not keep their promises.’

(Coimbra & Coimbra 2012)

- (75) Sempre discordam de tudo, sejam as discordâncias ligeiras, sejam de  
peso.

always disagree-PRES-3PL of all either ART.DEF-PL disagreement light-PL or of  
serious

‘They always disagree on everything, whether it’s a small disagreement or a  
serious one.’

- (76) Sempre discordavam de tudo, fossem as discordâncias ligeiras, fossem  
de peso.

always disagree-IPFV-3PL of all either ART.DEF-PL disagreement light-PL or  
of serious

‘They used to disagree on everything, whether it’s a small disagreement or a serious  
one.’

(*Novas Lições de Análise Sintática*, 1993, p.68, as cited in Bechara 2007)

以上挙げてきた接続法が用いられる統語構造は次節に示す意味機能と密接に関係し、一部ほぼ対応関係にあるものもある。

#### 1.4. 接続法が現れる意味機能

前節で見たように接続法の使用は文脈構造によって制限されているが、さらに補語節では主節動詞語彙、評価表現では形容詞、関係詞節では先行詞、副詞節では接続詞などによる意味的な制約も受ける。この意味的な制約が多岐にわたり、かつ直説法と接続法のいずれも許容する事例や、例外的な事例などもあるため、接続法についての一枚岩的な説明を困難にさせている。

福嶋 (2005) によると接続法の意味機能の捉え方は多元的アプローチと一元的アプローチに二分される。前者は接続法が用いられ得る表現をひとつひとつ列挙して解説していくもので、詳細な記述が可能であるが、各表現間の関係性がわかりづらい場合があることと、これに基づく学習指導に時間と労力を要する点が短所である。一方で後者はすべての接続法表現事例に当てはまるようなひとつの仮説理論を打ち立てていくアプローチであり、これにより接続法表現全体を説明することが可能となり得るが、例外的事例に対処できないという欠点がある。

本節ではまず多元的アプローチから具体的な意味文脈の例について分類し、後半では直説法、接続法の叙法選択を決定するより抽象的な構成概念を追究する一元的アプローチの先行研究をまとめ、さらに次章の叙法とモダリティの観点からの接続法観へとつなげていく。

### 1.4.1. 多元的アプローチ: 接続法が現われる表現

確認できるところ、Raposo, Bacelar do Nascimento, Mota, Segura, & Mendes (2013) を除き、現代ポルトガル語の文法書では多くが多元的アプローチのみを採用している (Bechara 2007; Cunha & Cintra 2007; Mateus et al 2003)。すなわち、抽象的、帰納的な仮説理論ではなく、具体的、演繹的な接続法表現事例をひとつひとつ記述しているものが多い。研究によってまとめ方は様々であるが、本節では各現代ポルトガル語文法書に従い、接続法が使用される意味的な文脈を分類する。ただし、関係詞節表現のように構造と不可分なものがある。

- ① 願望、強制、依頼、禁止の表現
- ② 蓋然性、可能性、疑い、正当性の表現
- ③ 驚き、後悔、喜び、感謝など感情の表現
- ④ 不特定、非指示的な人物を表す表現
- ⑤ 譲歩の表現
- ⑥ 条件、反実仮想の表現
- ⑦ 目的の表現
- ⑧ 時間の表現
- ⑨ 程度、様態の表現

#### 1.4.1.1. 願望、強制、依頼、禁止の表現

願望や強制、依頼や禁止など、話し手の価値判断により聞き手や第三者に命題内容を課したり、許可したりするような動詞の補語となる名詞節内で接続法が用いられる。

(77) A      Maria espera                      que      o      Rui chegue                      a horas.

ART.DEF Maria hope-PRES-3SG that ART.DEF Rui arrive-SBJV-PRES-3SG at hours

‘Maria hopes that Rui will arrive in time.’

(78) A Maria permitiu que os miúdos saíssem.

ART.DEF Maria permit-PPFV-3SG that ART.DEF-PL kids go.out-SBJV-IPFV-3PL

‘Maria permitted the children to go out.’

(79) É desejável que a Maria esteja em casa.

be-PRES-3SG desirable that ART.DEF Maria be-SBJV-PRES-3SG in house

‘It is preferable that Maria is at home.’

(Mateus et al. 2003)

命題、すなわち名詞節内の内容は発話時点では未実現の事柄であり、直説法と接続法は選択的ではなく、必ず接続法が用いられる。また、本表現では接続法未来は用いられない。

#### 1.4.1.2. 蓋然性、可能性、疑い、正当性の表現

命題の内容についての可能性を述べたり、疑ったり否定するような表現に置いて接続法が用いられる。

(80) A Rita duvida que cheguem a horas.

ART.DER Rita doubt-PRES-3SG that arrive-SBJV-PRES-3PL at hours

‘Rita doubts that they will arrive in time.’

(81) É possível que a Maria esteja em casa.

be-PRES-3SG possible that ART.DEF Maria be-SBJV-PRES-3SG in house

‘It is possible that Maria is home.’

(82) É duvidoso que a Maria esteja em casa.

be-PRES-3SG doubtful that ART.DEF Maria be-SBJV-PRES-3SG in house

‘It is doubtful that Maria is home.’

(83) A dúvida de que ele ganhe o prêmio preocupa-me.

ART.DEF doubt of that hewin-SBJV-PRES-3SG ART.DEF prize worry-PRES-3SG:me

‘The doubt about whether he will win the prize concerns me.’

(84) Talvez a Maria nos venha visitar.

Perhaps ART.DEF Maria us come-SBJV-PRES-3SG visit-INF

‘Maybe Maria will come to visit us.’

(85) É claro que ele foi à festa.

be-PRES-3SG clear that hebe-IND-PFV-3SG to:ART.DEF party

‘It is clear that he went to the party.’

(86) A certeza de que ela está bem anima-me.

ART.DEF certainty of that she be-IND-PRES-3SG very.much stir.up-PRES-3SG:me-ACC

‘The certainty that she is fine encourages me.’

(Mateus et al. 2003)

疑いを述べるような動詞の補語、可能性を評価するような評価文の補語、または *talvez* (maybe) を伴う主節において接続法が用いられる。なお、可能性や蓋然性の度合いによっては直説法が用いられ得る表現があるほか、命題内容の可能性を確信するような表現では従属節内の動詞は直説法となる(85)(86)。また、本表現では接続法未来は用いられない。

#### 1.4.1.3. 驚き、後悔、喜び、感謝など感情の表現

「・・・を悔やんだ」、「・・・ということが素晴らしい」という感情や反応を表す動詞補語表現や評価表現でも接続法が用いられる。

(87) A Ana lamenta que estejas doente.

ART.DEF Ana regret-PRES-3SG that be-SBJV-PRES-2SG ill

‘Ana regrets that you are ill.’

(88) Foi uma pena que estivesses doente.

be-PFV-3SG ART.IDEF pity that be-SBJV-IPFV-2SG ill

‘It was a shame that you were ill.’

(89) É uma maravilha que ele tenha conseguido o emprego.

be-PRES-3SG ART.IDEF marvel that heget-SBJV-PRES-3SG ART.DEF employment

‘It is marvellous that he is getting the job.’

(90) A Maria apreciou que lhe tivesses telefonado.

ART.DEF Maria appreciate-PFV-3SG that her-ACC call-SBJV-PSTPFV-2SG

‘Maria appreciated that you called her.’

(Mateus et al. 2003)

特筆すべき点として、願望や依頼の表現、可能性や疑いの表現と異なり、接続法で表される事柄が発話時点で行われている、あるいは既に済んでいる動作や状態となっていることが挙げられる。すなわち、本来であれば直説法が用いられるような意味内容で接続法が用いられる、特殊な表現例である。何故この表現の従属節内で接続法が用いられるのかの説明が、接続法研究やモダリティ研究において大きな課題となっている (e.g. Givón 1994, see also 本論 2.3)。なお、本表現でも接続法未来は用いられない。

#### 1.4.1.4. 不特定の、非指示的な人物を表す表現

文脈的に特定性や実在性、すなわち指示性 (Comrie & Holmback 1984, Givón 1994) が

認められない先行名詞句を修飾する制限的關係詞内において接続法が用いられる。

(91) A Rita procura um livro que tenha gravuras do Porto.

ART.DEF Rita look.for-PRES-3SG ART.IDEF book REL have-SBJV-PRES-3SG picture of.ART.DEF

Porto

‘Rita is looking for a book that has pictures of Porto.’

(92) A Rita encontrou um livro que tem gravuras do Porto.

ART.DEF Rita find-PFV-3SG ART.IDEF book REL have-IND-PRES-3SG picture of.ART.DEF Porto

‘Rita found a book that has pictures of Porto.’

(93) A Rita encontrou um livro que \*tenha gravuras do Porto.

ART.DEF Rita find-PFV-3SG ART.IDEF book REL have-SBJV-PRES-3SG picture of.ART.DEF Porto

‘Rita found a book that has pictures of Porto.’

(94) O Jorge, que chega sempre a horas, traz a encomenda.

ART.DEF Jorge REL arrive-IND-PRES-3SG always in hours bring-PRES-3SG ART.DEF box

‘Jorge, who always arrives on time, brings a pack.’

(Mateus et al. 2003)

使用される接続法形式には統語的制約もあり、不定冠詞を伴う非指示名詞には接続法現在が用いられることで非現実的な人や物を表現する。一方、定冠詞などを伴う非指示名詞、無冠詞先行詞、非語彙先行詞 (*o que*)、ゼロ先行詞関係代名詞 (*quem*) は接続法未来が用いられることで、限定的な集団内での人や物一般を修飾する表現となる(1.2.2.2)。先行詞は願望表現や推測表現の被動作主として主語や目的語になること、すなわち、法的意味のスコ

ープの範囲内に収まることが多いとされる (Comrie & Holmback 1984, Palmer 2001, Becker 2010)。なお、非制限的關係詞節は特定の、指示的な先行詞を修飾するため、従属節内の動詞は直説法となる(94)。

關係詞節表現では、接続法全形式のみならず直説法の全ての時制形式も用いられる。特に、接続法と同様に「非現実的な内容」を表す直説法未来と過去未来が關係詞節内で用いられる場合と、接続法が用いられる場合は混同される可能性がある。これについて、鳥越(2013a)では接続法は先行詞の非指示性を表現し、直説法未来と過去未来は先行詞の指示性と關係詞節内の内容の非断定性、非実現性を表現しているものと考察する。

#### 1.4.1.5. 譲歩の表現

譲歩の内容を表す動詞にも接続法が用いられる。

(95) Embora seja tarde, vou sair.  
 although be-SBJV-PRES-3SG late go-PRES-1SG go.our-INF  
 ‘Although it is late, I am going to go out.’

(Mateus et al. 2003)

(96) Ainda que perdoemos aos maus, a ordem moral não lhes  
 perdoa, (...)  
 even though forgive-SBJV-PRES-1PL to:ART.DEF-PL bad-PL ART.DEF rule moral not them-ACC  
 forgive-PRES-3sg

‘Even though we have forgiven them, they are not forgiven under public policy.’

(Maricá n/a, as cited in Bechara 2007)

(97) Por muito que eu desejasse ter aqui uma burra, não trocava  
 a amizade do Barbaças por todas as burras desta



freguesia.

how much that I desire<sup>-SBJV-IPFV-1SG</sup> have<sup>-INF</sup> here ART.DEF donkey not exchange  
ART.DEF friendship of;ART.DEF Barbaças byall<sup>-PL</sup> ART.DEF-PL donkeys of;this  
town

‘Although I wanted a donkey here, I would not exchange my Lybiidae for all the donkeys in this town.’

(Namora 1974, *O Rio Triste*, p.165, as cited in Cunha & Cintra 2007)

(98) Seja quem for, não abres a porta.

be<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup> whoever be<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup> not open<sup>-PRES-2SG</sup> ART.DEF door

‘No matter who comes, you never open the door.’

(Coimbra & Coimbra 2012)

譲歩の表現には2種類存在し、「たとえ・・・でも」という譲歩の内容が未実現の条件表現的なものと、「・・・ではあるものの」既に実現されている動作や状態のものがある。後者の場合でも従属節内の動詞は接続法となる。また、「どれだけ・・・しても」などの定型表現(98)を除き、本表現では接続法未来は用いられない。

#### 1.4.1.6. 条件、反実仮想の表現

発話時点、またはそれ以降に起こり得る条件表現においても接続法が用いられる。

(99) Se tu vieres cedo, vamos jantar fora.

if you come<sup>-SBJV-FUT-2SG</sup> soon go<sup>-FUT-1PL</sup> have.dinner out

‘If you comes soon, we are going to go out to have dinner.’

(Mateus et al. 2003)

(100) Caso seja necessário, vou falar com o advogado.

in.case be<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup> necessary go<sup>-PRES-1SG</sup> speak with ART.DEF advocate

‘In case it is necessary, I am going to speak to the advocate.’

(101) Ele não te ouve, a não ser que grites.

he not you<sup>-ACC</sup> hear<sup>-PRES-3SG</sup> unless shout<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup>

‘He does not hear you unless you shout.’

(Coimbra & Coimbra 2012)

(102) Se tu viesses cedo, iríamos jantar fora.

if you come<sup>-SBJV-IMPF-2SG</sup> soon go<sup>-COND-1PL</sup> have.dinner out

‘If you came soon, we would go out to have dinner.’

(103) Se está bom tempo, ficamos bem dispostos.

if be<sup>-IND-PRES-3SG</sup> good weather became<sup>-PRES-1PL</sup> well

‘If it is sunny, we will be fine.’

(Mateus et al. 2013)

非過去指示の条件表現は大きく 3 種類に分けられる。接続詞 *se* (if) で導入される条件の表現では接続法未来(99)、その他の *caso* や *no caso que* (in case) など接続詞表現で導入される表現では接続法現在が用いられる(100)(101)。条件の内容が非現実的な場合は非過去時であっても接続法未完了過去が用いられる(102)。習慣的行動など、条件の内容の実現性が極めて高い場合は直説法現在が用いられる(103)。

#### 1.4.1.7. 目的の表現

前置詞句の *para que* や *de modo que* (so that) などによって導入される目的の表現の副詞節内においても接続法(現在と過去)が用いられる。いずれも参照時点以降の事柄を表す。

(104) Ele volta para que todos fiquem contentes.

he return-PRES-3SG for that all.people become-SBJV-PRES-3PL content

‘He will return so that everyone will be content.’

(105) Ele voltou para que todos ficassem contentes.

he return-PFV-3SG for that all.people become-SBJV-IPFV-3PL content-PL

‘He returned so that everyone would be content.’

(106) Ela teria feito um bolo para que as crianças pudessem

lanchar.

she make-CONDPFV-3SG ART.DEF cake for that ART.DEF kids can-SBJV-IPFV-3PL  
eat-INF

‘She would have made a cake so that the kids could have had tea.’

(Mateus et al. 2003)

過去時制によって表現される場合、現在に至るまでの命題の実現の有無については関心がない。なお、本表現では接続法未来は用いられない。

また、*de modo que* や *de maneira que* の表現では従属節内の動詞を直説法にすると結果表現となる。

(107) O filho único escreveu uma carta do Brasil de maneira

que seus pais ficaram contentes.

ART.DEF son unique write-PFV-3SG ART.IDEF letter form;ART.DEF Brazil of manners  
that his-PL parents become-IND-PFV-3PL content

‘After the son wrote a letter from Brazil, his parents became content.’

(田所 et al. 2013)

(107)の従属節内の動詞を接続法 *ficassem* とすると「両親が満足するために」という目的表現となるが、直説法 *ficaram* とすると「結果として両親は満足した」という

#### 1.4.1.8. 時間の表現

時間表現で発話時点または参照時点以降に起こり得る内容は接続法で表される。非過去時指示表現においては、主に *quando* (when) によって導入される時間表現では接続法未来が用いられるが、それ以外の表現では接続法現在が用いられるケースと接続法現在、未来の両方が許容されるケースがある。

(108) Vou para casa antes que chova.

go-PRES-1SG to house before that rain-SBJV-PRES-3SG

‘I am going home before it rains.’

(109) Quando começar a trovoadas, desligo o computador.

when begin-SBJV-FUT-3SG ART.DEF thunderstorm shut.off-PRES-1SG ART.DEF computer

‘When the lightning begins, I shut off the computer.’

(Mateus et al. 2003)

なお、発話時点、参照時点以前に実現されている事柄を表す表現では直説法の過去時制を用いる。

(110) Ele foi para casa logo que começou a chover.

he go-PFV-3SG to house as.soon.as begin-IND-PFV-3SG to rain-IND

‘He went home as soon as it began to rain.’

(111) Quando começou a trovoadas, desliguei o computador.

when begin<sup>IND-PFV-3SG</sup> ART.DEF thunderstorm shut.off<sup>PFV-1SG</sup> ART.DEF computer

‘When the lightning began, I shut off the computer.’

(Mateus et al. 2003)

(108)(109)での「雨が降る」こと、「雷が鳴り始める」ことはともに未実現の事柄であり、接続法が用いられている。一方、(110)(111)の「雨が降った」こと、「雷が鳴り始めたこと」ことは事実であり、直説法の過去時制が用いられる。

#### 1.4.1.9. 程度、様態の表現

「～するように」、「～することに従って」などの程度や様態の表現にも接続法が用いられる。形式には接続法未来が用いられるが、ヨーロッパのポルトガル語では表現によっては接続法現在が用いられるとされる (富野 & 伊藤 2013)。

(112) Faça como souber.

do<sup>IMP-3SG</sup> as know<sup>SBJV-FUT-3SG</sup>

‘Do as you know.’

(113) Farei conforme mandares.

do<sup>FUT-1SG</sup> as order<sup>SBJV-FUT-2SG</sup>

‘I will do as you ask.’

(Cunha & Cintra 2007)

#### 1.4.1.10. 多元的アプローチ: まとめ

願望、強制、依頼、禁止、目的の表現は「当為判断のモダリティ (*deontic modality*)」、蓋然性、可能性、疑い、正当性の表現や、条件や時間の表現などは「真偽判断のモダリテ

ィ (*epistemic modality*)」に大分される (e.g. Lyons 1977, Palmer 2001)。ポルトガル語における当為判断のモダリティの文脈では接続法のみが用いられるが、真偽判断のモダリティの文脈では、話者による真実性や実現性、確かさの度合いなどにより、直説法と接続法が選択される (Bechara 2007; Mateus et al. 2003)。

感情の表現と一部の譲歩の表現のみ、命題 (従属節の内容) は実際に実現している事柄になる。これらの例のみ、接続法とは「話者がある行為や状態を主観的に表現」(富野 & 伊藤 2013)したり、「仮定したり非現実的なものとして述べ」る (田所 et al. 2013) といった一般的な定義と矛盾する。この矛盾をめぐっては後述の一元論的アプローチや、Givón (1994) や和佐 (2005) などのモダリティ研究においても課題となっている。

#### 1.4.2. 一元的アプローチ: 叙法選択の決定に関する各仮説理論

前節では接続法が用いられ得る具体的な意味文脈をまとめたが、単純に列挙するだけでは「接続法表現」として各表現に共通する構成概念についての理論的な理解が難しいと言える。前述の通り、近年の現代ポルトガル語の文法書などを目にして、前節のような用例列挙型の説明がほとんどである。一方でスペイン語文法では、直説法と接続法の選択についていくつかの帰納的、一元的な仮説理論が提唱されている。

本節ではスペイン語文法研究の文献を多く引用するが、議論の中心となるところはポルトガル語と共通しているものとする。

##### 1.4.2.1. Terrell & Hooper (1974) の assertion / non-assertion (presupposed)

Andrés Bello (1847) 以降のスペイン語学では、統語構造や共起語彙といった構造的要因が接続法選択を決定するという考えが主流派であった (cf. Resnick 1984, Castronovo 1989)。すなわち、特定の主節動詞語彙などが従属節に自動的に接続法を要求するという考え方である。このような考えにおいては、接続法形態素そのものは意味を持たない (cf. 彌

永 2008)。これに対して、主節語彙ではなく従属節の叙法選択が従属節の内容の「真実性」や「主張」、「前提」などの特定の意味的な概念と結びついているという視座から叙法選択理論を提唱した先駆的研究が Terrell & Hooper (1974) である。同研究では主に動詞の補語となる名詞節における接続法現在の生起を題材として理論が展開されている。Terrell & Hooper では従属節で表現される命題 (*proposition*) の内容が *assertion*<sup>23</sup>なのか、*presupposition* なのか、そのいずれでもないのか (*non-assertion* なのか) が、叙法選択の要素であるとされている。

(114) Me parece que Ud. debe de darse aquí.

me<sup>-ACC</sup> seem<sup>-PRES-3SG</sup> that you must<sup>-IND-PRES-3SG</sup> of give<sup>-INF<sup>REFL</sup></sup> here

‘It appears to me as though you must thrive here.’

(115) No me parece que Ud. haya terminado su tarea.

not me<sup>-ACC</sup> seem<sup>-PRES-3SG</sup> that you finish<sup>-SBJV-PFV-3SG</sup> your task

‘It does not appear to me as though you have finished your task.’

(Terrell & Hooper 1974, 下線は本論筆者による)

(114)では動詞 *parecer* (seem) によって命題の内容が真として *assert* されているため、命題内の動詞 *deber* (must) は直説法の *debe* となっている。一方で(115)では *parecer* を否定することで疑いの内容となり、命題の内容が真として *assert* されていない。この場合に命題内の動詞 *haber* (have) は接続法現在の *haya* となっている。

表現によっては文を否定しても命題内容の真性が保持されて、直説法が用いられるもの

<sup>23</sup> 国内のスペイン語学 (e.g. 出口 1980, 福嶋 1990, 和佐 2005) ではこれらを「主張」、「非主張」と訳している一方、福嶋 (1995) では *assertion* を「断定」と訳している。本論筆者の見解では「主張」という訳が何らかの誤解を生み出す可能性があると思われ、また「断定」は和佐 (2005) による別の術語と重複してしまう。そのため本論ではそのまま *assertion* / *non-assertion* と、和訳をせずに用いていく。

もある(116)(117)。

(116) Le dije que María no quería jugar tenis.

ACC-3SG say-PFV-1SG that María not want-IPFV-3SGplay-INF tennis

‘I told him that Maria did not want to play tennis.’

(117) No me dijo que Ud. había terminado su trabajo.

not me-ACC say-PFV-3SG that you finish-IND-PSTPFV-3SG your work

‘You did not tell to me that you finished your job.’

(Terrell & Hooper 1974)

Terrell & Hooper はこれを report として、(114)(115)とは別に扱っている。

さらに以下のような命題が真でありながらも接続法が用いられる表現(1.4.1.3 参照)についても説明している。

(118) Me alegro de que María haya podido terminar a tiempo.

me cheer-PRES-1SG of that María can-SBJV-PFV-3SG finish-INF in time

‘It pleased me that Maria was able to finish in time.’

(119) Es maravilloso que estudie tanto.

be-PRES-3SG marvelous that study-SBJV-PRES-3SG as.such

‘It is marvelous that you study so much.’

(120) Sé que va a ir con nosotros.

know-PRES-1SG that go-IND-PRES-3SG to go-IND with us

‘I know that you will go with us.’

(121) Le dije que María no quería jugar tenis.



ACC say-PFV-1SG that María not want-IND-IPFV-3SG play-INF tennis

'I told him that Maria did not want to play tennis.'

(Terrell & Hooper 1974)

(118)(119) の例では命題内容が真であること (*factive*, Kiparsky & Kiparsky 1970) を前提 (*presupposition*) しつつ、「嬉しい」、「素晴らしい」とコメントをしているが、*assert* はされていないため接続法が用いられるとされる。(120)(121)では命題の内容を「知っている」、「言う」と *assert* しているため、従属節内での動詞は直説法になっている。Terrell & Hooper は Kiparsky & Kiparsky (1970) を援用し、*assertion* では主動詞を否定すると命題内容の真性が失われ得るが、*presupposition* とは主動詞を否定しても命題内容の真性が失われない点が大きな特徴であるとしている。

まとめとして Terrell & Hooper は、接続法を用い得るのは「命令」、「疑い」、「コメント」に分類される表現であるとしている。

Semantic notion	Class	Mood
Assertion	(1)assertion	Indicative
	(2)report	Indicative
Presupposition	(3)mental act <sup>24</sup>	Indicative
	(4)comment	Subjunctive
Neither	(5)doubt	Subjunctive
	(6)imperative <sup>25</sup>	Subjunctive

図 4 Terrell & Hooper (1974, p.488, 本論筆者による再現)

Terrell & Hooper の仮説は従来の主節動詞主導の統語的なアプローチとは一線を画する

<sup>24</sup> スペイン語の一部の *presupposition* 表現では直説法と接続法のいずれも許容されるとし、直説法が許容されるものを *mental act* として分類している。

<sup>25</sup> 命令法表現と命令や使役、願望の動詞補語表現からなる。

ものであった。また、接続法を有標とする考え方ではなく、従来無標の標識として扱われる直説法を *assertiveness* という点で有標とする考え方も例を見ないものであった (cf. 出口 1981)。しかし、主文 (単文) はすべて *assertion* であるとしている点への疑問や、さらに命題を *assert* していないと考えられる疑問文において直説法が用いられる事実<sup>26</sup>を説明できていないとして、後述の出口 (1981) をはじめ多くの批判を招くこととなる。

一方で、同研究による *factive* な感情表現や評価表現で接続法が用いられる事実への説明となっている、「命題を *presupposition* として提示しているだけで、*assert* していない」という説明は、「旧情報」や「命題の背景化」などと術語を変えられてはいるが、後続の多くの研究者に支持され、あるいは影響を与えている (出口 1981, 高垣 1982, 福寫 1990, Palmer 2001, 和佐 2005)。

#### 1.4.2.2. 出口 (1981) の陰否法<sup>27</sup>

Terrell & Hooper (1974) の仮説に対する批判としてまず挙げられるのが、出口 (1981) が提唱する陰否性理論である。出口は Terrell & Hooper の *assertion / non-assertion* を直説法を無標とする直観に反するもの (ibid, p.20) とし、特に命題を「主張」していない疑問文において接続法が用いられない点を批判する。同研究では補文動詞に接続法を導くと考えられる否定を、命題の偽性を直接に主張する「否定」と話者が命題真理への主張に与しない「否定的態度」に分ける。

(122) *Creo que es infeliz.*

*think-PRES-1SG that be-IND-PRES-3SG unhappy*

‘I believe that you are unhappy.’

<sup>26</sup> Terrell & Hooper は「相手に単に肯定を答えとして要求している」としている (ibid, p. 486)。

<sup>27</sup> 同研究は「多元説」を自称するが、接続法使用に共通する構成概念を帰納的に明らかにすることを試みている点では、広い意味において福寫 (2005) の定義する一元的アプローチに含まれるべきであると考えられる。

(123) Creo que no es feliz.

think-PRES-1SG that not be-IND-PRES-3SG happy

'I believe that you are not happy.'

(124) Dudo que sea feliz.

doubt-PRES-1SG that be-SBJV-PRES-3SG happy

'I doubt that' you are happy.'

(125) No creo que sea feliz.

not think-PRES-1SG that be-SUBJ-PRES-3SG happy

'I do not think that you are happy.'

(出口 1981, p.27)

補語節内の情報（命題）の真性、偽性を主張する(122)(123)に対し、(124)(125)は否定的態度を示す。出口は否定のスコープが局限されれば、すなわち、否定辞が命題述語に近ければ否定が強力になると説明している。緩和された否定である否定的態度は「陰否性」という概念を構成し、これが接続法選択を決定すると規定する。

続いて出口は「陰否性の強さ」と「意志行為者性の強さ」の二次元から表現別の接続法性の強さを判定している (ibid, pp.29-30)。また、命題の真性が話者によって主張されるものなのか、第三者の主張が介入するののかによって叙法が変わるという配慮も加えている (ibid, pp.32-33)。

最後に出口は陰否性を全くの肯定と全くの否定を両極とする連続体スケールとしてモデル化し、両極においては直説法が、両極間の意味範囲、すなわち明確な肯定も否定もしない場合においては接続法が用いられると仮定した。

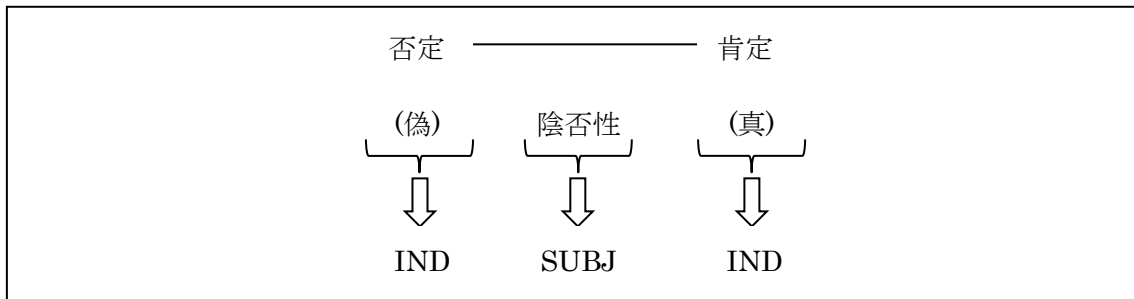


図 5 陰否法のスケール (出口 1981, p.34)

後に、出口 (1986) では伝統的に直説法未来と過去未来とされている動詞形態素を新たな叙法「推定法」とみなし、陰否性理論においては直説法と接続法の間、直説法ほど肯定、否定ではなく接続法ほど曖昧でない意味領域に推定法の領域を組み込んだ (cf. 本論 4.3.2)。ただし、具体的にどこからが接続法でどこからが推定法の意味範囲になるのかの基準がない (鳥越 2010)。

出口の陰否性理論に近い考え方として、和佐 (2005) の真偽判断のモダリティにおける「断定」と「非断定」が挙げられる。和佐は話者の知覚に基づく直接的認識であるまったくの肯定とまったくの否定をそれぞれ「断定」、間接的な認識である中間的な領域を「非断定」とし、それぞれの具体例を例示している (和佐 2005, pp.82-83)。これはいわば陰否性理論の weak version のようなもので、「非断定」の領域がすべて接続法で表現されるのではなく、法動詞や直説法未来による表現もここに含まれる。また、Klein-Andreu (1995) も陰否性理論に類似した連続体的な叙法観を主張している。

#### 1.4.2.3. 高垣 (1982, 1984)の独立文性と従属文性

高垣 (1982, 1984) は出口と同様 Terrell & Hooper の疑問文や否定文における説明力の欠陥と、直説法を有標的に扱う側面を批判し、「独立文性」 (*Independency*) と「従属文性」 (*Subordination*) からなる叙法選択基準を提案している。本仮説では従属節における

叙法選択に比較して等閑視されている、主節における叙法選択についても着目している。

高垣は独立平叙文の性格を命題の伝達・表明と規定し、これを「独立文性」と呼ぶ。

(126) 独立文性 = ある命題を肯定的に認定して表述するはたらき (高垣 1982, p.92)

一方で、独立文の持つ「肯定的・表述」という条件の一部を欠く節の特徴を「従属文性」と規定する。これらは文となる直前の段階とされ (127)、適格文となるために従属節として組み込まれる必要があるとされる (128)。

(127) La        muchacha    (no)    sea            bonita.  
ART.DEF    girl                not    be-SBJV-PRES-3SG pretty

‘The girl is (not) pretty.’

(128) Dudo        que    la        muchacha (no)    sea            bonita.  
doubt-PRES-1SG    that    ART.DEF    girl                not    be-SBJV-PRES-3SG    pretty

‘I doubt that the girl is (not) pretty.’

(高垣 1982)

その他、高垣は数点の補足をしている。まず、命令文や推測文など主節で用いられる接続法表現は、本来適格文になる前の状態であるとしている。

(129) ¡Venga            usted muy    temprano mañana!  
come-SBJV-PRES-3SG    you    very    early            tomorrow

‘Arrive very early tomorrow!’

(130) Tal vez venga                    muy    temprano mañana.

perhaps come<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup> very early tomorrow

‘Perhaps he will arrive very early tomorrow.’

(高垣 1982)

(129)は命令法の文であるが、命令固有のイントネーションにより *ordeno que* (order that) や *mando que* (order that) など命令の主節が潜在していることを示唆しているとする。また、(130)は *tal vez* (maybe) などの副詞表現の共起を必要とするため、主節が「半顕在」化しているとされる (高垣 1982, p.93)。

また、補語節において直説法が選択される文については独立文の並列ととらえている。これは後述の福嶋 (1990) の仮説に通じる考え方である<sup>28</sup>。

(131) *Creo que viene.*

*Yo creo : él viene*

*think<sup>-PRES-1SG</sup> that come<sup>-IND-PRES-3SG</sup>*

*I think : he comes*

(131)では補文命題は話者が認める内容であり、独立文性が付与される。すなわち、*yo creo* (I believe) という内容と *(él) viene* (he comes) という内容がともに独立性を得た文であるとされる。

その他、高垣は出口 (1981) と同じく、信念文 (陳述文) や評価表現では叙法選択への主語以外の他者 (話者) の価値観の介入による直説法と接続法の変化にも着目している。また、出口 (1981) が批判する Terrell & Hooper (1974) による「単に肯定を答えとして要求している」とする疑問文の *assertiveness* の説明については、Terrell & Hooper を支持している。

<sup>28</sup> ただし、高垣 (1982) は生成意味論的アプローチ、福嶋 (1990) は国語学の陳述論と、言語学的な背景は異なる。

#### 1.4.2.4. 福嶋 (1990) の陳述性と命題性

福嶋 (1990) はスペイン語文法における「現実 vs 非現実」 (e.g. RAE 1973)、あるいは「独立 vs 従属」の観点 (e.g. 高垣 1982, Takagaki 1984) からの叙法選択についての説明を評価しつつも、いずれにおいても説明しきれない用例があることを指摘する。そこで福嶋は、益岡 (1987) による日本語文法のモダリティ理論、及び国語学で古くから議論される陳述論より、陳述と命題の観点を導入し、スペイン語の接続法表現を考察している。

(132) 太郎が次郎に本を読ませたらしいね

(福嶋 1990)

命題とは名詞句及び動詞句およびその結びつきがもたらす客体的意味を指し、陳述とは命題に対して話者が抱く言表態度を指す (福嶋 1990, pp. 52-53)。スペイン語やポルトガル語においては概ね陳述は主節、命題は従属節に当たるといえる。すなわち、主節とその言表態度の影響を受ける従属節は命題によって文が構成されている (133)。

(133) [<sub>陳述</sub> Deseo [<sub>命題</sub> que venga].]

[<sub>陳述</sub> 私は [<sub>命題</sub> 彼が来ること] を望んでいる]

(福嶋 ibid)

福嶋は従属節においても陳述と同様に機能するもの、すなわち、複文でありながら主節のみの表現と同様に機能するものがあり、このような従属節を「陳述性の強い従属節」としている (134)。

(134) [陳述 Creo] [陳述 (que) vienes].

[陳述 彼は来る] [陳述 私はそう思う]

(福嶋 ibid)

この仮説では命題内容が事実にもかかわらず接続法が用いられる感情表現も説明できるとされる。これについては従属節内情報の「背景化」を命題性の根拠としており、先述の Terrell & Hooper (1974)、出口 (1981)、高垣 (1982, 1984) や和佐 (2005) にも通じる。

また、副詞節表現や関係詞節表現も陳述性と命題性によって説明可能であるとする。

(135) Aunque no venga, no importa.

= [陳述 [命題 aunque no venga], no importa]

= [陳述 たとえ [命題 彼が来ないようなこと] があっても、構わない]

(136) Aunque no viene, no importa.

= [陳述 (aunque) no viene], [陳述 no importa]

= [陳述 彼は来ない] が、 [陳述 それは構わない]

(137) No hay nadie que venga.

= [陳述 no hay nadie [命題 que venga]]

= [陳述 [命題 来る] ような人は、いない]

(138) Hay alguien que viene.

= [陳述 hay alguien] [陳述 (que) viene]

= [陳述 誰かがいる] [陳述 その人がやって来る]

(福嶋 ibid)

さらに、主節における接続法使用についても、発音、音調によって文脈的に命題性を持



たされている事例であると説明する。

(139) ¡Silencio!

=<sub>〔陳述 (命令) 〔命題 silencio〕</sub>

=<sub>〔陳述 〔命題 静かにすること〕 (を命じる)〕</sub>

(140) ¡A comer!

=<sub>〔陳述 (命令) 〔命題 (a) comer〕</sub>

=<sub>〔陳述 〔命題 食べること〕 (を命じる)〕</sub>

(141) Venga.

=<sub>〔陳述 (命令) 〔命題 venga〕</sub>

=<sub>〔陳述 〔命題 来ること〕 (を命じる)〕</sub>

(福畹 ibid)

福畹の仮説は意味論的視座に基づくものであるが、枠組み的には生成意味論的視座に基づく高垣 (1982, 1984) の「独立文性」、「従属文性」に通じるところがあると考えられる。なお、Wasa (1999) は福畹 (1990) の「接続法 = 命題性」仮説を「接続法とはモダリティを表現する文法手段のひとつであり、接続法を取る節は命題性を表すものではない」と批判する。これに対し、福畹 (2013) は陳述論とモダリティ研究のアプローチの違いから、術語上の誤解が生じていることを指摘している。

福畹によってなされた日本語研究の知見の導入は、後の和佐 (2005) などによる、仁田や益岡の日本語モダリティ理論のスペイン語への応用により、さらに成熟し、支持を得ることとなる (寺崎 2011, 福畹 2013)。

#### 1.4.2.5. Maeda の Processamento Cognitivo 1, 2, 3

ここまで見てきたように、多くの理論では叙法選択の要因を二項対立的や二極間の連続体的に扱っている。これに対しポルトガル語の Maeda (2001, 2004, 2005) の一連の仮説理論は他とは一線を画するものとなっていて、3つの *Procedimento Cognitivo* (「認知の営み」: *PCs*) と呼ばれる独自の階層的基準から叙法選択を検証している。

(142) PC1: 言語使用者が命題内容の真実性または実現可能性に対して確信がないと判断した場合

PC2: 言語使用者が自分自身の内的概念と外界の現状との間に何らかの対立を認識した場合

PC3: 言語使用者が心的判断の基準のうち最もプリミティブとされる”positive 対 negative”という判断基準に則って命題に関する評価を行った場合

(Maeda 2001, p.52. 和訳は p.51 の要旨より)

一つ目の基準 (PC1) は話者の命題内容への確かさの態度を基準とする。これは Terrell & Hooper (1974) の *assertion / non-assertion* と類似しているが、Maeda は言語内的な基準ではなく発話者の態度や知識といった「認知の営み」を基準とする点で異なっていることを強調している<sup>29</sup> (Maeda 2000, p.57)。PC1 は明確な直説法表現と接続法表現の違いはもちろん、直説法と接続法が混在する表現を説明できる。

(143) Creio que este é o caminho que devemos seguir.  
think-PRES-1SG that this be-IND-PRES-3SG ART.DEF way that must-PRES-1PL follow-INF  
'I believe that it is the path we must follow.'

<sup>29</sup> ただし、話者の判断と、結果的に選択される接続法を導く言語形式 (主節動詞や副詞など) の一致を認めている。

(144) Creio que seja possível a sobrevivência.

think-PRES-1SG that be-SBJV-PRES-3SG possible ART.DEF survival

‘I believe that survival is possible.’

(Maeda 2000)

動詞 *pensar* (think)、*achar* (think)、*crer* (think, believe)、*acreditar* (credit)、*supor* (suppose) などの補語節に直説法も接続法も用いられ得るのは話者の命題の確かさへの態度の度合い、すなわち PC1 によるとされる。

二つ目の基準 (PC2) は可能世界と現実世界の間におけるギャップへの認識とし、PC1 では説明ができなかった感情表現や譲歩表現 (Maeda 2001) への説明としている。

(145) ... estou surpreendido que um caramelo como este tenha

uma página de tão elevada qualidade.

be-PRES-1SG surprised that ART.IDEF caramelo like this have-SBJV-PRES-3SG

ART.IDEF page of such elevated quality

‘I am surprised that a caramel(?)<sup>30</sup> like this have a high quality page.’

(146) Mesmo que chova muito, eles brincam fora.

Although rain-SBJV-PRES-3SG very.much they play outside

‘Even though it rains so much, they are playing outside.’

(Maeda 2001)

感情表現では、例えば「caramelo には上質な記事がない」という心的前提を覆す「caramelo に上質な記事がある」事実が起こっていることの認識の標識として、譲歩表現

---

<sup>30</sup> 固有名詞であるのか、俗語であるのか、ネイティブチェックやコーパス分析を経ても判明しなかった。

では「雨が降っていたら外で遊ばない」という心的前提を覆す「雨が降っているのに外で遊んでいる」という事実が起こっていることの認識の標識として、PC2 に基づき接続法が用いられる。

また、Maeda (2004) ではPC2を反実仮想表現と条件表現に対する説明にも用いている。

(147) Se Jung estivesse vivo no Brasil, decerto ficaria de  
queixo caído com a reação dos eleitores.  
if Jung be-SBJV-IPFV-3SG alive in:ART.DEF Brazil maybe become-COND-3SG of  
chin dropped with ART.DEF reaction of:ART.DEF voters  
'If Jung were alive in Brazil, he may have been disappointed by the voters'  
reactions.'

(148) Se Jung estiver no Brasil ...  
if Jung be-SBJV-FUT-3SG in:ART.DEF Brazil  
'If Jung is alive in Brazil ...'

(149) Pisámos no chão (da casa do Jorge Amado) como se  
pisássemos em ovos.  
step-PPFV-1PL in:ART.DEF floor of:ART.DEF house of:ART.DEF Jorge Amado as if  
step-SBJV-IPFV-1PL in eggs  
'We stepped on the floor (of Jorge Amado's house) as if we stepped on eggs.'

(Maeda 2004)

(147)の反実仮想表現では「Jung がいる」という心内世界の内容が「Jung がない」という現実世界の内容と対立していることを認識して表出しているとされる。また、(149)の *como se* で表現される反実仮想比喩表現も同様で、現実には「床は卵でない」ものの、心内

世界では「床は卵である」とする対立を認識していることの標識として接続法未完了過去が用いられるとする。一方で、(148)の接続法未来の条件表現ではこの対立については無関心である。

三つ目の基準 (PC3) は話者の命題に対する肯定的あるいは否定的認識とし、これも譲歩表現や感情表現、あるいは願望表現 (Maeda 2004, 2005) に対する説明としている。

(150) Estou contente que eles estejam aqui de volta.

be-PRES-1SG content that they be-SBJV-PRES-3PL here of return

‘I am content with them returning here.’”

(Maeda 2001, 2004)

(151) Que chova 3 dias sem parar.

that rain-SBJV-PRES-3SG 3 days without stop-INF

‘I wish that it had rained nonstop for three days.’

(Maeda 2005)

事実に対する喜びや悲しみを表現する感情表現は、命題内容への肯定的あるいは否定的認識を表現している。(150)では「彼らが帰ってきていること」を客観的に陳述するのではなく、このことへの肯定的態度を表明している。また、命令表現や希求表現も PC1 の不確かさへの態度に加え、肯定的な態度を表現する。(151)では「3日間止まらずに雨が降ること」は現実世界とは異なる情報である (PC2) と同時に、これが起こることへの肯定的態度を表明している。このように命題内容への肯定的あるいは否定的認識を表明する際に命題に接続法が用いられる。

各 PC は排他的ではなく、それぞれが組み合わさることによって様々な表現における接続法選択を説明できるとする。Maeda (2004) では各接続法時制形態素がカバーできる PC の

意味範囲は限定性を図示している。

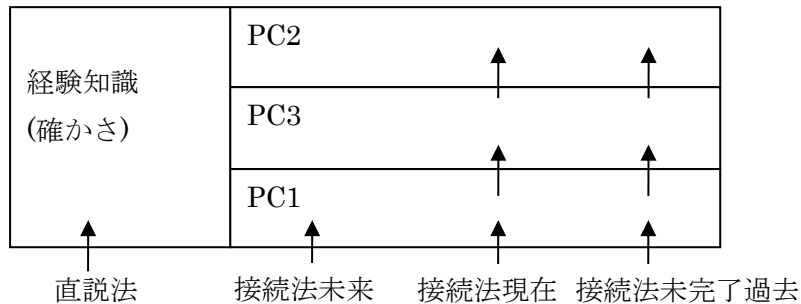


図 6 接続法各時制の及ぶ意味範囲 (Maeda 2004 より)

これによると、接続法未来では PC1 のみ (すなわち命令や希求は表現できない)、接続法現在、接続法未完了過去ではすべての PC が判断基準として使用される。これは接続法形態素習得研究において時制形態素に視点を置いたアプローチのひとつの基準となりえるという点からも興味深い。

#### 1.4.3. 一元的アプローチのまとめ、概観

Terrell & Hooper (1974) が提唱した assertion と non-assertion の叙法選択要因はスペイン語学における接続法観や叙法観を一変させる影響力を有した (出口 1981; 高垣 1982, 1984; 福嶋 1990)。ただしこれでは一部表現、特に疑問文における接続法の不使用を説明できない。そのため、これを克服するために多くの新しい叙法選択理論モデルが提唱された。しかし直説法と接続法の対立を念頭に置いて構成概念を当てはめた説明では行き詰まっていくことになる。接続法の理解のために、直説法と接続法以外の言語内の文法システムとの関係や、他言語における接続法に相当する表現の理解、あるいは言語学一般における理論の理解が不可欠である。

## 1.5. まとめ

本章では接続法の概略についてまとめた。接続法とはモダリティを表現するための動詞形態素を指すが、その使用条件は時制、統語構造、意味機能が非常に複雑に関係し合う。特に、意味機能面については一貫性を見出すのが非常に難しく、個別言語単位での研究や教材では説明がし切れていないといえる。

ポルトガル語文法では接続法は叙法として直説法とともに動詞形態素の頂点に位置づけられ、続いて時制、アスペクトと下位区分されていくことが一般的である (e.g. Cunha & Cintra 2007)。ただしこの区分では、接続法はポルトガル語文法における非常に広い領域を占めているという誤解を生じかねない。そこで、次章ではポルトガル語、あるいはスペイン語文法を離れ、言語学一般における叙法とモダリティの仮説理論を援用することで接続法を意味論的見地からさらに考察をしていく。動詞形態素の頂点に叙法を位置づけるのではなく、モダリティの枠組みにおける最下位区分として叙法を位置づけることによって、ポルトガル語における接続法の位置づけを、直説法との一対一ではないものとして再確認していく。

## 第2章 叙法とモダリティ研究から見る接続法

### 2. 接続法とモダリティ論

前章ではポルトガル語接続法について、形態的側面、統語的側面、意味的側面からまとめた。個別言語の文法研究では形態統語論を起点とした視座から、接続法を直説法と一対一で対立する叙法として対等に扱う事例が多い。ポルトガル語文法書などに多く見られる多面的アプローチでは直説法各時制が用いられる表現を一通り羅列した後に接続法が用いられる表現を時制形式別に羅列するのが一般的である (Bechara 2007; Cunha & Cintra 2007; 田所 & 伊藤 2002; 富野 & 伊藤 2013)。一方、スペイン語学で盛んに議論された Terrell & Hooper (1974) や出口 (1981) などの一元的アプローチでも、ある場合にいずれかの叙法が用いられ、それ以外の場合にもう一方が用いられるという、両叙法の対立的定義に終始している。しかしこれらの形態統語論的視座では、接続法表現と類似する内容を表すことができる言語要素、すなわち直説法形式及び不定詞でも真偽判断や当為判断などを表現する *poder* や *dever* などの動詞語彙や、接続法表現と同じように当為判断を表現する直説法未来・過去未来などの形態素、さらに副詞語彙などとの関係の説明が欠けていることが多い。例えば、出口 (1980) は「多様な法表現」として接続法表現と法動詞表現などの意味的共通性を指摘するが、個別言語の文法書や教材でこういった点を指摘している例は少ないと言える。

本章では、意味論的視座から接続法とその上位範疇である叙法、そしてさらに叙法を含む上位範疇であるモダリティについて概観していく。直説法と接続法の二項対立観では意識されにくい問題に焦点を当てることで、改めてポルトガル語文法における接続法の意義について再考する。

#### 2.1. 叙法とモダリティ

叙法 (*mood/mode*) とモダリティ (*modality*) はしばしば混同されやすい概念である。モ



ダリティとは発話において客観的事実に対する話者の態度を示す要素であり、言語の類型的なあり方に縛られない一般性の高い文法概念である(益岡 1991, Palmer 2001)。ただし、モダリティの定義については一定の了解があるものの、定義を超えた幅広い事例を有するために明確な特徴づけが難しいとされる(仁田 1989; Bybee, Perkins, & Pagliuca 1994; 亀井, 河野 & 千野 1995<sup>31</sup>; 和佐 2005, etc.)。John Lyons や F. R. Palmer はモダリティを「話者の態度や意見を文法化したもの」と定義する(Lyons 1977, Palmer 2001)。また、益岡隆志も「主観性の言語化されたもの」、「客観的に把握される事柄ではなく、そうした事柄を心に浮かべ、ことばに表す主体の側に関わる事項の言語化されたもの」(益岡 1991, p.30) と、仁田義雄は「発話時の話し手の立場からした言表事態に対する把握のしかた、および、それらについての発話・伝達的態度のあり方の表し分けに関わる文法的表現」(仁田 1991, p.2) と定義する。いずれもつかみにくい定義であると言え、各研究者ともに時制やアスペクト、ヴォイスなどと比べて明確な定義がしづらいことを認めている(Lyons 1977, 益岡 1991, 仁田 1991, Bybee et al. 1994, Palmer 2001)。諸研究を概観すると、「モダリティ」という術語は「命令」、「願望」や「推測」などといった意味概念を指す場合(e.g. Collentine 1995; Otaola 1988) と、発話された言語の中でそれらの意味概念を表している形式や構造を指す場合(e.g. Fillmore 1968, 益岡 1987, 仁田 1991, Palmer 2001, etc.) があるようである(see also Givón 1994)。

一方で叙法(あるいは「法」、「ムード」)とはモダリティを表象する言語システムの一部であり、動詞に関わるものである(益岡 1991, Palmer 2001, etc.)。西欧諸語においては接続法や条件法などの動詞の屈折として、太平洋諸語やネイティブアメリカン諸語では接辞として実現される傾向があるとされる(Givón 1994, Bybee & Fleischman 1995, Palmer 2001)。

次に叙法とモダリティ、並びにその他の関連言語要素について、図 7 に Palmer (2001) に

---

<sup>31</sup> 「文法範疇の中でもっとも捉えにくい範疇である」としている。

よる分類を図式化する。

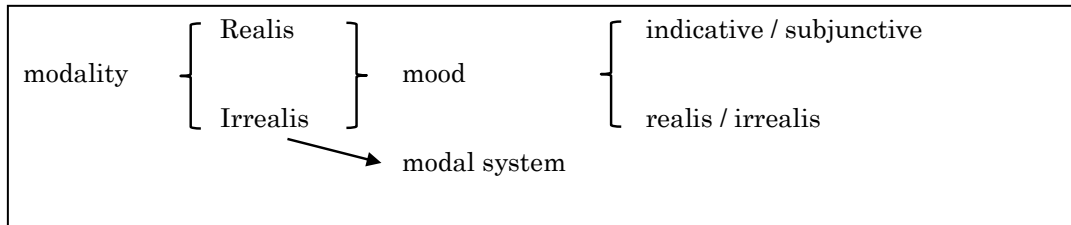


図 7 Palmer (2001) におけるモダリティ表現形式の区分 (本論筆者による整理)

Palmer はモダリティを表現する言語構造を *Realis* と *Irrealis* に二分し、その下位に叙法とその他のシステム (*modal system*: 副詞や法動詞語彙など) を分類し、さらに叙法を直説法と接続法からなるパラダイムと、*realis* と *irrealis* (アジア諸語などにおける叙法形式) からなるパラダイムに分類している。大文字の *Realis/Irrealis* は類型学的な文法カテゴリーを、小文字の *realis/irrealis* は構成概念と個別言語における文法カテゴリーを指す術語として呼称しており、本論でもこれらの Palmer の分類する術語を踏襲していく。

以上より、叙法とモダリティの研究において接続法はモダリティの最下位カテゴリーのひとつであると位置づけられる。

## 2.2. 命題とモダリティ

次にモダリティとは何かを考えていく上で、そのモダリティ (*modality*) と命題 (*proposition*) という構成概念の関係を考察していかなければならない。命題とモダリティという概念は格文法の Fillmore (1968) において、構造のカテゴリーとして示されている。その後の Terrell & Hooper (1974) や Lyons (1977)、Palmer (2001) といった意味論的視座からの叙法とモダリティの研究においても引用され、モダリティを考える上で不可欠な構成要素とされている。ただし、西欧のモダリティ諸研究では命題とは何かという定義が欠けていることが多い (e.g. Givón 1994, Palmer 2001)。

モダリティが言語普遍的な概念であるなかで、日本語の文法研究では命題とモダリティの体系が高度に発達しているとされる(益岡 1991, p.34)。現代日本語学のモダリティ研究の第一人者に仁田義雄と益岡隆志が挙げられる。仁田や益岡が展開する日本語のモダリティ理論は日本語に際立って見られる言語現象のみへの言及に止まらないと考えられ(cf. 福寫 1990, 和佐 2005)、本論ではポルトガル語叙法の考察に仁田や益岡のモデルを考慮していく。

仁田(1989, 1991)によると命題とは「話し手が現実との関わりにおいて描き取った一片の世界、文の意味内容のうち客体的な出来事や事柄を表した部分」である「言表事態」の核をなすもの、モダリティとは「発話時の話し手の立場からした言表事態に対する把握のしかた、および、それらについての発話・伝達の態度のあり方の表し分けに関わる文法的表現」、すなわち「言表態度」であると定義する。ただしこの規定によってモダリティ的なものすべてを定義できるものではないと注釈する(仁田 1991)。仁田(ibid, p.1)は文構造における命題(言表事態)とモダリティ(言表態度)の関係を以下のように図示している。

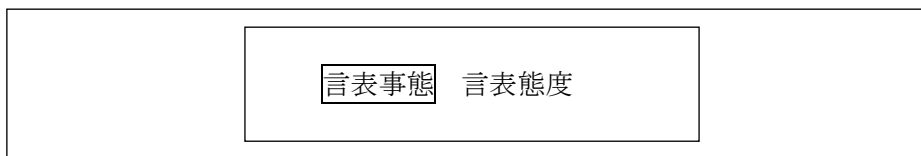


図 8 仁田の言表事態(命題)と言表態度(モダリティ)との関係図(仁田 1991 を元に本論筆者による再現)

益岡(1987)も命題を「文において客観的な内容を表す部分」、モダリティを「主観的な内容を表す部分である」と定義しているが、両者の線引きがどこでなされるのかは不明瞭であるとし、両者の間の中間的な存在を認める。益岡(1991)ではここからさらにモダリティ形式を、恒常的に主観性を表現するものと、それに内包され客観的表現になり得るもの

に下位区分し、前者を「一次的モダリティ」、後者を「二次的モダリティ」と定義した。一次的モダリティでは常に表現時における表現者（発話者）の判断・表現態度のみを表す。一方で、二次的モダリティでは表現者の判断と見なせない用法、表現時以外の時点での判断を表す用法、「～こと」のような表現の内部で使われる用法がある。日本語では「～だろう」や「～よ」が表現時の判断のみを表す一方、「らしい」や「ない」は客観化を許すとされる（益岡 1991, pp. 35-36）。

(152) 何も要らないだろう。

(153) \*何も要らないだろうことを知らなかった。

(154) 警察はそのことに気付いているらしいですか。

(155) 試験の結果もよくないですか。

(益岡 1991)

(152)は推測や断定の内容の表現であるが、この表現は(153)のように「こと」で客観化、すなわち二次的モダリティとなることができない。一方、(154)では「気付いているらしい」という推測のモダリティを、(155)では「よくない」という断定や評価のモダリティをそれぞれさらに「ですか」という疑問のモダリティで客観化させている。益岡が提唱する文構造における命題と一次的モダリティ、二次的モダリティとの関係は図 9 の通りである。ここではモダリティを大きく「表現系のモダリティ」と「判断系のモダリティ」に分け（後述）、判断系のモダリティにのみ二次的モダリティが認められるとされている。

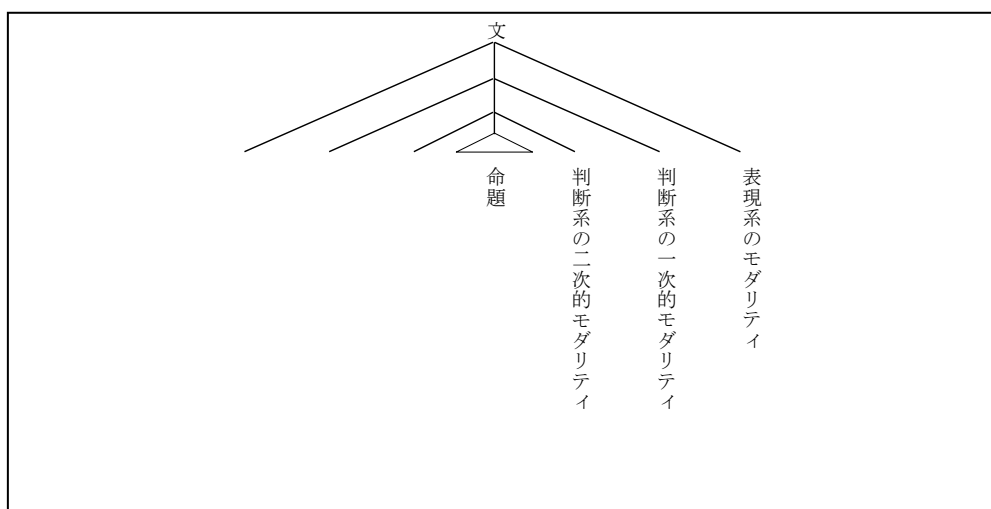


図 9 益岡の命題とモダリティの階層関係図 (益岡 (1991), p.43 を元に筆者による再現)

後に福寫 (1990) が益岡 (1987)、並びにその土台となる近代日本語文法の「陳述論」 (cf. 森山, 仁田 & 工藤 2000) の考え方を援用し、文の「命題性」と「陳述性」によるスペイン語の叙法仮説を提唱している。また、鳥越 (2013a) では命題とモダリティの明確な区分が難しい関係詞表現における叙法選択に関し、二次的モダリティの観点からの分析を試みている。

### 2.3. Realis と irrealis

さらに、モダリティを表象する叙法や語彙などの決定要因とされる *realis* と *irrealis* の概念について考える。これは Terrell & Hooper (1974) が提唱した *assertion / non-assertion* (cf. 本論 1.4.2.1) のような一元主義的アプローチの一種であるが、接続法に限らないモダリティ表現全体を説明するより広い考え方である。欧米の意味論や記述言語学、対照言語学の研究者の間では、命題の内容が *realis* なのか *irrealis* なのかによって接続法をはじめとする *Irrealis* 形式が出現するという考え方が定着している (e.g. Fleischman 1982, Givón 1994, Palmer 2001)。

Bybee et al. (1994) によると、*realis* と *irrealis* という用語がいつから用いられ始めたか

は厳密には定かではないが、確認できるところでは 1970 年代のクレオール語研究や太平洋諸語の研究の中で使われ始めたとされる。Mithun (1999, p.173) の定義によると、「realis とは実際に起こった、あるいは起こっており、直接的な知覚によって知ることのできる状況」をあらわし、「irrealis とは観念の領域にあり想像によってだけ知ることができるような状況をあらわす」とされる。この定義は表現構造がどういった意味を示すかに関心が置かれており、言語内的であるといえる。

これに対し、Givón (1994) は realis / irrealis の言語内性 (理論性) と言語外性 (コミュニケーション性) の二面性、及び実際の言語運用面における言語外性の優勢を指摘する。言語外的な定義の例として Palmer (2001) が挙げられる。Palmer の realis / irrealis の定義は Terrell & Hooper (1974) の *assertion / non-assertion* の考え方を weak version として内包する。すなわち、realis と irrealis とは単に命題の内容が事実 (factual) なのか事実ではない (non-factual) のか、真実 (real) なのか虚構 (unreal) なのかを根拠とするものではなく、発話者が命題の真偽ではなく命題内容を assert しているのか、していないのかをその決定要素としている。命題内容を assert していない irrealis には presupposition も含まれ、これによって、スペイン語やポルトガル語などにおける命題の内容が明確に事実で真実性が認められる factive 感情表現での接続法使用を説明している。

(156) Me alegra que sepas la verdad.

me<sup>ACC</sup> cheer<sup>PRES-3SG</sup> that know<sup>SBJV-PRES-2SG</sup> ART.DEF truth

‘It comforts me to know that you know the truth.’

(Palmer 2001)

(156)では「私が喜んでいる」内容である従属節内の「あなたが事実を知っていること」は実際に起こっている事実であるが、従属節内の動詞 *saber* (know) には接続法形式の

*sepas* が用いられている。ここで Palmer は命題の内容は事実であるにもかかわらず、命題を assert していない (presupposition である) ために *irrealis* と見なされ、接続法が用いられているとしている<sup>32</sup> (See also, Lyons 1977, p.794)。

また、Terrell & Hooper (1974) は、後続研究 (e.g. 出口 1981, 高垣 1982, 1984) より *assertion/non-assertion* が疑問文や否定文で直説法が用いられることを説明できていないとされる批判を受けるが、*realis / irrealis* にはこれを克服する糸口が見い出せる。Palmer によると疑問文や否定文は北米先住民諸語や南米先住民諸語では *Irrealis* の形式によって表現されることがある一方、ヨーロッパ諸語では *Irrealis* 形式による表現は稀であるとされる (Palmer 2001, pp.11-12)。すなわちポルトガル語を含むヨーロッパ言語では疑問文や否定文は概念的には *irrealis* であるが、形式的には *Realis* で表現される例であり、個別言語文法内の直説法と接続法の対立を単純にとらえるような視座ではたどり着けない考え方であると言えよう。

#### 2.4. モダリティの意味的カテゴリー

前章 1.4.1 にて接続法が用いられる意味文脈について列挙したが、モダリティ研究では伝統的に、接続法表現を含むモダリティの意味文脈を疑いや推測などの「真偽判断のモダリティ<sup>33</sup>」 (*epistemic modality*) と、願望や要求といった「当為判断のモダリティ<sup>34</sup>」 (*deontic modality*) に二分する (Lyons 1977, Givón 1994, Bybee et al. 1994, Palmer 2001, 和佐 2005)。しかしながら、単純な二つの分類では把握しきれないのがモダリティという構成概念である。近年、様々な研究者がテキスト分析などからモダリティの詳細な描写を試みて

---

<sup>32</sup> これに対し和佐 (2005) は、*realis/irrealis* は上記の感情表現を説明できていないとして「真偽判断を差し控えるモダリティ」を説明概念として挙げている。ただしこの和佐の説明は「補文命題に情報価値がない」ことを根拠としており、この点においては Palmer、及び Terrell & Hooper (1974) などと一致しているといえる。なお、和佐は Palmer が *assertion/non-assertion* を援用していることを特に指摘していない。

<sup>33</sup> 和佐 (2005) の訳語を採用している。益岡 (1991) でも「真偽判断のモダリティ」、仁田 (1991) では「認識のモダリティ」、出口 (1980) では「陳述緩和的助動詞」と訳される。

<sup>34</sup> 和佐 (2005) の訳語を採用している。益岡 (1991) では「価値判断のモダリティ」、仁田 (1991) では「当為評価のモダリティ」と訳される。

おり、本節では代表的な事例をまとめる。

#### 2.4.1. 真偽判断のモダリティと当為判断のモダリティ

前述の通り、ヨーロッパのモダリティ研究では伝統的に真偽判断のモダリティと当為判断のモダリティに二分され、多くのモダリティを扱う研究ではこの二分を前提として各々の仮説理論を展開している。また、日本語のモダリティ研究でも当為判断のモダリティと真偽判断のモダリティを中心に議論しているものもある（森山, 仁田 & 工藤 2000）。真偽判断とは命題が真か偽か、実現性のあるものかないものかの判断に関わるもので、当為判断とは命題に対する評価態度に関わるものである。以下、真偽判断のモダリティと当為判断のモダリティの例である。

(157) Kate may be at home now.

(158) Kate must be at home now.

(159) Kate may come in now.

(160) Kate must come in now.

(Palmer 2001, p.7)

Palmer は上記の例を *possible* と *necessary* を用いた言い換えによって解説する。

(161) It is possible (possibly the case) that Kate is at home now.

(162) It is necessarily the case that Kate is at home now.

(163) It is possible for Kate to come in now.

(164) It is necessary for Kate to come in now.

(ibid)



(161)(162)は命題内容の実現の可能性について判断している、真偽判断の例である。一方、(163)(164)は命題が為されるべきであるという判断を下している、当為判断の例である。

真偽判断のモダリティとは命題の真偽性を判断するものであるため、真、すなわち *realis* や *factive* などといった領域を含む。前者の *realis* について、ポルトガル語では補語節内に直説法現在を伴うような真の態度を表出するような表現も含まれる。

(165) É possível que a Maria esteja em casa.

be-PRES-3SG possible that ARTDEF Maria be-SBJV-PRES-3SG in house

‘It is possible that Maria is home.’

(166) É claro que ele foi à festa.

be-PRES-3SG clear that he go-IND-PFV-3SG to:ARTDEF party

‘It is clear that he went to the party.’

(Mateus et al. 2003)

(165)では「Maria が家にいること」について話者は「かもしれない」と真偽判断を保留する態度を取っているが、(166)では「彼がパーティへ行ったこと」は「もちろんである」と肯定的に判断している。このような、叙法的には直説法が表現する意味領域である *realis* の判断も真偽判断のモダリティの領域となる。

加えて *factive* について、命題内容が真でありながらも接続法が用いられるような感情表現(167)も、真偽判断のモダリティの一例として分類されることがある (Palmer 2001)<sup>35</sup>。

(167) A Ana lamenta que estejas doente.

ARTDEF Ana regret that be-SBJV-PRES-3SG ill

<sup>35</sup> 接続法の事例としては真偽判断 (命題めあて) モダリティの一部としているが (pp.121-124)、一般論としては「その他」として分類している (p.11)。

‘Ana regrets that you are ill.’

(Mateus et al. 2003)

ただし、Givón (1994) はこれを真偽判断モダリティに含めていない。

また、真偽判断の対象となる命題内容は過去、現在、未来と時間軸上のあらゆる内容及ぶ(168)。

(168) Ele duvida / duvidou que os miúdos recebam /  
recebessem / tenham recebido / tivessem recebido o prémio.

hedoubt-PRES-3SG doubt-PRES-3SG that ART.DEF-PL kids receive-SBJV-PRES-3PL

receive-SBJV-IPFV-3PL receive-SBJV-PFV-3PL receive-SBJV-PSTPFV-3PL ART.DEF prize

‘He doubts / doubted that the kids receive / received / have received / had received the prize.’

(Mateus et al. 2003)

「子どもたちが賞を受けること」も「子どもたちが章を受け取ったこと」もいずれも論理的に疑うことが可能である。

一方で当為判断のモダリティは、真か偽かの判断とは関係がなく、命令、強制、許可など常に *irrealis* の未実現の内容が関係する。そのため、論理的に命題の内容が参照時点（時制の時点）以前となることはない (Lyons 1977; 森山 et al. 2000)。

(169) Ele exige que os concorrentes leiam / \*lessem /  
tenham lido / \*tivessem lido as instruções.

hedemand-PRES-3SG that ART.DEF candidates read-SBJV-PRES-3PL read-SBJV-IPFV-3PL

read-SBJV-PFV-3PL read-SBJV-PSTPFV-3PL ART.DEF-PL instructions

'He demands that the candidates read / read / have read / had read the instruction.'

(Mateus et al. 2003)

(169)では「候補者が指示を読むこと」は「要求する」以前になることは論理的にあり得ない。完了過去（現在完了）を用いた「読み終わっていること」は文法的に成り立つが、その場合の内容は「彼が要求する」以前ではなく、それ以降の言語化されていない任意の時点以前となる (Mateus et al. 2003, p.270)。

また、真偽判断のモダリティは当為判断のモダリティを包みこむことができるが (170)(171)、当為判断のモダリティが真偽判断のモダリティを包みこむことはない。すなわち、当為判断はより命題に近い要素となる。

(170) 河野代表ら幹部は組織の内部から動揺が出ていることを深刻に受け止めなければならないだろう

(171) きみたち、逃げた方がいいんじゃないかな

(森山 et al. 2000)

このような統語意味的制約に関係し、森山 et al. (2000) では当為判断のモダリティを「疑似的モダリティ」とし、「成熟度の低い、副次的・二次的な存在でしかない」と評している。そのため、真偽判断のモダリティとしばしば対立的に提示されるものの、機能的に対等な関係にならないことを注意している。

また当為判断のモダリティでは言語外的な社会的規範が話者の判断に影響していることも特色である (Lyons 1977, Palmer 2001)。

## 2.4.2. Bybee, Pagliuca, & Perkins (1994) の分類

Bybee, Pagliuca, & Perkins (1994) は真偽判断のモダリティと当為判断のモダリティの二分ではなく、「主体指向 (*agent-oriented*)」、「話者指向 (*speaker-oriented*)」、「真偽判断 (*epistemic*)」、「従属節内叙法 (*subordinating moods*)」の4つに大別する。主体指向のモダリティは表される行動の遂行に対する主体者の内外的状況の存在を述べるもので、「強制 (*obligation*)」、「能力 (*ability*)」、「願望 (*desire*)」、「自発 (*willingness*)」、「*root possibility* (状況可能)<sup>36</sup>」に下位区分される。話者指向のモダリティは主体指向のモダリティで表現されるような内外的状況を聞き手に負わせる表現であるとされ、「命令 (*imperative*)」、「禁止 (*prohibitive*)」、「希求 (*optative*)」、「勸告 (*hortative*)」、「警告 (*admonitive*)」、「許可 (*permissive*)」に下位区分される。真偽判断のモダリティは伝統的な定義と同様、命題の真偽判断に対する発話者の態度であり、「可能性 (*possibility*)」、「蓋然性 (*probability*)」、「真実性 (*certainty*)」、「反実性 (*counter-factual*)」に下位区分される。従属節内叙法は「補語節 (*complement clause*)」、「譲歩節 (*concessive*)」、「目的節 (*purpose clause*)」に区分される。

表 11 Bybee, Pagliuca & Parkins (1994) のモダリティ分類 (本論筆者によるまとめ、和訳)

Agent-oriented modality (主体指向のモダリティ)	Obligation	(強制)
	Necessity	(必要)
	Ability	(能力)
	Desire	(願望)
	Intention	(意図)
	Willingness	(自発)
	Root possibility	(状況可能)
Speaker-oriented modality (話者指向のモダリティ)	Imperative	(命令)
	Prohibitive	(禁止)

<sup>36</sup> 玉地 (2010) の和訳を借用している。

	Optative	(希求)
	Hortative	(勧告)
	Admonitive	(警告)
	Permissive	(許可)
Epistemic modality (真偽判断のモダリティ)	Possibility	(可能性)
	Probability	(蓋然性)
	Certainty	(確実性)
	Counter-factual	(反実仮想)
Subordinating moods (従属節内叙法)	Complement clause	(従属節)
	Concessive	(譲歩)
	Purpose clause	(目的節)

Bybee et al. (1994) の区分では概念ベースの区分（主体指向と真偽判断）と形式構造ベースの区分（話者指向と従属節内叙法）に大別できる。これは同研究が言語間対照分析や通時比較分析から帰納して仮説を構築する方法論を採用しており、言語表現の形式や構造の出現、発展の順序などに基づいて区分していることが影響していると考えられる。他方、後述の仁田（1991）らによる枠組みからとらえ直すと、主体指向と真偽判断は「命題めあてのモダリティ」、話者指向は「発話伝達のモダリティ」に対応するものと考えられよう。

### 2.4.3. Givón (1994) の mega-modality

Givón (1994) は伝統的分類に倣いモダリティを *valuative (deontic)* と *epistemic* に二分するが、排他的なものとして扱うのではなく、表現によってはどちらの影響下にもあるものとして、連続体的にとらえるモデル (*mega-modality*) を提唱する (図 10)。それによると、スペイン語においてこれらの意味概念を実現する叙法は、当為判断の極である強い強制では接続法に加え不定詞と命令法が用いられ、真偽判断の極である強い確かさにおいては直説法が用いられるとされ、それらの中間的領域（弱い強制、願望、真偽判断的不安、弱い確かさ）において接続法が用いられるとしている。

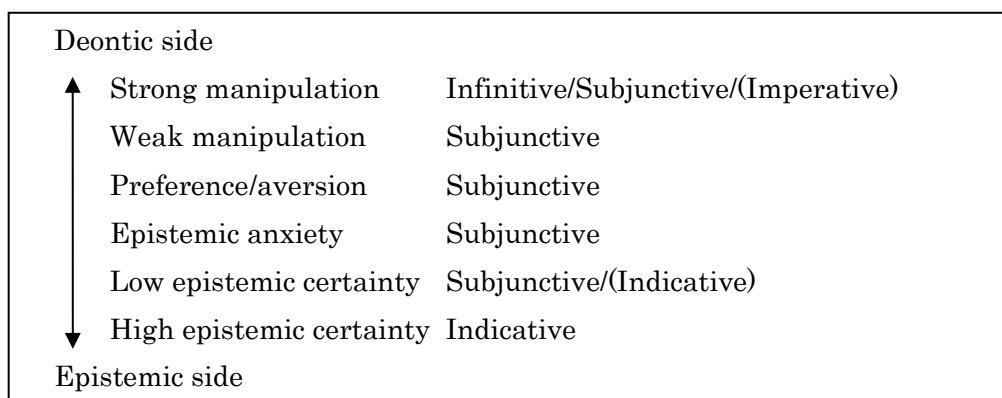


図 10 Givón (1994) によるモダリティ分類と、スペイン語において対応する叙法 (本論筆者による再現)

ただし、factive な感情表現はこの枠組みでとらえきれておらず、irrealis の非二元性や複雑性のためであると説明している。

#### 2.4.4. Palmer (2001) の分類

Palmer (2001: 1.2.2, 1.3) は真偽判断のモダリティ (*epistemic*) と当為判断のモダリティ (*deontic*) の伝統的区分のそれぞれに、さらに上位概念的に「命題へのモダリティ (*Propositional modality*)」と「事象モダリティ (*Event modality*)」の二つの枠組みを設けたうえで、「真偽判断モダリティ (*epistemic modality*)」と「証拠モダリティ (*evidential modality*)」、「当為判断モダリティ (*deontic modality*)」と「動的モダリティ (*dynamic modality*)」へと再構成している。表 12 に Palmer の分類をまとめる。

表 12 Palmer (2001) のモダリティ分類 (本論筆者によるまとめ、和訳)

Propositional modality (命題へのモダリティ)	Epistemic modality (真偽判断モダリティ)	Speculative Deductive Assumptive, etc	(推測) (仮定) (疑念)
	Evidential modality (証拠モダリティ)	Reported Sensory	(報告) (知覚)

Event modality (事象モダリティ)	Deontic modality (当為判断モダリティ)	Permissive Obligative Commissive	(許可) (強制) (委任)
	Dynamic modality (動的モダリティ)	Ability Volitive	(能力) (意欲)

命題へのモダリティは話者による命題への判断に関わるもので、真偽判断モダリティと証拠モダリティに区分される。真偽判断モダリティは命題の真偽判断に関わるもので、*Speculative* (推測)、*Deductive* (疑念)、*Assumptive* (仮定) に下位区分される。一方で証拠モダリティは真偽判断の根拠に関わるもので *Reported* (報告)、*Sensory* (知覚) に下位区分される<sup>37</sup>。

事象モダリティは起こり得る事象に対する話者の態度に関わるもので、当為判断モダリティと動的モダリティに区分される。当為判断モダリティは話者の外的要因が価値の判断に影響されるもので、「許可 (*Permissive*)」、「強制 (*Obligative*)」、「委任 (*Commissive*)」などといった概念に下位区分される。一方、動的モダリティは話者の内的要因が価値判断に影響するもので、「能力 (*Ability*)」や「意欲 (*Volitive*)」に下位区分される。

Palmer は以上に加え、「感情表現と譲歩表現 (*presupposed*)」、「否定と疑問 (*negative and interrogative*)」、「願望と危惧 (*wish and fear*)」、「モダリティとしての過去時制 (*past tense as a modal*)」を上記以外の「その他」として分類している。特に、一般的には当為判断のモダリティとして分類されることの多い願望表現を「部分的に当為判断的で部分的に真偽判断的」とし、当為判断への分類を保留している点が特徴的である。また、ポルトガル語文法書などでしばしば感情表現として分類されがちな危惧の表現を、願望表現とまとめて分類している点も興味深い。危惧とは確かに感情ではあるが、命題内容に対する否定的な願望でもあるとも考えられる。加えて、命題内容が真であるにもかかわらず接続法

<sup>37</sup> Palmer (2.2) の解説を見ると、*Evidential* はチベット語や南米先住民諸語などで文法化されるもので、ヨーロッパ諸語ではドイツ語やデンマーク語での類似した構造が示されているものの、ロマンス諸語での具体例文は示されていない。

が用いられるのが感情表現の特徴であるが、危惧の表現では命題内容に対する *irrealis* の判断態度であるため、どちらかというときと当為判断に分類されるべきと考えられる。

## 2.5. モダリティと *realis/irrealis*

2.3 では *realis* と *irrealis* について、2.4 では様々なモダリティのカテゴリーを概観した。接続法をはじめとする有標な *Irrealis* 形式は、各モダリティカテゴリーの *irrealis* の領域を表現する。モダリティのカテゴリーによっては *realis* か *irrealis* のどちらかを取るもの（あるいは中間的なもの）か、必ず *irrealis* になるものがある。

当為判断のモダリティでは、命題は必ず *irrealis* になるとされる。ポルトガル語では当為判断モダリティの動詞補語表現においては命題となる従属節内では接続法が要求される。

(172) A Maria espera que o Rui chegue a horas.

ART.DEF Maria hope-PRES-3SG that ART.DEF Rui arrive-SBJV-PRES-3SG in hours

‘Maria hopes that Rui will arrive on time.’

(173) É uma obrigação que se conheçam os termos do acordo.

be-PRES-3SG ART.IDEF obligation that REFL ART.DEF-PL of:ART.DEF terms of:ART.DEF agreement

‘It is necessary that you understand the terms of the agreement.’

(174) Ela volta para que todos fiquem contentes.

she return-PRES-3SG for that all.people become-SBJV-PRES-3PL content-PL

‘She is returning so that everyone will be content.’

(Mateus et al. 2003)

一方、真偽判断のモダリティでは、命題内容への確信の度合いなど様々な要素により *realis* 形式を用いる場合と *irrealis* 形式を用いる場合がある。



(175) A dúvida de que ele ganhe o prêmio preocupa-me.

ART.DEF doubt of that he win<sup>-</sup>SBJV-PRES-3SG ART.DEF prize worry<sup>-</sup>PRES-3SG:me

‘The uncertainty as to whether they will win the prize concerns me.’

(176) A certeza de que ela está bem anima-me.

ART.DEF certainty of that she be<sup>-</sup>IND-PRES-3SG well encourage<sup>-</sup>PRES-3SG:me

‘The certainty that she is fine encourages me.’

(Mateus et al. 2003)

これら *realis/irrealis* とモダリティカテゴリーの 2 領域は、言わば縦と横の関係にあると考えられる (図 11)。上述の通り、当為判断のモダリティには *realis* は存在しえない。

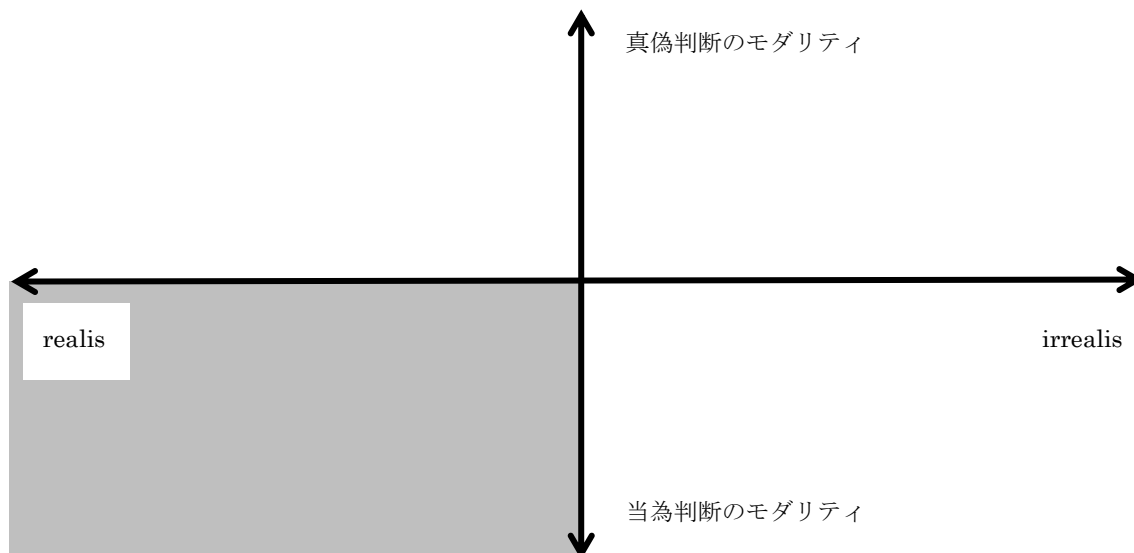


図 11 モダリティのカテゴリーと *realis / irrealis* の関係

接続法を含む有標の *Irrealis* 形式が用いられるのは、真偽判断のモダリティ、当為判断モダリティで *irrealis* となる場合である。

## 2.6. 二段構えのモダリティ

2.4 で、モダリティは大枠的には「真偽判断のモダリティ」と「当為判断のモダリティ」に分類されることを見た。和佐 (2005) はこれらを表現する手段の多様さがモダリティ研究を困難にしている要因であるとしている。接続法をはじめとした叙法はモダリティを表現する形式のひとつに過ぎず、モダリティは他に語彙的手段や音声的手段、その他の文法的手段によって表現される (和佐 *ibid.*, p.15)。このような各種のモダリティ表現の中での接続法の位置づけを明確にするため、「発話機能に対するモダリティ」と「発話内容に対するモダリティ」の区別に基礎をおいたモダリティ理論を引用する。

スペイン語のモダリティの研究では Otaola Olano (1988) が、日本語のモダリティの研究では仁田 (1991) と益岡 (1991) が、「発話機能に対するモダリティ」と「発話内容に対するモダリティ」からなる理論をほぼ同時期に提唱している (cf. 和佐 2005) (図 12)。このようなモデルを本論では便宜的に「二段構えのモダリティ」と呼ぶことにする。

「発話機能に対するモダリティ」はそれぞれ Otaola Olano が「発話行為のモダリティ (*modalidades de la enunciación*)」、仁田が「発話・伝達のモダリティ」、益岡が「表現系のモダリティ」と呼称するもので、これらを踏まえたうえで和佐はこれらを「発話・伝達のモダリティ」と整理している。他方、「発話内容に対するモダリティ」は Otaola Olano が「発話内容のモダリティ (*modalidades del enunciado*)」、仁田が「言表事態めあてのモダリティ」、益岡が「判断系のモダリティ」と呼称するもので、和佐は「命題めあてのモダリティ」と整理している。本論でもこれらの術語については和佐の呼称に従う。

発話・伝達のモダリティは聞き手めあてのモダリティ (益岡 1991) であり、発話時の聞き手に対する心的態度をあらわす言語形式である (和佐 2005)。文の様式、すなわち、平叙文、疑問文、命令文、感嘆文、丁寧文などを決定する言語要素であり、語彙や文法、イントネーションなどで実現される。

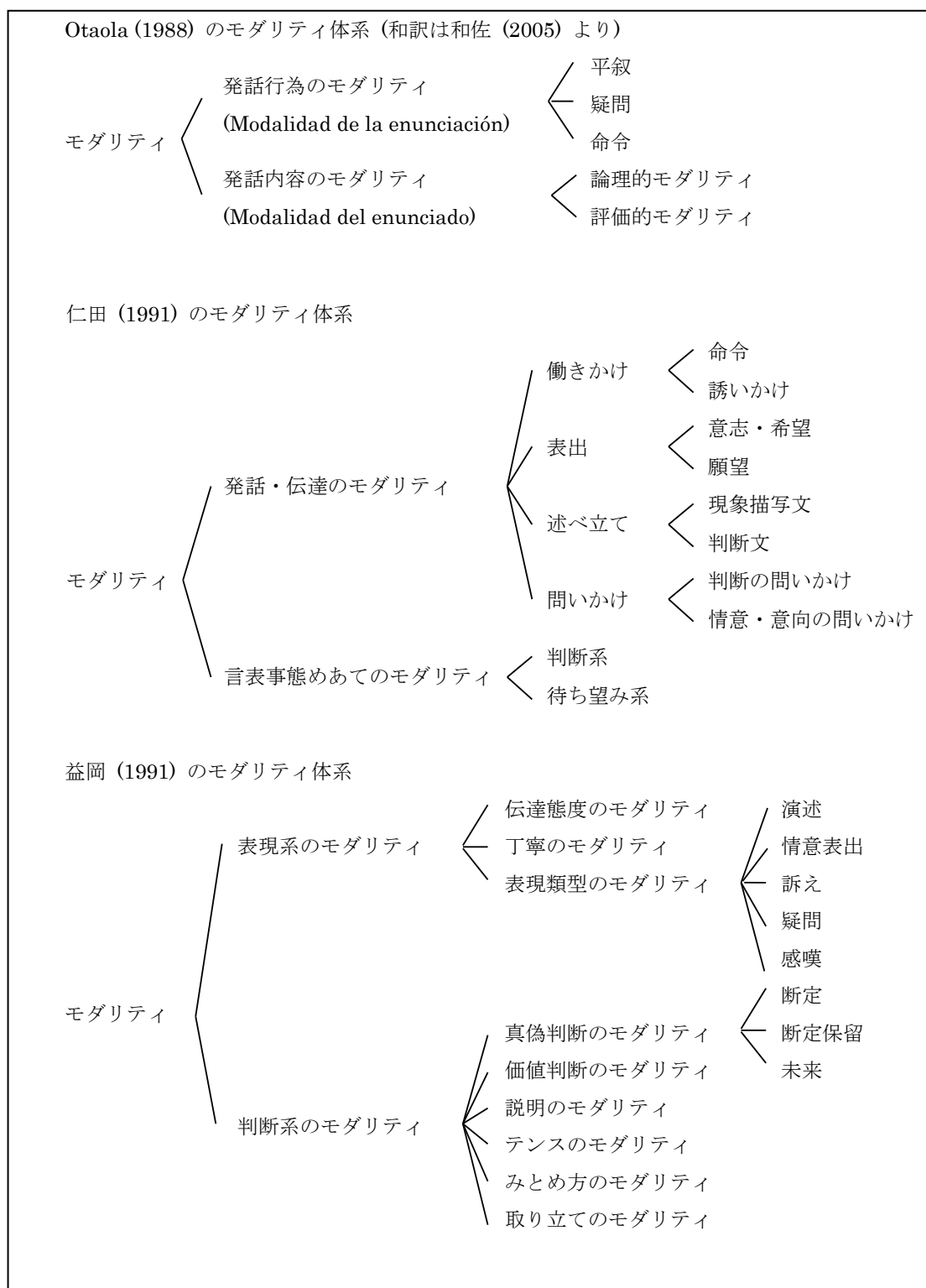


図 12 Otaola Olano、仁田、益岡のそれぞれのモダリティ体系

(177) *María viene.*

*María* come<sup>-IND-PRES-3SG</sup>

‘*Maria is coming.*’

(178) *¿María viene?*

*María* come<sup>-IND-PRES-3SG</sup>

‘*Is Maria coming?*’

(179) *Ven, María.*

come<sup>-IMP-2SG</sup> *María*

‘*Come, Maria!*’

(和佐 2005)

(180) 向こうからお嫁さんがやってくる

(181) これはどういうことだろうか。

(182) 「あなた早く帰ってきてちょうだい」

(仁田 1991)

(177)と(180)は「述べ立て」、(178)と(181)は「疑問」、(179)と(182)は「命令」で、内容はいずれも聞き手（命令は「*María*」または「あなた」）に向けられている。仁田（1991）によると、発話・伝達のモダリティは口語、文語に関わらず発話文を構成する上で不可欠な言語要素であり、文の存在様式であるとされる。すなわち、文は発話・伝達の機能を帯びることによって言語活動の単位として機能しうるものであり、発話・伝達のモダリティなくして存在できない（仁田 1991）。益岡（1991）もこのモダリティは本質的なモダリティであり、客観化、内包化を許さない「一次的モダリティ」にしかなりえないものであるとしている（益岡 1991, p.37）。

一方で、命題めあてのモダリティは、話し手の命題内容への把握の仕方に関わるもので

あり、命題内容に対する真偽判断と当為判断に大別される。

(183) それでは教えてあげます。看護は愛です。

(184) 郡山市のちかくまでは行けるだろう。

(仁田 1991)

(183)は「断定」、(184)は「推量」機能として機能し、聞き手ではなく命題内容に対する心的態度をあらわしている。

和佐 (2005) は二段構えのモダリティを、スペイン語の文法構造に合わせて項目を追加して整理している。これによって、Terrell & Hooper (1974) などの叙法研究において十分な説明がなされていない領域を含め、スペイン語のモダリティをより詳細に考察している。

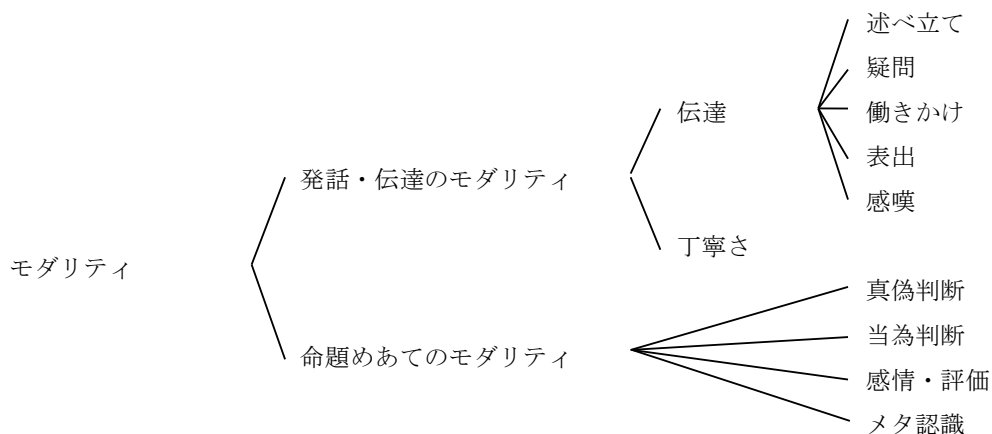


図 13 和佐 (2005) によるモダリティの体系

以降、和佐 (2005) によるスペイン語での事例の解説に基づいてまとめる。発話伝達のモダリティは「伝達機能」と「丁寧さ」からなる。「伝達機能」はさらに「述べ立て」、「疑問」、「働きかけ」、「表出」、「感嘆」に下位区分される。「述べ立て」はスペイン語やポルトガル

語では基本的には単文平叙文の陳述表現などに相当する。

(185) *María es española.*

*María be-IND-PRES-3SG Spanish*

‘*Maria is Spanish.*’

(和佐 2005)

「疑問」は「問いかけ」と「疑い」からなる。「問いかけ」はイントネーションによる疑問文で、聞き手にある情報を求める表現である。「疑い」は聞き手の存在を必要としない表現で、話し手がある事態への疑いを表現する形式である。

(186) *¿Desea saber las últimas novedades?*

*desire-IND-PRES-3SG know-INF ART.DEF-PL last-PL news-PL*

‘*Would you like to know the news?*’

(187) *¿Será verdad?*

*be-IND-FUT-3SG truth*

‘*Will it be the truth?*’

(ibid)

「働きかけ」は聞き手にある行為の実行を求めるような表現で、「命令」、「依頼」、「誘いかけ」、「申し出」からなり、スペイン語やポルトガル語では疑問文、平叙文、命令文で表現される。

(188) *Abre la puerta.*

open-IMP-3SG ART.DEF door

‘Open the door.’

(189) ¿Me podrías encender la luz?

me-ACC can-COND-2SG light-INF ART.DEF light

‘Would you turn on the light for me?’

(190) ¿Tomamos café?

have-IND-PRES-1PL coffee

‘Shall we have coffee?’

(191) ¿Quieres que abra la ventana?

want-IND-PRES-2SG that open-SBJV-PRES-3SG ART.DEF window

‘Would you like me to open the window?’

(ibid)

「表出」は「意志」、「希望」、「願望」の各表現に相当する。それぞれ聞き手に向けた発話ではない場合がある。

(192) Te llamaré esta noche.

You call-IND-FUT-1SG this night

‘I will call you tonight.’

(193) Quiero contarle todo.

want-IND-PRES-1SG tell-INF;you all

‘I want to tell you everything.’

(194) ¡Ojalá nos veamos en Buenos Aires!

I.wish REFL see-SBJV-PRES-1PL in BuenosAires

'I wish we could meet in Buenos Aires!'

(ibid)

「感嘆」は感嘆表現に相当する。

(195) ¡Que calor hace aquí!

how hot do-IND-PRES-3SG here

'It is hot today!'

(ibid)

「丁寧」はスペイン語やポルトガル語では助動詞語彙や過去未来（未完了過去）、敬称を用いることで表現される。

(196) ¿Puedes llevar esos platos a la cocina?<sup>38</sup>

can-IND-PRES-2SG take-INF these dishes to ART.DEF kitchen

'Would you take these plates to the kitchen?'

(197) ¿Quería ver los jardines?

want-IND-IPFV-3SG see ART.DEF-PL garden

'Would you like to see the gardens?'

(198) Abreme la ventana, por favor.

open-IMP-3SG:me-ACC ART.DEF window please

'Open the window for me, please.'

(ibid)

---

<sup>38</sup> 「丁寧」よりも「指示」の意味合いがあるとも考えられる。



命題めあてのモダリティは「真偽判断」(199)(200)、「当為判断」(201)(202)、「感情・評価」(203)と「メタ認識」(204)からなる。このうち、メタ認識についてはポルトガル語で該当する表現が確認できないため、本論では扱わない。

(199) María estará en casa.

María be-IND-FUT-3SG in house

‘Maria will be home.’

(200) Es probable que María esté en casa.

be-PRES-3SG probable that María be-SBJV-PRES-3SG in house

‘It is probable that Maria is home.’

(201) Puedes marcharte.

can-IND-PRES-2SG go.out-INF;REFL

‘You can go out.’

(202) Te permito que te marches.

you permit-PRES-1SG that REFL leave-SBJV-PRES-2SG

‘I allow you to leave.’

(203) Me alegro de que hayas venido.

REFL cheer-PRES-1SG of that come-SBJV-PFV-2SG

‘I am pleased that you have come.’

(204) Todavía no he terminado del todo. Es que he estado enfermo.

Yet not finish-PFV-1SG of+ART.DEF all be-3SG CONJ be-PFV-1SG ill

‘I have not finished everything yet. It is that I have been sick.’

(ibid)

スペイン語やポルトガル語において「真偽判断」は述べ立てや疑問の単文や複文で表現され、真偽判断を保留する場合 (*irrealis*、非断定)、*poder* などの法的動詞語彙や直説法未来、そして接続法表現<sup>39</sup>が用いられる。「当為判断」では命題内容は基本的に *irrealis* となり、命令法、法的動詞語彙、副詞などを用いた命令表現、希求表現、許可表現、そして接続法を用いる動詞補語表現といった有標表現が用いられる。「感情・評価」表現は本論で言う *factive* 感情表現であり、動詞補語表現や評価表現で表現され、命題内の動詞には接続法が要求される。

発話・伝達のモダリティと命題めあてのモダリティは互いに排他的ではない。命題めあてのモダリティは命題を内包し、発話・伝達のモダリティに内包される関係にある (図 14)。また、命題めあてのモダリティの内容 (真偽判断と当為判断) は、文がどのような表現 (発話・伝達のモダリティ) に属するかによって現われ方が決定される (益岡 1991)。

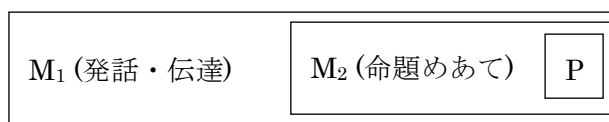


図 14 命題と二段構えのモダリティの関係 (和佐 2005, p.27 より本論筆者による再現)

例えば次の文の発話・伝達のモダリティは「述べ立て」、命題めあてのモダリティは「真偽判断」である。真偽判断の内容は *realis*、または「断定」 (和佐 2005) であり、命題内の動詞は直説法となっている。

(205) *Creo que María está en casa.*

*think-PRES-1SG that María be-IND-PRES-3SG in house*

<sup>39</sup> なお、和佐 (2005) で扱われているのは動詞補語表現や評価表現といった名詞節表現に限られるが、本論では条件表現など副詞節表現もこれに含めて扱っている。

'I believe that Maria is home.'

(和佐 2005)

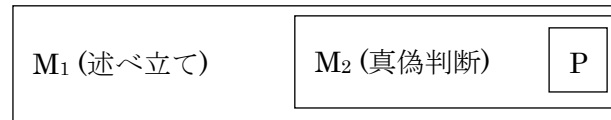


図 15 (205)の発話・伝達のモダリティと命題めあてのモダリティの関係

次の(206)の発話・伝達のモダリティは「働きかけ」、命題めあてのモダリティは「当為判断」、(207)の発話・伝達のモダリティは「疑問」、命題めあてのモダリティは「真偽判断」である。また、単文の場合は命題とモダリティ、及び発話・伝達のモダリティを表す要素と命題めあてのモダリティを表す要素が明確に区分されない。

(206) Te ordeno que te marches.

you order that REFL leave-SBJV-PRES-2SG

'I order you to leave.'

(207) ¿Crees que venga María?

think-PRES-2SG that come-SBJV-PRES-2SG María

'Do you think that Maria will be coming?'

(ibid)

したがって、接続法は命題めあてのモダリティが *irrealis* を表現する一部表現の命題内において用いられることがわかる。ただし、表現によっては接続法は用いられず、語彙や直説法未来等の他の動詞形態素、または疑問文やイントネーションなどで *irrealis* が表現される。

以上のように、二段構えのモダリティは Terrell & Hooper (1974) などの旧来の叙法選択研究よりも広い視点から、接続法にとどまらず意味的に類似する表現との関連についても知見を与えてくれる。近年では寺崎 (2011) や福嶋 (2013) などのスペイン語の接続法に関

する研究でも二段構えのモダリティ体系を支持している。

## 2.7. まとめ：叙法とモダリティ論から見るポルトガル語接続法

ここまで、接続法の上位概念である叙法とモダリティの研究について概観してきた。叙法とモダリティの研究において接続法を位置づける分類は大きく分けて二種類ある。Palmer (2001) などのモダリティ表現形式の分類では接続法とは叙法の一部であり、モダリティ表現形式の末端である。モダリティを考える上で、文を客観的内容である命題とモダリティに区分する考え方は有用であり、接続法とは命題内で現われる動詞形態素であることがわかる。また、モダリティには様々な意味カテゴリーがあり、それぞれで発話者が命題内容を *realis* ととらえているのか、*irrealis* ととらえているのかが叙法選択をはじめとする有標のモダリティ表現の使用に関係してくる。

さらに、スペイン語の Otaola (1988) や日本語モダリティ研究の益岡 (1991)、仁田 (1991) で示される文構造に基づく分類を援用することで、接続法が使用される場面は限定的であることがわかる。モダリティには発話・伝達のモダリティと命題めあてのモダリティがあり、大部分において接続法が現れるのは命題めあてのモダリティを受ける命題内である。これを考慮すると、接続法が表現できる発話内容は部分的であり、直説法との対等な関係は成り立たないと言えよう。ここでは直説法は無標の形式であり、*realis*、*irrealis* ともに幅広い表現を行うことができる。発話・伝達のモダリティで *irrealis* を表現できる形式としては、動詞語彙や副詞、そしていわゆる直説法未来・過去未来の形式が挙げられる (cf. 和佐 2005)。一方で接続法は命題めあてのモダリティ各表現のうちの一部における命題内で、直説法とは選択的、あるいは排他的に使用されて *irrealis* を表現する。

以上のように、接続法とは個別言語学における形態統語論的分類では直説法との対立概念として扱われるが、モダリティ研究の観点からはモダリティ表現の一部に過ぎず、直説法と対等な関係にはないことがわかる。

## 第3章 第二言語接続法習得研究

### 3. 接続法の指導、教材

前章までで見てきたように、接続法は言語内の要素だけでも形態、構造、共起語彙や文脈の意味など様々な次元の文法項目が絡み合う複雑なものである。すなわち、接続法の理解には前段階として時制、アスペクト、ヴォイスの動詞形態及び概念の理解、そして名詞節や副詞節など複文構造の理解 (Collentine 1995) が要求される。

また、スペイン語教育研究における事例ではあるが、接続法は中級の授業において大半の時間を割いて指導、学習されるものの、学習者 (主に英語母語話者であるが) による習得が難しい項目であるという報告がなされている (Terrell, Baycott, & Perone 1987; Collentine 1995; Gudmestad 2006; 福嶋 2005; Wasa 2009)。福嶋 (2005) のレビューによると、スペイン語と類似した接続法システムを有するポルトガル語母語話者やフランス語母語話者でも接続法の習得に困難を示す事例が確認されている。これに加え Sanz (2003a, 2003b) は外国語学習環境における接続法知識の失われやすさも指摘している。

#### 3.1. 接続法の学習、習得

本節以降では指導、教材とは逆方向の視点である、学習者による習得の観点から研究事例を見ていく。

##### 3.1.1. 動詞形態素習得研究

動詞形態素習得研究は第二言語習得研究の初期から注目されており、子供の第一言語習得における形態素習得順序を研究した Brown (1973) とそれに影響されて子供の第二言語習得の事例を研究した Dulay & Burt (1973) をその始まりとし、それに続く Bailey, Madden & Krashen (1974) が大人の形態素習得順序を研究した。これらは英語を学習対象言語としたものであったが、後に van Naerssen (1980) がスペイン語の形態素習得順序を研究している。これらの 1980 年代頃までの形態素習得研究は、一般的にどの学習段階で各

形態素が初めて産出されるのかという形式と初出にのみ着目した研究、すなわち、一度でも産出が確認されれば習得とみなすようなものであった。

1990年代になると、形式のみならず、形式が結びつく語彙の意味や、形式が現れる文脈情報にも着目した機能的アプローチからの形態素習得研究が主流になる (cf. Bardovi-Harlig 2000)。代表的なものとしてアスペクト仮説 (*Aspect Hypothesis, Primacy of Aspect*: Andersen & Shirai 1996) に基づく動詞形態素習得研究が挙げられ<sup>40</sup>、各言語のポルトガルで言う「直説法完了過去」と「直説法未完了過去」に該当する形態素の習得研究が多く行われている (e.g. 英語: Housen 2002, Bardovi-Harlig 1999; ポルトガル語: Leiria 1991; スペイン語: Salaberry 1999; その他ロマンス諸語: Ayoun & Salaberry 2005; see also Andersen & Shirai 1996, Bardovi-Harlig 2000)。また、一度産出すれば習得したと見なしていた形式的アプローチからの各研究に対し、機能的アプローチからの研究では形態素の初出だけでなく、同一被験者の長期的比較や習熟度別の被験者群を比較することで習得・定着、あるいは衰退の過程にも着目している (cf. R. Ellis 2008)。

上述のように、機能的アプローチの研究が進んだ後に時制とアスペクトを対象とした動詞形態素習得研究が多く発表されたが、それと比較して叙法やモダリティ表現を対象とした習得研究は非常に少ない (Giacalone Ramat 1992, Howard 2008, Ayoun 2013)。接続法に関しては、第二言語習得研究の主たる関心対象言語である英語において該当する明確な形態素が存在しないこと<sup>41</sup>が一因であると考えられる。

### 3.1.2. 第二言語接続法習得研究

本節では第二言語としての接続法の習得を研究している事例を詳細にレビューしていく。

---

<sup>40</sup> Bardovi-Harlig (2000, p.10) はアスペクト仮説を機能的アプローチの中でも内在する意味体系を表示するものとしての動詞形態素の分布を研究していく「形式指向の機能的アプローチ」と分類している。これに対して特定の意味概念を様々な言語様式で表現していくことを研究する「意味指向の機能的アプローチ」を挙げている。詳細は同著を参照されたい。

<sup>41</sup> Palmer (2001) は反実仮想表現の過去時制形式 (いわゆる「仮定法過去」)、動詞補語節における *should* 表現といわゆる「原型不定詞」 (see also Stokes 1988, Givón 1994, 野村 2007) を接続法としている。

現在のところ、ポルトガル語における接続法習得の研究事例は Bento (2013) しか確認ができないが、スペイン語（カスティーリャ語）やフランス語を対象とした研究はいくつかの事例を確認することができる。特に 2000 年代後半スペイン語の接続法習得を扱う学術論文や学位論文が増え、アプローチも多様になってきている (Collentine 2010)。接続法習得研究が L2 スペイン語を対象としたものに集中しているのは、英語やゲルマン系言語とは異なり口語でも接続法の形式や機能の消滅や交替が少ない (Palmer 2001) という言語内の要因に加え、応用言語学研究の中心地である米国において話者が多く、第二言語として学習される機会が多いという社会的要因も影響していると考えられる。

なお、本章で扱う第二言語習得研究とは大人になってから対象言語を学習するケースを研究したものを指す。そのため、幼少期から家庭環境で母語レベルでの複数言語をコントロールできるような均衡バイリンガルや、社会的なダイグロシア状況における第二言語習得のケース (e.g. Studerus 1995) は扱わないこととする。

### 3.1.2.1. Terrell, Baycott & Perone (1987)

接続法習得研究の先駆的な事例といえるのが Terrell, Baycott, & Perone (1987) の研究である。同研究の中心人物である Tracy Terrell は、接続法をはじめとするスペイン語文法の研究と、Stephen Krashen とともに発展させた「自然アプローチ (*Natural Approach*)」に代表される第二言語教育・習得研究の双方において功績を残している (cf. Hashemipour, Maldonado & van Naerssen 1995)。

Terrell et al. (1987) の研究では中級学習者の教室環境下での接続法習得を文法判断テストと口語タスクによって検証した。被験者は米大学の 1 年次の 4 学期中 3 学期目の学生（人数は明示されていない）で、最低 2 年のスペイン語学習経験があるとされる。授業は文法講義、演習、会話実践の形式からなり、接続法は 10 週のコースのうち後半の 4 週間を使って指導された。

表 13 Terrell et al. (1987) で得られた接続法産出 (本論筆者によるまとめ)

	名詞節	副詞節	形容詞節	その他	合計
接続法使用	7*		3**		10
接続法過剰使用	2	3	2	12	19
接続法要求表現における 接続法未使用	35	13*	4		52

\*文構造にエラーが生じている表現も含む  
\*\*データが欠けているため詳細不明

これに従えば、文法テストでは 25 題中平均正答率は 23 題であり、叙法の選択は適切に理解されていることが確認されたが、一方で、口語では接続法がほとんど使用されず、正しく用いられたのが 8 例、接続法が正しく用いられているが文構造に欠陥があるものが 2 例、接続法が用いられるべきではない構造で誤って用いられたのが 19 例、要求表現で用いられなかったのが 52 例となっている。この結果を受け、Terrell らは Krashen (1982) の「モニター理論 (Monitor Theory)」より「習得と学習の仮説 (Acquisition/Learning hypothesis)」を援用し、学習者は接続法文法知識を「学習 (learn)」できているが、即時発話のように十分に文法知識を参照する時間が与えられないケースでも産出ができる「習得 (acquire)」には至っていないと結論付けている。また、正しく用いられた 8 例に関しても、規則活用動詞については直説法現在と接続法現在の 3 人称単数形の形式的差異が語尾の母音の違いのみであり (e.g. *habla / hable* < *hablar*: to speak)、対象の語彙が -ar 動詞なのか -er/-ir 動詞なのか確信がないまま偶然に接続法現在の形になったことも考えられ、数値が偶然である可能性を指摘している。

接続法が正しく用いられた事例における文構造の内訳は、名詞節 (8 例中 5 例) が多く、副詞節と形容詞節が少ない (合わせて 8 例中 3 例だが、データに欠損があり詳細は不明)。接続法が用いられなかった接続法要求表現も名詞節が多数を占め (52 例中 35 例)、うち 16



例が *querer* (to want) を主動詞とする補語表現、5 例が *es necesario* (it is necessary) の主語となる評価表現であった。接続法要求表現では次いで副詞節が多く (52 例中 13 例)、そのうち 11 例が *cuando* (when) を接続詞とする時間表現であった。また、形容詞節は少なかった (52 例中 5 例)。

さらに加えて、同研究では NS スペイン語話者による、接続法が要求される箇所で産出されなかった例への理解に関するアンケート調査も行っている。結果として、接続法が適切に用いられているかどうかは NS の理解にとって重要ではなく、統語構造が文法的でない場合 (従属接続詞の脱落など) や代名詞の使用や位置に問題がある場合に理解に支障をきたすことが示唆された。この結果は接続法表現で伝えたい内容は文脈や共起語彙から理解されるものであり、接続法形式そのものは冗長であるという仮説 (e.g. Collentine 1995, 2010; 彌永 2008, 2013; etc.) を実証するような結果となっているといえる。

### 3.1.2.2. Stokes (1988)

Terrell et al. (1987) と並ぶ接続法習得の先駆的な研究事例が Stokes (1988) である。同研究では、ユタ州のミッショナリー・カレッジのスペイン語文法・作文コースに所属する上級学生 27 名を対象に、口語での接続法使用を検証している。27 名のうち 17 名はスペイン語文化圏への 16 か月から 24 か月の宣教研修を終えている。

タスクは Krashen (1982) の「習得と学習の仮説」に基づいて学習者の習得知識を観察するために即時的な口述タスクを採用している。その上で、データの長大化や回避ストラテジーによる発話の複雑化を避けるために、文の冒頭部分を聴解させ後続部分を発話させるプライミングタスクを採用している。また時制を変数とさせないため、扱われる文脈は現在のものに限られている。

同研究ではまず、事前テスト及び事後テストにおける接続法使用の正確さ、並びに各テ

ストにおけるスコアとスペイン語圏滞在経験（月数）や入学前の文法学習経験<sup>42</sup>、研修から帰国後の文法学習経験との関係性を相関係数によって説明している（表 15）。

表 14 Stokes (1988, p.707, Table2) の各項目間のピアソンの積率相関係数（和訳は本論筆者による）

各項目間のピアソンの積率相関係数		
事前テストとスペイン語圏滞在月数	$r = .51$	$p < .01$
事後テストとスペイン語圏滞在月数	$r = .73$	$p < .001$
事前テストと文法学習経験月数	$r = -.12$	有意性なし
事後テストと文法学習経験月数	$r = -.36$	有意性なし
事後筆記試験と文法学習経験月数	$r = .16$	有意性なし
スペイン語圏滞在月数と文法学習経験月数	$r = -.51$	$p < .01$
事前テストと事後テスト	$r = .54$	$p < .01$

結果として、スペイン語圏環境での滞在月数と各テストのスコアに相関関係が確認された。一方で各テストのスコアと事前文法学習経験、及び帰国後の文法学習経験との間に相関関係は確認されなかった。また、スペイン語圏滞在月数が長ければ長いほど、現地での文法学習時間が短くなる傾向がみられた。加えて、事後テストのさらに後に行われた叙法選択に関する筆記テストの得点においても文法学習月数との相関性が確認されなかった。さらに、事前テストと事後テストのスコアを  $t$  検定した結果でも、両スコアの平均の間に有意な差が見られなかった ( $t = -1.81$ ,  $p$  値は明示されず)。すなわち、事後テストでの得点はスペイン語圏への滞在とのみ関係があり、帰国後の上級コースの文法授業はスペイン語習得や化石化の防止に影響していないことが示された。

口述タスクの設問ごとの正答率を分析すると、学習者は関係詞節における接続法を最も困難としており、事後テストで上位 3 位を関係詞節表現が占めていた。これらについて

<sup>42</sup> 中等学校における 1 年間の学習を 8 点、大学の授業時間の 4 分の 1 を 1 点、スペイン語圏現地研修での 8 週間を 10 点として計算している。なお、5 年以上経過している事前学習は上記の配点の半分としている。

Stokes は英語構造からの転移<sup>43</sup>や手掛かりのなる構造の目立たなさ、教材での扱う量の少なさに起因するインプットの少なさに原因があると考察している。また、願望の動詞の補語節や、時間や結果の副詞節表現での接続法使用に事後テストでの改善が見られたのに対し、感情の表現と疑いの表現では事前テストと事後テストの間での改善が見られなかった。

表 15 Stokes (1988, p.708, Table3) の口述タスクによる接続法産出の結果 (和訳は本論筆者による)

節のタイプ	叙法トリガー	モダリティ タイプ	正答数		難易度ランク		項目番号 (両テスト共通)
			事前テスト	事後テスト	事前テスト	事後テスト	
名詞節	接続法	影響	1	10	1	7	9
関係詞節	接続法		2	3	2	1	16
副詞節	接続法	未来事象	3	11	3	8	2
関係詞節	接続法		4	5	4	2	4
関係詞節	接続法	不在	5	5	5	2	6
名詞節	接続法	感情	6	7	6	4	12
副詞節	接続法	条件	6	7	6	4	15
名詞節	接続法	疑念	7	8	8	6	11
名詞節	接続法	影響	9	15	9	10	19
副詞節	接続法	結果	10	14	10	9	3
名詞節	直説法	疑いなし	23	23	12	13	18
副詞節	直説法	特定の場所	25	22	13	12	14
副詞節	直説法	習慣的事象	26	27	14	19	1
関係詞節	直説法	既知の存在	26	23	14	13	5
関係詞節	直説法	既知の存在	26	23	14	13	7
名詞節	直説法	確信	26	26	14	16	8
名詞節	直説法	信念	27	26	18	16	10
名詞節	直説法	知識	27	26	18	16	13
関係詞節	直説法	既知の存在	27	27	18	19	17

<sup>43</sup> Stokes は L1 である英語からの影響、例えば動詞補語節構造において英語では”I insist that he go immediately.”という表現が存在し (see also Palmer 2001)、一般的に多くの英語母語話者は go が接続法であるかが特定できないながらもこの構造をスペイン語接続法のアナロジーとして直観的に分析しているのではないかということと、一方で英語の関係詞節表現においては同様のアナロジーが存在しないことを仮説としている。

### 3.1.2.3. Collentine (1995)

Joseph Collentine は Terrell 以降のスペイン語接続法研究の第一人者である。スペイン語の形態素習得研究にとどまらず、後に指導と接続法習得の関係性を探る研究も発表している (Collentine 1998) ほか、最新の L2 スペイン語接続法習得研究の事例を随時レビューしている (e.g. Collentine 2010)。

Collentine (1995) は同氏の代表的な接続法習得研究である。同研究では現在時における動詞の補語となる名詞節内 (*NP-clause*, *NPS*) に限定しつつ、中級学習者が適切な叙法の選択と、その前提として複文 (*NPS*) を産出できるか<sup>44</sup>、さらにモダリティの種類が学習者の適切な叙法選択に影響しているのかを検証している

同研究でも Terrell et al. (1987) や Stokes (1988) 同様、即時発話から学習者言語を評価するが、Krashen (1982) の心理言語学的なモニター理論を援用する先行の二研究とは異なり、同研究では Tarone (1988) の社会言語学的理論を援用している。すなわち、発話に十分な時間を与えることで言語形式への意識のため母語などの知識に頼ることができる場面 (*careful style*, Tarone *ibid*) ではなく、意味内容の伝達に主眼を置かせることで純粋に中間言語の知識のみにアクセスさせる場面 (*vernacular style*, *ibid*) における接続法使用を関心の対象とする。

ただし、完全な即時発話では NS であっても複雑な構造の表現を引き出しにくいいため、同研究では自由会話 (*Task 1*) と誘導的な口述タスク (*Task 2*) の二種類のタスクから得られたデータの分析を行うことで産出の質と量を確保している。*Task 1* はテーマ式の自由会話で、アリゾナ州立大学の学習者 40 名を対象に 10 分間の会話セッションを行ってデータを収集している。テーマは日常に関するものと時事に関するものからなる。*Task 2* はイラストの口述描写タスクでテキサス大学オースティン校の学習者 38 名を対象に、44 のイラスト

---

<sup>44</sup> 学習者の評価には Givón (1979, 1990; in Collentine 1995) の *syntactic stage* と *presyntactic stage* からなる成長モデルを援用している。

から 50 の質問を行い、叙法選択を導いている。

Task 1 の結果、得られた 804 発話のうち半数以上の 517 発話が単文で、残りの 287 発話のうち圧倒的多数の 202 が順接構造で、残りの 77 が NPS、3 が副詞節などその他構造であった。また、接続法が用いられるべき表現において適切に用いられていた例は必要とされる文脈のうち 13% (生起数は明示されず) にとどまった。

Task 2 の結果、直説法要求文脈 (n=570) のうち、名詞節の産出数は 405、接続詞の欠けた名詞節表現は 39、接続詞のエラーは 5、順接構造は 15、短文は 83、接続法要求文脈 (n=570) のうち、名詞節の産出数は 288、接続詞の欠けた名詞節表現は 29、接続詞のエラーは 19、順接構造は 81 となった。Collentine はこれについて接続法の産出を避けるために文を単純化させるストラテジーと、英語の表現からの転移の影響を考察している<sup>45</sup>。産出された NPS 構造のうち、叙法が適切に選択されている事例は直説法要求文脈では 90% (405 例中 365 例) と高かったのに対し、接続法要求表現では 34% (288 例中 97 例) と有意に低かった ( $\chi^2(1)=241.29; p<.0001$ )。また接続法の産出の傾向はモダリティのタイプによっても異なり (表 17)、接続法を必ず要求する強制表現、願望表現と、疑念・否定の表現において有意に多く産出された ( $\chi^2(4)=11.00; p<.0262$ )。

表 16 Collentine (1995, appendix table 5) より、接続法要求名詞節表現における接続法の産出 (和訳は本論筆者による)

接続法要求文脈	適切な叙法産出	要求表現頻度	叙法選択正答率
強制表現	16	33	48%
願望表現	25	66	38%
疑念・否定表現	36	100	36%
評価表現	15	53	28%
反応表現 (感情表現)	5	36	14%
合計	97	288	34%

<sup>45</sup> 接続詞に *para* (to / for) を用いる誤用が多く (誤用 19 例中 12 例)、英語の to 不定詞からの影響が考察されている。

中級学習者による適切な複文の産出、及び適切な叙法の産出が統計的有意性をもって直説法表現に偏っていることから、Collentine は中級段階では統語面、形態面のいずれにおいても習得状態への移行期にあると結論付けている。

#### 3.1.2.4. Sanz (2003a)

Sanz (2003a, 2003b) は普遍文法 (UG) に基づく第二言語習得研究 (UG-based SLA) の観点から、学習の非直線性 (*non-linearity, spiral effect*) を主張する。すなわち、学習初期に成長を見せつつも、中級に差し掛かったところで学習を仲介する母語 (L1) からの干渉によって後退し、その後、目標言語への直接的なアクセスによって再び成長していくという仮説である。同研究ではその具体的事例としてアスペクト表現と接続法を含むモダリティ表現が取り上げられ、分析されている。

Sanz (2003a) では神戸市外国語大学のスペイン語学科の1年生、2年生、3年生の学生を対象に対訳タスクを行ってモダリティ表現での接続法の使用を検証している。1年生に対しては以下の英文のスペイン語訳を課している。

(208) I want you to clean this room now.

ここでは *want* にあたる動詞 *querer* の後に補語節を続け、*clean* に相当する動詞 (*limpiar* など) を接続法に活用させることが要求されるが、36名の被験者のうち29名が接続法 (または接続法と思われる形式) を産出した。形態的には不完全ながらも、願望表現における接続法の使用を理解していることが示唆されている。

一方で2年生と3年生に対しては英語または日本語で与えられた課題文のスペイン語訳が課される。以下に課題文と接続法産出を引用する。

表 17 Sanz (2003a) より、各表現での接続法選択 (p.70, table 6, 本論筆者による再現)

Sentence	Second year (third semester)	Third year (fifth semester)
1. I hope that you can come to Japan next year.	71% (20/28)	86% (13/15)
2. 来年あなたが日本に来れるといいですね	52% (11/21)	58% (7/12)
3. I am glad that you come.	17% (5/28)	73% (11/13)
4. あなたが来てくれて嬉しい	38% (8/21)	33% (4/12)
5. I want you to come here immediately.	57% (12/21)	50% (6/12)
6. 私はあなたにすぐにここに来てもらいたい	75% (21/28)	93% (14/15)
7. It is possible that they do not see it and throw it away.	57% (12/21)	33% (4/12)
8. 彼らはそれがあのに気が付かなくて捨ててしま うでしょう	0% (0/28)	0% (0/15)

全体的に1年生の接続法使用率よりも低くなっている。表 17 中の 1 と 2 の課題文は「願望表現」、5 と 6 は「要求表現」と呼称されているが、いずれも当為判断モダリティの表現で比較的接続法使用率が高い。願望表現では英語で課題が与えられた場合に接続法使用率が高く、日本語で課題が与えられた場合に低い。一方で、要求表現では逆に日本語で課題文が与えられた場合に高いが、英語で課題文が与えられた場合には低くなり、2年生よりも3年生のほうが低くなる結果が得られている。7 と 8 は真偽判断モダリティの可能性表現であるが、英語で課題文が与えられた場合で3年生の接続法使用率が大きく低下し、日本語で課題文が与えられた場合にはまったく接続法が産出されないという結果が得られている。3 と 4 は *factive* な感情表現であるが、日本語で課題文が与えられている 4 での接続法使用

率が低調であり、Sanz は日本語への依存を問題視している。一方で 3 では 2 年生の極端に低い産出率が 3 年生では大きく改善している。4、5、7 の例より、Sanz は十分な指導の継続やインプットの量によっては接続法知識が後退していくこと、すなわち直線的な習得を示さないことを強調する。また、課題文の与え方によって接続法使用が変化していることより、L1 知識への依存が接続法の獲得に干渉していることを示唆している。

なお、Sanz (2003a) の解説では第三言語習得的観点による既習言語 (英語) からの影響 (reviewed in 鳥越 & 大本 2010) があまり強調されていない。Sanz 自身が脚注で指摘しているように、5 で接続法使用が少ないのは英語課題文の影響で *come* に相当する動詞 *venir* を不定詞で使用しているためであり、ここに英語知識からの干渉が考察される。一方で、1、5 (3 年生)、7 において、日本語で課題文が提示される 2、6、8 よりも接続法使用が多くなっている事実から、学習者が動詞補語節構造とそれが要求する接続法に気付きやすくなっていることが推測される。言い換えるなら、母語の日本語知識を介さずに既習言語の英語知識のパラメーターを介することで、目標言語表現に到達できている例であると考えられる。

Sanz (2003a) はフォローアップとして誤りを含む文章の文法判断テストを行うことで、受容知識の検証も行っている。表 18 に接続法分の例文と模範例、各学年の被験者の評価点を引用する。評価点は 1 点から 5 点のリッカート・スケールで、点数が高いほど文法的であるという判断である。

表 18 Sanz (2003a) より学習者による文法性判断 (pp.78-80, table 8 より一部引用)

Sentence	Correct sentence	1 <sup>st</sup> year	2 <sup>nd</sup> year	3 <sup>rd</sup> year
13. Quiero que vienes aquí enseguida.	Quiero que vengas aquí enseguida.	2.49	2.68	1.86
20. Quiero que podrás venir a Japón el próximo año.	Quiero que vengas a Japón el próximo año.	2.77	2.63	1.82
29. Me alegré de que vengas.	Me alegré de que vinieras.	2.60	4.17	3.14
38. Quizá lo tiran cuando lo vean.	Quizá lo tiren cuando lo vean.	2.56	2.93	3.36



当為判断表現（願望表現）（表 18 中の 13, 20）では非文を文法的であると評価する点数が上級生で最も小さくなる。一方で真偽判断表現（表 18 中の 38）や感情表現（表 18 中の 29）<sup>46</sup>では 1 年生で最も評価点が低いものの、2 年生以降で文法的と判断する点数が高くなっており、特に真偽判断表現では 3 年生において最も高くなっている。このことから、Sanz は中級学習者において L1 知識へ依存による後退が起こっていることが示唆されていると考察している。

さらに Sanz (2003b) では 2 年生と 3 年生を対象に自発的産出タスクを用いて追調査している。2 年生には日本の昔話についての説明作文、3 年生には個人的関心についてのエッセイが課せられ、さらに絵や動画を見せて即時に状況を描写させるリアクションタスクも両学年を対象に行われている。接続法産出はリアクションタスクにおいてわずかに報告されている。

### 3.1.2.5. Isabelli & Nishida (2005)

Isabelli & Nishida (2005) はスペイン語圏でスペイン語を学ぶ *study abroad (SA)* 環境における学習者の接続法習得の段階と、母国で外国語としてスペイン語を学ぶ *study at home (SH)* 環境における学習者による接続法習得との違いを検証した。研究の背景として SA 環境の学習者は SH 環境での学習者に比べ、流暢さやわかりやすい文法項目 (*ser* と *estar*、完了過去と未完了過去など) の習得において優位だが、複雑な構造の習得には両者に差がないという先行研究事例がある (DeKeyser 1991, in Isabelli & Nishida 2005; Collentine 1995)。

被験者の SA 環境の学生はイリノイ大学およびカリフォルニア大学で 2 年間スペイン語を学習し、バルセロナ大学への交換留学プロジェクトに参加した 29 名からなる。SH 環境の被験者は同じく両大学で学習するスペイン語学習者のうち、5 学期目を修了した 16 名と 6

---

<sup>46</sup> ただし表中 29 の例は叙法選択というよりも時制の誤りへの気づきが主たる問題であると考えられる。

学期目を修了した 16 名の 2 グループからなる。SA 環境、SH 環境の被験者ともに、英語以外の言語を母語とする者、家庭でスペイン語を話す者、既にスペイン語圏への留学を経験している者は除外されている。

データ収集は 10 の題目を用いた自由形式の口述インタビューによって行われる。SA 環境の被験者のデータは滞在 0 か月、4 か月、9 か月の時点で、SH 環境の学習者はそれぞれ学期の終わりにインタビューが実施されている。なお、インタビューは接続法を産出させるために特化されたものではない。また、全体のデータサイズ及びサブデータのサイズは公表されていない。

分析の結果（下表 19 表 19）、SA 環境の学生は滞在 0 か月から 4 か月の間に飛躍的に接続法を習得した。接続法要求表現の産出が全体で 28 例から 56 例へと倍増し、接続法産出数も 5 例から 21 例と飛躍的に向上した。特に時間の副詞節における産出がともに激増している。また、4 か月から 9 か月の間も接続法使用、接続法要求表現産出ともに全体的になだらかに向上を続けた。なお、Isabelli & Nishida は被験者の接続法使用のうち、時制の誤りや形態の誤りも「接続法使用例」として含めている。接続法を使用した被験者数も、SA 環境での滞在月数が進むにつれて高くなっている。滞在 0 か月から 4 か月にかけて 25%以上の、また滞在 4 か月から 9 か月にかけても 18%増加している。

表 19 Isabelli & Nishida (2005) より SA 環境の学習者の接続法産出結果 (p.83, table.1, 和訳は本論筆者による)

	接続法要求表現の産出			接続法使用			接続法使用率		
	0 か月	4 か月	9 か月	0 か月	4 か月	9 か月	0 か月	4 か月	9 か月
名詞節	12	13	12	4	6	8	33%	46%	67%
副詞節	15	41	53	1	14	26	7%	34%	49%
形容詞節	1	2	4	0	1	0	0%	50%	0%
合計	28	56	69	5	21	34	19%	38%	49%

接続法が使用された構造は副詞節が圧倒的に多かったが、接続法が使用された文脈の種類は名詞節に多かった (表 20)。

表 20 Isabelli & Nishida (2005) より SA 環境学習者の接続法産出被験者数と比率 (p.86, table.8, 和訳は本論筆者による)

	接続法要求表現 を産出した被験 者数	接続法を使用し た被験者数	接続法使用被験 者数比率	全体の被験者に 占める接続法使 用被験者比率*
0 か月	14	3	21%	10%
4 か月	22	11	50%	37%
9 か月	21	16	76%	55%

\*本論筆者による算出

また、意味的側面から考察すると、名詞節表現では *quiero que* (I want to) や *es importante que* (it is important that) などの当為判断表現と *no creo que* (I don't believe that) や *es posible que* (it is possible that) などの真偽判断表現の産出に大きな差はないが、副詞節表現では時間表現や条件表現など真偽判断モダリティに分類される領域が目的表現や譲歩表現と比較して圧倒的に多くなっている (表 21)。なお、関係詞節 (形容詞節) における接続法産出は確認できなかった。

表 21 Isabelli & Nishida (2005) より SA 環境学習者の文脈別接続法産出 (p.86, table.2-7 より本論筆者によるまとめ)

名詞節	英訳	学習 0 か月		学習 4 か月		学習 9 か月	
		要求表現	接続法使用	要求表現	接続法使用	要求表現	接続法使用
<i>quiero que</i>	I want that	2	1	4	1	4	3
<i>es posible que</i>	It is possible that	2	0	3	1	1	1
<i>espero que</i>	I hope that	2	0				
<i>recomiendo que</i>	I recommend that	1	1				

no creo que	I do not think that	1	1	5	3	1	1
requiere que	I require that	1	0				
es difícil que	It is difficult that	1	0				
el mejor es que	It is better that	1	0				
es bueno que	It is good that	1	1				
diciendo que	Saying that			1	1		
para decirles que	To say that					1	1
lo importante es que	The most important is that					1	0
no estoy segura que	It is not sure that					1	0
no importa que	It does not matter that					2	1
siento que	I am sorry that					1	1
<b>副詞節</b>	<b>英訳</b>						
hasta que	till	7	1	18	5	21	10
cuando	when	6	0	15	4	20	7
si	if	1	0	7	5	8	7
antes de que	before	1	0			1	0
para que	in order to			1	0	1	1
aunque	although					1	1
<b>合計</b>		<b>27</b>	<b>5</b>	<b>54</b>	<b>20</b>	<b>64</b>	<b>34</b>

また、SH 被験者集団の接続法産出はわずかに 1 例（接続法要求表現産出 12 例）であり、SA 環境での学習者の接続法使用、接続法要求表現産出、接続法使用者数のそれぞれが圧倒的に多いことがわかった。ただし、推測統計を用いた分析は特に行われていない。

### 3.1.2.6. Gudmestad (2006)

Gudmestad (2006) は前述の Collentine (1995) と、願望と未来性の文構造が学習者の接続法使用に影響すると主張する Lubbers Quesada (1998, as cited in Gudmestad 2006) より影響を受け、中級及び上級学習者の接続法習得に影響する言語的要素を検証した。Lubbers Quesada がデータ収集に口述インタビューを用いたのに対し、Gudmestad (2006)

は記述タスクを利用している点が異なる。これについて Gudmestad は自然発話では比較に十分な接続法表現が産出されにくいこと、加えて文構造だけではなく文脈が接続法使用に影響しているか着目したいためであると説明する。一方で、記述タスクを用いることで口述インタビューを用いた先行研究との比較ができなくなることや、接続法知識を検証できても接続法産出を検証できないという短所も注釈している。また、他にも不規則動詞の定義が異なる点<sup>47</sup>、感情表現も考察対象としている点、複数の被験者集団を検証している点について Lubbers Quesada と異なっていると加えている。

同研究の被験者は大学で学ぶ英語母語スペイン語学習者であり、中級と上級の二集団からなる。中級学習者集団はスペイン語学習 4 学期目を修了した 17 名で、2 学期目から接続法を学習している。上級学習者集団は 4 年生の学生で、応用言語学を学習している。それぞれ専攻はビジネス、社会科学、教育学など、多岐にわたっている。データ収集に先立って 11 項目からなるスペイン語習熟度テストを行った結果、上級者が優れているとする有意差が検証された ( $\chi^2= 568.20, p < 0.001$ )。

データ収集に用いられるタスクは選択式であり、英語で書かれた文章に続いて、動詞部分が直説法現在で書かれたスペイン語の一文と接続法現在で書かれた一文が提示されている。タスクは接続法要求が 20 項目、直説法要求が 10 項目の計 35 項目からなっている。接続法要求文章はそれぞれ「不規則動詞」 (*irregular*)、「願望の意味」 (*desire*)、「未来性的意味」 (*futurity*)、「感情の意味」 (*emotion*) の四項目の有無が独立変数としてコーディングされ、10 通りの可能なコーディングの組み合わせが 2 度ずつ提示される (Gudmestad 2006, p.182)。

---

<sup>47</sup> 二重母音化語幹の動詞群 (*volver: vuelve / vuelva*) を「不規則」と定義している Lubbers Quesada に対し、Gudmestad は同動詞群を規則動詞扱いしているとしている。なお Gudmestad は 3 人称単数において語幹が変化しているとしている *tener (tiene / tenga)* を不規則と定義しているが、接続法現在の形態生成方法としては直説法現在の 1 人称単数形を基準 (*tengo / tenga*) とするのが一般的であり、本論もそれに倣っている。この点から Gudmestad の「不規則動詞」の定義及び「不規則」として実際に扱われている動詞群が本論のものと異なっている可能性が高い。

表 22 Gudmestad (2006) より、各独立変数における期待値と接続法産出の有意差 (和訳は本論筆者による)

	中級学習者		上級学習者	
	$\chi$	クラマーの V	$\chi$	クラマーの V
不規則動詞	7.025**	0.144**	7.645**	0.138**
未来性	0.165	0.022	10.812**	0.164**
願望表現	3.321	0.099	19.784***	0.222***
感情表現	0.165	0.022	6.513*	0.128*

自由度はすべて df=1  
\*p<0.05, \*\*p<0.01, \*\*\*p<0.001

表 23 Gudmestad (2006) より各独立変数の有無による接続法産出と期待値 (和訳は本論筆者による)

コード	数値	習熟度		
		接続法使用	上級 総文脈数	%
[+不規則]	実測値	113	170	66.5
	(期待値)	(101)		(59.4)
[-不規則]	実測値	89	170	52.4
	(期待値)	(101)		(59.4)
[+未来]	実測値	200	240	83.3
	(期待値)	(186.6)		(77.8)
[-未来]	実測値	111	160	69.4
	(期待値)	(124.4)		(77.8)
[+願望]	実測値	77	80	96.3
	(期待値)	(62.2)		(77.8)
[-願望]	実測値	234	320	73.1
	(期待値)	(248.8)		(77.8)
[+感情]	実測値	114	160	71.3
	(期待値)	(124.4)		(77.8)
[-感情]	実測値	197	240	82.1
	(期待値)	(186.6)		(77.8)

収集したデータを分析した結果、上級学習者の接続法使用（311/400）が中級学習者（202/340）よりも有意に多いこと（ $\chi^2 = 29.036, p < 0.001$ ）が確認された。各独立変数と接続法使用との関連性をカイ検定で求めた結果（表 22）、中級学習者の接続法使用は動詞の不規則性がある場合のみ期待値を有意に上回った（ $\chi^2 = 7.025, p < 0.01$ ）。一方で上級学習者の接続法使用はすべての独立変数において期待値との有意差を示したが、感情の意味がある場合のみ期待値をわずかに下回る産出数であり（表 23）、感情の意味がない場合の方が産出数が高い結果となっていた。

次に各独立変数が接続法使用へ連動しているかについて回帰分析を用いて検定した結果、中級学習者においては不規則動詞のみ（ $p < 0.01$ ）が、上級学習者においては不規則動詞と願望の表現（ $p < 0.001$ ）が接続法使用に有意に関係していることがわかった。すなわち、中級学習者の接続法使用には形態統語的要素のみが、上級学習者の接続法使用には形態統語的要素に加えて文脈情報が接続法使用に影響していることが示唆された。

### 3.1.2.7. Howard (2008)

Martin Howard は近年の L2 フランス語習得研究の中心的研究者の一人であり、形態素習得研究をはじめ様々なレベルの SLA 研究を行っている。

Howard (2008) は、カナダのフランス語変種では接続法使用が一部の動詞語彙に従属する節内に限定されるとされる先行研究に基づき、3つのサブグループからなる被験者集団を対象に、各被験者約 1 時間のインタビューを実施してその接続法使用を検証した。被験者集団は、1 年間の文法指導を経験したグループ(グループ 1)、フランス語圏への留学を経験したグループ(グループ 2)、2 年間の文法指導を経験したグループ(グループ 3)からなる。

結果、学習者の接続法使用の頻度は全体で 9 例、うち 5 例がグループ 2 と極端に低く、当為判断表現の *falloir que* (be necessary that) 表現に限定されていた。この結果を受けて、

Howard は 1)被験者たちが接続法を統語的あるいは機能的にではなく、語彙文法として習得して化石化してしまっているとする仮説、2)モダリティを語彙やイントネーションなどで表現するために、接続法を冗長的なものとして戦略的に回避しているとする仮説、3)さらにネイティブスピーカーからのインプットが少ないために習得が遅いとする仮説を挙げている。なお、接続法は産出されなかったものの、接続法を要求する複文表現が、動詞補語名詞節表現を中心に初級から多く見られ、学習者にとって複雑な構造の産出が困難であると結論付ける Collentine (1995) と反する結果が得られている。

本研究は後に未来表現及び条件法習得研究 (Howard 2009) と統合され、法的なモダリティ表現の習得研究として再構築されている (Howard 2012)。同研究は本論筆者が現在確認できる限りでは唯一の、量的分析によって接続法と直説法未来、条件法の習得を同時に考察した研究となっている。

### 3.1.2.8. Bento (2013)

Bento (2013) は L2 ポルトガル語学習者による接続法使用を扱った数少ない事例のひとつである。この研究ではポルトガル語と異なる叙法システムを持つ言語 (オランダ語) を母語とする学習者群を実験群とし、統制群としてポルトガル語と類似する叙法システムを持つ言語 (スペイン語) を母語とする学習者群、及びポルトガル語母語話者との接続法使用の違いを分析することを目的としている。データはコインブラ大学一般・応用言語学研究所が収集した学習者書き言葉コーパスの Corpus de PEAPL2 (6.1.2) と、リスボン新大学が収集した CAL2<sup>48</sup>より、当該の母語話者集団サブコーパスが用いられている。オランダ語母語中級学習者のデータは 8 名のインフォーマントによる 9 テキスト (2237 語)、オランダ語母語上級学習者のデータは 2 名による 4 テキスト (774 語)、スペイン語母語中級学習者のデータは 28 名による 32 テキスト (8023 語)、スペイン語母語上級学習者のデータは 21 名による 33 テキスト (7900 語)、ポルトガル語母語話者のデータは 19 名による 19 テキスト

---

<sup>48</sup> <http://cal2.clunl.edu.pt/>



(6794 語) からなっている。オランダ語母語学習者のデータの少なさは、両コーパスにおける同学習者群の人数の少なさに起因している。

次に Bento は接続法が要求される文脈表現を 27 種類に分類した。これに基づいて、学習者集団ごとにどの種類の表現で接続法使用が多いのか、どの種類の表現で接続法が使われていないのか、誤って使われているのかを検証している。下表 24 に Bento の 27 の文脈と、それぞれにおける各学習者集団の正しい接続法使用 (TLU: target-like use) と誤りの数をまとめた (Bento ibid, 3.4, 表 1-表 4 より)。

表 24 Bento (2013) による接続法要求文脈の分類と、それらにおける接続法産出 (和訳は本論筆者による)

文脈	オランダ語中級		オランダ語上級		スペイン語中級		スペイン語上級	
	TLU	誤り	TLU	誤り	TLU	誤り	TLU	誤り
1 願望の動詞補語節		1			5		17	1
2 名詞補語節			1		2		1	
3 形容詞補語節	1				1		2	
4 自動詞補語節								
5 使役動詞補語節			1	2			4	
6 Factive 感情動詞の補語節							2	
7 否定の動詞の補語節							1	
8 時間の副詞節	4	1			8	1	4	
9 条件の副詞節	3	2			17		14	1
10 目的の副詞節	3		1		2		2	
11 譲歩の副詞節	4				9	4	9	4
12 比較条件の副詞節 ( <i>como se</i> )					3	1		
13 順応の副詞節 ( <i>conforme</i> )					1	2		
14 原因理由の副詞節				2				
15 制限関係詞節		3			2		5	
16 非制限関係詞節				1				
17 主節		1						
18 希求				1				
19 対照							1	

20	法助動詞への補語								1
21	単文での使用 ( <i>talvez / oxalá</i> )	3				2	5		1
22	願望 <i>quem me dera</i>	1							
23	陳述の動詞の補語節								2
24	真偽判断の動詞の補語節						3		
25	許可の動詞の補語節						1		
26	感情の動詞の補語節								
27	定型表現			1					1
合計		19	8	8	2	50	9	71	11

データ分析の結果、オランダ語中級学習者は TLU19 例、誤り 8 例の計 27 例を産出している。7 文脈で TLU 産出をしている一方、直説法が要求される制限関係詞節では接続法を過剰使用している。オランダ語上級学習者は、その被験者集団の少なさもあり TLU8 例、誤り 2 例が確認できるのみである。8 例の TLU は 7 文脈に渡っており、幅広く接続法が理解されていると考えられる。スペイン語中級学習者は TLU50 例、誤り 9 例の計 59 の接続法表現を産出している。オランダ語中級学習者と比べると圧倒的に産出が多く、TLU も 10 文脈に渡っているが、一方で譲歩の表現の誤りの多さも特徴的である。なお、Bento は譲歩、推測 (*talvez*) や希求 (*oxalá*) の表現で接続法ではなく直説法過去未来を用いていることを指摘しており、興味深い。スペイン語上級学習者は TLU71 例、誤り 11 例の計 82 の接続法表現を産出している。TLU は 15 文脈に見られるが、中級学習者と同じく譲歩表現での誤りが多い。

Bento はスペイン語学習者による TLU 産出文脈の多さ、及び譲歩表現での直説法使用の多さを母語のスペイン語からの文法の影響であると断定する。すなわち、TLU の幅広さはポルトガル語とほぼ同じ接続法システムを有していることに、また、譲歩表現での直説法使用の多さはスペイン語における同表現では直説法と接続法が選択的であることに、それぞれ起因しているとする。一方で、オランダ語母語話者学習者のパフォーマンスについては断定的ではなく、母語と既習言語からの影響を推測している。

### 3.1.3. 各先行研究のまとめ

以上に挙げた先行研究の特徴や方法論の詳細を表 25 にまとめる。各先行研究は対象言語のみならず、対象となる接続法表現の構造や時制、対象とする言語データ、言語データの収集方法、データ収集の期間、被験者の学習環境などが多種にわたる。

表 25 各先行研究の方法論などのまとめ

研究例	対象言語	環境	L1	データ収集	研究形式	期間
Terrell et al. (1987)	スペイン語	FL	英語	インタビュー	書き言葉 vs 話し言葉	横断
Stokes (1988)	スペイン語	L2/FL	英語	プライミング 口述タスク	事前テスト vs 事後テスト	長/横
Collentine (1995)	スペイン語	FL	英語	自由口述タスク		横断
Sans (2003a)	スペイン語	FL	日本語	対訳作文	初学者 vs 中級学習者	横断
Isabelli & Nishida (2005)	スペイン語	L2/FL	英語	インタビュー	L2 環境 vs FL 環境	長/横
Gudmestad (2006)	スペイン語	FL	英語	文法判断テスト	中級学習者 vs 上級学習者	横断
Howard (2009)	フランス語	L2/FL	英語/ アイルランド語	インタビュー	L2 環境 vs FL 環境	横断
Bento (2013)	ポルトガル語	L2	オランダ語/ スペイン語	作文コーパス分析	接続法言語 vs 非接続法言語	横断

注:横断/横=横断的調査, 長=長期的調査

また、分析結果も多様であるが、直接的な比較を行うことについては慎重にならなければならない。

以下、各研究の結果の共通点、相違点をまとめていく。

#### 3.1.3.1. 学習環境について

接続法形式が使用できるようになるために、あるいは、接続法要求表現を用いることができるようになるためには目標言語 (TL, SA) 環境での滞在経験が不可欠であることが示唆される。Stokes (1988) では両者の相関関係に統計的有意性が認められ、Isabelli &

Nishida (2005) でも統計分析こそ行われていないものの、産出に圧倒的な差が認められた (see also Correa 2011)。

非目標言語・外国語学習 (FL, SH) 環境における中級コースでの 1 年程度の学習では、例えコミュニケーションな指導を受けていても接続法を習得するには至らない (Terrell et al. 1987<sup>49</sup>, Stokes 1988, Collentine 1995, Isabelli & Nishida 2005)、あるいは接続法を要求するような複雑な統語構造を産出するにも至らない (Collentine 1995, Isabelli & Nishida 2005) 傾向がある。特に Terrell et al. (1987) と Collentine (1995) では、筆記テストで完璧に近いような接続法使用を示した学習者集団でも、発話のように即時的なアウトプットが求められる場面での接続法表現、及びそれにおける正しい接続法使用は極端に低くなった。また、一旦習得しても、十分な学習時間やインプットの継続がないと容易に退化してしまう傾向も見られる (Sanz 2003a)。FL 環境での会話テスト形式のタスクでは Terrell et al. (1987) の合計約 6 時間のデータで 8 例の接続法使用しか認められず、また Isabelli & Nishida (2005) では接続法は現れなかった (被験者 n=16)。また接続法要求表現の産出も Terrell et al. で 81 例、Isabelli & Nishida ではわずか 8 例であった。口述産出タスク形式の Collentine (1995) の研究 (n=38) でも、接続法要求問題で接続法要求構造を産出できたのは 53% で、接続法を使用できていたのは 34% であった (直説法では構造産出 74%、接続法使用 64%)。

即時的言語場面での接続法使用の少なさについて、Terrell et al. (1987) や Stokes (1988) はモニター理論 (Krashen 1982 etc.) の観点から、また、Collentine (1995) は Tarone (1988) の *vernacular/careful style* の観点から、産出 (発話) に時間をかけられない (L1 知識や L2 文法知識に頼れない) 場面での接続法文法の定着がなされていないと説明している。

以上より、TL 環境での学習及び生活経験が接続法使用・習得への重要な要因であることが示唆されるが、どれくらいの、どのようなインプットが必要であるのかは明らかでない。

---

<sup>49</sup> 具体的な指導内容は明示されていないものの、Terrell et al. (1987) では学習者の「コミュニケーションな授業」への満足な評価があることが言及されていた。

### 3.1.3.2. 習得順序

願望や命令、依頼を表す表現（当為判断モダリティ）については接続法が使用されやすいとする報告が多い（Terrell et al. 1987, Stokes 1988, Collentine 1995, Sanz 2003a, Isabelli & Nishida 2005, Gudmestad 2006, Bento 2013）。当為判断モダリティ表現は口述産出タスク、文法判断タスクともに産出、選択が多く、言語知識にも言語運用能力にも定着しやすいと仮定できる。また、Sanz (2003a) では、当為判断モダリティ表現については FL 環境でも知識が後退せず、定着していく傾向が報告されている。これに関して各研究とも考察や説明は特になされていないが、命令依頼表現や願望表現など言語内的に *realis* と *irrealis* の対立が起こらず、常に *irrealis*、あるいは「未実現」や「非実現」の内容となること（Givón 1994; 森本, 仁田 & 工藤 2001; 和佐 2005; etc.）ことが影響しているものと考えられる

これに対し、特に非指示名詞修飾関係詞節における接続法の使用、及び同表現自体の産出が極端に低い傾向がある（Stokes 1988, Isabelli & Nishida 2005, Bento 2013）。Stokes (1988) の口述産出タスク (n=27) では 6 題で正答率 14% (24/162)、Isabelli & Nishida (2005) のインタビュー (n=29) では接続法使用 60 例中 1 例と、極端に少ない。また、Bento (2013) ではオランダ語母語学習者が TLU を産出していない一方、ポルトガル語と叙法システムを有するスペイン語母語学習者は 7 例と比較的多く TLU を産出していた。これについて Bento は母語からの影響を主たる要因として推測していた。一方で、Stokes (1988) は指導の経験上関係詞節の接続法に時間をかけられていないことと教科書での扱いが少ないことを挙げているが、実証的なデータは挙げられていない。

加えて、後悔や驚きなどの感情を表す表現についても Terrell et al. (1987) や Collentine (1995)、Isabelli & Nishida (2005)、Bento (2013) のような産出型タスクでほとんど出現せず、Sanz (2003a) や Gudmestad (2006) のような判断タスクでも接続法使用が少なかった。

これについては各研究では特に説明や考察がないが、接続法を用いて表わされる従属節の「命題」が現実的であるというこの表現の特性と、各研究の L1 である英語やオランダ語では同表現に直説法を用いることが大きく影響しているものと考えられる。また、Sanz (2003a) の文法判断タスクでは学習後の後退の傾向がみられた一方、対訳タスクでは英文ポルトガル語訳の際の接続法使用が 3 年生で多かったことより、受容知識、産出知識ともに不十分ではあるものの、語彙や表現構造への気付かせ方によっては産出できる程度の文法化はなされ得ると推測される。

さらにこれらに加え、福嶋 (2005) のスペイン語接続法習得のレビューでは *cuando* (when; ポルトガル語では *quando*) で導入される時間表現<sup>50</sup>、否定命令法、そして反実仮想表現での接続法習得の難しさが指摘されている。特に *cuando* 表現では L1 の影響などから直説法未来を誤用される傾向が強いことが指摘されている。また、反実仮想表現では接続法未完了過去ではなく接続法現在を用いる傾向が報告されている。

### 3.1.3.3. 矛盾点

Terrell et al. (1987) では名詞節構文において接続法が多く産出されるという結果が得られているが、Isabelli & Nishida (2005) では副詞節構文において多いという結果が得られている。また、Bento (2013) の結果を集計しても、オランダ語母語話者、スペイン語母語話者ともに副詞節を多く産出している。特に、条件表現や時間表現などの真偽判断モダリティの副詞節表現は初中級から産出が多く、習得のされやすさが示唆されている (Isabelli & Nishida 2005, Bento 2013)。これは上述の福嶋 (2005) のレビューとも矛盾する。ただしそれぞれの研究で学習環境、習熟度、データ収集方法が異なるため、直接的な比較には慎重になるべきである。

加えて、疑念表現 (*I suspect that ...*) について Collentine (1995) では接続法が使用され

---

<sup>50</sup> ただし後続する形式がスペイン語では接続法現在なのに対し、ポルトガル語では接続法未来が要求される違いがある。

やすいという結果が得られる一方、Stokes (1988) では同表現において接続法は使用されにくいという結果が得られている。興味深いことに両者ともにそれぞれの結果は L1 である英語からの影響によるものであると説明している。Stokes は英語では同様の表現で接続法を用いないため L2 でも接続法が結びつきにくいと主張する一方、Collentine は英語の疑念表現は補語に不定詞や分詞を取らず従属名詞節のみを要求するため、すなわち構造的に類似しているため、L2 では接続法表現を導きやすいとしている。

#### 3.1.3.4. その他の問題点

各研究は接続法形式が要求されている表現で適切に用いられているか、あるいは選択、判断されているかの議論に終始している。接続法がどのように誤用されているのか、また、接続法が用いられなかった場合どのような誤用が起こっているのかについての記述に乏しい。

### 3.2. まとめ

本章では冒頭で接続法のポルトガル語教材での扱われ方を見て、初級後期で導入される傾向を確認した。続いて、主にスペイン語における接続法習得研究を詳細にレビューした。様々な方法論による研究から様々な研究結果が得られているが、願望表現が習得されやすく、感情表現、関係詞節表現が習得されにくいなど、概ね共通する結果が得られている。一方で、時間や条件の副詞節表現や、疑念表現などの習得について矛盾する結果も見られる。第 5 章ではこれらの研究結果を受けて、本研究における研究設問を立てる。

## 第4章 直説法未来と過去未来

### 4. 直説法未来と過去未来

前章まではポルトガル語の接続法についてまとめた。直説法と接続法の比較でしばしば問題になるのが、直説法の未来と過去未来という接続法と同じくモダリティを表現する動詞形式の存在である。これらは個別言語の文法研究でも接続法との関係が議論された歴史があり (cf. Alarcos Llorach 1980, Castronovo 1989)、また習得研究においても接続法との混同が問題にされることがある (cf. 福嶋 2005)。

本章では接続法習得の分析に入る前に、直説法未来と過去未来及びそれらと接続法との関係について、第2章で展開した叙法とモダリティの観点から考察していく。

#### 4.1. 未来とモダリティ

過去、現在、未来は時間指示において基礎的な概念である。言語によっては未来の時間概念を動詞形態素や言語的標識によって明示できない場合があるが、哲学的概念としては様々な様式で普遍的に共有されていると考えられる (Comrie 1985)。

一方で文法標識としての未来時制については、未来時制は存在するのか、非直説法叙法の非過去時制ではないのかといった議論が、一般的な言語理論においても個別言語の文法においても起こっている (Fleischman 1982, Comrie 1985)。Comrie (1985) は過去、現在、未来の時間の流れをベクトルとしてとらえているが、現在から見た過去と現在から見た未来は同質ではないとする。すなわち、現在に対し過去は既に経験された決定的事象であるのに対し、未来はまだ生じていない予測的事象であるために、時間指示ではなくモダリティ的概念として扱われるべきであるという問題が生じることを指摘している (see also, 工藤 1995)。ただし Comrie は英語を例に挙げ、モーダルではない未来指示の可能性を指摘して時制としての未来形を支持している。これに対し、Langacker (1991) は「未来」と「推測」をともに「経験」の外に位置する概念として一体的にとらえ、ともに *irrealis* の領域で



あるとしている。また、Fleischman (1982) は未来の時間指示的側面とモダリティ的側面を切り離さず、流動的なものとして捉えている。

#### 4.2. ポルトガル語の直説法未来、直説法過去未来

ポルトガル語では、いわゆる「未来時制」として「直説法未来」と呼ばれる動詞形態素が存在する。多くの場合、直説法未来は第一義的に発話時（現在）を起点としてそれ以降に起こる事象を表現するための形態素であるとされる (Bechara 2007, Cunha & Cintra 2007, Raposo et al. 2013)。また、直説法未来は基準時が発話時であるが、基準時を過去とし、過去から見た未来の（未実現の）事象を表す形態素として「直説法過去未来」が存在する。

上述のとおり、これらを未来時制とするのか、叙法とするのか、またはアスペクトの観点から起動相とするのかなどについて、一般言語理論においても (Comrie 1985, Fleischman 1982)、個別言語文法においても (Yvon 1952, as cited in Fleischman 1982; Alarcos Llorach 1980; Resnick 1984; 上田 1988; Castronovo 1989)、長い議論の歴史がある。後者に関しては後続のセクションで詳しく議論する。

なお、ポルトガル語において「直説法過去未来」(*Futuro do Pretérito*) とはブラジルの文法呼称法によるもので、ポルトガルの文法呼称法では「条件法」とされ、単純形式は「単純条件法」(*Condicional Simples*; Mateus et al. 2003) や「条件法現在」(*Condicional Presente*; Coimbra & Coimbra 2011) と呼称される。ブラジル文法呼称法の直説法過去未来完了に対応する、ter の条件法+過去分詞による複合（完了アスペクト）形は「複合条件法」(*Condicional Composto*; Mateus et al. 2003) や「条件法過去」(*Condicional Pretérito*; Coimbra & Coimbra 2012) と呼称される。日本ではブラジル式を採用することが多く、本論でもこれに合わせ、「直説法過去未来」、「過去未来完了」の呼称を採用する。

#### 4.2.1. 直説法未来、過去未来の語尾変化

ポルトガル語の直説法未来と直説法過去未来は規則的な形態変化を示す。両形式とも不定詞と同じ形式を語幹とし、それぞれの語尾と組み合わせる。不規則動詞、すなわち語尾に不規則があるものはないが、*dizer*(say)、*fazer*(do, make)、*trazer*(bring)の三語（及びその派生動詞語彙）のみ語幹が *dir-*、*far-*、*trar-*となる。以下にそれぞれの活用形をまとめる。

表 26 *falar*（「話す」）の直説法未来

<i>falar</i>	単数	複数
1 人称	<i>falarei</i>	<i>falaremos</i>
2 人称	<i>falarás</i>	<i>falareis</i>
3 人称	<i>falará</i>	<i>falarão</i>

表 27 *dizer*（「言う」）の直説法未来

<i>dizer</i>	単数	複数
1 人称	<i>direi</i>	<i>diremos</i>
2 人称	<i>dirás</i>	<i>direis</i>
3 人称	<i>dirá</i>	<i>dirão</i>

表 28 *falar*（「話す」）の直説法過去未来

<i>falar</i>	単数	複数
1 人称	<i>falaria</i>	<i>Falaríamos</i>
2 人称	<i>falarías</i>	<i>Falaríais</i>
3 人称	<i>falaria</i>	<i>Falaríam</i>

表 29 *dizer*（「言う」）の直説法過去未来

<i>dizer</i>	単数	複数
1 人称	<i>diria</i>	<i>diríamos</i>
2 人称	<i>dirias</i>	<i>diríais</i>

#### 4.2.2. 直説法未来の用法

本節ではポルトガル語の直説法未来が用いられる表現を Bechara (2007) と Cunha & Cintra (2007) に従い、以下のようにまとめる。

##### ① 発話後に起こり得る事実

(209) As aulas começarão depois de amanhã.

ART.DEF classes start-IND-FUT-3PL after of tomorrow

‘The class will start the day after tomorrow.’

(Anjos 1957, *2 Romances: o Amanuense Belmiro*, p.222, as cited in Cunha & Cintra 2007)

##### ② 発話時の事実に対する推定

(210) Ele terá seus vinte anos.

he have-IND-FUT-3SG his-PL twenty years

‘He may be around twenty years old.’

(Bechara 2007)

(211) Quem está aqui? Será um ladrão?

who be-PRES-3SG here be-IND-FUT-3SG ART.IDEF thief

‘Who is here? Is it be a thief?’

(Ramos 1947, *Insônia*, p.9, as cited in Cunha & Cintra 2007)

##### ③ 丁寧な表現

(212) Dirá o senhor: mas como foi que aconteceram? E eu

lhe direi: sei lá.  
 say<sup>IND-FUT-3SG</sup> ART.DEF sir but how be<sup>PFV-3SG</sup> that happen<sup>PFV-3PL</sup> and I  
 you<sup>ACC</sup> say<sup>IND-FUT-1SG</sup> know<sup>PRES-1SG</sup> there

‘Sir will ask: But how did this happen? I will respond: I don’t know.’

(Drummond de Andrade 1958, Contos de Aprendiz, p.141, as cited in Cunha &

Cintra 2007)

④ 命令の表現

(213) Defenderás os teus direitos.

defend<sup>IND-FUT-2SG</sup> ART.DEF-PL your<sup>PL</sup> rights

‘You shall defend your rights.’

(214) Não fumarás!

not smoke<sup>IND-FUT-2SG</sup>

‘Do not smoke!’

(Bechara 2007)

明確に発話時以降の事柄を表しているのは①と④である。これに対し、②と③には明確な後時性はなく、現在指示である。そのため、直説法現在とは時間指示ではなく、確かさや丁寧さといったモダリティによって使い分けられる。加えて、各表現はいずれもモダリティ表現としてとらえることができる。各表現に二段構えのモダリティ（本論 2.6）の要素を当てはめるなら、(209)は発話伝達のモダリティが「述べ立て」、命題めあてのモダリティが「真偽判断」である。同様に(210)も「述べ立て」で「真偽判断」、(211)は「疑問」で「真偽判断」、(212)は「丁寧」、(213)と(213)(214)は「働きかけ」で「当為判断」である。②と④は明確な *irrealis* である。

### 4.2.3. 直説法過去未来の用法

本節ではポルトガル語の直説法過去未来が用いられる表現を Bechara (2007) と Cunha & Cintra (2007) に従い、以下のようにまとめる。

#### ① 過去のある時点以降に起こり得る事柄

(215) Depois de instalada, a Academia se transformaria em sua outra casa.

after of installed ART.DEF academy REFL transform-COND-3SG in his another house

‘After it was launched, the Academy was relocated to a different house.’

(Martins Moreira 1970, *Visão em Vários Tempos*, p.43, as cited in Cunha & Cintra 2007)

#### ② 過去における推定

(216) Haveria na festa umas doze pessoas.

have-COND-3SG in:ART.DEF party ART.IDEF-PL twelve people

‘There might be about twelve people at the party.’

(Bechara 2007)

#### ③ 願望・丁寧の婉曲

(217) Desejaríamos ouvi-lo sobre o crime.

desire-COND-1PL hear-INF:him/about ART.DEF crime

‘We would like to hear about the crime.’

(Drummond de Andrade 1962, *A Bolsa & a Vida*, p.103, as cited in Cunha & Cintra

## ④ 疑問や感嘆

(218) O           nosso amor morreu... Quem o diria?

ART.DEF   our    love   die-PFV-3SG   who   it say-COND-3SG

'Our love died... Who would say that?'

(Espanca 1962, *Sonetos*, p.168, as cited in Cunha & Cintra 2007)

## ⑤ 実現が考えられない事柄 (反実仮想表現帰結)

(219) Se   tivessem ouvido o           conselho, essa   desgraça   não se   daria.

if   hear-SBJV-PSTPFV   ART.DEF   advice           that   misery       not REFL   give-COND-3SG

If they had listened to the advice, the unpleasantness would not have happened.

(Ribas n/a, *Ecos da Minha Terra*, p.117, as cited in Cunha & Cintra 2007)

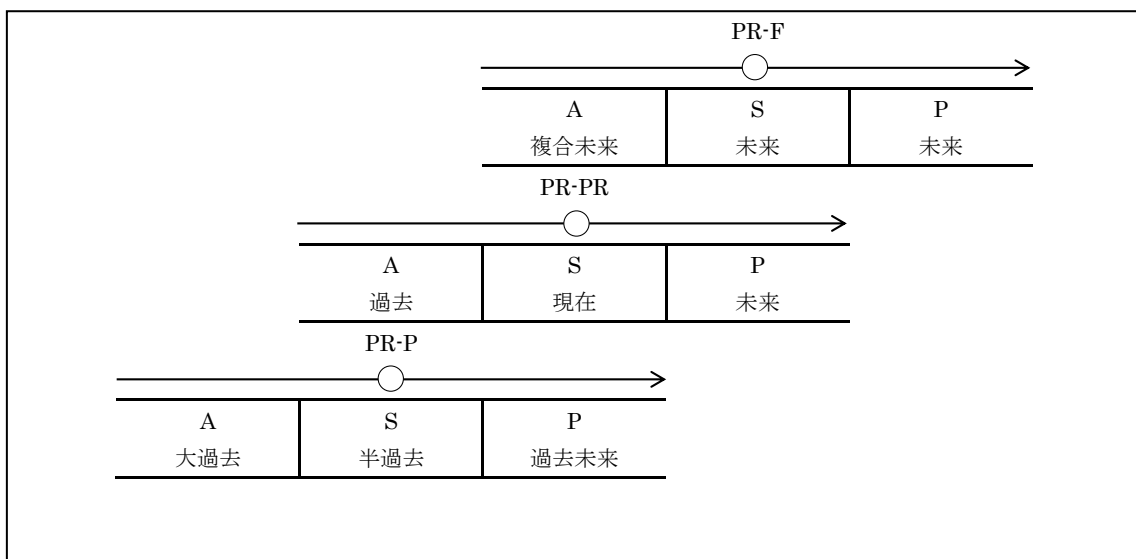
明確に時間指示として機能しているのは①で、過去の相対時制として機能している。モダリティの観点から考えると、(215)の発話伝達のモダリティは「述べ立て」、命題めあてのモダリティは「真偽判断」である。同様に(216)も「述べ立て」の「真偽判断」である。(217)は「丁寧」の「当為判断」、(218)は「疑問」や「感嘆」、(219)は「述べ立て」で「真偽判断」の一事例 (反実仮想) として考えられる。

## 4.2.4. 直説法未来と過去未来の関係

直説法過去未来は、形態的類似性からしばしば直説法未来の過去時制のように位置づけられることがある。特にブラジルポルトガル語文法における形態論指向の時制体系では直説法未来を「現在未来」 (*Futuro do Presente*) として、過去未来 (*Futuro do Pretérito*) と

対応させている事例が見られる (Bechara 2007, Cunha & Cintra 2007)。実際に直説法未来と過去未来は同一概念の非過去時指示と過去時指示として機能する ((209)と(215)、(210)(211)と(216))。一方で、両者はモダリティ的側面の強さで対立する場合もある。発話後に起こり得る事実(209)、及び発話時における不確かさ(210)(211)と実現が見込まれない事柄(219)は、ともに非過去指示であり、前者二例は実現可能性の真偽判断を保留するにとどまっている (*non-factual*: Lyons 1977) のに対し、後者は現実では起こらない事柄 (*counter-factual*: ibid) を述べている。そのため、「現在未来」、「過去未来」の両呼称は両形式の機能及び対立概念を十分にとらえきれていないと言える。

一方で、アスペクトを考慮した意味論指向の時制体系においては、直説法未来が直説法現在、直説法完了過去などとともに絶対時制として扱われることが多いのに対し、直説法過去未来は「過去のある時点から見た未来」のように相対時制として扱われ、体系的には関連が薄いようにまとめられる傾向もある (e.g. Comrie 1985)。例えば彌永 (1991, 2007) は「三段構えの時称体系」(図 1 図 16) を提唱しているが、この仮説では直説法過去未来を過去時における相対時制として扱っている一方、直説法未来を絶対時制としても現在時の相対時制としても扱っている。



#### 図 16 彌永 (2007) の「三段構えの時称体系」 (本論筆者による再現)

この構図では未来と過去未来の間に対等な関係を見出しにくい。また、反実仮想表現の過去未来の機能が考慮されていない。

また、過去未来をポルトガルの呼称法に従い「条件法」と分類する場合、単純形式を「条件法現在」(*Condicional Presente*)、*ter*との複合(完了アスペクト)形式を「条件法過去」(*Condicional Pretérito*)と分類することがある(e.g. Coimbra & Coimbra 2011, 2012)。この場合、非過去と過去の対立がこの二形式で完結してしまい、直説法未来との時制的関連性が薄くなってしまう。

#### 4.3. 非直説法叙法としての直説法未来・過去未来

直説法未来と過去未来が表すのは直説法現在などが表現する意味概念である *realis* (事実や経験に基づく領域)とは異なると考えられることがある。つまり、意味的な観点から両形式は接続法に近い領域であると考えられる。一方で、直説法未来と過去未来は統語構造の面、動詞語彙との共起関係の面で接続法とは異なり、むしろ直説法現在と同様の振る舞いをする(e.g. Bello 1847)。そのため、スペイン語やブラジルポルトガル語の文法分類では両形式は現在でも直説法に分類されるのが一般的であるが、一方で両形式を直説法でも接続法でもない第三の叙法であるとする考え方が、主にスペイン語の文法において議論されている。

両形式のうち、過去未来は歴史的に複雑な変遷をたどっている。スペイン語では Nebrija (1492, cited in Castronovo 1989)、ポルトガル語では Barros (1540 / 1971) などの初期の文法書においては接続法の過去形式として扱われていた。スペイン語では 20 世紀半ばまで Real Academia Española (RAE) の文法書に接続法と規定されていたが、Bello (1847) の統語構造的説明によって直説法説が主張されると、RAE (1917) は「可能法」(*potencial*) な



る妥協的な叙法を設定して、これに区分され、さらに William Bull や Samuel Gili Gaya の研究を受けて、RAE (1973) によって直説法として再定義され、現在に至っている (reviewed in, 上田 1988, 西川 1988, Castronovo 1989, 秦 1994)。20 世紀後半になっても Alarcos Llorach (1980, 1994) などによって、「可能法」(*potencial*) や「条件法」(*modo condicionado*) など、直説法未来形式と統合された非直説法仮説が主張されているが、Bello (1847) の統語構造を根拠とする仮説を覆せず、現在に至るまで両形式は直説法として扱われるのが定説となっている。

一方ポルトガル語においては、Barros (1540) 以降の歴史的経緯は不明瞭である。先述の通り、現代ブラジルの文法呼称法では現代スペイン語と同様、それぞれを直説法未来、過去未来と呼ぶが、ポルトガルの文法呼称法では過去未来の形式のみを条件法として扱っている。後者の扱いはやや揺れがあり、単純形式を「条件法現在」、「*ter* の条件法+過去分詞」による複合形式を「条件法過去」とするものが一般的であるようだが、直説法未来を「未来」、過去未来を「条件法」としつつも両形式を同一概念の二時制として扱うケースも見られる (Mateus et al. 2003, Raposo et al. 2013)。

次節以降では、主にスペイン語に関して、直説法未来・過去未来を非直説法叙法として積極的に定義、提案している事例を挙げる。

#### 4.3.1. Alarcos Llorach の *Modo Condicionado*

Real Academia Española によって直説法未来・過去未来の名称と概念が定着したのちにおいても、Alarcos Llorach (1980) は統語構造的説明に頼らず、機能的観点から「可能法 (*Modo Potencial*)」を主張し続けた。Alarcos Llorach (ibid) は直説法未来・過去未来形式がアスペクトの点で無標であること、それぞれ直説法現在、直説法未完了過去と時間指示の点で差異がないこと、さらに両形式はある条件下において実現が可能である事象を表現しているという 3 点から、直説法の未来時制という位置付けではなく、第三叙法であるこ

とを主張している。後年、Alarcos Llorach (1994) において、両形式は *Modo Condicionado* という呼称に変更される。日本のスペイン語学者で Alarcos Llorach を支持しているのが寺崎 (ibid) であり、両形式を「条件法」とすることを提案している。また、Fleischman (1982) によると Alarcos Llorach 以前からフランス語の Yvon (1952, as cited in Fleischman 1982) が同様の第三叙法説を提案している。

#### 4.3.2. 出口の推定法

現在のところスペイン語文法において直説法未来・過去未来の非直説法性を最も理論的に解説し、第三叙法としての具体的な再編案を主張しているのが出口 (1986) である。出口は以下の三点を柱に、両形式を「推定法」として再定義する。

- ① 直説法現在と直説法未来の時間的共通性
- ② 3法2時制：叙法の下位区分ではない時制
- ③ 陰否性理論の再定義

出口はまず、直説法未来の非未来性と非直説法性を指摘する。直説法未来と直説法現在はいずれも現在も未来も表すことができ、非過去という性質で共通する。一方、直説法未来による表現は法助動詞による表現と置き換え可能であり、直説法現在表現とは時間指示ではなく法性で対立していると指摘する。この2点は Alarcos Llorach (1980) とも共通している。

次に叙法間での時制の共通性の不透明さに疑問を投げかけている。従来の各叙法から枝分かれ的に各時制が並べられるような「階層的化された」叙法・時制体系モデル (e.g. 本論, p.17, 図 2) では、例えば直説法現在と接続法現在の「現在」の共通性がわかりづらいのではないかと指摘し、叙法と時制を直説法、接続法と直説法未来と過去未来に対応する「推

定法」の非過去と過去からなる3法2時制のマトリックス型に整理する(図17)。

時制 / 法	直説法	推定法	接続法
非過去	amo	amaré	ame
過去	amaba / amé	amaría	amara (amase)
非過去完了	he amado	habré amado	haya amado
過去完了	había amado	habría amado	hubiera (hubiese) amado

図17 出口(1986)の法時制マトリックス(本論筆者による再現)

第三に、接続法と推定法の違いについては法性の強さの違いであるとしている。このため、完全な肯定と否定は直説法、中間的な否定は接続法であるとする陰否性理論(出口1981)において、推定法は直説法ほど完全でなく、接続法ほど部分的でない、中間的な叙法として位置付けている(図18)。

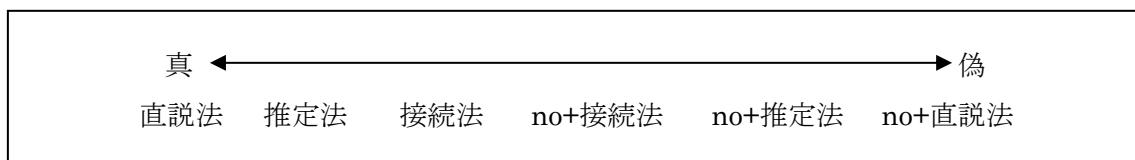


図18 陰否性と「推定法」(出口1986, p.12)

推定法仮説は直説法未来と過去未来の概念の問題点を順序立てて批判しているが、時制的な観点からの説得力の強さに対して、叙法的な観点からの説得力に乏しい。第一に、直説法未来の叙法的な意味について、助動詞表現との同等性を例示するにとどまっている点が挙げられる。第二に、推定法を陰否性理論に組み込み、接続法と直説法の間位置付けているが、推定法が接続法よりも陰否性が弱いとは必ずしも定義できない。例えば *factive* な感情表現における接続法(220)と、反実仮想表現における条件法(221)の陰否性はどちらが

強いといえるか、絶対的な尺度は存在しない。

(220) É uma pena que chegues atrasado.

be-PRES-3SG ART.IDEF pity that arrive-SBJV-PRES-2SG late

‘It is a pity that you arrive late.’

(221) Se ele tivesse concluído o trabalho, estaria agora de férias.

if he conclude-SBJV-PSTPFV-3SG ART.DEF work be-COND-3SG now of holidays

‘If I had completed my job, I would now be on holiday.’

(Mateus et al. 2003)

なお、出口は 1986 年の論文以降、この推定法理論を修正した様子はない (出口 1996)。

推定法と非常に似通った例として、Klein-Andreu (1995) の *Realtive Assertion* が挙げられる。未来と過去未来は assertion (cf. Terrell & Hooper 1974) ではないものの、接続法ほどの non-assertiveness がないとする、出口の陰否法理論とほぼ同様の考え方に基づいた非直説法仮説の主張であるが、特に出口の研究への言及はない。

#### 4.3.3. 非直説法叙法の否定

以上見てきたように、文法史や実際の直説法未来・過去未来のモダリティ的用法から、両形式を非直説法第三叙法として扱うべきであるという議論が 1980 年頃のスペイン語研究において見られたが、現在ではスペイン語やブラジルポルトガル語では両形式を直説法として扱うことで落ち着いている。先述の通り、Bello (1847) の統語構造的説明を覆せないことがその主たる要因となっている (Castronovo 1989)。この他にも、意味的にも直説法未来・過去未来は本質的に時制であるとするのが近年の共通見解であると見られる。例えば和佐 (2005) は直説法未来・過去未来に *irrealis* 表現の形式としての側面を認めているが、未来時指示の用法こそが本来的な用法であり、叙法的用法はあくまでも「転移用法 (usos

dislocados)」であるとしている (ibid, p.22)。また、上田 (1988b) も直説法未来・過去未来の本質は「未来性」ではなく「推定性」にあるとし、それぞれ「現在推量」、「過去推量」と呼称することが相応しいとしながらも、叙法としては直説法として区分することを主張している (上田 1988a<sup>51</sup>)。

#### 4.4. 直説法未来・過去未来と接続法

ここまで述べてきたように、直説法未来と過去未来と呼ばれる動詞形態素は純粋な未来の時間指示のみならず、法的な意味を含むものである。同じく *irrealis* を表現する動詞形態素として、接続法及び接続法表現との相違がポルトガル語文法における難解な点のひとつであると言えよう。学習者が接続法を学習する際にも、直説法未来との混同がしばしば生じることが報告されている (e.g. 福罵 2005)。しかしながら、ポルトガル語の文法書や教材を概観しても、直説法未来・過去未来と接続法はそれぞれ単独に項目を分けて扱われており、両者の相違点について解説しているものはほとんどない。そこで本節では両者の共通点と相違点を記述する。

統語構造的観点から見ると、接続法は *talvez* 表現など一部を除き、基本的に従属節内において用いられるという制約を受ける動詞形態素である。具体的には他動詞の補語となる名詞節、非人称評価表現の主語となる名詞節内、時間や譲歩、目的などの副詞節内、関係詞節内、そして *talvez* 表現、希求表現と譲歩などの定型表現で用いられる。これに対し、直説法未来・過去未来は自由度が高く、非接続法要求表現において主節、名詞節、副詞節、関係詞節のほぼすべてで用いられる。すなわち、直説法現在に準じ、ほとんどにおいて接続法とは排他的関係となる。ただし、直説法現在と直説法未来の統語構造的互換性について、条件や時間の副詞節表現では直説法現在は用いられるが、直説法未来は用いられないといった事例もある。また、実際の言語使用データベースを分析すると、接続法を要求し

---

<sup>51</sup> 加筆修正版 (上田 1988b) では明言されていない。

ない動詞補語節表現において直説法現在ではなく直説法未来と結びつきやすい動詞語彙群があり、直説法現在と直説法未来が全く同じ共起的振る舞いをするとも限らないことが示唆されている（鳥越 2010, Torigoe 2013）。

意味表現の観点から見ると、接続法の方が圧倒的に広く用いられる。接続法、直説法未来・過去未来ともに用いられる表現は真偽判断表現、命令表現、反実仮想表現である。ただし、反実仮想表現では接続法（未完了過去）は条件の内容でのみ用いられるのに対し、過去未来は帰結節において条件下で起こり得る事柄の内容を表現する。また、現代ポルトガル語において、丁寧や婉曲の表現は直説法未来・過去未来で表現されるが、接続法形式では表現されない。

#### 4.5. 叙法とモダリティの観点から見る直説法未来・過去未来

本章 4.2. で直説法未来・過去未来が現れる表現を具体的に見てきたが、両形式を叙法的に考える場合、モダリティ理論において直説法未来・過去未来はどのように位置づけられるのであろうか。Otaola Olano (1988)、益岡 (1991)、仁田 (1991) が提唱している「二段構えのモダリティ」(cf. 本論 2.6) は、直説法未来・過去未来の機能と接続法各形式の機能の差異についての体系的な説明に役立つ。

まず、接続法は多くにおいて従属節内で用いられるため、基本的に真偽判断や当為判断などの *irrealis* の命題めあてのモダリティを受ける命題内で言表事態のマーカとなる (222)(223)。一方で、主節動詞に現われて、述べ立て、疑問、丁寧などの発話伝達のモダリティとして機能することは命令法や希求表現を除いて原則できない。そのため、接続法形式自体には意味がないとする意見もある (e.g. Collentine 1995, 彌永 2008)。

(222) É provável que a Maria chegue atrasada.  
 be-PRES-3SG probable that ART.DEF Maria arrive-SBJV-PRES-3SG late

‘It is likely that Maria will arrive late.’

(223) A Ana permitiu que a filha saia.

ART.DEF Ana permit-PFV-3SG that ART.DEF daughter go.out

‘Ana allowed her daughter to go out.’

(Mateus et al. 2003)

これに対し、直説法未来と過去未来は接続法と同様に命題内に現われることができるほかに、命題に対する言表態度を直接的に表現することで、発話・伝達のモダリティとして機能することもできる(224)。この点が接続法との決定的な違いである。これは法動詞語彙である *poder* (can)や *dever* (must) にも当てはまる(225)。

(224) A esta hora, o Rui já estará em casa.

at this hour ART.DEF Rui already be-IND-FUT-3SG in house

‘By this time, Rui will already be home.’

(225) O Rui deve sair amanhã.

ART.DEF Rui must-IND-PRES-3SG leave-IND tomorrow

‘Rui must leave tomorrow.’

#### 4.6. 第二言語直説法未来・過去未来習得研究

以上、irrealis 形式としての直説法未来と過去未来、そしてそれらと接続法各形式との差異をまとめてきた。本節では直説法未来と過去未来の習得に関する先行研究をレビューしていく。

第3章で述べたように、第二言語動詞形態素習得研究において、各言語の「直説法完了過去」と「直説法未完了過去」に該当する形態素の習得研究は1990年代以降盛んになるが、

一方で直説法未来や過去未来にあたる形式の習得研究は接続法同様、ロマンス語のみならず英語を対象とした研究ですらあまり確認できない (cf. Bardovi-Harlig 2000, Salaberry & Shirai 2002, Howard 2009, Ayoun 2013)。

直説法未来にあたる形式の習得研究の具体的な事例を挙げると、Bardovi-Harlig (2002, 2004) は L2 英語学習者の、Wiberg (2002) は L2 イタリア語学習者の、Gudmestad & Geeslin (2013) は L2 スペイン語学習者の (直説法) 未来形 (*synthetic future, morphological future*) と未来迂言表現 (*go-future, periphrastic future*) の習得を検証している。Wiberg (2002) によると限られた直説法未来習得研究は形式習得を扱うものが主であり、また、Howard (2009) によると Wiberg (2002) の研究を含めほとんどが未来指示表現としての用法の習得に限定され、*Irrealis* としての習得研究の事例は希少であるとされる。なお、Gudmestad & Geeslin (2013) は未来形の持つ不特定性について言及しているが、基本的に両研究ともモダリティの観点からの習得については配慮していない。

直説法過去未来にあたる形式の習得に関する研究はさらに希少であり、Bardovi-Harlig (2000) や Howard (2009) のレビューによるとフランス語の条件法の形式習得を対象にした数例と、Giacalone Ramat (1992) らによるイタリア語を対象としたモダリティ表現の習得順序研究に限られるとされる。フランス語習得の各研究においては直説法過去未来 (条件法) は上級レベルの学習者より機能習得が見られ (reviewed in Howard 2009, Ayoun 2013)、Giacalone Ramat (1992) のイタリア語習得研究でも習得順序の後期で習得されるとまとめられている。一方で Howard (2009) による口述データの研究では、反実仮想表現帰結節において、留学経験のない初級学習者でも比較的多くの条件法形式が産出されることを報告している。むしろ、条件節内の動詞形式に誤りが多いとされる。また、丁寧の表現も多く産出されるが、推測の表現の産出は少ない。

鳥越 (2013b) は学習者の対訳作文データから直説法未来の産出と過去未来の産出を同時に横断的に記述し、両者の使用の傾向に相関関係が見られないことを報告している。ただ



し、データサイズが小さいうえ、各被験者の客観的な習熟度が得られていないため、習得のプロセスを推定できていない。また、作文のテーマによるバイアスも考えられ、産出データの偶然性の高さが考えられる。

Giacalone Ramat (1992) と Howard (2012) では接続法各形式と直説法未来・過去未来を含むモダリティ形式全体の習得研究を行っており、両形態素群の習得の比較がなされている。各研究とも、直説法未来・過去未来が接続法に先行して習得されるという検証結果を得ている。特に Howard (2012) は直説法過去未来の習得が直説法未来の習得に先行していることを報告しており、興味深い。

以上のように第二言語習得研究の歴史において多くの形態素習得研究が積み重ねられている中で、直説法未来と過去未来の習得は依然調査事例が少なく、明らかにされるべき研究項目であるといえる。

#### 4.7. まとめ

本章では現代の多くの文法では直説法に分類される「直説法未来」と「直説法過去未来」について概観した。直説法未来と過去未来は統語的、共起的な振舞いは直説法であっても、意味機能的には *irrealis* のモダリティ形式であると考えられる。また、同じく *irrealis* を表現する動詞形態素である接続法は、主に命題めあてのモダリティを受ける命題内で *irrealis* のマーカーとして用いられるのに対し、直説法未来・過去未来は主節動詞としても用いられ、これにより発話・伝達のモダリティとしても機能する点が決定的な差異となっている。直説法未来と過去未来の習得研究については、時制形式としての習得研究も、*irrealis* 形式としての習得研究も、他の動詞形態素の習得研究と比較して事例が少なく、今後研究が重ねられていくべき領域である。

## 第5章 研究設問

### 5. 研究設問

本研究では第二言語ポルトガル語学習者による接続法の使用を検証する。各先行研究ではBento (2013)を除き、研究者が独自に収集したデータに基づいて分析を行っていたため、収集データ及び接続法の産出が小規模なものが多い。本研究では既存の大規模学習者データ (Corpus do PLE、Corpora de PEAPL2) を用いることで、より広い学習者からより多くの接続法産出を得て、より一般的な接続法習得像を得ることを目指す。

まず、学習者による接続法使用の全体像を、母語話者、習熟度、時制、意味表現の側面から明らかにしていく。続いて、分析結果と、叙法とモダリティの先行研究及び第二言語スペイン語接続法習得に関する各先行研究の結果を受けて、以下の研究設問を挙げ、考察していく。

#### 5.1. 表現別接続法習得順序の推定

本研究では習熟度別学習者データを用いることにより、疑似的に習得順序を推定することができる。これにより、どのような表現における接続法の使用がどの習熟度から使用が見られるのか、それぞれどの学習段階で使用や定着が認められるのかを明らかにし、先行研究結果とも比較していく。

#### 5.2. 接続法未来の習得

接続法未来は接続法習得研究の多くで対象言語であるスペイン語では用いられない文法であり、ポルトガル語習得研究におけるひとつの特色である。本研究は各学習者の接続法使用及び誤用の傾向について、習熟度と母語、表現の面から考察する。

#### 5.3. 接続法と未来・過去未来との混同

また、接続法各形式と直説法未来・過去未来の混同の可能性についても検証する。直説

法未来と過去未来は同じ *irrealis* の形式として、言語によっては接続法形式を置き替えている例もあり (Lyons 1977, Palmer 2001)、また、ポルトガル語習得においても接続法と混同される可能性がある (福畠 2005)。本研究では主に接続法が直説法未来・過去未来が用いられるべき文脈で用いられている例、及び、直説法未来・過去未来が接続法が用いられるべき文脈で用いられている例を考察する。

#### 5.4. 日本人学習者の接続法使用と習得

最後に、分析対象を日本語母語学習者によるサブコーパスに絞ることで、その接続法習得の傾向に迫ってゆく。習熟度別、時制別、表現別に考察する。

## 第6章 方法論

### 6. 方法論

本章では本研究で扱うデータベースとその分析に用いる各プログラムやソフトウェアについて紹介し、それらを用いた分析手法について具体的に述べる。

#### 6.1. コーパスデータ

##### 6.1.1. Corpora do Português Língua Estrangeira (PLE)

*Corpora do PLE*<sup>52</sup>はリスボン大学言語研究所 (Centro de Linguística da Universidade de Lisboa: CLUL)<sup>53</sup> が構築した学習者コーパスデータベースである。被験者は12か国18の大学でポルトガル語を学ぶ397名の学生からなり (表30)、データは2008年から2010年までの間に収集された。データ収集の手法はテーマに基づく自由作文である。

表 30 Corpora do PLE の被験者の母語話者別の内訳 (PLE のウェブサイトより)

被験者の母語	被験者数	被験者の母語	被験者数
ドイツ語	41	英語	37
アパッチ語 <sup>54</sup>	1	イタリア語	112
ブルガリア語	7	日本語・ポルトガル語	1
ブルガリア語・トルコ語	1	コンカニ語 <sup>55</sup>	13
カタルーニャ語	2	コンカニ語・英語	1
朝鮮語	59	ルクセンブルク語	1
チェコ語	2	ポーランド語	21
クロアチア語	3	ポルトガル語	12
スロヴァキア語	1	ルーマニア語	52
スペイン語	79	ルワンダ語	1

<sup>52</sup> ポルトガル語版: <http://www.clul.ul.pt/pt/recursos/314-corpora-of-ple> (2015年2月11日閲覧)

英語版: <http://www.clul.ul.pt/en/resources/314-corpora-of-ple> (2015年2月11日閲覧)

<sup>53</sup> ポルトガル語版: <http://www.clul.ul.pt/pt> (2015年2月11日閲覧)

英語版: <http://www.clul.ul.pt/index.php> (2015年2月11日閲覧)

<sup>54</sup> 北米のネイティブ・アメリカン言語のひとつ。

<sup>55</sup> インド・ゴア州の公用語でもある、インドヨーロッパ語族言語。

スペイン語・イタリア語	1	ロシア語	5
フランス語	8	セルビア語	2
フランス語・ポルトガル語	2	スウェーデン語	1
ヒンディー語	4		

作文に先立ってまず年齢、性別、国籍、学籍の個人情報の記入と、ヨーロッパ言語共通参照枠 (*Common European Framework of Reference for Languages: CEFR*) に基づいたポルトガル語運用能力に関する自己評価アンケートが行われている。これらの結果のリストは PLE のサイト上にて Excel ファイルでダウンロードが可能である<sup>56</sup>。CEFR は Council of Europe (2001) が提唱する、多言語間で共通する言語能力習熟度尺度である。書くこと、読むこと、聞くこと、やりとりの 4 技能における習熟度を初級から上級まで A1、A2、B1、B2、C1、C2 の 6 段階で自己評価していく。CEFR の成り立ちや応用事例などの詳細は和田 (2004)、投野 (2013) などを参照されたい。

作文では「個人」、「社会」、「環境問題」の 3 つの大きなテーマのそれぞれについて、いくつかの下位テーマ群 (全 41 テーマ: 付録 1) から 1 つずつを選んで執筆する。個人情報記入、自己評価、作文は授業時間内 (120 分) に行われた。

データ収集の結果、二重母語話者を含め 27 通りの母語話者グループからなる述べ 397 名から 471<sup>57</sup>の作文が得られている。データの総語数は約 70500 語で、1 サブデータあたりの平均語数は約 150 語と公表されている。なお、ポルトガル語を母語とする被験者データがあるが、プロフィールリストよりこれらはアンゴラなどのポルトガル語を母語とする被験者や、ポルトガル国外で出生して家庭内でポルトガル語を話すために、母語としているものの体系的な学習を受けていないため、当地で継承言語としてのポルトガル語を学習しているケースであると考えられる。

<sup>56</sup> [http://www.clul.ul.pt/files/anagrama/Dados\\_Sociolinguisticos.xls](http://www.clul.ul.pt/files/anagrama/Dados_Sociolinguisticos.xls) (2015 年 2 月 11 日閲覧)

<sup>57</sup> Corpus do PLE のサイトでは 470 としているが、実際に 471 のサブデータが入手できる。

また本論筆者の集計の結果、学習者の習熟度別のサブデータの内訳は、CEFR の A1 から A2 のレベルが 236、B1 から B2 のレベルが 163、C1 から C2 のレベルが 72 となっている。

表 31 Corpora do PLE の被験者の習熟度別の内訳 (PLE のウェブサイトより)

CEFR 習熟度	データ数
A1-A2	236
B1-B2	163
C1-C2	72

コーパスデータは CLUL のサイトから一括ダウンロード、または個々のデータごとの閲覧が可能である。なお、サイト内でコーパスデータを操作できる専用のオンライン・コンコーダンサーなどが実装されていないため、コーパスの分析には各自データと、分析のための外部コンコーダンサーのダウンロードが必須である。

### 6.1.2. Corpus de Produções Escritas de Aprendentes do PL2 (PEAPL2)

Corpus de PEAPL2<sup>58</sup>はコインブラ大学一般・応用言語学研究所 (Centro de Linguística Geral e Aplicada: CELGA)<sup>59</sup> が構築した学習者言語コーパスデータベースである。当データは Corpus do PLE のプロジェクトリーダーの協力のもとに構築されたもので、その収集の Protokol は共通である (6.1.1) が、PLE では作文のテーマが 41 あったのに対し、PEAPL2 では 9 つに限定されている。テーマごとの被験者の内訳は下表 32 に示す。

表 32 Corpus de PEAPL2 の作文テーマと被験者の内訳 (PEAPL2 のウェブサイト<sup>60</sup>より)

個人	n=309
1.1A	80

<sup>58</sup> <http://www.uc.pt/fluc/rcpl2> (2015 年 2 月 11 日閲覧)

<sup>59</sup> <http://www.uc.pt/uid/celga> (2015 年 2 月 11 日閲覧)

<sup>60</sup> <http://www.uc.pt/fluc/rcpl2/dados/> (2015 年 2 月 11 日閲覧)

6.1B	111
33.1J	118
社会	n=79
50.2L	40
52.2L	29
55.2M	10
環境問題	n=121
69.3Q	57
75.3S	4
77.3T	60

被験者は 2009 年から 2010 年までにコimbra大学の外国人向けポルトガル語コース (Curso Anual da Língua Portuguesa para Estrangeiros) で学んだ、39 の異なる母語の 391 名からなる(表 33)。年齢層は 16 歳から 68 歳までと広く、本業も大学生に限られない<sup>61</sup>。

表 33 Corpus de PEAPL2 の被験者の母語話者別の内訳

被験者の母語	被験者数	被験者の母語	被験者数
ドイツ語	81	フランス語	28
ドイツ語・スペイン語	1	フランス語・ポルトガル語	1
ドイツ語・フランス語	1	ガリシア語	9
ドイツ語・トルコ語	2	ギリシア語	5
アラビア語	1	ヒンディー語	1
バウレ語 <sup>62</sup>	1	ヒンディー語・スィンディー語	2
バスク語	1	ハンガリー語	3
バスク語・スペイン語	2	英語	57
ブルガリア語	5	英語・ポルトガル語	1
カタルーニャ語	4	イタリア語	77
カタルーニャ語 (バレンシア語)	1	日本語	12
チェコ語	22	ラトヴィア語	2
チェコ語・スロヴァキア語	1	リトアニア語	5

<sup>61</sup> なお、筆者も被験者の一人である。筆者が参加したデータ収集時は辞書の使用が認められていた。

<sup>62</sup> コートジボワールに分布するアカン語族言語。

中国語	30	オランダ語	18
中国語（広東語）	9	ポーランド語	27
中国語（普通語）	3	ルーマニア語	15
朝鮮語	9	ロシア語	11
クロアチア語	1	スウェーデン語	2
デンマーク語	1	タガログ語	1
スロヴァキア語	5	タイ語	1
スロヴェニア語	2	テトゥン語	1
スペイン語	55	トルコ語	9
スペイン語・カタルーニャ語	4	ウクライナ語	5
スペイン語・ガリシア語	3	ウクライナ語・ロシア語	1
ペルシア語	4	チェコ語・スロヴァキア語	1
フィンランド語	2		

データ収集の結果、総語数 119381 語に及ぶ 546 の作文データが得られた (表 34)。サブデータあたりの平均語数は約 220 語となっており、PLE よりも大きい。学習者の習熟度別のサブデータの内訳は、CEFR の A1 レベルが 111、A2 レベルが 117、B1 レベルが 251、B2 レベルが 43、C1 レベルが 24 となっている。

表 34 Corpus de PEAPL2 の被験者の習熟度別の内訳

CEFR 習熟度	データ数
A1/A1+	111
A2 /A2+	117
B1	251
B2	43
C1	24

コーパスデータ並びにインフォーマントの詳細は CELGA のサイトからダウンロードが可能である。



### 6.1.3. 書き言葉データのまとめ

各話し言葉データの概要を表 35 にまとめる。

表 35 PLE と PEAPL2 の比較

	PLE	PEALP2
収集方法	自由作文	自由作文
総語数	70,500	120,000
サブコーパス数	471	546
被験者の学習環境	被験者の所属大学 (SH)	コインブラ大学 (SA)
日本語母語話者総語数	n/a	
日本語母語話者サブコーパス数	n/a	12

1) 公式サイトによる発表  
2) 筆者による AntConc を用いた手作業での集計

Corpus do PLE は外国語学習環境 (study at home: SH) における、PEAPL2 は第二言語学習環境 (study abroad: SA) におけるポルトガル語学習者の作文である。そのため、両コーパスデータの統合、及び分析結果の比較を行う際は慎重にならなければならない。

なお、日本語母語話者のデータは PEAPL2 のみに 12 例確認できる。PLE にも日本語母語話者のデータがひとつあるが、ポルトガル語との二重母語話者である。日本語母語話者の習得研究を行う場合は PLE 及び、PEALP2 の日本人以外のデータを統制群データとして用いることができる。

## 6.2. データ分析

### 6.2.1. 品詞タグ付与

PLE と PEAPL2 はいずれも各語彙の品詞情報タグが付与されていない<sup>63</sup>。そのため、膨大なデータの中から特定の形態素を検索するためには語彙ごとの品詞情報 (*POS: Part-of-Speech*) タグづけを行う必要がある。ポルトガル語に対応している品詞タグづけソ

<sup>63</sup> このようなプレーンテキスト状態のデータを「コーパス」と呼ぶべきではないとする意見もある (McEnery et al. 2006)。

フトのうち、強力かつ無償で利用できるものに **TreeTagger**<sup>64</sup>と **FreeLang**、**LX-Tagger**がある。本研究では **TreeTagger** を採用する。

### 6.2.2. コンコーダンサー: AntConc

PLE、PEAPL2 の両コーパスはローカルデータのみが公開されており、ウェブページ上での分析ツール (コンコーダンサー) によるサービスを有していない。そのため、コーパスデータを分析するにはデータに適したコンコーダンサーを別途用意する必要がある。本研究では無償で、多彩な機能を備えたコンコーダンサーである **AntConc (ver.3.2.4w)** を用いる。

### 6.2.3. データ解析の手順

**AntConc** に **TreeTagger** でタグ付けした PLE と PEAPL2 のデータをインポートし、それぞれ分析する。データ全体、習熟度別サブコーパスの複数に分けてデータを分析する。

接続法と、未来・過去未来のそれぞれの形態素の検索には正規表現を用いる。**TreeTagger** によってタグ付けされた語彙は「(産出形態素)(品詞タグ)(見出し語)」の順に変換されるため、接続法形態については接続法動詞の品詞タグの **VMS** を検索して全産出形態素を検索する。一方、直説法未来と過去未来についてはすべて直説法動詞の品詞タグ **VMI** が付与されるため、活用語尾を検索する。

検索の際、検索語彙の前後 250 語までを表示させるように設定し、可能な限り文脈情報を確認できるようにする。**KWIC** リストとして得られた結果は、テキストファイルとしてダウンロードされ、**Microsoft Excel®**を用いて一例ずつ目視によって接続法が産出された文脈が簡易的にコードされる。また、タグ付けエラーによって拾い上げられた他の品詞など、

---

<sup>64</sup> <http://www.ims.uni-stuttgart.de/projekte/complex/TreeTagger/>

なお、**TreeTagger** によるポルトガル語の解析には別途、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学の **Pablo Gamallo** 教授が開発したタグセットパラメーターファイルをインストールする必要がある。2015 年現在どうファイルは **UNIX/Linux OS** のみに対応している。

余計な産出データは削除される。データの選別に当たっては以下の点を基準とした。

- 1) 規則動詞の接続法未来と形式が共通している（人称）不定詞が接続法としてタグ付けされてしまっている場合、明らかに不定詞として使用されている例を除外する。
- 2) 文脈的に明らかな誤用であっても接続法形式を産出してあれば産出例（誤用例）として残す。
- 3) 他の品詞タグが割り当てられてしまっていると考えられる、「隠れた」接続法産出については扱わないこととする。

本研究ではコーパス分析によって学習者の言語使用を分析、観察する。関心と対象となる言語産出は、形態素に付与された品詞タグを元に検索する。そのため、要求表現 (*obligatory context*) において適切な動詞形態素が用いられなかった例や、3)のように品詞タグ付けミス等により検出されなかった例を検証することができない。本研究でも誤用分析を行うが、要求表現において産出されなかったエラーは扱わず、非要求表現で産出されてしまった過剰使用エラーを検証する。

#### 6.2.4. データのコーディング

AntConc によって検索されたデータには例文番号とサブコーパス名が付与される。サブコーパス名には PLE では大学名と習熟度、選択課題が、PEAPL2 には母語と習熟度、選択課題がそれぞれコードされている。また、PLE は全ユーザーの国籍、母語、生年月日、専攻などがまとめられたリストが公開されている。これらを元に、KWIC リストのテキストファイルより Excel®を用いて「形態素」、「時制」、「エラー」、「文脈コード」、「母語」、「習熟度」、「タスク」を集計し、例文番号、文脈、サブコーパス名に加えてコードしていく(図 19)。

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K		
1	例文	形態素	文脈	時制	エラー	文脈コード	文脈コード2	被験者国	被験者母語	被験者習熟タスク	被験者	
2	2	corram	desejs são que corram bem	現在		desejar que	願望表現	スペイン	スペイン語	A1-A2	1.1 A	AL
3	3	tenham	desejs são que tenham	現在		desejar que	願望表現	スペイン	スペイン語	A1-A2	1.1 A	AL
4	5	tenha	antes de que tenha	現在	es	antes que	時間表現	アイルランド	英語	A1-A2	1.1 A	AL
5	11	termine	quando termine	現在	el	quando	時間表現	スペイン	スペイン語	A1-A2	1.1 A	AL
6	13	gostar	o que gostar	未来		関係詞	一般関係詞	イタリア	イタリア語	A1-A2	1.1 A	AL
7	15	possa	é muito difícil que possa	現在		é difícil	真偽判断評価表現	スペイン	スペイン語	B1-B2	1.1 A	AL
8	18	tivesse	se tivesse mais horas	過去		反実仮想se	反実仮想	ロシア	ロシア語	B1-B2	59.2M	AL
9	30	viva	não acho que viva	現在		não achar que	疑念表現	スペイン	スペイン語	B1-B2	70.3Q	AL
10	32	viajar	se viajar com o avião	未来		条件se	条件表現	ドイツ	ドイツ語	A1-A2	25.1 H	AU
11	34	divirtam	quero divertam	現在	es	quero	願望表現	ドイツ	ドイツ語	A1-A2	25.1 H	AU
12	35	cantem	eles cantem	現在	ec	主節	主節	ドイツ	ドイツ語	A1-A2	25.1 H	AU
13	37	possa	tenho confiança que eu possa	現在		confiança que	真偽判断評価表現	ルーマニア	ルーマニア語	A1-A2	1.1 A	BU
14	40	mandassem	até os professores mandassem	過去	es	até que	時間表現	ルーマニア	ルーマニア語	A1-A2	6.1 B	BU
15	41	cumpras	espero que cumpras	現在		esperar que	願望表現	ルーマニア	ルーマニア語	A1-A2	6.1 B	BU
16	42	venhas	espero que venhas visitar	現在		esperar que	願望表現	ルーマニア	ルーマニア語	A1-A2	6.1 B	BU
17	43	esteja	espero que esteja	現在		esperar que	願望表現	ルーマニア	ルーマニア語	A1-A2	6.1 B	BU
18	45	seja	desejo muito que seja	現在		desejar que	願望表現	ルーマニア	ルーマニア語	A1-A2	1.1 A	BU
19	46	estivesse	sinto como se estivesse	過去		como se	反実仮想	ルーマニア	ルーマニア語	B1-B2	7.1 B	BU
20	47	tiver	apesar de tiver	未来	es	apesar que	譲歩表現	ルーマニア	ルーマニア語	B1-B2	7.1 B	BU
21	48	possa	acho que possa	現在	?	achar que	陳述表現	ルーマニア	ルーマニア語	B1-B2	10.1 C	BU
22	49	pudesse	se pudesse	過去		反実仮想se	反実仮想	ルーマニア	ルーマニア語	B1-B2	70.3Q	BU
23	50			現在			仮定想像表現	ルーマニア	ルーマニア語	B1-B2	70.3Q	BU

図 19 コーディング実例

「形態素」のコードは検索語彙からなる。「時制」は「現在」、「未来」、「過去」からなり、「ter + 過去分詞」の aspekto は考慮されていない。「エラー」については、時制形態の選択の誤りには「el」、文構造的欠陥がある場合は「es」、接続法が用いられるべきではない文脈的な誤用に「ec」と付与した。

「文脈コード」は Bento (2013) の 27 のコードを参考に分類した (表 36)。意味と統語の両面から分類している同研究に対し、本論では極力統語的側面を排した、類似した意味文脈のものをひとつに統合するような分類を試みている。さらにその上で「当為判断のモダリティ」、「真偽判断のモダリティ」、「不定表現」、「その他の表現」、「定型表現」、「非接続法表現」に大別した。ただし、[4]目的表現や[11]時間表現、[12]条件表現、[13]反実仮想表現 (副詞節) や各関係詞節表現 ([19]、[20]、[26]) など、文脈と構造が不可分な表現もある。

表 36 本研究と Bento (2013) の文脈コードの比較

本研究	Bento (2013)
当為判断のモダリティ	[1] 願望の動詞補語節

[1] 願望・希求表現	[2] 名詞補語節
[2] 許可表現	[3] 形容詞補語節
[3] 命令・使役表現	[4] 自動詞補語節
[4] 目的表現	[5] 使役動詞補語節
[5] 当為評価表現	[6] <b>Factive</b> 感情動詞の補語節
[6] 心配表現	[7] 否定の動詞の補語節
<hr/>	
真偽判断のモダリティ	[8] 時間の副詞節
[7] 可能性表現	[9] 条件の副詞節
[8] 疑念表現	[10] 目的の副詞節
[9] 否定表現	[11] 譲歩の副詞節
[10] 仮定想像表現	[12] 比較条件の副詞節 ( <i>como se</i> )
[11] 時間表現	[13] 順応の副詞節 ( <i>conforme</i> )
[12] 条件表現	[14] 原因理由の副詞節
[13] 反実仮想表現	[15] 制限関係詞節
[14] 陳述表現	[16] 非制限関係詞節
[15] 真偽判断評価表現	[17] 主節
<hr/>	
その他	[18] 希求
[16] <b>factive</b> 感情表現	[19] 対照
[17] 譲歩表現	[20] 法助動詞への補語
[18] 様態表現	[21] 単文での使用 ( <i>talvez / oxalá</i> )
<hr/>	
不定表現	[22] 願望 <i>quem me dera</i>
[19] 非指示関係詞	[23] 陳述の動詞の補語節
[20] 一般関係詞	[24] 真偽判断の動詞の補語節
<hr/>	
定型表現	[25] 許可の動詞の補語節
[21] <i>ou seja</i>	[26] 感情の動詞の補語節
[22] 列挙	[27] 定型表現
[23] <i>quer queiramos quer</i>	
<hr/>	
非接続法表現	
[24] 主節	
[25] 指示関係詞	
[26] 不定詞	
[27] 理由	
[28] 比較表現	
[29] 結果表現	
[30] <i>quer dizer que</i>	

以下、本研究での分類を説明していく。

[1]願望・希求表現は主に *esperar que* (hope)、*querer que* (want) の補語節内や、*oxalá (que)* (I wish) で導入される希求表現からなる。

[2]許可表現は *permitir que* (permit)、*deixar que* (let) などの動詞の補語節で用いられる接続法表現からなる。

[3]命令・使役表現は *mandar que* (order that)、*dizer que* (say that)、*recomendar que* (recommend that)、*fazer (com) que* (make) など強制や使役の動詞の補語となる表現と、命令法<sup>65</sup>表現からなる。

[4]目的表現は *para que* や *de modo que* (in order that) で導入される副詞節表現からなる。

[5]当為判断評価表現は *é desejável que* (it is desirable that) や *é obrigatório que* (it is obligatory that) といった、当為判断の内容の tough 構文的な評価表現からなる。

[6]心配表現は *recear que* や *temer que* (fear that) といった動詞の補語や、*receio*、*medo* (fear) といった名詞の補語節表現からなる。先行研究では感情表現に含まれることが多いが、命題を好ましくないとする態度、すなわち願望の否定であると判断し、当為判断として分類した (cf. Palmer 2001)。

[7]可能性表現は *talvez* (maybe) で導入され、主節で接続法が使用される推測表現、*poder*

---

<sup>65</sup> 肯定命令の 2 人称以外は接続法と共通の形態素。研究によっては接続法の用例のひとつに分類しているものもある。

*que* (be able that) の補語表現などからなる。

[8]疑念表現は *duvidar que* (doubt)、*suspeitar que* (suspect) などの疑いの動詞の補語節や、*é duvidável que* (it is doubtful that) で導入される疑いの評価表現からなる。

[9]否定表現は *negar que* (deny) など否定の陳述動詞の補語節、*não é que* (it is not that) で導入される否定の陳述表現や評価表現、及び *não porque* (not because) で導入される否定の理由の表現からなる。

[10]仮定想像表現は *imaginar que* (imagine that) や *supor que* (suppose that) 仮定や想像の動詞の補語節からなる。

[11]時間表現は *quando* (when) や *depois que* (after)、*antes que* (before) *até que* (until) などで導入される副詞節表現からなる。

[12]条件表現は *se* (if)、*caso* (in case) などで導入される副詞節表現である。副詞節内の動詞は *se* で導入される場合は接続法未来が用いられ、その他の場合は接続法現在が用いられる。また、同表現では習慣的動作や状態を意味する場合は従属節内の動詞に直説法現在が用いられることもあるが、接続法が使用される場合は条件内容の実現性の判断が保留されていることを示す。

[13]反実仮想表現は *se* (if) または *como se* (as if) で導入され、接続法過去、または過去完了によって表現される、実現が見込めない、あるいは現実とは異なる条件内容の副詞節表現である。

[14]陳述表現は *achar que* (think that)、*crer que* (think that) などの動詞補語表現からなる。直説法表現を許容する表現や、接続法を用いることができない表現も含む。

[15]真偽判断評価表現は *é provável que* (it is probable that) や *é possível que* (it is possible that) などによって導入される命題の真偽判断に関する評価表現からなる。

[16]factive 感情表現は、*lamentar que* (mourn, be sorry) などの動詞の補語表現、*é lamentável que* (it is sorry that) などの評価表現からなる。

[17]譲歩表現は *embora* や *mesmo que*、*ainda que* (although, even if) によって導入される副詞節表現からなる。節内では意味的に現実的な内容であっても接続法現在が要求される。

[18]様態表現は *como* (as) や *segundo*、*conforme* (according to)によって導入される副詞節表現で、節内では接続法未来が要求される。

[19]非指示関係詞は不定冠詞を伴うなど非指示的關係詞を修飾する關係詞節、[20]一般關係詞は定冠詞を伴うが指示的でない先行詞や、無冠詞先行詞、非語彙先行詞などを修飾して一般的集団について言及する關係詞節表現である。

定型表現や非接続法表現は分析して出現したものをタグ付けした。

[21]*ou seja*は *ser*の接続法現在 *seja* を用いているがモダリティ表現ではなく、「すなわち」



の意の言い換え表現として機能する接続表現である。

[22] 列挙表現は *seja A (ou) seja B* のなど、*ser* の接続法現在 *seja* を用いた接続表現であり、モダリティ表現ではない。

[23] *quer queiramos quer não* は「求めようと求めまいと」を意味する譲歩の定型表現である。

非接続法表現はすべて、規範的には直説法形式、または不定詞が用いられるべき表現であり、すべてにエラータグを同時に付与している。

[24] 主節は規範的には接続法が現われない、いわゆる主節動詞での接続法使用である。

[25] 指示関係詞は先行詞が文脈的に特定の直説法を用いて修飾するべき関係詞節表現での接続法使用である。

[26] 不定詞は文中の主語や前置詞に続いて名詞として機能すべき動詞が不定詞ではなく接続法形式になっている事例である。

[27] 理由は *porque* (because) に続く理由の副詞節内で接続法が用いられている例で、本来は直説法が用いられるべき文脈である。

[28] 比較表現は *mais ... do que* (more ... than) の *do que* 以下の比較対象を示す内容で接続法が用いられる例で、本来は直説法が用いられるべき文脈である。

[29]結果表現としているのは、接続詞句 *de modo que* で導入される副詞節で、従属節内の動詞が直説法となることで、「結果～である」(so that) として機能する。なお、同表現で従属節内の動詞が接続法の場合は *para que* と同様の目的表現 (in order that) となる。

[30]*quer dizer que* (that is to say) も *ou seja* と同様、「すなわち」の意の接続表現である。形式的には動詞 *querer* (want) の動詞補語節を用いた願望表現のようであるがモダリティ表現ではなく、後続する内容の動詞はモダリティの文脈にならない限り直説法となるべきである。

「習熟度」のコードはコーパスによって異なり、PLE では「A1-A2」、「B1-B2」、「C1-C2」の3段階、PEAPL2 では「A1」、「A2」、「B1」、「B2」、「C1」の5段階でコードされる。

まとめられたデータを元に量的分析を進め、図表化していく。また、文脈とエラーについてはコーパスの当該個所を個別に確認する質的な分析を行い、具体的な産出像に迫る。

### 6.3. まとめ

本章では接続法習得を分析、考察していくための情報源となるコーパスデータ、分析するための品詞タグ付けソフトとコンコーダンサー、そして分析結果のコーディング方法を示した。次章では分析結果を詳細に記述していく。

## 第7章 分析結果

### 7. 分析結果

本章では、Corpora do PLE と Corpus de PEAPL2 の両コーパスを分析した結果得られた学習者による接続法使用を提示する。

#### 7.1. 接続法産出概観

##### 7.1.1. Corpora do PLE

まず本節では PLE での接続法産出の概要を見ていく。PLE では全体で 471 名の被験者中 141 のユーザーから、269 の接続法形式が産出された<sup>66</sup>。まずは母語話者別の接続法産出を見ていく (表 37)。なお、PLE では被験者の詳細な社会的背景のリストが公開されており、国籍と母語の両方が記録されており、参考のため国籍別分類も提示するが、本研究では母語別分類に基づいて分析していく。

表 37 Corpora do PLE より被験者の母語別接続法産出

母語	産出	産出被験者数	総被験者数	産出被験者一人あたりの産出数	総被験者一人あたりの産出数	総被験者に占める被験者の割合
ドイツ語	13	10	41	1.30	0.32	24%
ブルガリア語	6	4	7	1.50	0.86	57%
カタルーニャ語	1	1	2	1.00	0.50	50%
チェコ語	1	1	2	1.00	0.50	50%
朝鮮語	16	11	59	1.45	0.27	19%
クロアチア語	1	1	3	1.00	0.33	33%
スロヴァキア語	1	1	1	1.00	1.00	100%
スペイン語	19	14	82	1.36	0.23	17%
スペイン語/イタリア語	1	1	1	1.00	1.00	100%
フランス語	1	1	7	1.00	0.14	14%

<sup>66</sup> 得られたデータより集計。なお、PLE の公式サイト上 (<http://www.clul.ul.pt/pt/recursos/314-corpora-of-ple>) で公開されている集計値とは若干異なる。

ヒンディー語	2	1	4	2.00	0.50	25%
英語	32	16	37	2.00	0.86	43%
イタリア語	70	30	108	2.33	0.65	28%
コンカニ語	6	4	12	1.50	0.50	33%
コンカニ語/英語	1	1	1	1.00	1.00	100%
N/R	2	1	2	2.00	1.00	50%
ポーランド語	37	14	21	2.64	1.76	67%
ポルトガル語	14	8	13	1.75	1.08	62%
ポルトガル語/ フランス語	2	1	1	2.00	2.00	100%
ルーマニア語	42	19	52	2.21	0.81	37%
ロシア語	1	1	5	1.00	0.20	20%
アパチェ語			1			
ブルガリア語/トルコ語			1			
フランス語/ ポルトガル語			1			
日本語/ポルトガル語			1			
フランス語手話			1			
ルクセンブルク語			1			
ルワンダ語			1			
セルビア語			2			
スウェーデン語			1			
全体	269	141	471	1.91	0.57	30%

純粋に産出が多くなっているのはイタリア語、ルーマニア語、ポーランド語、英語、スペイン語、朝鮮語、ポルトガル語、ドイツ語の順に、相対的に総被験者数の多い母語話者グループとなっている。

3名以上の接続法産出被験者がいる母語話者集団を見ると、英語、イタリア語、ポーランド語、ルーマニア語母語話者に産出被験者一人あたり2回以上と、全体平均1.91よりも多い接続法産出が見られ、特に多く産出されていると言える。また、平均には及ばないものの、ブルガリア語、コンカニ語、ポルトガル語母語話者学習者も一人あたり1.5回以上産出している。母語話者全体における接続法産出割合を見ると、ブルガリア語、英語、イタリ

ア語、ポーランド語、ポルトガル語、ルーマニア語母語話者が全体平均 0.57 よりも多く産出している。特にポーランド語母語話者学習者は 1.81 と非常に多い。同様に、全被験者中の産出被験者の割合は、ドイツ語や朝鮮語、スペイン語、イタリア語で 20%台以下と落ち込む一方、英語とルーマニア語では約 40%と高く、ブルガリア語では 57%、ポーランド語に至っては 67%と非常に高い。以上より、ドイツ語や朝鮮語、スペイン語、イタリア語母語話者集団では一部の学習者に接続法産出が集中している一方、ブルガリア語、英語、ポーランド語、ポルトガル語、ルーマニア語母語話者集団では広く接続法が産出されていることがわかる。

次に習熟度別産出被験者のリストを提示する。

表 38 Corpora de PLE より、被験者の習熟度別接続法産出

習熟度	産出	産出被験者数	総被験者数	総語数 <sup>67</sup>	産出被験者一人あたりの産出数	総被験者一人あたりの産出数	総被験者に占める被験者の割合	直前レベルとの検定統計量 $\chi$
A1-A2	74	48	236	32872	1.54	0.31	20%	-
B1-B2	128	62	163	31568	2.06	0.79	38%	16.19***
C1-C2	67	31	72	12855	2.16	0.93	43%	2.54
全体	269	141	471	77295	1.91	0.57	30%	

\*\*\*: 有意水準 0.1%で有意差あり

PLE では CEFR の A1 と A2、B1 と B2、C1 と C2 がそれぞれまとめてコーディングされているため、表でもこれに習って 3 段階の習熟度別学習者集団で扱うこととする。接続法産出を見ると、初級の A1-A2 レベルでも 74 例と、ある程度の産出が見られる。すなわち、各先行研究では「中級学習者」や「上級学習者」を対象として接続法習得を考察しているが、CEFR による学習者区分では A レベルの初級学習者でも接続法を産出できることがわかる。ただし、各習熟度サブコーパスの総語数を用いて、A1-A2 と B1-B2、B1-B2 と

<sup>67</sup> AntConc による集計。合計は公式サイト発表と異なる。

C1-C2の間でそれぞれカイ二乗検定<sup>68</sup>を行った結果、初級と中級の間には有意差 ( $p < 0.001$ )が見られたため、中級から急激に接続法産出が増え、上級で落ち着いていることが示されている。その他の数値を見ると、産出した被験者一人当たりの接続法産出数、各習熟度の総被験者一人当たりの産出、各習熟度の総被験者に占める産出被験者数の割合のそれぞれが、習熟度が高くなるにつれ緩やかに高くなっている。

最後にタスクバイアスを検討する。PLE はテーマ別の自由作文によってデータ収集を行っているが、接続法の産出に作文のテーマが影響している可能性も考えられる。以下にサブコーパスをタスク別に分類し、各サブコーパスにおける接続法産出数、接続法産出者数、総被験者数、接続法産出者一人あたりの接続法産出数、全体被験者一人あたりの接続法産出数、全体被験者に占める接続法産出者の割合を下表 39 にまとめる。

表 39 Corpora do PLE より、作文のテーマ別の接続法産出

タスク	産出	産出被験者数	総被験者数	産出被験者一人当たりの産出数	総被験者一人あたりの産出数	総被験者に占める被験者の割合
1.1A	38	19	141	2.00	0.27	13%
3.1A	9	2	4	4.50	2.25	50%
4.1A	3	2	5	1.50	0.60	40%
5.1B	10	2	11	5.00	0.91	18%
6.1B	12	4	15	3.00	0.80	27%
7.1B	15	8	14	1.88	1.07	57%
8.1B	7	5	11	1.40	0.64	45%
10.1C	4	3	10	1.33	0.40	30%
15.1D	2	2	3	1.00	0.67	67%
18.1F	0	0	1	0.00	0.00	0%
22.1G	14	6	7	2.33	2.00	86%
24.1H	13	9	22	1.44	0.59	41%
25.1H	3	3	16	1.00	0.19	19%

<sup>68</sup> 検定には石川, 前田 & 山崎 (2010) に付属のマクロファイルを使用している。

26.1H	1	1	7	1.00	0.14	14%
31.1I	0	0	5	0.00	0.00	0%
34.1J	1	1	10	1.00	0.10	10%
35.1J	2	2	5	1.00	0.40	40%
37.1J	8	3	10	2.67	0.80	30%
39.1J	15	6	6	2.50	2.50	100%
44.2L	5	3	3	1.67	1.67	100%
45.2L	27	12	24	2.25	1.13	50%
48.2L	3	2	7	1.50	0.43	29%
50.2L	9	6	11	1.50	0.82	55%
52.2L	1	1	1	1.00	1.00	100%
53.2L	0	0	2	0.00	0.00	0%
54.2L	0	0	2	0.00	0.00	0%
55.2M	5	5	19	1.00	0.26	26%
57.2M	1	1	1	1.00	1.00	100%
59.2M	1	1	5	1.00	0.20	20%
60.2M	1	1	5	1.00	0.20	20%
65.2O	5	2	2	2.50	2.50	100%
66.2O	16	3	4	5.33	4.00	75%
67.2P	1	1	3	1.00	0.33	33%
69.3Q	9	5	9	1.80	1.00	56%
70.3Q	9	6	18	1.50	0.50	33%
71.3Q	1	1	3	1.00	0.33	33%
73.3R	5	4	17	1.25	0.29	24%
74.3R	1	1	3	1.00	0.33	33%
75.3S	2	2	5	1.00	0.40	40%
78.3T	0	0	4	0.00	0.00	0%
80.3U	6	4	11	1.50	0.55	36%
83.3V	4	2	9	2.00	0.44	22%
全体	269	141	471	1.91	0.57	30%

18.1F、31.1I、53.2L、54.2L、78.3T の 5 つのサブコーパスを除いて、全体にわたって接続法が産出されていることが分かる。総被験者数が 10 以上のサブコーパスを見ると、概ね総被験者数の 25%から 55%が接続法を産出している。この中から、総被験者数が 10 以

上のサブコーパス群に、PEAPL2でも作文テーマとして採用されている69.3Qと75.3Sを含めて重回帰分析を行った<sup>69</sup>結果、接続法産出者数が接続法産出を有意に説明するという結果 ( $R^2=.89$ ) が得られたが、残差の検討により1.1Aと5.1Bが外れ値である可能性が判定され、両サブコーパスに作文のテーマによるバイアスが生じている可能性があることが示唆されている(付録2)<sup>70</sup>。1.1A、5.1Bともに接続法産出者が全体の10%と少ないながら、一人あたりの産出が大きくなっており、テーマよりも学習者の個人能力の影響が高くなっていることが考えられる。ただし、これらの外れ値を排除することはせず、貴重な接続法産出例として分析の対象としていく。逆にテーマによって総被験者数に占める接続法産出被験者数が多くなっているのが7.1B、50.2Lと69.3Qであるが、こちらは重回帰分析の残差検討では統計的な有意性は見られなかった。

### 7.1.2. Corpus de PEAPL2

続いて本節ではPEAPL2を分析した結果を表40に提示する。PEAPL2では総被験者546名のうち247のユーザーが553例の接続法を産出している。

表 40 Corpus de PEAPL2 より、被験者の母語別接続法産出

母語	産出	産出被験者数	総被験者数	産出被験者一人当たりの産出数	総被験者一人あたりの産出数	総被験者に占める被験者の割合
ドイツ語	93	40	81	2.33	1.15	49%
ドイツ語/ スペイン語	3	2	2	1.50	1.50	100%
ドイツ語/ フランス語	2	1	1	2.00	2.00	100%
ブルガリア語	7	3	5	2.33	1.40	60%
バウレ語	2	1	1	2.00	2.00	100%
バスク語	1	1	1	1.00	1.00	100%

<sup>69</sup> 石川 et al. (2010) に付属の Microsoft Excel 用アドイン、「多変量解析システム Seagull-Stat2010年版」を用いた。Seagull-Statについては同著及び開発者の早狩進氏のウェブサイト (<http://www7b.biglobe.ne.jp/~hayakari/>; 2014年9月5日閲覧) を参照されたい

<sup>70</sup> 1.1A:  $H_{ii}=0.63$



バスク語/ スペイン語	1	1	2	1.00	0.50	50%
カタルーニャ語	2	2	5	1.00	0.40	40%
チェコ語	20	10	22	2.00	0.91	45%
中国語	27	11	33	2.45	0.82	33%
中国語 (広東語)	19	5	9	3.80	2.11	56%
朝鮮語	6	2	9	3.00	0.67	22%
クロアチア語	1	1	1	1.00	1.00	100%
スロヴァキア語	4	3	5	1.33	0.80	60%
スロヴェニア語	1	1	2	1.00	0.50	50%
スペイン語	45	28	55	1.61	0.82	51%
スペイン語/ カタルーニャ語	4	3	4	1.33	1.00	75%
スペイン語/ ガリシア語	5	2	3	2.50	1.67	67%
フィンランド語	4	2	2	2.00	2.00	100%
フランス語	24	13	28	1.85	0.86	46%
フランス語/ ポルトガル語	2	1	1	2.00	2.00	100%
ガリシア語	13	6	9	2.17	1.44	67%
ギリシア語	10	3	5	3.33	2.00	60%
ヒンディー語	2	1	1	2.00	2.00	100%
ヒンディー語/ スインディー語	1	1	2	1.00	0.50	50%
英語	138	40	57	3.45	2.42	70%
イタリア語	40	24	77	1.67	0.52	31%
日本語	18	10	12	1.80	1.50	83%
リトアニア語	2	1	5	2.00	0.40	20%
オランダ語	19	6	18	3.17	1.06	33%
ポーランド語	18	10	27	1.80	0.67	37%
ルーマニア語	1	1	15	1.00	0.07	7%
ロシア語	11	5	11	2.20	1.00	45%
スウェーデン語	2	1	2	2.00	1.00	50%
トルコ語	4	4	9	1.00	0.44	44%
ウクライナ語	1	1	5	1.00	0.20	20%
アラビア語			1			
デンマーク語			1			

ペルシア語			4			
ハンガリー語			3			
ラトヴィア語			2			
タガログ語			1			
タイ語			1			
テトウン語			1			
チェコ語/ スロヴァキア語			1			
ドイツ語/トルコ語			2			
英語/ポルトガル語			1			
ウクライナ語/ ロシア語			1			
全体	553	247	546	2.24	1.01	45%

PEAPL2でも英語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、中国語、フランス語、オランダ語、ポーランド語と、被験者の多い母語話者集団で産出が大きくなっている。産出被験者数が3名以上いる集団を見ると、ドイツ語、ブルガリア語、中国語、広東語、ギリシア語、英語、オランダ語で一人あたりの産出が全体平均2.24を上回っている。特にギリシア語、広東語、英語、オランダ語は一人あたりの産出が3を上回っており、接続法は英語母語話者にとって難しいとされる Collentine (1995) や Perini (2004) などの主張に、相対的に反するような結果となっている。また、チェコ語やガリシア語、ロシア語も全体平均に届かないものの、産出被験者一人当たり2例以上の接続法を産出している。これに対し、スペイン語、フランス語、イタリア語のロマンス諸語やポーランド語ではやや低くなっている。

母語話者集団全体における一人あたり接続法産出を見ると、ドイツ語、ブルガリア語、広東語、ガリシア語、ギリシア語、英語、日本語、オランダ母語話者が全体平均1.01を超えており、特に広東語、ギリシア語と英語母語話者が一人あたり2以上と高い水準の産出を保持している。一方、イタリア語とトルコ語母語話者のすべての被験者から一人あたり

の産出は 0.5 台以下となっている。

母語話者全体に占める接続法産出被験者の割合は日本語母語話者が 83%と高くなっている。これに次いで英語 (70%)、ガリシア語 (67%)、ブルガリア語 (60%)、スロヴァキア語 (60%)、スペイン語 (60%)、ギリシア語 (60%) と続いて全体平均 45%より高くなっている。一方で、産出被験者一人あたりの産出数が多かったものの、被験者全体に占める産出被験者の割合が 50%以下となっているのは中国語 (33%)、オランダ語 (33%) 母語話者である。同じく産出被験者あたりの産出の多いチェコ語やロシア語は平均的 (45%) である。

以上より、広東語、英語、ガリシア語などでは広く接続法が産出されている一方、中国語、オランダ語などでは一部の被験者に産出が偏っている。

次に習熟度別産出被験者リストを下表 41 に提示する。

表 41 Corpus de PEAPL2 より、被験者の習熟度別の接続法産出

習熟度	産出	産出被験者数	総被験者数	総語数 <sup>71</sup>	産出被験者一人当たりの産出数	総被験者一人あたりの産出数	総被験者に占める被験者の割合	直前レベルとの検定統計量 $\chi$
A1	9	6	111	15452	1.50	0.08	5%	—
A2	28	21	117	20478	1.33	0.24	15%	4.54*
B1	406	168	251	67015	2.42	1.62	67%	68.98***
B2	64	32	43	11474	2.00	1.49	74%	0.30
C1	46	20	24	6622	2.30	1.92	83%	1.09
全体	553	247	546	12041	2.24	1.01	45%	

\*\*\*: 有意水準 0.1%で有意差あり

\*: 有意水準 5%で有意差あり

習熟度別の産出を見比べると、PEAPL2 のデータも概ね習熟度が上がるにつれて接続法産出が多くなっていることが分かる。PLE のデータと比較すると少ないながらも、A1 レベルで既に接続法の産出が見られることが特徴的である。ただし、習熟度別サブコーパスを

<sup>71</sup> AntConc による集計。合計は公式サイト発表と異なる。

用いてカイ二乗検定をすると、A1 と A2 の間 ( $p < 0.05$ ) と A2 と B1 の間 ( $p < 0.001$ ) に有意差が見られた。すなわち、A1、A2、B1 で劇的に接続法産出が増え、以降上級まで産出が落ち着いていることが分かる。産出被験者数あたりの産出は A1 が A2 を上回り、B1 レベルにおいて最も多くなっているが、前者については A1 レベルでは産出被験者数が極端に少なさに対する接続法産出の相対的な多さが、後者については B1 レベルの B2、C1 レベルに対する全体被験者数の圧倒的多さが接続法産出に影響しているものと考えられる。被験者全体に占める産出被験者の割合は習熟度と比例していて、B1 レベルから劇的に高くなり、上級にかけてなだらかに増え、C1 レベルでは全体の 84%もの被験者が接続法を産出している。

最後に PEAPL2 のデータについても、作文テーマによるバイアスを検証する。PEAPL2 は PLE とは異なり、作文のテーマが全 9 種類に限定されており、ここでは 9 つのサブコーパスにおける接続法産出数、接続法産出者数、総被験者数、接続法産出者一人あたりの接続法産出数、全体被験者一人あたりの接続法産出数、全体被験者に占める接続法産出者の割合を表 42 にまとめる。

表 42 Corpus de PEAPL2 より、作文のテーマ別の接続法産出

タスク	産出	産出被験者数	総被験者数	産出被験者一人あたりの産出数	総被験者一人あたりの産出数	総被験者に占める被験者の割合
1.1A	15	8	80	1.88	0.19	10%
33.1J	142	58	118	2.45	1.20	49%
50.2L	34	21	40	1.62	0.85	53%
52.2L	36	15	29	2.40	1.24	52%
55.2M	1	1	10	1.00	0.10	10%
6.1B	120	57	111	2.11	1.08	51%
69.3Q	89	42	57	2.12	1.56	74%
75.3S	4	41	4	1.00	0.10	10%
77.3T	112	40	60	2.80	1.87	67%

全体	553	247	546	2.24	1.01	45%
----	-----	-----	-----	------	------	-----

総被験者数の少ない 55.2L と 75.3S を除くと、各サブコーパスとも概ね総被験者の約 50% が接続法を用いている。その中で、1.1A は接続法使用者の割合が 10% と極端に少なく 69.3Q 及び 77.3T は 74%、67% とやや高くなっている。接続法産出数、接続法産出被験者数、総被験者数の重回帰分析の結果、77.3T に外れ値の可能性が見られた（付録 2）。77.3T では接続法産出数とその期待値（推定値）との差である「残差」を標準化した「スチューデント残差」が有意に大きいため、過剰に接続法が産出されている可能性がある。ただし PLE 同様、PEAPL2 でも外れ値の可能性のあるサブコーパスを排除することはしない。

### 7.1.3. 両コーパスの扱いについて

本研究では PLE と PEAPL2 でから得られた接続法産出データを統合せずに、各コーパス別に記述し、考察していく。これは以下の 2 点を根拠とする。

PLE は外国語学習環境（FL 環境、SH 環境）で、PEAPL2 は第二言語習得環境（L2 環境、SA 環境）でそれぞれ収集されたデータである。各先行研究（Terrell et al. 1987, Stokes 1988, Isabelli & Nishida 2005, Corea 2011）では学習環境の差異は接続法の使用や習得に決定的な役割を果たすことを実証、または示唆している。

また、カイ二乗検定を用いて、母語別接続法産出と習熟度別接続法産出を検定することで、それぞれにおける両コーパスの統計的同一性を検証した（下表 43）。

表 43 両コーパス間の母語別接続法産出のカイ二乗検定結果

	PLE			PEAPL2			検定統	検定統
	産出	期待値	総語数	産出	期待値	総語数	計量 $\chi^2$	計量 $G^2$
ドイツ語	13	21.0	4976	11	85.0	20110	3.37	
ブルガリア語	6	6.8	1245	7	6.2	1143	0.02	
カタルーニャ語	1	0.5	188	2	2.5	915	0.00	0.47

チェコ語	1	1.1	290	20	19.9	5411	0.00	0.00
朝鮮語	15	16.0	5013	6	5.0	1575	0.06	
スロヴァキア語	1	0.4	113	4	4.6	1270	0.02	0.64
スペイン語	19	31.9	12355	45	32.1	12414	9.67**	
フランス語	1	3.2	1034	24	21.8	6948	1.08	2.36
ヒンディー語	2	3.3	921	2	0.7	209	0.96	2.03
英語	32	48.7	5820	138	121.3	14501	7.61**	
イタリア語	70	62.3	20413	40	47.7	15637	1.93	
ポーランド語	37	29.1	5307	18	25.9	4736	4.06*	
ルーマニア語	42	44.7	9636	11	8.3	1792	0.69	
ロシア語	1	3.6	986	11	8.4	2265	1.81	3.46

\*\*：有意水準 1%で有意差あり

\*：有意水準 5%で有意差あり

母語別に見ると、絶対的な産出量が多い英語、スペイン語、ポーランド語母語話者の産出に有意差が見られた。また、カタルーニャ語、チェコ語、スロヴァキア語、フランス語、ヒンディー語、ロシア語学習者による産出にはコーパス間で有意差が見られなかったが、両コーパスのうちのいずれかにおける接続法産出が 5 以下であり、カイ二乗検定では有意差が検証できないとされる（石川, 前田 & 山崎 2010）。このため、低頻度分析に向くとされる対数尤度比検定で補足をし、結果、こちらでも有意差は見られなかったが、これでも適切に有意差を検証できているとは言い切れない。

次に習熟度別産出の差異を検証する。

表 44 両コーパス間の習熟度別接続法産出のカイ二乗検定結果

	PLE			PEAPL2			検定統計 量 $\chi^2$
	産出	期待値	総語数	産出	期待値	総語数	
A1-A2	74	53.0	32872	37	58.0	35930	15.15***
B1-B2	128	171.5	31568	470	426.5	78489	15.22***
C1-C2	67	74.6	12855	64	38.4	6622	1.99

\*\*\*：有意水準 0.1%で有意差あり

表 44 を見ると、初級学習者 (A1-A2) による産出は PLE が、中級学習者 (B1-B2) による産出は PEAPL2 が有意に多くなっている。上級学習者による接続法産出は両コーパス間に有意差が確認できない。

以上を受け、本研究では両コーパスから得られた結果を統合せず、別々に接続法産出を考察していく。

## 7.2. 時制別の産出

本節では学習者による接続法の時制形態素の産出を学習習熟度別、母語別に考察する。本節では分類されたデータの粗頻度の小ささから、カイ二乗検定などの統計手法を用いて有意差を求めることは行っていない。

### 7.2.1. Corpora do PLE

まずは PLE のデータから得られた結果を提示する (表 45)。なお、以降では表中では紙幅の関係で接続法未完了過去を「接続法過去」と表記する。

表 45 Corpora do PLE より、被験者の習熟度別接続法各時制の産出

被験者群	接続法現在		接続法未来		接続法過去		合計
	産出数	割合	産出数	割合	産出数	割合	
A1-A2	54	73%	6	8%	14	19%	74
B1-B2	92	72%	19	15%	17	13%	129
C1-C2	46	69%	14	21%	7	10%	67
全体	192	72%	39	14%	38	14%	269

初級の A1-A2 レベルから接続法現在のみならず、未来や過去の産出が見られるのが特徴的である。全習熟度を通して、全接続法形式中で接続法現在の産出が約 70%と圧倒的に多

く、次いで接続法未完了過去、接続法未来が同程度となっている。レベル別に見ると、A1-A2 では接続法現在に次いで接続法過去の産出割合が接続法未来に対し多くなっているが、B1-B2 レベルでは接続法未来の産出が接続法過去をわずかに逆転し、C1-C2 レベルでは接続法未来が接続法過去に対して圧倒的に多くなっている。

続いて、母語別の時制形式の産出を考察する（表 46）。

表 46 Corpora do PLE より、被験者の母語別接続法各時制の産出

母語	接続法現在	接続法未来	接続法過去	合計
ドイツ語	7	3	3	13
ブルガリア語	6	0	0	6
カタルーニャ語	0	0	1	1
チェコ語	1	0	0	1
朝鮮語	6	10	0	16
クロアチア語	1	0	0	1
スロヴァキア語	0	1	0	1
スペイン語	17	1	1	20
スペイン語・イタリア語	0	0	1	1
フランス語	0	0	1	1
ヒンディー語	2	0	0	2
英語	26	2	4	32
イタリア語	52	10	8	70
コンカニ語	4	1	1	6
コンカニ語・英語	1	0	0	1
不明	2	0	0	2
ポーランド語	26	4	7	37
ポルトガル語	10	2	2	14
ポルトガル語・フランス語	1	1	0	2
ルーマニア語	30	4	8	42
ロシア語	0	0	1	1
全体	192	39	38	269

全体の接続法各形式の産出バランス（概ね現在:未来:過去=5:1:1）と比較して、接続法現



在、未来、過去を相対的にバランスよく産出しているのがドイツ語、イタリア語、ポーランド語、ルーマニア語、そしてポルトガル語母語話者である。一方で、スペイン語母語話者は接続法現在に集中した産出を見せており、接続法未来が用いられなくなっている母語からの影響が考えられる。また、朝鮮語母語話者では接続法未来の産出が突出しており、接続法現在の産出を上回っていることも興味深い。

最後に、母語話者集団をさらに習熟度別に分類して、疑似的に習得過程を考察する（表47）。

表 47 Corpora do PLE より、被験者の母語と習熟度別接続法各時制の産出

母語	習熟度	接続法現在	接続法未来	接続法過去	合計
ドイツ語	A1-A2	8	3	2	13
ブルガリア語	B1-B2	6	0	0	6
カタルーニャ語	B1-B2	0	0	1	1
チェコ語	A1-A2	1	0	0	1
朝鮮語	C1-C2	6	10	0	16
クロアチア語	B1-B2	1	0	0	1
スロヴァキア語	B1-B2	0	1	0	1
スペイン語	A1-A2	3	0	0	3
	B1-B2	14	1	1	16
スペイン語・イタリア語	B1-B2	0	0	1	1
フランス語	A1-A2	0	0	1	1
ヒンディー語	B1-B2	2	0	0	2
英語	A1-A2	20	1	4	25
	B1-B2	6	1	0	7
イタリア語	A1-A2	12	1	3	16
	B1-B2	31	9	5	45
	C1-C2	9	0	0	9
コンカニ語	B1-B2	4	1	1	6
コンカニ語・英語	B1-B2	1	0	0	1
不明	B1-B2	2	0	0	2
ポーランド語	A1-A2	3	0	2	5

	C1-C2	23	4	5	32
ポルトガル語	B1-B2	2	2	0	4
	C1-C2	8	0	2	10
ポルトガル語・フランス語	A1-A2	1	1	0	2
ルーマニア語	A1-A2	8	0	0	8
	B1-B2	23	4	7	34
ロシア語	B1-B2	0	0	1	1
<b>全体</b>		<b>169</b>	<b>39</b>	<b>36</b>	<b>269</b>

初級（A1-A2）レベルから接続法産出が見られるのはドイツ語、チェコ語、スペイン語、フランス語、英語、イタリア語、ポーランド語、ポルトガル語・フランス語、ルーマニア語母語話者である。また、複数の習熟度からなる被験者集団はスペイン語、英語、イタリア語、ポーランド語、ポルトガル語、ルーマニア語母語話者となっている。全体的に初級学習者による産出は接続法現在に偏っている。初級から中級になるにつれて接続法形式全体の産出が増え、時制形式の種類も豊富になる傾向が見て取れるが、英語母語学習者やドイツ語母語学習者は初級から産出、形態素の種類ともに豊富である。なお、イタリア語とポルトガル語では上級学習者による産出が中級と比較して接続法現在に集中している傾向にあるが、頻度の小ささより接続法習得の後退を断定するのは難しい。

### 7.2.2. Corpora de PEAPL2

次に PEAPL2 のデータから得られた結果を提示する。まずは各形式の産出を被験者の習熟度別にまとめる（表 48）。

表 48 Corpus de PEAPL2 より、被験者の習熟度別接続法各時制の産出

習熟度	接続法現在		接続法未来		接続法過去		合計
	産出数	割合	産出数	割合	産出数	割合	
A1	8	89%	1	11%	0	0%	9
A2	18	64%	4	14%	6	21%	28

B1	256	63%	48	12%	102	25%	406
B2	38	59%	12	19%	14	22%	64
C1	35	76%	4	9%	7	15%	46
全体	355	64%	69	12%	129	23%	553

PLEと同様、PEAPL2でも全習熟度を通じて接続法現在の産出が60%から80%近くを占めている。一方でPLEと比べて、全体的に接続法過去の産出の割合がやや高い。接続法未来と接続法過去の産出はA1レベルではほとんど見られず、A2レベルより少しずつ見られるようになる。両者はA2、B2、C1の各レベルではほぼ同等の産出であるが、被験者数の多いB1レベルでは接続法過去が未来に対して2倍近く産出されている。

次に被験者の母語別にまとめる(表49)。

表 49 Corpus de PEAPL2 より、被験者の母語別接続法各時制の産出

母語	接続法現在	接続法未来	接続法過去	合計
ドイツ語	57	12	24	93
ドイツ語・スペイン語	2		1	3
ドイツ語・フランス語		1	1	2
ブルガリア語	6	1		7
バウレ語	2			2
バスク語	1			1
バスク語・スペイン語	1			1
カタルーニャ語	2			2
チェコ語	16	3	1	20
中国語(広東語)	13	1	5	19
中国語	20	4	3	27
朝鮮語	6			6
クロアチア語			1	1
スロヴァキア語	4			4
スロヴェニア語	1			1
スペイン語	29	3	13	45
スペイン語・カタルーニャ語	1		3	4

スペイン語・ガリシア語	3		2	5
フィンランド語		2	2	4
フランス語	14	3	7	24
フランス語・ポルトガル語	1	1		2
ガリシア語	9		4	13
ギリシア語	5		5	10
ヒンディー語	1		2	3
英語	84	23	31	138
イタリア語	25	1	14	40
日本語	11	5	2	18
リトアニア語	1		1	2
オランダ語	12	2	5	19
ポーランド語	12	6		18
ルーマニア語	1			1
ロシア語	10		1	11
スウェーデン語	1		1	2
トルコ語	3	1		4
ウクライナ語	1			1
全体	355	69	129	553

接続法各形式を合計（概ね現在:未来:過去=6:1:2）と比較して相対的にバランスよく産出しているのはドイツ語、英語母語話者である。全体の産出はやや少ないものの、フランス語母語話者とオランダ語母語話者もバランスよく産出している。一方で、スペイン語、ガリシア語、イタリア語を母語とする被験者集団は接続法未来の産出が少なくなっている。また、チェコ語、日本語、ポーランド語母語話者は相対的に接続法未来の産出が多く、接続法未完了過去の産出が少なくなっているのが特徴的である。

母語話者集団をさらに習熟度別に分類して、疑似的に習得を考察する（表 50）。

表 50 Corpus de PEAPL2 より、被験者の母語と習熟度別接続法各時制の産出

母語	習熟度	接続法現在	接続法未来	接続法過去	合計
ドイツ語	A1	4	1		5

	A2	3		1	4
	B1	40	9	17	66
	B2	10	2	6	18
ドイツ語・スペイン語	B1	2		1	3
ドイツ語・フランス語	A2		1	1	2
ブルガリア語	B1	5			5
	B2	1	1		2
バウレ語	C1	2			2
バスク語	B1	1			1
バスク語・スペイン語	B1	1			1
カタルーニャ語	A2	2			2
チェコ語	B1	11	3	1	15
	B2	5			5
中国語(広東語)	B1	11	1	3	15
	C1	2		2	4
中国語	A2	2			2
	B1	8	3	1	12
	B2	2			2
	C1	8	1	2	11
朝鮮語	B1	6			6
クロアチア語	B2			1	1
スロヴァキア語	B2	3			3
	C1	1			1
スロヴェニア語	B1	1			1
スペイン語	A2	3		1	4
	B1	16	2	8	26
	B2	5		4	9
	C1	5	1		6
スペイン語・カタルーニャ語	B1			2	2
	B2	1		1	2
スペイン語・ガリシア語	B1	3		2	5
フィンランド語	B1			1	1
	B2		2	1	3
フランス語	A1	1			1
	B1	10		6	16
	B2	3	3	1	7

フランス語・ポルトガル語	B2	1	1		2
ガリシア語	A2	1			1
	B1	8		4	12
ギリシア語	B1	5		5	10
ヒンディー語	B1	1			1
	C1			2	2
英語	A2	2		1	3
	B1	71	21	30	122
	B2	5	2		7
	C1	6			6
イタリア語	A2	2	1		3
	B1	23		14	37
日本語	A2		1		1
	B1	3	2	1	6
	B2	1			1
	C1	7	2	1	10
リトアニア語	B1	1		1	2
オランダ語	A2	1		1	2
	B1	11	1	4	16
	B2		1		1
ポーランド語	B1	11	6		17
	B2	1			1
ルーマニア語	A2	1			1
ロシア語	B1	7		1	8
	C1	3			3
スウェーデン語	A2	1		1	2
トルコ語	A1	3			3
	A2		1		1
ウクライナ語	C1	1			1
全体		355	69	129	553

全体的に初級では産出数が少ないうえに接続法現在に偏っており、B1 レベルで接続法未来、過去の産出が増え、B2 レベル以降では各母語話者集団によって異なる傾向を示している。ドイツ語とトルコ語母語学習者はA1 レベルから、ドイツ語・フランス語、カタルーニ

ャ語、中国語、スペイン語、フランス語、ガリシア語、英語、イタリア語、日本語、オランダ語、ルーマニア語母語学習者では A2 レベルから接続法が産出されている。一部を除きこれらの学習者集団では初級レベルと B1 レベルを比較することができるが、いずれも産出数、産出形態素の種類ともに B1 で大幅に多くなる傾向が見られる。一方でブルガリア語、チェコ語、中国語（広東語）、スペイン語・ガリシア語、フィンランド語、ヒンディー語、ポーランド語、ロシア語では B1 レベルと、B2 または C1 レベルとの比較ができるが、ロウデータ（粗頻度）を見る限り産出数、産出形態素の種類ともに劇的な伸びはなく、集団によっては少なくなってしまう例が見られる。B1 レベル全体の被験者数及び産出被験者数の多さがこれらの原因となっているのは明らかであるが、B2、C1 レベルでは産出被験者数一人当たりの産出数も B1 より低くなっており、極端に接続法産出を繰り返す被験者が少なくなっていることも一因であると考えられる。

### 7.2.3. 両コーパスのまとめ

接続法時制形式の産出と習得について PLE、PEAPL2 ともに見られる傾向として、まず、接続法現在の産出が圧倒的に多いことが挙げられる。これには接続法現在が要求される表現の多様さと、それによるインプットの機会の多さ、そして学習者がそれらの表現を理解できていることが要因であることが考えられる。

習熟度別に見ると、いずれの形式も中級から産出が多くなっている。ただし、一部初級での産出数が極端に少ないため、統計的有意差は求めていない。

母語別の共通した傾向については、両コーパスによって各母語話者のサブコーパスのサイズが異なったり、習熟度内訳や産出の多さが異なるため判断が難しい。接続法各形式をバランスよく産出している被験者集団に、ドイツ語（両コーパス）、英語（PEAPL2）、ポーランド語（PLE）、オランダ語（PEAPL2）など非ロマンス語母語話者集団が目立つのが興味深い。言語的影響のみならずサブコーパスサイズの大きさによる影響が強いと考えられ

る。一方でロマンス語母語学習者については、接続法未来の回避の傾向が見て取れる。PLEのイタリア語母語学習者が接続法未来を多く産出しているものの、特に、両コーパスのスペイン語や PEAPL2 のイタリア語母語学習者では産出が少ないほか、ガリシア語やカタルーニャ語などイベロロマンス語母語学習者にも接続法未来産出が見られない。これについては次章 8.2 でも扱う。

### 7.3. 文脈別の産出

本節では学習者が接続法を産出する意味機能について学習習熟度別、母語別に考察する。文脈の分類は Bento (2013) を参考にしつつ、構造による分類を排して可能な限り意味による分類に努めている (6.2.4 参照)。

表 51 両コーパスの文脈別の接続法産出

	PLE 頻度	PEAPL2 頻度
当為判断のモダリティ		
[1] 願望・希求表現	17	76
[2] 許可表現	1	2
[3] 命令・使役表現	14	29
[4] 目的表現	13	28
[5] 当為評価表現	9	10
[6] 心配表現	1	2
真偽判断のモダリティ		
[7] 可能性表現	13	21
[8] 疑念表現	3	6
[9] 否定表現	2	7
[10] 仮定想像表現	3	1
[11] 時間表現	13	50
[12] 条件表現	27	34
[13] 反実仮想	24	69
[14] 陳述表現	16	16
[15] 真偽判断評価表現	6	12



その他			
[16]	factive 感情表現	2	2
[17]	譲歩表現	26	73
[18]	様態表現		1
不定表現			
[19]	非指示関係詞	16	10
[20]	一般関係詞	18	13
定型表現			
[21]	ou seja	10	22
[22]	列挙	4	14
[23]	quer queiramos quer		1
非接続法表現			
[24]	主節	23	25
[25]	指示関係詞	4	21
[26]	不定詞	2	2
[27]	理由	2	1
[28]	比較表現		3
[29]	quer dizer que		1
[30]	結果表現		1
合計		269	553

表 51 を見ると、PLE、PEAPL2 とともに表現によって産出にばらつきが見られる。当為判断のモダリティ表現では、先行研究で習得がなされやすいとされる願望・希求の表現をはじめ、命令・使役の表現、目的の表現と当為判断評価表現に接続法産出が多く確認できる。真偽判断のモダリティ表現では、同じく習得がなされやすいとされる (Isabelli & Nishida 2005, Bento 2013) 時間表現と条件表現に多くの産出が見られるが、一方で特に PEAPL2 で圧倒的に多くの産出が集中しているのが先行研究では取り扱われていなかった反実仮想表現である。次いで可能性表現や陳述の表現も両コーパスで接続法産出が多くなっている。一方、Stokes (1988) と Collentine (1995) で意見が分かれていた疑念表現については産出が少なく、Collentine を支持する結果となっている。その他では先行研究では習得がなされにくいとされる factive 感情表現の産出が極端に少なく、先行研究を支持する

ような結果となっている。一方で、先行研究に反するような結果となっているのが、同じく習得が困難とされる関係詞節表現であり、両コーパスとも各表現 10 例以上の産出が見られる。また、先行研究ではあまり取り扱われていなかった譲歩表現の習得が両コーパスとも非常に多くなっている点も特筆すべきである。

以上の結果を受け、本節では文脈別分類から時制、学習者の習熟度、母語の詳細を提示し、接続法使用の傾向を考察していく。なお、以降の産出例文について、本題に関係しない語彙や名詞と形容詞の性数一致、時制などの誤用や誤植については修正せず、産出のままとしている。

### 7.3.1. 願望・希求表現

まずは学習者が接続法を使用した願望と希求の表現から考察する。ここでは主に *querer que* (want that)、*esperar que* (hope that)、*desejar que* (desire that)などの動詞補語節表現(226)(227)と、*oxalá que* (I wish), *quem me dera que* (I wish) の希求表現(228)を含める。

(226) Neste momento, desejo muito que meu cachorro seja audável<sup>72</sup>.

in;this moment desire-PRES-1SG much that my dog is-SBJV-PRES-3SG fine

‘At this moment, I certainly hope that my dog is fine.’

(PLE, BU\_1\_16\_1.1A)

(227) Espero que tenha uma boa viagem.

hope that have-SBJV-PRES-3SG ART.IDEF good trip

‘I hope that you will have a good trip.’

(PLE, PU\_3\_22\_24.1H)

(228) Oxalá que tenhas umas férias boas amiga, ...

<sup>72</sup> *saudável*の誤植と考えられる

I.hope that have·SBJV-PRES-2SG ART.IDEF-PL holidays good·PL friend

‘I wish you a good holidays, friend.’

(PEAPL2, INGLÊS.ER.B1.60.6.1B)

産出表現の詳細は表 52 にまとめる。両コーパスとも *esperar que* の願望表現が圧倒的に多く、次いで *querer que* の表現が多く見られた。一方で *oxalá (que)* や *quem me dera que* などの希求表現は PEAPL2 のみに産出が見られた。

表 52 願望・希求表現における接続法の産出 (表現別)

願望・希求表現	PLE			PEAPL2		
	TLU	構造 エラー	時制 エラー	TLU	構造 エラー	時制 エラー
<i>querer que</i>	5	1		8		
<i>esperar que</i>	8			49		3
<i>desejar que</i>	1			2		1
<i>preferir que</i>	1			1	(1)	(1)
<i>gostar de que</i>				4		
<i>reclamar que</i>				1		
<i>oxalá (que)</i>				5		2
<i>deus queira que</i>				2		
<i>quem me dera que</i>				1		
その他	2			2		
全体	16	1		69	(1)	6(1)

明確な誤用については、命題に接続法未来を用いる時制エラーが *esperar que* で 2 例 (229)(230)、*oxalá que* で 2 例(231)(232)、*desejar que*、*preferir que* でそれぞれ 1 例(233) 見られた (例文中の誤用を示す\*は筆者による)。

(229) Espero que o gripe suína não \*for grave naquele

momento.

hope-PRES-1SG that ART.DEF influenza swine not be-SBJV-FUT-3SG serious in;that  
moment

‘At this moment, I hope that the Swine Influenza is not serious.’

(PEAPL2, CHINÊS.CA.B1.02.33.1J)

(230) Espero que para as proximas ferias nos \*pudermos  
combinar para fazer um plano juntas.

hope-PRES-1SG that for ART.DEF-PL next-PL holidays we can-SBJV-FUT-1PL  
agree-INF to do ART.IDEF plan together

‘I hope that for the next holidays we will set appointment to make plans.’

(PEAPL2, ESPANHOL.CA.C1.13.6.1B)

(231) As vezes oxalá \*for mais barato viajar ás montanhas  
para esquiar, ...

at-PL times I.pode be-SBJV-FUT-3SG more cheap travel-PL to;ART.DEF-PL mountains  
to ski

‘Sometimes I wish it that was cheaper to travel to mountains to ski.’

(PEAPL2, INGLÊS.ER.B1.110.33.1J)

(232) Oxalá um dia \*puderes passar umas férias aqui, ...

I.hope one day can-SBJV-FUT-1PL pass ART.IDEF-PL holidays here

‘I hope that one day you could spend the holidays here.’

(PEAPL2, INGLÊS.ER.B1.76.6.1B)

(233) As vezes preferia \*se houverem mais restaurantes porque  
não há muitas opções ...

ART.DEF-PL times prefer-IPFV-1SG if have-SBJV-FUT-3PL more restaurant because

not have-PRES-3SG many-PL options

‘Sometimes I wish that there were more restaurants because there are not many options.’

(PEAPL, INGLÊS.ER.B1.152.77.3T)

それぞれ、願望の命題の後時性に誘導され、文法的に許容されない接続法「未来」が使用されていると考察される。(233)は複雑で、過去の文脈のため従属節内を接続法未完了過去 *houvessem* とするべきだが、条件の接続詞 *se* を用いた上に接続法未来を用いている。そのため、上表では構造エラーと時制エラーにまたがる括弧付きの数字で集計している。

また、現在の文脈であるが過去時制が用いられている例も 2 例見られた(234)(235)。願望など当為判断の表現では意味的に命題内容が発話時以前となることはできない (cf. Mateus et al. 2003)。

(234) Espero que \*tivesses gostado da tua viagem a Portugal, ...

Hope-PRES-1SG that like-SBJV-IPFV-2SG of:ART.DEF your trip to Portugal

‘I hope that you liked the trip to Portugal.’

(PEAPL2, ALEMÃO.ER.B1.114.6.1B)

(235) Desejo que ... ao fim \*consequisses os teus sonhos ...

Desire-PRES-1SG that at:ART.DEF end achieve-SBJV-IPFV-2SG ART.DEF-PL your-PL dreams

‘I hope that you will finally achieve your dreams.’

(PEAPL2, ESPANHOL.ER.B2.31.6.1B)

その他では接続詞 *que* が欠けている構造的なエラーが 1 例のみ見られた。下の(236)では動詞 *divertir(-se)* (enjoy) は不定詞にならなければならない。

(236) Eu quero \*divirtam-se contigo.

I want<sup>~PRES-1SG</sup> enjoy<sup>~SBJV-PRES-3PL>REFL</sup> with.you

'I want you to enjoy yourself.'

(PLE, AU\_1\_04\_25.1H)

次に習熟度ごとの産出を表 53 にまとめる。

表 53 願望・希求表現における接続法の産出(習熟度別)

学習者習熟度	PLE			PEAPL2		
	TLU	構造エラー	時制エラー	TLU	構造エラー	時制エラー
A1		1				
A2	10			2		
B1				48	(1)	4(1)
B2	4			7		1
C1	2			12		1
全体	16	1		69	(1)	6(1)

両コーパスとも初級学習者から接続法使用が見られる。PLE では A1-A2 レベルから産出が見られ、全体的にも初級に産出が集中している。PEAPL2 では A2 レベルで若干の産出が見られるが、全体的には中上級レベルに集中している。

最後に表 54 より、学習者の母語別の産出を見る。

表 54 願望・希求表現における接続法の産出(母語別)

母語	PLE			PEAPL2		
	TLU	構造エラー	時制エラー	TLU	構造エラー	時制エラー
ドイツ語	1	1		12		1

ブルガリア語	1			
チェコ語			1	
中国語			6	1
朝鮮語	1		3	
スロヴァキア語			3	
スペイン語	2		8	2
フランス語			6	
ガリシア語			1	
英語	2		22	(1) 2(1)
イタリア語	2		2	
日本語			2	
コンカニ語	1			
ポーランド語	1		1	
ルーマニア語	5			
ロシア語			1	
ウクライナ語			1	
全体	16	1	69	(1) 6(1)

全体で 17 と、比較的広い母語話者集団によって産出されている。PLE ではルーマニア語母語学習者の産出が 5 と突出しているが、それ以外は最大 2 例と突出した学習者集団は見られない。一方、PEAPL2 では英語母語学習者による産出が圧倒的に多く、これに次いでドイツ語母語学習者の産出も多い。また、スペイン語やフランス語などロマンス諸語を母語とする学習者の産出も多い一方、中国語や朝鮮語、日本語などアジア言語の母語話者による産出も比較的多く確認できる。

### 7.3.2. 許可・禁止表現

許可の表現は *permitir que* (permit that) や *deixar que* (leave that) など(237)(238)、禁止の表現は *proibir que* (prohibit that) (239)や許可表現の否定の、いずれも動詞補語節表現からなる。両表現は PLE と PEAPL2 を合わせても 3 例しか産出されなかった(表 55)。

(237) ...o telemóvel é um aparelho que permite que as  
 pessoas estejam sempre em contacto ...  
 ART.DEF cellphone be-PRES-3SG ART.IDEF gadget REL permit-PRES-3SG that ART.DEF-PL  
 persons be-SBJV-PRES-3PL always in contact  
 ‘The cell phone is a gadget that allows people to always stay connected.’  
 (PLE, RU\_3\_05\_45.2L)

(238) ...mas não deixes que eles te dominem.  
 but not let-PRES-2SG that they you dominate-SBJV-PRES-3PL  
 ‘... however do not allow them to dominate you.’  
 (PEAPL2, ESPANHOL.ER.B1.104.33.1J)

(239) ...e nunca permitiu que me sentisse como uma estrangeira.  
 and never permit-PFV-3SG that REFL feel-SBJV-IPFV-1SG as ART.IDEF foreigner  
 ‘and never allowed myself to feel like a foreigner.’  
 (PEAPL2, ESPANHOLCATALÃO.ER.B2.37.6.1B)

表 55 許可・禁止表現における接続法の産出 (表現別)

許可・禁止表現	PLE	PEAPL2
permitir que	1	1
deixar que		1
全体	1	2

接続法産出はすべてイベロロマンス諸語の母語話者によるものであった。(237)はポルトガル語話者 (C1-C2) によるもので、*permitir que* の許可表現、(238)はスペイン語母語話者 (B1) による *não deixar que* (do not leave that) 禁止の表現である。さらに(239)はスペイン語・カタルーニャ母語話者 (B2) による *nunca permitir que* (never permit that) の禁止



の表現であるが、過去の文脈における表現であるため、接続法未完了過去が用いられている。構造や形式の面で明確な誤用は見当たらなかった。

### 7.3.3. 命令・使役表現

主節での命令法の表現(240)、助言の *aconselhar que* (advise that) や推薦の *recomendar que* (recommend that)、そして使役の *fazer (com) que* (make that) の動詞補語表現(241) を命令・使役の表現としてまとめている。

(240) Se estiveres mal-disposto, não hesites em contactar-me.  
 if be<sup>-</sup>SBJV-FUT-2SG ill-disposed not hesitate<sup>-</sup>SBJV-PRE-2SG in contact<sup>-</sup>INF;me

‘If you feel ill, do not hesitate to contact me.’

(PEAPL2, CHINÊS.CA.C1.17.6.1B)

(241) ... com novos valores e novas idéias que ... fazem que eu  
seja uma pessoa melhor.

with new<sup>-</sup>PL values and new<sup>-</sup>PL ideas REL make<sup>-</sup>PRES-3PL that I  
 be<sup>-</sup>SBJV-PRES-3PL ART.DEF person better

‘... with new values and new ideas that help me to be a better person.’

(PLE, PA\_2\_27\_39.1J)

産出の詳細 (表 56) を見ると両コーパスで使役表現の *fazer (com) que* が多く産出されている。また、PEAPL2 ではさらに命令法が多く産出されている。

表 56 命令・使役表現における接続法の産出 (表現別)

命令・使役表現	PLE	PEAPL2
	TLU	TLU
	時制エラー	時制エラー

fazer (com) que	10	9	
pedir que		2	
convencer que	2		
その他			1
命令法	2	16	
全体	14	27	1

一例のみ丁寧表現において接続法現在を用いる時制エラーが確認された。(242)では現在時における文脈であるが、主節が丁寧の過去未来 *recomendaria* (recommend) となっているので、従属節の動詞は接続法未完了過去の *gozassem* (enjoy) が望ましい。

(242) Por isso recomendaria aos todos que gozem do seu tempo na melhor ... possível.

for it recommend·COND-1SG to:ARTDEF all-PL that enjoy of:ARTDEF your time in:ARTDEF better possible

‘This is why I recommend all of you to enjoy your time as much as possible.’

(PEAPL2, CHECO.ER.B1.138.33.1J)

次に習熟度別の接続法産出を見ていく。構造的に大きな差異がある命令法表現 (表 57) と使役表現 (表 58) を区別する。まずは主節で接続法形式が用いられる命令法表現から見ていく。

表 57 命令・使役表現 (命令法表現) における接続法の産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE		PEAPL2	
	TLU	時制エラー	TLU	時制エラー
A1			3	
A2	1		1	

B1		9
B2	1	1
C1		2
全体	2	16

表 57 より命令法を用いた命令の表現は両コースとも初級から産出が見られる。PLE では産出数が少ないが、PLE では初級から上級にかけて、B2 以外のすべての習熟度の被験者に産出が見られる。

表 58 命令・使役表現（その他表現）における接続法の産出（習熟度別）

学習者習熟度	PLE		PEAPL2	
	TLU	時制エラー	TLU	時制エラー
A1	1			
A2				
B1	4		9	1
B2			1	
C1	7		2	
全体	12		12	1

一方で表 58 を見ると、接続法を伴う動詞補語表現による命令・使役の表現は PLE での 1 例を除いて中級以降に産出が多く見られる。主節で接続法形式を用いる命令法と異なり、複文構造を産出する必要があるが、初級学習者は構造がより単純な命令法表現を好む傾向があるのではないかと推測される (cf. Collentine 1995)。

次に命令法以外の命令・使役表現のみ、産出された接続法の時制形式を見ていく。

表 59 命令・使役表現（その他表現）における接続法の産出（時制形式別）

時制形式	PLE		PEAPL2	
	TLU	時制エラー	TLU	時制エラー

接続法現在	12	9	1
接続法未来			
接続法未完了過去		3	
全体	12	12	1

表 59 を見ると、大部分が現在時の文脈における接続法現在の産出であり、過去の文脈における接続法未完了過去の使用は 3 例に止まった。また、前述の通り丁寧の表現で接続法現在が用いられている誤用例が 1 例のみ見られた(242)。なお、命令・使役表現では接続法未来は文法的に許容されないが、両コーパスで接続法未来の誤用は確認できなかった。

最後に学習者の母語別に産出を見ていく（下表 60）。

表 60 命令・使役表現（命令法表現）における接続法の産出（母語別）

母語	PLE		PEAPL2	
	TLU	時制エラー	TLU	時制エラー
ドイツ語			6	
ブルガリア語	1			
中国語			2	
スペイン語			3	
フランス語			1	
英語			1	
イタリア語			2	
ルーマニア語	1			
スウェーデン語			1	
全体	2		16	

命令法表現は特に PEAPL2 においてドイツ語母語話者に多く見られるが、両コーパス共通で産出している母語話者集団は見られない。すなわち、特定の母語が産出に強い影響を与えている可能性は低いと考えられる。全体的にはロマンス諸語を中心として、東欧諸語、北欧諸語母語話者に、アジア諸語では中国語母語話者にも産出が見られるが、より多くの

データを分析する必要があると言える。

次に命令法以外の表現の母語別産出を見ていく (表 61)。

表 61 命令・使役表現 (その他表現) における接続法の産出 (母語別)

母語	PLE		PEAPL2	
	TLU	時制エラー	TLU	時制エラー
ドイツ語			1	
バウレ語			1	
チェコ語				1
スペイン語	1		3	
ガリシア語			2	
ギリシア語			1	
英語	1		4	
イタリア語	5			
ポーランド語	4			
ポルトガル語	1			
全体	12		27	1

その他の命令・使役表現の産出の傾向も両コーパスで異なり、こちらも被験者の母語による強い影響はないと見られる。接続法産出は、PLE ではイタリア語とポーランド語母語話者に、PEAPL2 では英語母語話者に集中している。両データ間で共通して接続法を産出しているのはイタリア語、英語、スペイン語母語話者に限られている。こちらもロマンス諸語から東欧言語、アフリカ言語と幅広い母語話者によって産出されている。

#### 7.3.4. 目的表現

目的の表現は *para que*、*de modo que* (in order that) など導入される副詞節表現からなる。産出された例は *para que* 表現(243)に集中していた (表 62)。

(243) Esta ilha deve ser pequena para que possa

aproveitar da tranquilidade.  
 this island must-PRES-3SG be-INF small to that can-SBJV-PRES-3SG  
 make.use.of-INF of:ART.DEF tranquility

‘This island must be small in order to enjoy the tranquility.’

(PLE, HU\_1\_16\_24.1H)

表 62 目的表現における接続法の産出 (表現別)

目的表現	PLE		PEAPL2	
	TLU	構造エラー	TLU	構造エラー
para que	11		25	
a fim de que			3 <sup>73</sup>	
de maneira que	1			
de modo que	1			
全体	13		28	

他には 3 種類の接続詞句に導入される目的表現が見られたが、わずかであった。

次に習熟度別の産出をまとめる (表 63)。

表 63 目的表現における接続法の産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE		PEAPL2	
	TLU	構造エラー	TLU	構造エラー
A1				
A2	3		2	
B1			22	1
B2	4		2	
C1	6		1	
全体	13		28	1

<sup>73</sup> 1 例のみ、時間表現を導入する *assim que* (as soon as) を目的の接続表現 *a fim de que* と混同していると見られる例が確認されたが、誤用とは扱っていない。

両コーパスとも初級から産出が見られるのが特徴的である。PEAPL2 では産出が B1 レベルに偏っているが、PLE では上級学習者でも多く用いられている。

最後に、母語話者別に産出をまとめる (表 64)。

表 64 目的表現における接続法の産出 (母語別)

母語	PLE		PEAPL2	
	TLU	構造エラー	TLU	構造エラー
ドイツ語	1		3	
バウレ語			1	
中国語			2	
朝鮮語			1	
スロヴァキア語			1	
スペイン語	2		1	
フィンランド語			1	
フランス語			2	
ガリシア語				
ギリシア語			1	
英語			8	1
イタリア語	5		1	
オランダ語			3	
ポーランド語	4			
ポルトガル語	1			
ルーマニア語			1	
ロシア語			1	
全体	11		28	1

全体で 17 にわたる幅広い母語話者集団に産出されているが、コーパス間で産出母語話者集団に違いが見られ、特定の母語からの影響の強さが見出しにくい。PLE ではイタリア語やポーランド語、PEAPL2 では英語母語話者に産出が集中しているが、全体にはポーラン

ド語、スロヴァキア語、ロシア語などの東欧言語や朝鮮語、中国語、フィンランド語、バウレ語などの非印欧語の母語話者など幅広く、かつ 1 例から多くても 3 例と低頻度で産出が見られる。

### 7.3.5. 当為判断評価表現

当為判断評価表現は *é bom* (it is good)、*é importante* (it is important)、*é necessário* (it is necessary) など、命題内容がなされるべきかという態度に関係する非人称の評価表現 (244)(245)(246) と、動詞補語表現の *basta que* (it is sufficient that) からなる(下表 65)。

(244) Mas também é importante que trabalhe para o dinheiro.  
 but also be-PRES-3SG important that work-SBJV-PRES-3SG to ART.DEF money  
 ‘However, it is also important to work for money.’

(PLE, ED\_1\_05\_22.1G)

(245) É bom que não só fique na minha cidade, ...  
 be-PRES-3SG good that not only stay-SBJV-PRES-3SG in:ART.DEF my city  
 ‘It is good that I do not stay in my city longer.’

(PEAPL2, CHINÊS(CANTONÊS).CA.B1.10.52.2L)

(246) Secundo, é necessário que recicle as latas de alumínio e papel.  
 secondly be-PRES-3SG necessary that recycle-SBJV-PRES-3SG ART.DEF-PL cans of aluminium and paper

‘Second, it is necessary to recycle aluminium cans and paper.’

(PLE, PU\_3\_02\_73.3R)



表 65 当為判断表現における接続法産出（表現別）

当為判断表現	PLE	PEAPL2
é bom que	1	3
é importante que	1	1
é melhor que	2	2
é necessário que	4	1
é normal que		2
é preciso que	1	
basta que		1
全体	9	10

両コーパスのサイズや全体の産出比を考慮すると、PLE での産出が多くなっている。産出された表現は PLE では *é necessário que* の産出が多く、PEAPL2 では分散している。なお、誤用は確認できない。

次に、習熟度別の産出をまとめる（表 66）。

表 66 当為判断表現における接続法産出（習熟度別）

学習者習熟度	PLE	PEAPL2
A1	3	
A2		1
B1	3	9
B2		
C1	3	
全体	9	10

両データとも、初級から産出が見られるのが特徴的である。PLE では初級から上級までバランス良く産出が確認できるが、PEAPL2 では A2 レベルで産出が確認できた他は B1 レベルに集中している。

最後に母語別の産出をまとめる 表 670。

表 67 当為判断表現における接続法産出 (母語別)

母語	PLE	PEAPL2
ドイツ語		2
ブルガリア語	1	
中国語		1
朝鮮語	2	
フランス語	1	
ギリシア語		3
英語	2	
イタリア語	2	4
ポルトガル語	1	
全体	9	10

全体の産出の少なさもあり、両コーパスともに突出して産出が多い母語話者集団が見られず、共通して産出が見られるのはイタリア語母語学習者のみである。全体的にはギリシア語やブルガリア語のような非ロマンス語や、中国語や朝鮮語のような東アジア諸語の母語学習者による産出も見られる。

### 7.3.6. 心配表現

心配や不安の表現は *recear que*, *temer que* (fear that), *ter medo de que* (be afraid that) などの動詞補語表現や名詞補語表現からなる。本論 2.4.4 にて先述の通り、この表現は感情表現として扱われることが多いが、本論では否定的な願望表現の一種として当為判断のモダリティとして扱う (cf. Palmer 2001)。

(247) ... onde possa beber um copo ... sem medo que não  
ouça nada ...  
REL can-SBJV-PRES-1SG drink-INF ARTDEF glass without fear that not

hear<sup>-SBJV-PRES-1SG</sup> nothing

‘... where I can drink, without worrying about hearing anything.’

(PEAPL2, CHECO.ER.B1.138.33.1J)

(248) Mas quando eles par(t)iram, eu tinha medo de que eu fique  
sozinha na casa grande.

but when they leave<sup>-PFV-3PL</sup> I have<sup>-IPFV-1SG</sup> fear of that I become<sup>-SBJV-PRES-1SG</sup>  
lonely in<sup>ART.DEF</sup> house big

‘However, after they left, I worried that I would be lonely in the large house.’

(PEAPL2, COREANO.CA.B1.47.77.3T)

(249) Mas tenho medo que a situação mude.

but have<sup>-PRES-1SG</sup> fear that ART.DEF situation move<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup>

‘However, I am worried about changing the situation.’

(PLE, VA\_3\_05\_69.3Q)

PLE と PEAPL2 ではいずれも *ter medo de que* 表現のみ、以上の合計 3 例が産出されている。PLE では C レベル (ポーランド語母語話者)、PEAPL2 では B1 レベル (チェコ語、朝鮮語母語話者) と、いずれも中上級の非ロマンス語母語学習者による産出となっている。

### 7.3.7. 可能性表現

可能性表現は主に *talvez* (maybe) に続く推測表現からなる。

(250) ... talvez escreva no espanhol....

perhaps write<sup>-SBJV-PRES-1SG</sup> in<sup>ART.DEF</sup> Spanish

‘Perhaps I will write in Spanish.’

(PLE, ED\_1\_23\_67.2P)

(251) Talvez seja muito bom para a gente idosa, ...

perhaps be-SBJV-PRES-3SG very good for ART.DEF everyone aged

‘Perhaps it is very good for the elderly.’

(PEAPL2, RUSSO.ER.B1.85.69.3Q)

この表現は接続法が主節で用いられる事例である。副詞の *talvez* に動詞が続く場合、接続法形式（現在または未完了過去）が用いられる。一方で、*talvez* が動詞の後に用いられる場合、動詞は直説法形式となる。また、*talvez* とほとんど同じ意味を表す *se calhar* (maybe) や *provavelmente* (probably) なども直説法の動詞を従える（1.3.5 参照）。これらの直説法要求可能性表現で接続法が誤用されている例は見られなかった。

また、*poder ser que* (it can be that) など、法動詞の *poder* (can) が関わる表現(252) も可能性の表現として含める。

(252) ... por isso pôde acontecer ... que alguém tivesse entrado num

centro comercial e ... lá tivesse puxado para estímulos ... a comprar  
objectos.

for it can-PFV-3SG happen that someone enter-SBJV-PSTPFV-3SG in:ART.IDEF

center commercial and there draw-SBJV-PSTPFV-3SG to stimulus to buy-INF

objects

‘... so that it is possible for someone to enter a shopping centre and be motivated to make purchases.’

(PLE, VE\_1\_15\_80.3U)

表 68 可能性表現における接続法産出 (表現別)

可能性表現	PLE	PEAPL2
talvez 表現	7	19
poder que 表現	6	2
全体	13	21

表 68 のまとめを見ると、産出された表現は大多数が *talvez* 表現である。*Talvez* 表現、*poder que* 表現のいずれにおいても、接続法未来を用いるなどの時制形式面での誤用は確認できなかった。

続いて学習者の習熟度別の産出を見ていく (表 69)。

表 69 可能性表現における接続法産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE	PEAPL2
A1		
A2	4	1
B1	8	15
B2		3
C1	1	2
全体	13	21

両コーパスとも初級から産出が見られ、中級 (B1) に産出が集中しているのが特徴的である。また、上級学習者の産出も確認できる。

最後に、母語別に接続法使用を見る (表 70)。

表 70 可能性表現における接続法産出 (母語別)

母語	PLE	PEAPL2
ドイツ語		3
ブルガリア語	1	

中国語		1
スペイン語	3	1
フランス語		3
ギリシア語		1
英語	1	3
イタリア語	6	3
オランダ語		4
ポーランド語	1	
ルーマニア語	1	
ロシア語		2
全体	13	21

スペイン語とイタリア語、英語母語話者以外では、両コーパスで産出した母語話者集団が異なっている。両コーパスとも、東欧諸語母語話者による産出も一部見られるが、全体的に西欧諸語母語話者による産出が目立つ。なお、アジア諸語母語話者による産出は中国語母語話者による1例のみとなっている。

### 7.3.8. 疑念表現

疑念表現は *duvidar que* (doubt that) や *suspeitar que* (suspect that)、*não achar que*、*não pensar que*、*não crer que* (いずれも do not think that) などの疑いや否定陳述の動詞補語表現、そして *é duvidoso que* (it is doubtful that) のなど評価表現を想定している。

(253) Não cre(i)o que seja uma boã pessoá.

not think-PRES-1SG that be-SBJV-PRES-3SG ART.IDEF good person

‘I do not think that he is good person.’

(PLE, ED\_1\_06\_50.2L)

(254) Nunca tinha pensado que a linguagem pudesse ser tanto complexa.

never think<sup>PSTPFV</sup> that ART.DEF speech can<sup>SBJV-PFV-3SG</sup> be<sup>IF</sup> such complex

‘I would have never thought that the speech could be so complex.’

(PEAPL2, FRANCÊS.ER.B1.150.52.2L)

表 71 疑念表現における接続法産出 (表現別)

疑念表現	PLE		PEAPL2	
	TLU	時制エラー	TLU	時制エラー
não achar que	1		3	
não crer que	2		1	
não pensar que			1	1
全体	3		5	1

表 71 のまとめを見ると、両コーパスともに産出は少なく、産出例はすべて *não achar que*、*não pensar que* の否定の陳述表現で、*duvidar que* などの肯定の疑念表現は見られなかった。なお、1 例のみ時制のエラーが見られた (B1 レベル、チェコ語母語話者)(255)。

(255) Não penso que viver na cidade \*fosse melhor que viver no campo ou ao contrário.

not think that live<sup>INF</sup> in:ART.DEF city be<sup>SBJV-PFV-1SG</sup> better than live<sup>INF</sup> in:ART.DEF country or to:ART.DEF contrary

‘I do not think that living in the city is better than living in the country, or vice-versa.’

(PEAPL2, CHECO.ER.B1.108.69.3Q)

(255)では疑われる内容は特に過去時ではないため、従属節内の動詞に接続法現在 (*seja*) が用いられるべきであるが、接続法未完了過去 (*fosse*) が用いられている。

次に習熟度別の産出をまとめる（表 72）。

表 72 疑念表現における接続法産出（習熟度別）

学習者習熟度	PLE		PEAPL2	
	TLU	時制エラー	TLU	時制エラー
A1	1			
A2				
B1			5	1
B2	2			
C1				
全体	3		5	1

PLE で A レベルの学習者による産出が 1 例見られた以外は、すべて中級レベルの学習者による産出であった。また、上級学習者による産出は確認できない。

最後に母語別の接続法産出を見る（表 73）。

表 73 疑念表現における接続法産出（母語別）

母語	PLE		PEAPL2	
	TLU	時制エラー	TLU	時制エラー
チェコ語				1
スペイン語	1			
フランス語			1	
英語	1		4	
イタリア語	1			
全体	3		5	1

ほとんどが英語母語話者に集中しているほかは、ロマンス諸語とチェコ語母語学習者（誤用）によって産出されている。英語母語話者による疑念表現での接続法使用は、習得されやすいとされる Collentine (1995) と習得されにくいとする Stokes (1988) とで見解が分かれ



ていたが (3.1.3.3 参照)、本研究のデータはどちらかというと *Collentine* を支持する結果となっている。

### 7.3.9. 否定表現

否定の表現は多岐にわたる。当初は動詞補語表現の *negar que* (negate that) などを想定したが、同表現の産出は見られなかった。一方で否定の陳述(256)(257)や否定の理由(258)など、広い意味での否定表現ととらえられるものが散見され、これに分類した。

(256) Não é que façamos peças todas as noites, ...  
not be-PRES-3SG that make-SBJV-PRES-1PL screenplays all-PL ART.DEF-PL nights

‘It is not as if we wrote screenplays every night.’

(PEAPL2, ESPANHOL.ER.B1.104.33.1J)

(257) Não digo que as minhas composições sempre estejam  
bonitos ou agradáveis de se ouvir, ...  
not say-PRES-1SG that ART.DEF-PL my-PL essays always be-SBJV-PRES-1PL  
beautiful-PL or comfortable-PL of REFL hear

‘I would not say that my essays are always good or easy to listen to.’

(PEAPL2, ITALIANO.ER.B1.42.33.1J)

(258) É não porque goste de animais ou de natureza, ...  
be-PRES-3SG not because like-SBJV-PRES-1SG of animals ou of nature

‘It is not because I like animals or nature.’

(PEAPL2, JAPONÊS.CA.C1.03.69.3Q)

また、*sem que* (without, unless) に続く副詞節表現(259)もここに分類している。同表現

は否定の条件表現とされることが多いが、条件というよりも否定の状況ととらえることが適切と判断したため、否定表現として分類した。なお、(259)ではコーパス構築者によって *sem se reparar* と不定詞表現とすべきとするエラータグが添えられている。

(259) ... pessoas já morreram no apartamento ao lado sem que alguém reparasse.

persons already die-PFV-3PL in;ART.DEF apartment at;ART.DEF side without that someone notice- SBJV-IPFV-3SG

'... people already died in the apartment without anyone noticing.'

(PEAPL2, ALEMÃO.ER.B2.35.69.3Q)

表 74 否定表現における接続法産出 (表現別)

否定表現	PLE		PEAPL2	
	TLU	構造エラー	TLU	構造エラー
não dizer que			1	
não porque	1		2	
não ser que			1	
sem que		1	2	
全体	1	1	6	

表 74 を見ると、全体的に産出数は少ないが、否定の理由表現が両コーパスを通じて産出されている。それ以外是一方のコーパスのみ TLU が確認される。

明確な誤用としては接続表現と動詞形式の不一致のエラーが見られた(260)。

(260) ..., sem \*tenha muito dinheiro numa cidade que não conheces bem.

without have<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup> much money in<sup>ART.IDEF</sup> city REL not know<sup>-PRES-2SG</sup>  
well

‘... without much money in a city with which I am unfamiliar.’

(PLE, BU\_2\_42\_7.1B)

(260)では前置詞 *sem* (without) に続いて *ter* (have) の接続法現在の *tenha* が続いているが、不定詞の *ter* が用いられるべきである。あるいは接続法現在の *tenha* を用いるためには接続表現は *sem que* とならなければならない。

次に習熟度別の産出をまとめる (表 75)。

表 75 否定表現における接続法産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE		PEAPL2	
	TLU	構造エラー	TLU	構造エラー
A1				
A2				
B1			4	
B2	1	1	1	
C1			1	
全体	1	1	6	

PLE、PEAPL2 とともに B レベル以上での産出に限られ、A レベルでの産出は見られなかった。

最後に母語別の産出をまとめる (表 76)。

表 76 否定表現における接続法産出 (母語別)

母語	PLE		PEAPL2	
	TLU	構造エラー	TLU	構造エラー

ドイツ語			1
バスク語・スペイン語			1
スペイン語			1
イタリア語			2
日本語			1
ルーマニア語	1	1	
合計	1	1	6

主にロマンス諸語を中心とする西欧諸語母語話者による使用に集中しているが、否定理由の表現は日本語学習者 (PEAPL2、C1) による産出も見られた。

### 7.3.10. 仮定想像表現

仮定想像表現は *imaginar que* (imagine that) (261)(263)や *supor que* (suppose that) (262)などの動詞補語節表現からなる。

(261) ... imagino que a dificuldade maior seja lidar com a burocracia italiana...

imagine<sup>PR</sup>-1SG that ART.DEF difficulty major be<sup>SB</sup>-PRES-3SG tackle with ART.DEF bureaucracy Italian

‘... I imagine the major problem is tackling with the Italian bureaucracy.’

(PLE, PA\_2\_38\_66.20)

(262) Suponho que não se possa ter confiança nos legumes que se vendem nas lojas.

suppose<sup>PR</sup>-1SG that not REFL can<sup>SB</sup>-PRES-3SG have<sup>INF</sup> confidence in;ART.DEF-PL vegetables REL REFL sell<sup>PR</sup>-3SG in;ART.DEF-PL shops

‘I suppose that we should not be confident about vegetables sold in shops.’

(PLE, BU\_2\_27\_70.3Q)

(263) ...imaginavamos que fossemos na floresta, com enímeros tereveis, ...

Imagine-IPFV-1PL that be- SBJV-IPFV-1PL in:ART.DEF forest with enemies terrible-PL

‘We imagined that we were in the forest with dreadful enemies.’

(PEAPL2, INGLÊS.ER.B1.110.33.1J)

誤用として、間接疑問文での接続法使用が 1 例確認された(264)。間接疑問文では仮定想像などの接続法を要求する動詞の補語節となっても直説法が要求される。

(264) Não consigo nem imaginar como um estrangeiro \*possa

entende-las.

not achieve-PRES-1SG nor imagine-INF how ART.IDEF foreigner can-SBJV-PRES-3SG

understand-INF;them

‘I cannot imagine how a stranger could understand them.’

(PLE, PA\_2\_38\_66.20)

産出は全体で以上の 4 例に限られるが、PLE、PEAPL2 とともに B レベルの中級学習者に集中している。産出母語話者はイタリア語 2 名 (TLU1 名、構造エラー 1 名)、ルーマニア語と英語がそれぞれ 1 名であった。

### 7.3.11. 時間表現

時間表現は接続法未来を要求する *quando* (when) や *enquanto* (while)、接続法現在を要求する *antes que* (before) や *até que* (till, until)、さらに接続法現在と未来の両方を許容する *depois que* (after) や *logo que* (as soon as) などの副詞節表現からなる。詳細は表 77 にまとめる。

(265) O(s) meu(s) pais of(e)rece(m) coisas diferentes asi(assim) que  
goste(m) algo a cada pessoa.

ART.DEF my parents offer-PRES-3PL things different-PL as.soon.as  
like-SBJV-PRES-3SG something to each people

'As soon as my parents find something they like for someone, they give it to him or her.'

(PLE, ED\_1\_09\_50.2L)

(266) Fui muitas experiências aqui enquanto viajar, ...

be-PRES-1SG many-PL experiences here while travel-SBJV-FUT-1SG

'I have had several experiences while travelling here, ...'

(PEAPL2, ALEMÃO.ER.A1.25.6.1B)

(267) Existam várias formas obrigatórias de movimento que temos  
aprender até que possamos fazer toda a forma perfeitamente.

exist-SBJV-3PL various forms obligatory-PL of movement REL have-PRES-1PL  
learn-INF until that can-SBJV-PRES-1PL do all ART.DEF form perfectly

'There are many compulsory forms of movement that we have to learn before we can perform all of the forms perfectly.'

(PEAPL2, ALEMÃO.ER.B1.119.33.1J)

(268) E cada dia depois que comesse jantar, fui a meu quarto ...

and each day afterthat eat-SBJV-IPFV-1SG dinner go-PFV-1SG to my room

'And, everyday, after I had dinner, I would go to my room, ...'

(PEAPL2, INGLÊS.ER.B1.110.33.1J)

表 77 時間表現における接続法産出 (表現別)

時間表現	PLE				PEAPL2			
	TLU	構造	時制	叙法	TLU	構造	時制	叙法
		エラー	エラー	エラー		エラー	エラー	エラー
antes que	1				2	1	1	
assim que	1				1			
até que		1			1			
depois que								2
enquanto					1		1	
logo que								1
mal					1			
quando	7		3		25		12	1
全体	9	1	3		31	1	14	4

産出は圧倒的に接続法 *quando* を用いた表現に集中している。この表現では従属節内では接続法未来、または過去時制として接続法未完了過去が要求され(269)、接続法現在には許容されない(270)(271)。

(269) Naquela altura, quando quisesse pegar o sinal de Internet, precisei de trazer o computador, usando no corredor de emergência.

in;that time when want-SBJV-IPFV-1SG catch-INF ART.DEF signal of Internet  
need-PFV-1SG of bring-INF ART.DEF computer, using in;ART.DEF corridor of  
emergency

‘In those days, when I wanted an Internet connection, I had to bring the computer to the emergency exit to use it.’

(PEAPL2, CHINÊS.CA.B1.12.77.3T)

(270) Quando eu \*termine o curso, eu vou a trabalhar em

uma ONG.

when I finish-SBJV-PRES-1SG ART.DEF course I go-PRES-1SG to work-INF in  
ART.IDEF NGO

‘After I complete the course, I am going to work at an NGO.’

(PLE, AL\_1\_23\_1.1A)

(271) Dormir durante doze horas consecutivas é um verdadeiro  
prazer, ..., quando faz frio ou \*chova no exterior...

sleep-INF during twelve hours consecutive-PL be-PRES-3SG ART.IDEF true

pleasure when do-PRES-3SG cold or rain-SBJV-PRES-3SG in;ART.DEF outside

‘When it is cold or rainy, it is a true pleasure to sleep for twelve consecutive hours.’

(PLE, AL\_1\_23\_1.1A)

この *quando* 表現で接続法現在を用いている誤用例は PLE、PEAPL2 とともに同表現の産出全体の 3 分の 1 近くを占めている。誤用を産出した習熟度や母語話者集団については以降で考察する。

時間表現では接続法現在と過去時制の未完了過去、そして表現によっては未来が許容されるため、ここでは時制別産出もまとめる。なお、産出数に大きな差があることと、要求される時制形式の違いから、*quando* 表現とその他の表現で別々に考察する。まずは *quando* 以外の表現における時制別産出を見ていく (表 78)。

表 78 時間表現 (*quando* 以外の表現) における接続法産出 (時制形式別)

時制形式	PLE			PEAPL2				
	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー
接続法現在	2				4	1		



接続法未来			1			
接続法未完了過去		1	1		2	3
全体	2	1	6	1	2	3

全体的な産出は少ないが、誤用が多く見られる。PLE では統語面でのエラーのみ産出されている。(272)では動詞を不定詞 *mandar(em)* とするか、前置詞 *até* (until) を接続詞句 *até que* としなければならない。

(272) ... que nos faziam rir até \*(que) os professores nos

mandassem calar.

that usmake-IPFV laugh-INF until that ART.DEF-PL professors us  
order-SBJV-IPFV-3SG be.quiet-INF

‘that meke us laugh until the professors order us to be quiet.’

(PLE, BU\_1\_11\_6.1B)

一方で PEAPL2 では接続法未完了過去の産出について、用いられる必要がない現在の文脈で用いられている時制のエラー(273)(274)、直説法を用いるべき過去の文脈で用いられている叙法選択のエラーがいくつか産出されている(275)(276)。

(273) Entanto \*tivesses feito o trabalho não tens porque ter medo,

embora os nervos estivessem a engolir-te ...

while do-SBJV-IPFV-3SG ART.DEF work not have-PRES-2SG why ter medo

though ART.DEF-PL nerves estar-SBJV-IPFV-3SG to swallow-INF;you

‘Even if you feel anxious, do not worry while we work.’

(PEAPL2, ESPANHOL.ER.B1.104.33.1J)

(274) ... antes de que eu \*quitasse a casa vou escrever minha mensagem.

before of that I leave<sup>-SBJV-IPFV-1SG</sup> to house go<sup>-PRES-1SG</sup> write<sup>-INF</sup> my message  
'... I will write my message before I leave home.'

(PEAPL2, INGLÊS.ER.B1.100.6.1B)

(273)と(274)では「仕事をする一方で」、「家を出る前に」と非過去時の文脈となっているために、それぞれ接続法未来、接続法現在が用いられるべきである。

(275) A última vez que estava em Hamburgo grelhamos na case de XXXXX e logo que \*começássemos a chover.

ART.DEF last time RFL be<sup>-IPFV-3SG</sup> in Hamburg grill<sup>-PFV-1SG</sup> in ART.DEF house  
of xxx and later that begin<sup>-SBJV-IPFV-1PL</sup> to rain

'The last time you were in Hamburg, it began to rain as soon as we started grilling at xxx's house.'

(PEAPL2, ALEMÃO.ER.B1.67.6.1B)

(276) Aninha, vai fazer 3 meses que não a vi depois de que \*tivesse partido para Portugal, como estás?

tomorrow go<sup>-PRES-3SG</sup> make<sup>-INF</sup> 3 months REL not you see<sup>-PFV-1SG</sup> after of  
that depart<sup>-SBJV-PSTPFV-1SG</sup> to Portugal how be<sup>-PRES-2SG</sup>

'Tomorrow, it will be three months since I left for Portugal and last saw you. How are you?'

(PEAPL2, CHINÊS(CANTONÊS).CA.C1.15.6.1B)

また、(275)、(276)とも「雨が降り始めてすぐに」、「ポルトガルに出発した後で」と過去における事実の文脈となっているため、接続法ではなくそれぞれ直説法の完了過去、過去完了が用いられるべきである。

次に接続詞 *quando* に導入される表現での時制形式の産出について考察する (表 79)。この表現では現在の文脈においては接続法未来のみ許容されるため、接続法現在の産出はすべて時制エラーとなる。

表 79 時間表現(*quando* 表現)における接続法産出 (時制形式別)

時制形式 ( <i>quando</i> 表現)	PLE			PEAPL2				
	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー
接続法現在			3			12		
接続法未来	7				23			
接続法未完了過去					2			1
全体	7		3		25	12		1

両コーパスとも、全体の 3 分の 1 近くが接続法現在、または非過去時における直説法未完了過去による誤用となっていた。また、直説法未完了過去が用いられるべき過去の習慣の表現において接続法未完了過去が用いられている事例 (叙法エラー) が 1 例のみ見られた。

(277) Quando \**fosse* uma miúda, começava a fazer natação.

when be-SBJV-IPFV-1SG ART.IDEF child start-IPFV-1SG to do-INF swimming

'I learned to swim when I was child.'

(PEAPL2, ESPANHOL.ER.B1.125.33.1J)

(277)の例では過去の習慣の文脈であるため、従属節内の動詞 *ser* (be) は直説法未完了過去

*era* となるべきである。例のように接続法未完了過去 *fosse* を用いる場合は「子どもになれるような時に」のような過去の条件表現か、「子どもである時があったら」のように反実仮想の文脈を作ってしまう。

次に習熟度別の産出を見る。まずは *quando* 表現以外の産出を表 80 にまとめる。

表 80 時間表現 (*quando* 以外の表現) における接続法産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE			PEAPL2				
	TLU	構造	時制	叙法	TLU	構造	時制	叙法
		エラー	エラー	エラー		エラー	エラー	エラー
A1	2	1			1			
A2								
B1					5	1	2	2
B2								
C1								1
全体	2	1			6	1	2	3

PLE では産出が初級学習者に集中している。一方で、PEAPL2 では誤用も含めて B1 レベルの中級学習者に集中している。

次に *quando* 表現を見ていく (表 81)。

表 81 時間表現 (*quando* 表現) における接続法産出 (習熟度別)

学習者習熟度 ( <i>quando</i> 表現)	PLE			PEAPL2				
	TLU	構造	時制	叙法	TLU	構造	時制	叙法
		エラー	エラー	エラー		エラー	エラー	エラー
A1	2		2					
A2							1	
B1	4				20		10	2
B2				1	2		2	
C1	1				1			

全体	7	3	23	13	2
----	---	---	----	----	---

*Quando* を用いる時間表現も、特に PLE において A レベルの初級学習者から産出が見られるのが特徴的である。一方で、特に PEAPL2 では中級 (B1) に産出の大多数が集中しているが、その他の時間表現同様、接続詞が抜けるなどの統語構造的エラーや現在時制を用いる形態的エラーが中上級学習者にも見られる。

最後に母語別の産出を見る。まずは *quando* 以外の時間表現から見ていく (表 82)。

表 82 時間表現 (*quando* 以外の表現) における接続法産出 (母語別)

母語	PLE			PEAPL2				
	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー
ドイツ語					2			1
チェコ語	1							
中国語								1
フランス語					1			
スペイン語							1	
英語		1			2	1	1	1
イタリア語					1			
ルーマニア語		1						
全体	1	2			6	1	2	3

中国語母語話者による誤用が見られるが、TLU を産出しているのはヨーロッパ言語母語話者に限られる。両コーパスを通じて TLU を産出している母語話者集団は見られず、全体的に英語とドイツ語母語学習者による産出が誤用も含めて若干多くなっており、他の母語話者は 1 例ずつに分散している。いずれも全体の被験者の多さによるものと考えられるが、一方で同じく被験者全体の人数が多く、ポルトガル語と同様の叙法システムを持つイタリア語やスペイン語母語学習者による産出はほとんど見られない。

次に *quando* 表現における接続法産出を見ていく (表 83)。

表 83 時間表現 (*quando* 表現) における接続法産出 (母語別)

母語 ( <i>quando</i> 表現)	PLE			PEAPL2				
	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー
ドイツ語	2				4		5	
ブルガリア語							1	
チェコ語					2			
中国語					2			
朝鮮語	1							
スペイン語			1		1		1	1
フランス語							1	
ガリシア語							1	
英語			1		8		1	
イタリア語	2							
日本語					3		1	
オランダ語					1			
ポーランド語					4		1	
ポルトガル語			1					
ルーマニア語	2							
全体	7		3		23		13	2

*Quando* 表現でも両コーパスを通じて TLU を産出しているのがドイツ語に限られ、全体的には英語とドイツ語母語学習者の産出が若干多くなっている。さらに、PEAPL2 ではポーランド語、日本語など東欧言語やアジア言語母語話者による産出も目立つ。また、イタリア語、スペイン語、フランス語などの接続法未来を有さないロマンス諸語を母語とする学習者が、*quando* 表現で接続法現在を誤用してしまうことが想定されたが、このような形式的誤用は各母語話者で多くても 1 例にとどまった。ただし、ロマンス諸語母語学習者による TLU も多くない。なお、*quando* 表現におけるこのような時制面での誤用はドイツ語

母語学習者に集中している。

### 7.3.12. 条件表現

条件表現は *se* (if) (278)、*caso* (in case) (279)、*sempre que* (everytime) (279)などで導入される副詞節表現である。*Se* 表現の場合は従属節内で接続法未来が要求され、それ以外の表現では接続法現在が要求される。なお、*sempre que* は時間表現として扱われることがあるが、本論では条件表現として扱う。

(278) Ou, se tu quiser, podes vir visitar-me.

or if you want<sup>-SBJV-FT-2SG</sup> can<sup>-PRES-2SG</sup> come<sup>-INF</sup> visit<sup>-INF</sup>:me

‘Or, if you would like, you may visit me.’

(PLE, BU\_2\_39\_7.1B)

(279) Além de estudar, caso tenha os tempos livres,

vejo televisão, passeio num jardim, ...

beyond ART.DEF study<sup>-INF</sup> case have<sup>-SBJV-PRES-1SG</sup> ART.DEF-PL times free<sup>-PL</sup>

watch<sup>-PRES-1SG</sup> television walk.around<sup>-INF</sup> in:ART.IDEF garden

‘In addition to studying, when I have free time, I watch television, walk around in the garden...’

(PEAPL2, CHINÊS.CA.B1.07.33.1J)

(280) ... mas isso é o mais normal, sempre que eles gostem

do lugar onde moram.

but it be<sup>-PRES-3SG</sup> ART.DEF most normal always that they like<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup>

of:ART.DEF place REL live<sup>-PRES-3PL</sup>

‘... however, it is the most normal everytime they like the place in which they are

living.’

(PEAPL2, ESPANHOLGALEGO.ER.B1.96.77.3T)

表現別の産出の詳細を表 84 にまとめる。産出は比較的多く、両コーパスとも産出された例のほとんどが *se* 条件表現であった。

表 84 条件表現における接続法産出 (表現別)

条件表現	PLE			PEAPL2				
	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー
<i>se</i>	22		2		23		5	
<i>caso</i>	1		1		1			
<i>no caso que</i>					1			
<i>a não ser que</i>	1							
<i>sempre que</i>					4			
全体	24		3		29		5	

産出が非常に多い一方で、適切な時制形式を用いていない例は *quando* 時間表現ほど多くはなく、*se* 条件表現に接続法現在を用いている例(281)が 6 例、*caso* の条件表現に接続法未来を誤用している例(282)が 1 例のみ見られた。

(281) Se \*faça sol e \*tenha de estudar, gostaria muito  
 mais de estudar no nosso jardim ...  
 if make-SBJV-PRES-1SG Sun and have-SBJV-PRES-1SG of study-INF like-COND-1SG much  
 more of study-INF in:ART.DEF our garden

‘When it is sunny and I have to study, I like to study in the garden.’

(PEAPL2, ALEMÃO.ER.B1.27.33.1J)



(282) Caso o sonho \*for “utopia” demais, isto pode provocar  
um sentido de frustração ...

case ART.DEF dream be<sup>-SBJV-FUT-3SG</sup> Utopia too.much it can<sup>-PRES-3SG</sup> provoke  
ART.IDEF meaning of frustration

‘When a dream is too surreal, it can be frustrating ...’

(PLE, PA\_2\_34\_5.1B)

次に産出を時制別に見ていく (表 85)。

表 85 条件表現における接続法産出 (時制形式別)

時制形式	PLE			PEAPL2				
	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー
接続法現在	2		2		6		4	
接続法未来	22		1		23			
接続法未完了過去							1	
全体	24		3		29		5	

両コーパスとも接続法未来を要求する *se* 表現を適切に使用できている例が多いため、同形式に産出が集中している。

被験者を次に被験者を習熟度別に分類する (表 86)。

表 86 条件表現における接続法産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE			PEAPL2				
	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー
A1	2		2					

A2			1	
B1			18	5
B2	9	1	8	
C1	13		2	
全体	24	3	29	5

両コーパスともわずかながら初級の A レベルから産出 (*se* 条件表現) が見られるのが特徴的である。PLE では C1-C2 の上級学習者の産出が多くなっている一方、PEAPL2 では B1 及び B2 の中級学習者に産出が誤用も含めて集中している。

最後に母語別の産出を見る (表 87)。

表 87 条件表現における接続法産出 (母語別)

母語	PLE			PEAPL2				
	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー
ドイツ語	1				7		4	
ブルガリア語					1			
バスク語					1			
チェコ語					1			
中国語					3			
朝鮮語	9							
スペイン語					4			
フィンランド語					1			
フランス語					4			
英語	1		2		5			
イタリア語	5		1				1	
日本語					1			
オランダ語					1			
ポーランド語	4							
ポルトガル語	3							
ルーマニア語	1							
全体	24		3		29		5	

ロマンス言語から東欧言語、アジア言語など、全体で 16 の幅広い言語母語話者による産出が見られる一方、両コーパス間での産出被験者の母語に共通する特徴が見出しにくく、母語による産出への影響は弱いものと考えられる。両コーパスで共通して産出が見られるのは英語とドイツ語母語学習者で、PLE では朝鮮語母語話者、PEAPL2 ではドイツ語母語話者に産出が集中しているのが特徴的である。また、母語で *se* 条件表現に当たる表現において接続法未来を用いないイタリア語、スペイン語、フランス語などのロマンス諸語でも TLU は見られるが、いずれかのコーパスのみでの産出にとどまっている。

### 7.3.13. 反実仮想表現

反実仮想表現は *se* (if) で導入される反実仮想条件表現(283)と、*como se* (as if) で導入される反実仮想比喩表現(284)からなる副詞節表現で、非過去時に接続法未完了過去、過去時に接続法過去完了が要求される点で特徴的である。

(283) Se tivesse muito dinheiro, compraria um carro ... e estaria feliz.

if have-SBJV-IPFV-1SG much money buy-COND-1SG ART.DEF car and be-COND-1SG happy

‘If I had plenty of money, I would buy a car and be happy.’

(PLE, ED\_1\_12\_22.1G)

(284) ... isso é o que diz a gente porque ... me sinto como se estivesse em casa.

it be-PRES-3SG what say-PRES-3SG to everyone because REFL feel-PRES-1SG as if be-SBJV-IPFV-1SG in house

‘... this is what people say, because I feel as if I am home.’

(PEAPL2, ESPANHOL.ER.A2.35.1.1A)

表 88 反実仮想表現における接続法産出 (表現別)

反実仮想表現	PLE		PEAPL2	
	TLU	時制エラー	TLU	時制エラー
se	18	1	57	1
como se	5		11	
全体	23	1	68	1

表現別の詳細 (表 88) を見ると、両コーパスとも産出数が多いが、大多数は *se* に導入される反実仮想条件表現であった。誤用は少なく、*se* 反実仮想表現に 2 例のみ見られた。

(285) Sería melhor se \*tiver dois o tres máis locais para ir  
do compas.  
be-COND-3SG better if have-SBJV-FUT-3SG two or three more places to go-INF  
of:ART.DEF shopping

‘It would be better if there were two or three more places to go shopping.’

(PLE, ED\_1\_06\_50.2L)

(286) O único problema eram as escais monumentais<sup>74</sup>. Seria ... melhor  
se \*sejam móbil!  
ART.DEF unique problem be-IPFV-3PL ART.DEF stairs monumental-PL be-COND-3SG better  
if be-SBJV-PRES-3PL movable

‘The only problem was the Monumental Stairs. It would have been better if they were movable!’

<sup>74</sup> *Escada Monumental* (コインブラ大学の大階段) の謝りであると見られる。

(285)、(286)ともに非現実的な反実仮想の文脈であるが、前者では接続法未来 *tiver*、後者では接続法現在 *sejam* が用いられている。

次に習熟度別の接続法産出をまとめる (表 89)。以降、2種類の表現を区別してまとめていく。

表 89 反実仮想表現における接続法産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE		PEAPL2			
	se 反実仮想表現		como se	se 反実仮想表現		como se
	TLU	時制エラー		TLU	時制エラー	
A1	6	1				
A2				3	1	
B1	10		2	46	1	
B2				5		
C1	2		3	3		
全体	18	1	5	57	1	
					11	

両コーパスとも産出は中級学習者に集中しているが、特に *se* 反実仮想表現は初級学習者にも比較的多く産出が見られ、上級になっても産出が続いている。

次に母語別に産出を分類する (表 90)。

表 90 反実仮想表現における接続法産出 (母語別)

母語	PLE		PEAPL2			
	se 反実仮想表現		como se	se 反実仮想表現		como se
	TLU	時制エラー		TLU	時制エラー	
ドイツ語	1			13		
カタルーニャ語	1					

中国語				2		
クロアチア語				1		
スペイン語				4		3
スペイン語/イタリア語		1				
フランス語				2		
ガリシア語				1		
ギリシア語				2		
ヒンディー語				2		
英語	4	1		19		2
イタリア語	4			5	1	6
オランダ語				4		
コンカニ語	1					
リトアニア語				1		
ポーランド語	2		3			
ルーマニア語	4		1			
ロシア語	1			1		
全体	18	1	5	57	1	11

全体で 19 と幅広い母語話者集団によって産出されている。両コーパスとも、誤用を含め英語とイタリア語母語学習者に産出が多く見られる。各コーパス別では、PLE においてポーランド語とルーマニア語母語学習者に、PEAPL2 ではスペイン語とドイツ語母語学習者にも産出が多く見られる。全体的には東欧言語やアジア言語も含め、幅広い母語話者集団による産出が見られる。類型学的に反実仮想表現では叙法対立はなくとも過去時制によるマークがなされる傾向があるため (cf. Lyons 1977, Palmer 2001, etc.)、母語または既習言語の情報からの類推によって産出が容易になっていることが推測される。

なお、*como se* で導入される反実仮想比喩表現はコーパスごとに産出の傾向が変わるが、PLE のポーランド語母語話者、PEAPL2 の英語母語話者以外はロマンス諸語を母語とする学習者に産出が集中している。

最後に表現の特殊性から反実仮想表現に限り、タスクからの影響を考慮して作文テーマ (付録 1 参照) 別に産出を分類した (表 91)。

表 91 反実仮想表現における接続法産出（作文テーマ別）

作文テーマ	PLE		PEAPL2	
	TLU	時制エラー	TLU	時制エラー
1.1A	4		3	
22.1G	3			
3.1A	3			
33.1J			17	
44.2L	1			
5.1B	2			
50.2L	1	1	3	
52.2L			2	
59.2M	1			
6.1B			11	
66.2O	2			
69.3Q			9	
7.1B	3			
70.3Q	2			
77.3T			23	1
8.1B	1			
全体	23	1	68	1

全 44 のタスクから選択されて作文が行われる PLE において、反実仮想表現で接続法が用いられているのはそのうち 11 のタスクと限られているが、接続法の使用は最大で 1.1A の 4 例であり、特定のタスクが非常に強く影響しているとは考えにくい。また、一方で PEAPL2 では 9 のタスクのうち 7 のタスクにおいて接続法が用いられている。なお、PEAPL2 で接続法が多く用いられたタスクは順に 77.3T、33.1J、6.1B、69.3Q となっているが、PLE ではこれらのタスクで接続法が一例も用いられていない。以上より、特に統計的な処理は行っていないが、特定のタスクが接続法の使用に強く影響しているとはいえないと考えられる。

### 7.3.14. 陳述表現

陳述表現の定義は難しいが、主に *achar que* (think that)、*crer que* (believe that) など、述べ立て表現として命題内容を伝達する機能を主とする動詞補語表現で、接続法形式を積極的には要求しないようなものが主たる対象である。陳述表現には真偽判断モダリティ表現として、直説法表現を要求して接続法を許容しない表現や、直説法と接続法のいずれも許容される表現がある。本項では接続法を許容する表現と接続法を認めない表現に分けて見ていく。

思考の動詞表現 *achar que*、*crer que*、*pensar que* (think that) は従属節に直説法を要求する表現であるが、推測の意味合いの動詞表現 *acreditar que* (believe that)、*calcular que* (reckon that)、*desconfiar que* (suspect that)、*julgar que* (judge that)、*presumir que* (presume that)、*suspeitar que* (suspect that) などは内容の真偽性の度合いにより直説法も接続法も許容されるとされる (e.g. Mateus et al. 2003, p.261.)。一方で *parecer que* (seem that) は推定の表現であるが命題内容は直説法で表現される。また、*saber que* (know that) で表現される内容は話者の知識であるため、命題内容への話者の態度は必然的に「真」となり接続法は文法的に許容されない。この表現の否定の一種である *não saber se* (do not know if) は否定表現であり、接続法が用いられそうな意味領域であるが、間接疑問文表現であるため動詞は直説法形式が要求される。その他、*constatar que* (confirm that)、*prometir que* (promise that) などの確認や約束の表現は命題に接続法を用いる例も見られるが、どちらかという直説法未来・過去未来が使用される傾向がある (鳥越 2010, Torigoe 2013)。

以下にコーパスに見られた産出を提示していく。

(287) ... neste momento eu penso que seja importante acabar  
o meu curso universitário ...



in;that moment I think-PRES-1SG that be-SBJV-PRES-3SG important finish  
 ART.DEF my course university-ADJ

‘... at this moment, I believe that it is important to complete my university course ...’

(PLE, PA\_1\_03\_1.1A)

(288) ...mas creio que ver um lugar com os proprios olhos

seja muito melhor.

but think-PRES-1SG that see-INF ART.IDEF place with ART.DEF-PL own-PL eyes  
 be-SBJV-PRES-3SG much better

‘... but I believe that it is much better to see the place with one’s own eyes.’

(PLE, PA\_2\_20\_48.2L)

(289) De facto, o senhorio sempre reclamou que o espaço público

seja sujo, ...

of fact ART.DEF landlord always claim-PFV-3SG that ART.DEF space public  
 be-SBJV-PRES-1SG dirty

‘In fact, the landlord always claims that the public space is dirty, ...’

(PEAPL2, CHINÊS.CA.B1.12.77.3T)

表 92 接続法を許容する陳述表現における接続法の産出 (表現別)

陳述表現	PLE 接続法使用	PEAPL2 接続法使用
acreditar que		1
constatar que		1
prometer que	1	
全体	1	2

直説法も接続法も許容すると考えられる表現における接続法使用は 3 表現の 3 例に限ら

れた (表 92)。これらの表現では叙法の使用は話者の命題の真偽への態度に委ねられるとされるため、接続法現在及び未完了過去の使用は TLU とも誤用とも扱わず、「接続法使用」として分類する。また、鳥越 (2010, 2013) で直説法未来・過去未来による共起の傾向が見られるとされる表現についても、接続法使用は特に誤用としては扱わない。

表 93 接続法を許容しない陳述表現における接続法産出 (表現別)

陳述表現	PLE	PEAPL2	
	叙法エラー	叙法エラー	時制エラー (接続法未来)
achar que	9	3	3
acontecer que	1		
crer que	3	1	
descobrir que		1	
parecer que		2	
pensar que	2		
saber que		1	
não saber se		1	
ser que		2	
全体	15	11	3

一方で接続法を許容しない表現での接続法使用は *achar que*、*crer que*、*pensar que* で多く見られ、続いて *acontecer que* (happen that)、*descobrir que* (discover that)、*parecer que*、*saber que*、*não saber se* に見られた (表 93)。各表現での接続法使用は「叙法エラー」として分類した。また、動詞補語表現で許容されない接続法未来を用いている 3 例は「時制エラー」として分類した。

次に産出された時制形式も見る (表 94)。

表 94 陳述表現における接続法産出 (時制形式別)

時制形式	PLE		PEAPL2		時制エラー (接続法未来)
	接続法使用	叙法エラー	接続法使用	叙法エラー	
接続法現在	1	13	2	9	
接続法未来					3
接続法未完了 過去		2		2	
全体	1	15	2	11	3

両コーパスとも、誤用も含め、大多数が非過去時の文脈で接続法現在を用いている表現に占められる。一部の過去の文脈での接続法未完了過去の産出や、*achar que* 表現での接続法未来の誤用も見られる(290)。

(290) Acho            que eles \*gostarem muito.

think-PRES-1SG that they like-SBJV-FUT-3PLmuch

‘I think that they will like it very much.’

(PEAPL2, JAPONÊS.CF.A2.11.33.1J)

続いて、習熟度別の産出を見ていく (表 95)。

表 95 陳述表現における接続法産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE		PEAPL2		
	接続法使用	叙法エラー	接続法使用	時制エラー (接続法未来)	叙法エラー
A1		3			
A2				1	3
B1	1	8	1	1	6

B2			1	1	2
C1		4			
全体	1	15	2	3	11

初級から多くの表現が産出されているが、上級でも接続法使用が見られる。また、誤用は中級まで見られ、PEAPL2では接続法未来を用いる誤用がB2レベルまで確認される。

最後に母語別の産出を見ていく（表 96）。

表 96 陳述表現における接続法産出（母語別）

母語	PLE		PEAPL2		時制エラー (接続法未来)
	接続法使用	叙法エラー	接続法使用	叙法エラー	
ドイツ語			1	1	1
チェコ語				1	
中国語				1	
クロアチア語		1			
フィンランド語					1
ギリシア語				1	
英語		1		4	
イタリア語	1	11	1	1	
日本語					1
オランダ語				1	
ルーマニア語		2			
スウェーデン語				1	
全体	1	15	2	11	3

全体で12の母語話者集団によって産出されている。特筆すべきは、PLEにおけるイタリア語母語学習者による誤用を含めた産出の多さである。イタリア語母語学習者によって接続法が用いられている表現は主に *achar que*、*crer que*、*pensar que* で、産出被験者の習熟度は初級から上級と幅広い。一方、その他では産出が突出した母語話者集団は見られない

ものの、東欧、北欧を含めた欧州諸語を中心に、日本語（誤用）、中国語の母語学習者による接続法使用も見られる。また、接続法未来を用いている時制形式のエラーは非ロマンス語母語話者に限られている。

### 7.3.15. 真偽判断評価表現

真偽判断評価表現は、*é possível que* (it is possible that) (291)や*é provável que* (it is probable that) (292)など、命題内容の真偽への態度に関する評価表現である。可能性表現と同じく真偽判断の表現であるが、統語的に大きく特徴が異なるため、別項目として区分している。

(291) ... é possível que o ambiente seja melhor no próximo século.

be-PRES-3SG possible that ART.DEF environment be-SBJV-PRES-3SG better in:ART.DEF  
next century

‘... it is possible that the environment will improve during the next century.’

(PLE, PU\_3\_15\_73.3R)

(292) ... <é> muito provável que vá trabalhar para ganhar dinheiro necessário ...

be-PRES-1SG very probable that go-SBJV-PRES-3SG work to earn-INF  
money necessary

‘... it is quite probable that he will work to earn the necessary money’

(PEAPL2, POLACO.ER.B1.83.33.1J)

なお、*é certo que* (it is certain that) や *é verdade que* (it is truth that) など、命題内容を

確信するような表現では名詞節内で直説法が要求され、接続法は用いられない。表現別産出の詳細を下表 97 にまとめる。

表 97 真偽判断評価表現における接続法産出 (表現別)

真偽判断評価表現	PLE		PEAPL2			
	TLU	叙法 エラー	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー
é possível que	3		3	1	1	
é provável que			1			
é difícil que			1			
é impossível que	1		1			
é inegável que			1			
não é verdade que	1					
é claro que						1
é evidente que						2
tenho confiança de que		1				
全体	5	1	7	1	1	3

両コーパスとも、*é possível que* 表現の産出が多くなっている。また、1例ずつであるが *é impossível que* (it is impossible that) 表現でも両コーパス通じて産出されている。PEAPL2 では1例に接続法未来を用いる誤用が見られる。一方、直説法が要求される確信表現における接続法の誤用は *é claro que* 表現で1例(293)、*é evidente que* (it is evident that) 表現(294)(293)で2例、いずれも PEAPL2 において見られた。また、他と異なる構文であるが PLE で1例見られた *tenho confiança de que* (I have a confidence that) 表現もこれに分類している。

(293) À nível cultural é claro que \*seja melhor viver  
na cidade ...

at:ART.DEF level cultural be-PRES-3SG clear that be-SBJV-PRES-3SG better live  
 in:ART.DEF city

‘From a cultural perspective, it is clear that it is better to live in the city ...’

(PEAPL2, INGLÊS.ER.B1.147.69.3Q)

(294) É evidente que não \*possa viajar sempre assim, ...

be-PRES-3SG evident that not can-SBJV-PRES-1SG travel-INF always like.that

‘It is apparent that you cannot always travel like that, ...’

(PEAPL2, INGLÊS.ER.B1.147.33.1J)

(293)では *é*, (294)では *pode* と直説法現在の形式が用いられるべきである。

次に学習者の習熟度別に見ていく (表 98)。

表 98 真偽判断評価表現における接続法産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE		PEAPL2			
	TLU	時制 エラー	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー
A1						
A2	1	1	1			
B1			4	1	1	3
B2	2					
C1	2		2			
全体	5	1	7	1	1	3

全体的な産出数は少ないが得られたデータより、真偽判断評価表現の接続法使用は初級から見られ、上級でも産出が継続されている。また、主に PEAPL2 において誤用が中級に集中している。

さらに、学習者の母語別に産出を見ていく（表 99）。

表 99 真偽判断評価表現における接続法産出（母語別）

母語	PLE		PEAPL2			
	TLU	時制 エラー	TLU	構造 エラー	時制 エラー	叙法 エラー
中国語			1			
朝鮮語	1		1			
スペイン語	2					
英語	1		2	1	1	3
イタリア語	1		1			
日本語			1			
ポーランド語			1			
ルーマニア語		1				
全体	5	1	7	1	1	3

全体で 8 の母語話者集団による産出に限られている。産出数自体は少ないが、日本語、中国語、朝鮮語と、東アジア言語母語学習者に広く産出されているのが特徴的である。PEAPL2 に見られる誤用はすべて英語母語学習者に集中しているが、これは全体的な英語母語学習者の多さに由来すると考えられ、より大きなデータから検証する必要があると言える。

### 7.3.16. Factive 感情表現

Factive 感情表現は *lamentar que* などの動詞補語節表現や、*ser lamentável que*、*ser uma lástima que* (以上 be sorry that)、*ser sorprendente que* (be surprising that) などの評価表現からなる。命題内容は事実であるが接続法が要求される表現である。PLE、PEAPL2 両コーパスでの学習者による産出は(295)(296)の 2 例のみであったが、初級学習者から産出が見られた。



(295) Acho que é uma lástima que ninguém os possa  
 aproveitar ...  
 think that be<sup>-PRES-3SG</sup> ART.DEF pity that nobody them can<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup>  
 make.use.of

‘I think it is a shame that nobody can make use of them ...’

(PEAPL2, CATALÃO.ER.A2.103.77.3T)

(296) ..., as pessoas teriam lamentado que a exposição e o tempo  
fossem mal organizados.

ART.DEF-PL persons regret<sup>-COND-PFV-3PL</sup> that ART.DEF exposition and ART.DEF time  
 be<sup>-SBJV-IPFV-3PL</sup> badly organized

‘..., the people would have regretted that the exposition and the timetable were not well-organized.’

(PEAPL2, ALEMÃO.ER.B1.97.52.2L)

産出したのは A2 レベルのカタルーニャ語母語学習者と B1 レベルのドイツ語母語学習者であった。特に B1 ドイツ語母語学習者は過去文脈での *factive* 感情表現における接続法未完了過去を産出している。

### 7.3.17. 譲歩表現

譲歩表現は *embora*、*mesmo que*、*ainda que* (以上 *although*, *even if*) などに導入される副詞節表現 (297)(298) と、 [接続法現在]+[疑問詞]+[接続法未来] の定型的表現 (299)(300)(301) からなる。

(297) Embora no princípio tivesse muitos problemas e no fosse fácil, agora estão contenta, ...

although in;ART.DEF beginning have<sup>-SBJV-IPFV-3SG</sup> many<sup>-PL</sup> problems and not  
be<sup>-SBJV-IPFV-3SG</sup> easy now be<sup>-PRES-3PL</sup> content

‘Although at first there were many problem and it was not easy, now they are content, ...’

(PLE, HU\_1\_07\_6.1B)

(298) Essas coisas fazem-me sentir melhor mesmo que tenha mau tempo.

those things make<sup>-PRES-3PL;me</sup> feel<sup>-INF</sup> better even that have<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup> bad  
weather

‘These make me feel better even in the bad weather.’

(PEAPL2, JAPONÊS.CA.B1.50.33.1J)

(299) Mas eles são, mesmo assim, sempre capazes para expressar a sua vontade (seja como for).

but they be<sup>-PRES-3PL</sup> even like. that always capable to express<sup>-INF</sup> ART.DEF  
their willingness be<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup> how be<sup>-SBJV-FUT-3SG</sup>

‘However, they always continue to express their willingness (to do whatever).’

(PEAPL2, ALEMÃO.ER.B1.126.52.2L)

(300) enfastio com ele porque coma o que comer, ele nunca engorda!

be.bored<sup>-PRES-1SG</sup> with him because eat<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup> what eat<sup>-SBJV-FUT-3SG</sup> henever  
become.fat<sup>-PRES-3SG</sup>

‘I get bored with him being able to eat anything and not become fat.’

(PEAPL2, INGLÊS.ER.B1.147.69.3Q)

(301) ... e aconteça \_\_\_\_\_ o que acontecer normalmente as(s)isto a 5  
jogos cada ano.

and happen<sup>˘</sup>SBJV-PRES-3SG what happens<sup>˘</sup>SBJV-FUT-3SG normally watch<sup>˘</sup>PRES-1SG to 5  
games each year

‘... and, no matter what happens, I generally watch five games each year.’

(PEAPL2, INGLÊS.ER.B1.76.33.1J)

(300)(301)(302)の定形的表現では、表現としての産出は一例とするが、産出された形態素は接続法現在と接続法未来を合わせて二例としている。下表 100 では 1 表現における両形式の産出を「1+1」と表記している。

表 100 譲歩表現における接続法産出 (表現別)

譲歩表現	PLE			PEAPL2		
	TLU	構造エラー	時制エラー	TLU	構造エラー	時制エラー
[ 接 続 法 現 在][疑問詞][接 続法未来]	1 + 1			5 + 5		
embora	14	1		40		
ainda que	2	1		7		
apesar que		(1)	(1)			
mesmo que	4			14		
por maior que	1					
se bem que				2		
全体	23	2(1)	(1)	73		

両コーパスとも *embora* 表現が大多数を占めているが、*mesmo que*、*ainda que* など、多様な表現が産出され、大多数が TLU である。誤用は PLE に 3 例見られるが、それぞれ接続詞語彙が誤っているか、接続詞句に *que* が欠けていて接続詞として不適當である事例と

なっている。なお、そのうち 1 例(302)では接続法未来（同形となる不定詞との混同と考えられる）が誤用されており、上表では構造エラーと時制エラーの両方に該当するものを括弧つきで示している。

(302) \*Apesar de \*tiver estudado elementos de cultura, ainda tenho dificuldades ...

in.spite of study-SBJV-FUTPFV-1SG elements of culture still have-PRES-1SG  
difficulties

‘Even though I have studied, I still struggle with culture.’

(PLE, BU\_2\_24\_7.1B)

(303) Podemos tambem mandar mensagens de emergencia ou de alegria, em uns minutos a qualquer parte do território ou \*ainda seja nas esquenas dos quatro continentes do mundo.

can-PRES-1PL also send-PL messages of emergency or of happiness in  
ART.IDEF-PL minutes to whatever part of territory or yet be-SBJV-PRES-1SG  
in;ART.DEF-PL edges of;ART.DEF-PL four continents of;ART.DEF world

‘We can send urgent or joyful messages in a few minutes to any place and even to the four corners of the world.’

(PLE, GO\_2\_03\_45.2L)

(304) \*Entanto fosse bastante simples, gozamos da comida.

although beSBJV-IPFV-3SG very simple enjoy-PRES-1PL of;ART.DEF food

‘Although it was very simple, we enjoyed the dish.’

(PLE, HU\_1\_17\_24.1H)

(302)では接続詞の譲歩の接続詞表現 *apesar (de) que*ではなく前置詞句の *apesar de* (in spite of)となっているため、*apesar (de) que* とするか、後続する動詞を名詞として機能する不定詞とするべきである。(303)も *ainda* ではなく *ainda que* とするべきである。また、*entanto* と逆接の接続表現での語彙が用いられた例が見られたが(304)、文脈から譲歩の *embora* と混同されているものと考えられる。

次に学習者の習熟度別の産出をまとめる (表 101)。

表 101 譲歩表現における接続法産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE			PEAPL2		
	TLU	構造エラー	時制エラー	TLU	構造エラー	時制エラー
A1						
A2	5	1		1		
B1				53		
B2	12	1 + (1)	(1)	8		
C1	6			11		
全体	23	3		73		

PLE、PEAPL2 とともに B1 以上の中上級学習者による使用が大多数を占めるが、PLE では初級の A レベルから産出が見られる。また、総被験者数を考慮すると、上級の C レベルの学習者による産出も割合的に多い。

次に母語別の産出をまとめる (表 102)。

表 102 譲歩表現における接続法産出 (母語別)

母語	PLE			PEAPL2		
	TLU	構造エラー	時制エラー	TLU	構造エラー	時制エラー
ドイツ語	2	1		8		
ブルガリア語						
チェコ語				6		

中国語				11
朝鮮語	2			
スペイン語				7
フィンランド語				1
フランス語				1
ガリシア語				1
ヒンディー語	1			
英語				25
イタリア語	7			2
日本語				6
コンカニ語		1		
オランダ語				1
ポーランド語	5			2
ポルトガル語				
ルーマニア語	5	(1)	(1)	
ロシア語				2
不明	1			
全体	23	3		73

全体で 20 と幅広い母語話者集団に産出されている。また、各コーパスで産出の高い学習者集団が異なっているが、全体的にはロマンス諸語をはじめとする西欧諸語から東欧諸語、アジア諸語まで幅広い言語母語話者に産出されており、母語による産出への強い影響はないものと考えられる。PLE ではイタリア語、ポーランド語、ルーマニア語で産出が多くなっているが、英語母語学習者の産出が見られない。一方、PEAPL2 では英語、中国語、スペイン語、イタリア語、チェコ語、日本語など、多様な母語の学習者によって産出されている。

なお、本研究と同じく PEAPL2 をデータソースに用いた Bento (2013) ではスペイン語母語学習者による譲歩表現での接続法使用が少ないとされているが、同表現における接続法産出は絶対的には少ないものの、イタリア語やフランス語などと比較すると相対的には少なくないことがわかる。

### 7.3.18. 程度・様態表現

程度・様態の表現は *como* (as) や *conforme*、*segundo* (according as) などに導入される副詞節表現で、従属節内の動詞は接続法未来となる。産出されたのは PLE から、B1 レベルの中国語母語話者による 1 例のみであった。

(305) Mas, como ficar muitas pessoas, o espaço é um pouco estreito e cheio.

but as become-SBJV-FUT-3SG many-PL people ART.DEF space be-PRES-3SG a little narrow and full

‘However, since many people were there, the space was a little crowded.’

(CHINÊS(CANTONÊS).CA.B1.11.77.3T)

ただし、規則動詞 *ficar* の 1 例だけの産出ということもあり、接続法未来と不定詞を混同している可能性なども考えられる。同表現もより大きなデータや、誘導的タスクによって得られたデータによってさらに検証していく必要がある。

### 7.3.19. 非指示関係詞表現

ポルトガル語では接続法は関係詞表現でも用いられる。特定のでなく実際に存在するかどうかわからない物や人が先行詞となる場合、すなわち非指示的 (*non-referential*; Comrie & Holmback 1984) な場合に、これを修飾する関係詞節内の動詞は接続法現在となる。

非指示関係詞表現は、文脈的に特定のでない場合の不定冠詞や不定形容詞 (*algum* [some]) などが付いた名詞(306)(307)、または不定代名詞 (*alguém* [someone], *algo* [something])、否定代名詞 (*ninguém* [no one], *nada* [nothing]) を修飾する関係詞表現(308)で、関係詞節内の動詞は接続法現在となる。なお、無冠詞先行詞については次節の一

般関係詞表現との区分が難しいが、無冠詞名詞の複数形と不定冠詞を伴う複数形名詞の不定の意味の面での共通性<sup>75</sup>から、無冠詞名詞の複数形を、接続法現在を伴う関係詞で修飾して内容的にも特定のでないもの(308)を非指示関係詞表現として本節で扱うこととする。

(306) Gostaria de morar num hótel que fique perto do rio.  
like-COND-1SG of live in;ART.IDEF hotel REL exist-SBJV-PRES-3SG near of;ART.DEF river

‘I would like to stay in a hotel that is near the river.’

(PLE, HU\_1\_10\_7.1B)

(307) ... posso levar-te a algum lugar que ainda não conheças.  
can-PRES-1SG take-INF;you to some place REL still not know-SBJV-PRES-2SG

‘... I could take you to some place with which you are unfamiliar.’

(PEAPL2, ESPANHOLCATALÃO.ER.B2.37.6.1B)

(308) Em vez disso, a fim de ter “alguém” de quem possam  
cuidar e dedicar seu tempo, ...  
instead of;it to aim of have-INF someone of REL can-SBJV-PRES-3PL

take.care-INF and dedicate-INF his time

‘Instead of that, to have someone who could pay attention and devote his time, ...’

(PLE, VA\_3\_03\_44.2L)

(309) Não há muitas dias que passem sem encontrar os  
meus amigos, ...  
not have-PRES-3SG many-PL days REL pass-SBJV-PRES-3PL without meet-INF ART.DEF-PL

my-PL friends

‘There are few days that pass in which I do not see my friends.’

---

<sup>75</sup> ポルトガル語文法では不定冠詞つきの複数名詞と無冠詞の複数名詞はいずれも不定であるとされる。すなわち、無冠詞の複数名詞は定性を得ない (Comrie & Holmback 1984)。



下表 103 に表現別の産出をまとめる。

表 103 非指示関係詞表現における接続法産出 (表現別)

非指示関係詞表現	PLE	PEAPL2
不定冠詞先行詞修飾 (無冠詞複数形を含む)	15	7
不定代名詞・形容詞先行詞修飾	1	2
否定代名詞・否定文脈		1
合計	16	10

両コーパスともに、大多数は不定冠詞つき先行詞、または無冠詞複数先行詞を修飾する関係詞節内での接続法現在の使用であった。加えて、不定代名詞を修飾する関係詞節、不定形容詞つき先行詞を修飾する関係詞節、否定の文脈での目的語を修飾する関係詞節における接続法現在の使用がそれぞれ少数見られた。

次に習熟度別の産出を見る (表 104)。

表 104 非指示関係詞表現における接続法産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE	PEAPL2
A1		
A2	2	
B1	7	7
B2		3
C1	7	
合計	16	10

PLE で初級から産出が見られるが、全体的にはほとんど中上級で、さらに被験者集団の

バランスを考慮すると上級学習者に産出が集中している。PEAPL2 では B1 レベルの学習者に産出が集中している。

最後に被験者ごとの産出を見る (表 105)。

表 105 非指示関係詞表現における接続法産出 (母語別)

母語	PLE	PEAPL2
ドイツ語	1	4
ブルガリア語		1
スペイン語	2	1
ガリシア語		1
英語	1	
イタリア語	2	
オランダ語		1
ポーランド語	1	2
ポルトガル語	6	
ルーマニア語	3	
合計	16	9

全体的に、ロマンス諸語を中心としたヨーロッパ言語の母語話者に産出が占められており、アジア言語の母語話者による産出が見られない。加えて、他の接続法で多くの産出を見せている英語母語話者による産出が 1 例のみしか見られないことが特徴的である。これはスペイン語習得において関係詞表現での叙法選択は英語母語話者には特に難しいとする Terrell et al. (1987)、Stokes (1988)、Isabelli & Nishida (2005) などの研究結果を、ポルトガル語習得研究においても支持するような結果となっている。

両コーパスで共通して産出が見られるのはドイツ語、スペイン語、ポーランド語母語話者である。PLE ではポルトガル語母語話者 (すべて C1-C2) に、PEAPL2 ではドイツ語母語話者に産出が集中している。

### 7.3.20. 一般関係詞表現

非指示的關係詞表現とは別の区分として、特定のグループの中の人や物一般を修飾する「一般的關係詞表現」(Comrie & Holmback 1984)がある。ただし、非指示的解釈と一般的解釈の意味的な区分は必ずしも明確ではないため、本研究では Comrie & Holmback が説明する構造的特徴から区分していく。すなわち、定冠詞が付く先行詞を接続法未来の關係詞節で修飾する表現、文の主語となっている無冠詞単数名詞や無先行詞關係詞 (*o que* [what]、*quem* [who]) を接続法未来の關係詞節で修飾する表現、文の目的語となっている無冠詞名詞や無先行詞關係詞を接続法現在の關係詞節で修飾する表現を一般關係詞表現とする。定冠詞つき先行詞への接続法現在の共起と、不定冠詞つき先行詞への接続法未来の共起は非文法的であるが、無冠詞先行詞などについては明確な区分が難しいため、誤用ではなく表現ごとに用いられた時制形式でまとめる(表 106)。

(310) ... agora eu tenho muito mais tempo para fazer o que quiser.  
 now I have-PRES-1SG much more time to do-INF what want-SBJV-FUT-1SG  
 ‘... now I have much more time to do as I like.’  
 (PEAPL2, INGLÊS.ER.B1.82.33.1J)

(311) Há quem goste mais da vida sossegada do campo do que da agitação de cidades.  
 have-PRES-3SG REL like-SBJV-PRES-3SG more of:ART.DEF life quiet of:ART.DEF  
 country than of:ART.DEF agitation of cities  
 ‘There are some people who would prefer quiet life in the country to the tentions of the city.’  
 (PLE, VA\_3\_04\_69.3Q)

表 106 一般関係詞表現における接続法産出 (表現別)

一般関係詞表現	PLE		PEAPL2	
	接続法現在	接続法未来	接続法現在	接続法未来
定冠詞先行詞	*3		*2	
無冠詞単数形先行詞	1			2
無先行詞関係詞	7	2	4	2
qualquer que	1	1	1	
aquele que			*1	
todos que	2			
tudo o que	1		1	
合計	15	3	9	4

定冠詞先行詞に接続法を続ける一般関係詞表現では、産出された例はすべて接続法現在を用いる誤用となっている。(311)(312)では先行詞は特定の・指示的でなく、特定集団内の該当人物一般を指す文脈であるため、関係詞節内の動詞は接続法未来とならなければならない。

(312) Os trabalhadores que por acaso \*venham a sofrer as fracturas, ...

ART.DEF-PL workers REL for chance come-SBJV-PRES-3PL to suffer ART.DEF fractures

‘The workers who unfortunately suffer from fractures ...’

(PEAPL2, GO\_2\_06\_45.2L)

また、両コーパスとも無先行詞関係詞に接続法現在または未来を続ける表現が多く見られた。指示代名詞を修飾する *aquele que* は一般的解釈の際は接続法未来が要求されるため、接続法現在を続けている例は誤用とした。*Qualquer que* (whatever) は接続法現在も未来も従え得る表現であり (Comrie & Holmback 1984)、*todos que* (everyone who)、*tudo o que*

(all that) は新聞コーパス分析<sup>76</sup>より事例が確認できる。

次に習熟度別の産出を見ていく (表 107)。

表 107 一般関係詞表現における接続法産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE		PEAPL2	
	接続法現在	接続法未来	接続法現在	接続法未来
A1		1		
A2				
B1	8	1	6	3
B2			2	1
C1	7	1	1	
合計	15	3	9	4

全体的に接続法未来を用いる表現よりも接続法現在を用いる表現の方が多く産出されている。PLE で 1 例のみ A1-A2 の学習者による接続法未来表現の産出があるものの、非指示関係詞表現同様、中級以上の学習者による産出が目立つ。

最後に、母語話者別の産出を見る (表 108)。

表 108 一般関係詞表現における接続法産出 (母語別)

母語	PLE		PEAPL2	
	接続法現在	接続法未来	接続法現在	接続法未来
ブルガリア語	1			
チェコ語			1	
中国語			3	
スペイン語	3		4	
イタリア語		1	1	
英語				2
コンカニ語		1		

<sup>76</sup> Cetempúblico / Cetenfolha:

コンカニ語・英語	1			
ポーランド語	7	1		2
ルーマニア語	3			
合計	15	3	9	4

ポーランド語母語話者による産出が多く、特に PLE では接続法現在を多く産出しているほか、接続法未来も全体で 7 例中 3 例を産出している。チェコ語やブルガリア語といった他の東欧言語母語話者にも産出が散見される。また、ポルトガル語と同じイベロロマンス語のスペイン語母語話者も比較的多く産出をしているが、接続法未来を用いた表現が見られず、現代語では接続法未来を使用しなくなっている母語からの影響が考えられる。一方で、他の表現で接続法を多く産出する英語母語話者による産出は非常に少なく、英語母語話者にとっては非指示的關係代名詞と同様に、関係詞節での接続法使用が困難であることがうかがえる (cf. Terrell et al. 1987, Stokes 1988, Isabelli & Nishida 2005)。同様に他表現での接続法産出の多いドイツ語母語話者による産出はまったく見られない。その他ではイタリア語やルーマニア語母語話者による産出が見られるものの、1 例を除き接続法現在に限られ、フランス語やその他のイベロロマンス語母語話者による産出が見られないのも特徴的である。また、ポーランド語に加え、少数ではあるがブルガリア語やチェコ語といった東欧言語母語話者による産出が見られる。アジア言語では中国語に産出が見られる。

### 7.3.21. *Ou seja*

接続法が用いられる定型表現で最も産出が多いのが *ou seja* (in other words, precisely) である。この表現は接続法表現というよりも、言い換えや説明のための接続詞表現として機能しており、*irrealis* のマーカーとしての接続法表現ではない。また、*ser* の接続法表現の *seja* のみが用いられ、その他の語彙が用いられることはない。叙法とモダリティの議論からは外れてしまうが、このような接続表現は文章の結束性に関係するため、まとまった文章が書けるようになることが想定される初級後期や中級で扱われる傾向がある (e.g. 武

田 et al. 2014, 香川 2007, Coimbra & Coimbra 2010)。

(313) ... mas não é bem percebido pela gente que deveria ou  
seja a gente que ocupa as posições importante  
nas instituiçoes ...  
but not be-PRES-3SG well understood by:ART.DEF everybody REL must-COND-3SG or  
be-SBJV-PRES-3SG ART.DEF everybody REL occupy-PRES-3SG ART.DEF position important  
in:ART.DEF institution  
‘... but it is not well understood by the people who must know, in other words, those  
who occupy important positions in the institutions, ...’  
(PLE, VE\_1\_05\_74.3R)

(314) também já morava <(...)> 2 anos numa cidade, ou seja,  
perto das grandes cidades ...  
also already live-IPFV-1SG 2 years in:ART.IDEF city or be-SBJV-PRES-3SG  
near of:ART.DEF big-PL cities  
‘In addition, I have already lived in a city for two years; precisely, near big cities ...’  
(PEAPL2, JAPONÊS.CA.C1.03.69.3Q)

*Ou seja* による言い換え表現は PLE では 10 例、PEAPL2 では 22 例と、比較的多く産出された。習熟度別の産出は表 109 の通りである。

表 109 *ou seja* 表現の産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE	PEAPL2
A1	3	
A2		1

B1	7	15
B2		5
C1		1
合計	10	22

習熟度別に見ると初級から産出が見られるのが特徴的であるが、全体的には B1 レベル以降に産出が集中している。やはりまとまった文章を書くことができる中級以降で扱えるようになる表現であることが伺える。

最後に被験者の母語別の産出を見る (表 110)。

表 110 *ou seja* 表現の産出 (母語別表 110)

母語	PLE	PEAPL2
ドイツ語		2
チェコ語		4
スペイン語		1
スロヴェニア語		1
フランス語		3
ガリシア語		1
ヒンディー語		1
英語		3
イタリア語	6	5
日本語		1
コンカニ語	2	
ポルトガル語	1	
ルーマニア語	1	
合計	10	22

全体的にはイタリア語母語学習者にやや集中し、唯一両データで共通して産出して産出が見られている。その他ではチェコ語、フランス語、英語母語話者で比較的産出が多い。全体ではコンカニ語、スロヴェニア語、日本語、ヒンディー語など幅広い被験者集団に産



出が確認でき、学習者の母語による影響は大きくないものと考えられると同時に、他の表現の産出が少ない母語話者集団にも産出が見られることから、中級以降で比較的習得がなされやすい表現であることも推測される。

### 7.3.22. 列挙表現

前節の *ou seja* と同様、定型表現で産出が多く見られたものに *seja ... (ou) seja ...* の列挙表現が挙げられる。この表現も *seja* が *irrealis* のマーカーとしての接続法としては機能しておらず、また *ser* 以外の語彙の接続法が用いられることはない。

(315) Pessoas das            ambas    culturas    conduzem    os            carros  
    rapidamente    reduzem    a            velocidade que há            nenhuma  
    outra opção, seja            por causa de uma            placa ou seja            por  
    causa dum            acidente.

persons    of:ART.DEF-PL both-PL    culture            drive-PRES-3PL    ART.DEF-PL cars  
    fast                                    and reduce-PRES-3PL ART.DEF velocity            REL    have-PRES-3SG    no  
    other    option    be-SBJV-PRES-3SG for    reason of    ART.IDEF    sign    or    be-SBJV-PRES-3SG for  
    reason of:ART.IDEF accident

‘People from both cultures drive their cars too fast and only reduce their speeds because of penalties or accident.’

(PEAPL2, ALEMÃO.ER.B1.126.52.2L)

(316) Eu gosto            de viajar com qualquer tipologia de transporte,  
    seja            um    carro, um    comboio, um    avião, uma    bicicleta.

I    like-PRES-1SG of    travel with whatever    tipe            of    transport  
    be-SBJV-PRES-3SG ART.IDEF car            ART.IDEF trem            ART.IDEF plane    ART.IDEF bicycle

'I like to travel by any means of transport, including cars, trains, planes, or bicycles.'

(PLE, PA\_1\_07\_75.3S)

(317) Depois, Varna é uma cidade de eventos diversos relacionados com a cultura – sejam típicas búlgaras ou sejam internacionais.

then Varna be-PRES-3SG ART.DEF city of events diverse-PL related with ART.DEF culture be-SBJV-PRES-3PL typical-PL Bulgarian-PL or be-SBJV-PRES-3PL international-PL

'After all, Varna is a city in which various cultural events are held –including typical Bulgarian and international events.'

(PEAPL2, BÚLGARO.ER.B1.65.50.2L)

列挙表現は PLE で 4 例、PEAPL2 で 14 例の産出が見られた。学習者の習熟度別の産出は下表 111 の通りである。

表 111 列挙表現の産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE	PEAPL2
A1	1	
A2		
B1	3	14
B2		
C1		
全体	4	14

PLE で初級学習者 (イタリア語母語話者) による産出が 1 例確認できる以外はすべて中

級学習者による産出となっている。

母語話者別の産出は下表 112 の通りである。

表 112 列挙表現の産出 (母語別)

母語	PLE	PEAPL2
ドイツ語		4
ブルガリア語		3
チェコ語		1
中国語		6
スペイン語	1	
イタリア語	3	
全体	4	14

各コーパスで産出している母語話者集団が完全に異なっているのが特徴的である。列挙表現は中国語、ドイツ語、イタリア語、ブルガリア語、スペイン語、チェコ語学習者によって産出されているが、表現の性質上、同一の被験者による繰り返しが多くなっており、母語の影響というよりも個々の学習者の知識に起因するところが大きいと考えられる。また、被験者集団の多い英語母語学習者による産出は見られない。

### 7.3.23. その他定型表現

その他定型表現として、「好むにしろ好まざるにしろ」を表す *quer queiramos quer não* (whether we like or not) が上級のロシア語母語話者学習者によって 1 例産出された。意味合いとしては条件表現や譲歩表現に近いが、命題内容の動詞が接続法になっているのではなく、語彙も *querer* に固定されているために、文法というよりは語彙的な定型表現であると言える。

(318) ... estando na cidade, ficamos rodeados de pessoas, quer

queiramos quer não.

be-PRESPTCP in:ART.DEF city keep-PRES-1PL surrounded of persons either  
like-SBJV-PRES-1PL or not

‘... being in the city, we are surrounded by people, whether or not we like it.’

(PEAPL2, RUSSO.CA.C1.08.69.3Q)

### 7.3.24. 主節での誤用

接続法が文脈的、構造的に用いられるべきではない表現で誤用されている例で、もっとも多かったのは主節での接続法使用である。接続法形式は命令法や *talvez* (maybe) 表現などの特殊な表現を除き、基本的には主節で用いられることができない形式である。従って以下のような例はすべて誤用となる。

(319) Os ingleses não \*gostem muito fazer de esporte, prefererem  
o televisão e os computadores.

ART.DEF-PL English-PL not like-SBJV-PRES-3PL very much do-INF of sport prefer-PRES-3PL  
ART.DEF television and ART.DEF computer

‘English people do not enjoy playing sports very much, and instead prefer to watch  
TV or surf the Internet.’

(PLE, ED\_1\_07\_50.2L)

(320) Caso de não experimentado isto, \*faltasse-me uma coisa muito  
básica na minha vida.

case of not experienced it lack-SBJV-IPFV-3SG:me-ACC ART.IDEF thing basic  
in:ART.DEF my life

‘In case I do not try it, I will be lacking some basic issues.’

(PEAPL2, ALEMÃO.ER.B2.25.69.3Q)

(321) E por isso, ..., os Estados Unidos têm muitas problemas  
saudes (...); já \*seja a desenvolver um epidémico.

and for it ART.DEF-PL United States have-PRES-3PL many-PL problems

health already be-SBJV-PRES-3SG to develop ART.IDEF epidemic

‘As such, the United States has many health problems; there may already be a  
developing epidemic’

(PEAPL2, INGLÊS.CA.C1.23.50.2L)

(319)は初級学習者による規則動詞 *gostar* (like) の接続法の誤用例である。Terrell et al. (1987) ではこのような誤用から、学習者には *gostar* が-ar 動詞であるか-er/-ir 動詞であるかという知識が定着しておらず、いずれかの活用形式を当てはめているだけである可能性があることを指摘している。(320)は B2 レベルの学習者による産出例だが、反実仮想表現の帰結節、すなわち、過去未来(条件法)と混同されており、中級学習者でも2つの *irrealis* 形式を混同していることが考えられる。また、スペイン語では一部の動詞語彙において反実仮想の帰結節に過去未来の代わりに *-ra* 形の接続法未完了過去が用いられることがあり (Butt & Benjamin 2000)、当該の学習者にスペイン語の学習経験がある場合はこの知識が干渉している可能性もある。(321)は推測の表現として用いられており、主節で表現されるには接続法現在の *seja* ではなく直説法未来の *estará* や法的動詞の *poder* (can) を用いるべきである。すなわち、ここでも別の *irrealis* の表現との混同が起こっている。

主節での接続法誤用の習熟度別の産出は下表 113 の通りである。

表 113 主節での接続法の誤用 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE	PEAPL2
--------	-----	--------

A1		3
A2	14	3
B1		17
B2	9	1
C1		1
合計	23	25

PLE では初級の A1-A2 レベルに多く見られ、中級でも多くの誤用が見られる一方で、PEAPL2 では初級よりも B1 レベルの学習者に誤用が集中している。上級レベルでの誤用は PEAPL2 で 1 例確認できるが、初級から B1 と比較するとごく少数である。

次に被験者の母語別の誤用産出を見る (表 114)。

表 114 主節での接続法の誤用 (母語別)

母語	PLE	PEAPL2
ドイツ語	2	7
ヒンディー語	1	
ブルガリア語		1
中国語		1
スペイン語		1
スロヴァキア語	1	
ガリシア語		1
フランス語		1
ギリシア語		1
英語	11	4
イタリア語	1	2
日本語		1
リトアニア語		1
オランダ語		1
ポーランド語	3	2
ポルトガル語	1	
ルーマニア語	2	
ロシア語		1

不明	1	
合計	23	25

全体で 19 の母語話者と幅広い範囲の学習者に見られる。英語やドイツ語母語話者による誤用が特に多く見られるのは被験者数の多さによる影響であると考えられる。特に英語母語話者に関しては、母語に接続法に相当する明確な形態素が存在しないため法的動詞語彙と併せて接続法の過剰使用が起こっていたり (Collentine 1995)、動詞を -ar 動詞と -er/-ir 動詞を混同したまま化石化している学習者が多数いることが考察される (Terrell et al. 1987)。

(322) As pessoas francesas<sup>77</sup> não \*possam viver sem a sua  
baguette o quixo.

ART.DEF-PL persons French-PL not can-SBJV-PRES-3PL live-PL without ART.DEF theirbaguette  
or cheese

‘French people cannot live without baguettes and cheese.’

(PLE, ED\_1\_20\_50.2L)

その他では、日本語や中国語、ヒンディー語などアジア言語の他、ポーランド語やロシア語など東欧諸語を母語とする学習者にも誤用が散見される。また、ポルトガル語と近い接続法体系及び動詞語彙を持つロマンス諸語を母語とする学習者にも誤用が散見される。

(323) Os meus amigos \*digam que sou uma pessoa muito  
agradavel e simpática.

ART.DEF-PL my-PL friends say-SBJV-PRES-3PL that be-PRES-1SG ART.IDEF person very

<sup>77</sup> *francesa* の誤植と考えられる。

comfortable and sympathetic

‘My friends say that I am a very kind and relaxed man.’

(PLE, VE\_1\_09\_1.1A)

(324) Também\*apanhe um o autocarro de Coimbra à Madrid

no mes de Outubro ...

also pick.up·SBJV-PRES-3SG ART.IDEF ART.DEF bus from Coimbra to Madrid

in;ART.DEF month of October

‘I also took a bus from Coimbra to Madrid in October.’

(PEAPL2, ESPANHOL.ER.A2.62.75.3S)

(325) Fique muito sorpsendida da experiência vivida, ...

become·SBJV-PRES-1SG very surprised of;ART.DEF experience vivid

‘I became very surprised by the powerful experience.’

(PEAPL2, GALEGO.CFA2.07.52.2L)

ただし、スペイン語やガリシア語など、イベロロマンス語母語話者による誤用のほとんどは直説法完了過去との混同とも考えられる (323)(324)(325)。

### 7.3.25. 指示関係詞表現

先行詞が非指示的であったり、特定集団の中の人や物一般である場合は関係詞節内で接続法が用いられるのに対し、先行詞が実際に存在する物や人を指す場合には関係詞節内の動詞形式は直説法となる。先行詞が実在する物や人であるにもかかわらず接続法形式（特に接続法現在）が用いられている事例が PLE で 4 例、PEAPL2 で 21 例確認された。

(326) Geralmente eu sou a pessoa que não \*tenha muito tempo



livre, ...

generally I be-PRES-1SG ART.DEF person REL not have-SBJV-PRES-1SG much time  
free

‘I am generally a man with little time, ...’

(PEAPL2, POLACO.ER.B1.101.33.1J)

(327) Hoje em dia o uso do telemóvel é uma actividade que  
\*ocupe muito do nosso tempo.

today in day ART.DEF use of:ART.DEF cellphone be-PRES-3SG ART.IDEF activityREL  
occupy-SUBJ-PRES-3SG much of:ART.DEF our time

‘Today, the use of cell phones is an activity that occupies much of our time.’

(PLE, BU\_2\_44\_45.2L)

(326)では「私」という最も具体的かつ実在的な人物を修飾する関係詞表現であるため、従属節内では直説法が用いられるべきである。(327)では *actividade* は不定冠詞に続いているが、実際に私たちの時間を拘束している行動であるため、指示的な初出情報であり、関係詞節内ではやはり直説法が用いられるべきと考えられる。

産出された誤用を被験者の習熟度別にまとめる (表 115)。

表 115 指示関係詞表現における接続法誤用 (習熟度別)

学習者習熟度	PLE	PEAPL2
A1		
A2		3
B1		13
B2	4	4
C1		1
合計	4	21

PEAPL2 では初級の A2 レベルの学習者にも誤用が見られるが、大部分は中級学習者に集中している。初級では関係節内での接続法の用法が十分に習得されていないため、誤用もまた中級以降から多くなる傾向があると考えられる。

次に母語別の誤用を見ていく（表 116 表 116 指示関係詞表現における接続法誤用（母語別））。

表 116 指示関係詞表現における接続法誤用（母語別）

母語	PLE	PEAPL2
ドイツ語		4
カタルーニャ語		1
スペイン語		2
ガリシア語		2
ギリシア語		1
英語	1	3
イタリア語		1
オランダ語		1
ポーランド語		3
ルーマニア語	3	
ロシア語		2
トルコ語		1
合計	4	21

PLE では関係詞での誤用そのものが少なく、ルーマニア語母語学習者に誤用が偏っているものの、PEAPL2 と合わせた全体として見ると主にヨーロッパ言語母語話者に占められている。ドイツ語や英語などの非ロマンス西欧諸語、ポーランド語やロシア語などの東欧言語に加え、スペイン語やガリシア語など、関係詞表現においてポルトガル語と類似した叙法体系を持つイベロロマンス諸語の母語話者にも誤用が見られるのが興味深い(328)(329)。

(328) O dia em que \*tenha a minha casa adoptarei um gatinho ...

ART.DEF day in REL have<sup>-</sup>SBJV-PRES-1SG ART.DEF my house adopt<sup>-</sup>FUT-1SG ART.IDEF  
cat

‘When I get a house, I will have a cat ...’

(PEAPL2, GALEGO.ER.B1.137.33.1J)

(329) Meu Deus... que será o que não \*tenha visto esta cidade.

My God what be<sup>-</sup>FUT-3SG what not see<sup>-</sup>SBJV-PRES-1SG this city

‘My God! What I have not yet seen in this city?’

(PEAPL2, ESPANHOL.ER.B2.23.6.1B)

東アジア諸語母語話者による誤用は確認できないが、一方で非指示関係詞表現や一般関係詞表現における TLU も少なく、英語母語話者と合わせて関係詞節内での接続法使用の習得に困難があるものと推測される。

### 7.3.26. 不定詞が要求される表現

前置詞の後や動詞の補語など、動詞の形を不定詞とすべき表現で接続法が誤用されている事例が 4 例見られた。

(330) ... queria fazer um pequeno trabalho na Espanha por \*puder pagar um apartamento ...

want<sup>-</sup>IPFV-1SG do<sup>-</sup>INF ART.IDEF small work in;ART.DEF Spain to  
can<sup>-</sup>SBJV-FUT-1SG pay<sup>-</sup>INF ART.IDEF apartment

‘... I wanted to take a temporary job in Spain to be able to pay for my apartment.’

(PLE, PA\_2\_33\_5.1B)

(331) ... e assim ficam por oito o nove anos alí, sem \*souber  
nada sobre as coisas que ...  
and so stay<sup>-PRES-3PL</sup> for eight or nine years there without know<sup>-SBJV-FUT-3SG</sup>  
nothing about ART.DEF things REL

‘... and they remained like this for eight or nine years, there without anyone  
knowing anything about them ...’

(PLE, SI\_2\_01\_34.1J)

PLE では接続法未来が不定詞と混同されている事例が 2 例、いずれも中級 (B1-B2) レベルのイタリア語母語とスペイン語母語の学習者によって産出された(330)(331)。両例とも前置詞の後に続いており、接続法を産出しようとする意図よりも、不定詞の形式を誤って覚えていたことが推測される。

(332) Eu gosto \*visite.

I like<sup>-PRES-1SG</sup> visit<sup>-SBJV-PRES-1SG</sup>

‘I like to travel.’

(PEAPL2, TURCO.ER.A1.39.1.1A)

(333) Eu e que é a minha amiga queiremos \*visite  
diffirente país.

I and that be<sup>-PRES-3SG</sup> ART.DEF my friend want<sup>-PRES-1SG</sup> visit<sup>-SBJV-PRES-1SG</sup>  
different country

‘My friend and I would like to visit a different country.’

PEAPL2 で確認された 2 例はいずれも同一の A1 レベルのトルコ語母語学習者によるものである(332)(333)。いずれも *gostar de* (like to)、*querer* (want) の後に続くべき不定詞を接続法現在と混同している、あるいは動詞補語節を形成する接続詞 *que* (that) を省略してしまっている事例である。これらの表現では不定詞の動作主が発話者と異なる場合、*que* で導入される補語節を用いて以下のように言い換えることができる。

(334) Eu gosto que (ele/ela/ você) visite a nossa empresa.

I like<sup>~PRES-1SG</sup> that he she you visit<sup>~SBJV-PRES-3SG</sup> ART.DEF our company

‘I would like him/her/you to visit our company.’

(335) Eu e a minha amiga queremos que (ele/ela/ você) visite  
um país diferente.

I and ART.DEF my friend want<sup>~PRES-1PL</sup> that he she you visit<sup>~SBJV-PRES-1SG</sup>

ART.IDEF coutry different

‘My friend and I want him/her/you to visit a different country.’

(作例)

このため、産出された誤用例は意味的に接続法要求表現に近いが、構造的に接続法は許容されない。学習者は接続法表現の構造が習得できていないが、意味概念には気づいているものと考えられる。

### 7.3.27. 理由表現

肯定の理由表現では、理由の内容はモダリティ的に無標 (*realis*) であるため、理由の接続詞 *porque* (because) 以降に接続法を要求する動詞補語表現や接続詞表現がない限り、動

詞は直説法となる。直説法形式が用いられるべき理由表現で接続法が用いられている例は3例見られた。

(336) E mudei no cidade com a minha familia porque  
\*continuasse os meus estudos.

and move<sup>-PFV-1SG</sup> in<sup>ART.DEF</sup> cidade with<sup>ART.DEF</sup> my family because  
continue<sup>-SBJV-IPFV-1SG</sup> ART.DEF-PL my<sup>-PL</sup> studies

‘I moved to the city with my family because I wanted to continue my studies.’

(PLE, BU\_2\_37\_70.3Q)

(337) ..., não porque não queira, mas porque me \*sinta  
estranho intervir em discussões entre gente que já se conhece.

not because not want<sup>-SBJV-PRES-1SG</sup> but because REL feel<sup>-SBJV-PRES-1SG</sup>  
strange interfere in discussions among everyone REL already REFL know<sup>-PRES-3PL</sup>

‘... it is not because I want to, but I feel odd to insert myself into conversation  
between familiar people.’

(PLE, BU\_2\_39\_7.1B)

(338) Não sei porque não \*vá lá mais gente.

not know<sup>-PRES-1SG</sup> because not go<sup>-SBJV-PRES-1SG</sup> there more everyone

‘I do not know why more people do not go there.’

(PEAPL2, INGLÊS.ER.B1.99.33.1J)

PLEでの産出はいずれも中級のルーマニア語母語話者による誤用であった。(336)は、同じく *irrealis* を表現する直説法過去未来(条件法)と混同しているものと考えられる(339)。この場合の過去未来形式は願望や希求、または過去の相対時制として機能するが、接続法

形式にはそのような機能はない。なお、文脈的に *para que* で導入される目的の表現とすると接続法表現となる(339)。

(339) E mudei à cidade com a minha família porque  
continuaria os meus estudos.

and move~PFV-1SG to;ART.DEF city with ART.DEF my family because  
continue~COND-1SG ART.DEF-PL my~PL studies

‘I moved to the city with my family because I would like to continue my studies.’

(340) E mudei à cidade com a minha família para que  
continuasse os meus estudos.

and move~PFV-1SG to;ART.DEF city with ART.DEF my family for that  
continue~SBJV-IPFV-1SG ART.DEF-PL my~PL studies

‘I moved to the city with my family in order to continue my studies.’

(作例)

(337)の例は最初の否定の理由 (*não porque não queira*) での接続法利用に誘導されて、肯定の理由でも接続法が用いられてしまった可能性が考えられる。PEAPL2 での 1 例(338)は B1 レベルの英語母語話者による誤用であった。この表現は補語となる名詞節であり、直説法が要求される。この例では否定の表現との見かけの類似性が叙法選択に影響してしまったこと、または単純に動詞 *ir* の活用<sup>78</sup>を習得していないことが考えられる。

### 7.3.28. 比較表現

比較表現の比較対象の部分で接続法が用いられている例が、PEAPL2 で 3 例確認された。

---

<sup>78</sup> 動詞 *ir* の直説法現在の三人称単数は *vai* となるべきである。なお、スペイン語における *ir* の直説法現在三人称単数は誤用の通り *vá* となる。

この表現も理由表現と同様にモダリティ的には無標 (realis) であり、英語の *than* に相当する *que* または *do que* によって導入される文では接続法を要求する名詞節や副詞節が続かない限り、直説法が用いられる。

(341) Eu gosto de meu edificio é tanto novo que não

\*tenha problemas com insectes, ni ratas, ...

I like<sup>-PRES-1SG</sup> of my building be<sup>-PRES-3SG</sup> such new as not

have<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup> problems with insects nor mice

‘I like my building as it is so new that I do not have any problems with insects or mice.’

(PEAPL2, INGLÊS.CFA2.05.77.3T)

(342) ... com melhor trabalho que \*ficassem a trabalhar no povo

(na zona rural)

with better work<sup>REL</sup> than stay<sup>-SBJV-IPFV-1SG</sup> to work<sup>-INF</sup> in<sup>ART.DEF</sup> people

in<sup>ART.DEF</sup> zone rural

‘... with better work than continuing to work in a rural area.’

(PEAPL2, ESPANHOL.ER.B1.39.77.3T)

(343) ... temos muito mais do que outros povos do mundo

\*pudessem imaginar nunca.

have<sup>-PRES-1PL</sup> much more than other<sup>-PL</sup> people<sup>-PL</sup> of<sup>ART.DEF</sup> world

can<sup>-SBJV-IPFV-3PL</sup> imagine<sup>-IFN</sup> never

‘... we have much more than other people in the world can imagine.’

(PEAPL2, GALEGO.ER.B1.86.77.3T)



(341)は A2 レベルの英語母語学習者に産出された同等比較の表現である。「虫もネズミも出ない」という内容は特に接続法要求表現を受けていない内容のため、接続詞 *que* (*than*) に続く比較対象の部分は接続法現在の *tenha* ではなく直説法現在の *tem* が続くべきである。また、関係代名詞などが抜けている文となっている。(342)は B1 レベルのスペイン語母語学習者による優等比較表現である。比較対象の部分の動詞は接続法未完了過去の *ficassem* となっているが、不定詞の *ficar* が用いられ、名詞句として *trabalho* (*work*) と比較されるべきである。(343)はガリシア語母語学習者に産出された優等比較表現である。「他国の人々が想像するよりも」という可能性や推測の表現からなる比較対象ではあるが、接続詞句 *do que* 以降の動詞は接続法要求表現を受けないために接続法未完了過去の *pudesse* ではなく、直説法過去未来の *poderiam* とするべきであり、*irrealis* を表現する動詞形態素間の混同が起こっている。

### 7.3.29. 結果表現

接続表現の *de modo que* や *de maneira que* は、接続法を続けることで目的表現 (*in order*) となるが、直説法を続けると結果 (*so that*) を表す内容となる (本論 1.4.1.7)。本研究では PEAPL2 のデータに、*de modo que* 表現によって結果を示していると思われるものの従属節内で接続法を用いている例が見られた。

(344) Acima disso, muitos representavam pontos de vistas normativas de modo que não \*fosse possível nem sequer aprender técnicas de pesquisa ou examinar outras abordagens teóricas pelo seu valor epistemológico.

above of:it many.people represent-IPFV-3PL points of views normative-PL in way that not be SBJV-IPFV-3SG possible nor even learn-INF techniques of

research or examine<sup>-INF</sup> other<sup>-PL</sup> approaches theoretical by<sup>ART.DEF</sup> its value  
epistemological

‘Moreover, several people represented normative points of view so it was not be possible to learn research techniques or to examine other theoretical approaches based on its epistemological value (of studying at the university).’

(PEAPL2, ALEMÃO.ER.B2.33.6.1B)

「多くの人々が規範的な内容を」のが「研究手法の習得や他のアプローチの検証ができない」ようにするためではなく、「多くの人々が規範的な内容を」結果として「研究手法の習得や他のアプローチの検証ができない」と解釈することが妥当であろう。そのため、*ser* (be) の接続法未完了過去 *fosse* を用いるのではなく、直説法未完了過去 *era* や直説法過去未来 *seria* を用いるべきである。

### 7.3.30. Quer dizer que

*Quer dizer que* (that is to say) は、一見すると構造的に動詞 *querer* (want) に続く当為判断モダリティ表現のようであるが、実際は言い換えやつなぎ (フィラー) の等位接続の定型表現として機能しているため、後続する内容で動詞が接続法になることはない。この表現で接続法が誤用されている例が見られた。

(345) Isto quer dizer que \*passe muito tempo a sair, tomar  
cafés, ir aos parques etc.

it want<sup>-PRES-3SG</sup> say<sup>-INF</sup> that pass<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup> much time to go.out<sup>-INF</sup> take<sup>-INF</sup>  
coffees go<sup>-INF</sup> to<sup>ART.DEF-PL</sup> parks

‘Specifically, much time is spent going out, having coffee, going to the parks, etc.’

この例では接続法現在の *passe* ではなく直説法現在の *passa* (または直説法過去形式) を用いるべきであり、上述の通り *quer* に影響されて当為判断の表現と誤解し接続法を誤用してしまっているものと考察される。

#### 7.4. まとめ

本章では Corpus do PLE と Corpora de PEAPL2 の両データから得られた結果を詳細に分析してきた。前半ではそれぞれのコーパスの全体的像についてまとめた。接続法は初級学習者 (A1) から産出が見られるが、産出が大幅に増えるのは中級学習者からで、上級にかけては緩やかに微増減する。学習者の母語別に見ると、英語やドイツ語、イタリア語、スペイン語など、規模の大きい母語話者集団による接続法産出が目立つが、ポーランド語やブルガリア語、PEAPL2 ではチェコ語やギリシア語や広東語など、母集団が中小規模かつ非西欧言語母語話者による産出も目立った。時制別に見ると、接続法現在の産出が圧倒的に多く、同形式が関係する表現の豊かさが関係しているものと見られる。

後半では特に表現の意味機能の比重を置いて記述的にまとめた。先行研究で習得がなされやすいとされる願望・希求表現を始めとする、当為判断モダリティの各表現と、同じく習得がなされやすいとされる時間表現、条件表現の産出が多く見られた。加えて、先行研究では言及されることがなかった反実仮想表現や譲歩表現でも多くの産出が見られた。また、先行研究で習得がなされにくいとされる *factive* 感情表現の産出はやはり少なかった。これに対し、同じく先行研究で習得がなされにくいとされる関係詞節表現については、*factive* 感情表現などほど産出が少なくはなく、初級学習者による産出も見られた。先行研究で意見が分かっていた疑念表現の産出は、本研究では少なかった。

以上、本論後半では表現ごとに縦割りに考察してきたが、次章では第 5 章で挙げた各研

究設問に沿って、接続法産出をさらに整理して考察していく。

## 第 8 章 研究設問に対する考察

### 8. 研究設問に対する考察

本章では前章で得られた学習者コーパスの分析結果を再整理し、研究設問に沿って考察、議論していく。ここで再び研究設問を確認する。

- ① 接続法習得順序の推定
- ② 接続法未来の習得
- ③ 接続法と未来・過去未来との混同
- ④ 日本人学習者の接続法使用と習得

#### 8.1. 接続法習得順序

##### 8.1.1. 時制別接続法習得順序

時制形式の習得順序については前章を参照されたい。初級の A レベルから各接続法形式が産出されるが、全体を通じて接続法現在に集中していた。接続法未完了過去、接続法未来も初級から産出が見られるが、PLE では A1-A2 レベル、PEAPL2 では B1 レベルで接続法未完了過去の産出が接続法未来を大きく上回り、その後習熟度が上がるにつれ両者の産出は均衡してくる。

##### 8.1.2. 表現別接続法習得順序

前章で意味機能別の接続法使用を細部にわたって見てきたが、ここでは習熟度別に各意味機能の産出を整理して、習得順序を考察していく。

先行研究を再確認すると、願望や使役・命令、依頼などの当為判断表現における接続法使用が定着しやすいとされる (Terrell et al. 1987, Stokes 1988, Collentine 1995, Sanz 2003a, Isabelli & Nishida 2005, Gudmestad 2006, Bento 2013)。一方で非指示的關係詞表現 (Stokes 1988, Isabelli & Nishida 2005, Bento 2013) や感情表現 (Terrell et al. 1987,

Stokes 1988, Collentine 1995, Sanz 2003a, Isabelli & Nishida 2005, Gudmestad 2006, Bento 2013) においては接続法産出が鈍いとされる。また、疑念表現における接続法は習得されやすいとする Collentine (1995) と習得されにくいとする Stokes (1988) で意見が分かれている。

下表 117 では、本研究で得られた意味機能別の接続法産出を被験者の習熟度でも分類して提示する。まずは純粋な産出数（粗頻度、ロウデータ）を見る。

表 117 表現別・習熟度別接続法産出

	PLE						PEAPL2									
	A1-A2		B1-B2		C1-C2		A1		A2		B1		B2		C1	
	TLU	誤用	TLU	誤用	TLU	誤用	TLU	誤用	TLU	誤用	TLU	誤用	TLU	誤用	TLU	誤用
1 願望・希求表現	8	3	4		2				2		48	5	7	1	12	1
2 許可表現					1						1		1			
3 命令・使役表現	2		5		7		3		1		18	1	2		4	
4 目的表現	3		4		6				2		22	1	2		1	
5 当為評価表現	3		3		3				1		9					
6 心配表現					1						2					
7 可能性表現	4		8		1				1		15		3		2	
8 疑念表現	1		2								5	1				
9 否定表現			1	1							4		1	1	1	
10 仮定想像表現			2	1							1					
11 時間表現	3	4	4	1	1		1			1	25	17	2	2	1	1
12 条件表現	2	2	9	1	13				1		18	5	7		2	
13 反実仮想表現	6	1	12		5				4		56	1	7		3	
14 陳述表現	3		8	1	4				2	2	2	6	2	2		
15 真偽判断評価表現	1	1	2		2				1		4	5			2	
16 factive 感情表現			2						1		1					

17	譲歩表現	5	1	12	2	6			1		53	8	11				
18	様態表現										1						
19	非指示関係詞	2		7		7					7	2					
20	一般関係詞	1		6	3	4	4				5	4	3	1			
22	ou seja	3		7					1		15		5	1			
23	列挙	1		3							14						
24	quer queiramos quer														1		
25	主節		14		9			3		3		17	1		1		
26	指示関係詞				4					3		13	4		1		
27	不定詞				2			2									
28	理由				2							1					
29	比較表現									1		2					
30	quer dizer que											1					
31	結果												1				
総合計		48	26	101	27	63	4	4	5	18	10	326	80	53	11	42	4

願望や希求の表現は両コーパスとも初級学習者からの産出が多く、同表現が習得されやすいとする各先行研究の結果を支持する結果となっている。同じく先行研究で習得がされやすいとされる時間表現や条件表現も、初級からある程度の産出が見られる。また、各先行研究で習得がなされにくいとされる **factive** な感情表現では接続法使用が合計で4例と少ない。本研究では同構造における接続法不使用について考慮しないため、消極的ではあるがこれも各先行研究を支持する結果となっている。一方、各先行研究で習得がなされにくいとされる非指示関係詞表現や一般関係詞表現における接続法使用は、PLE では初級から少し産出が見られるものの、全体的には中級以降からまとまった産出が現れている。そのため、習得がなされにくいとするよりも、初級学習者にとって難解であるにとらえることが適切であると考えられる。先行研究で見解が分かれている疑念表現では両コーパスともに接続法産出が少なく、中級以降にわずかに産出が見られる程度である。この点から、習得

されやすいとする Collentine (1995) ではなく、習得がなされにくいとする Stokes (1988) を支持するような結果となっている。

次に、習得の傾向を考察するが、産出の粗頻度では各習熟度別サブコーパスのサイズが考慮されておらず、習熟度間の直接の比較が意味をなさないことがある。そこで、粗頻度を習熟度集団別の総語数で割って 10 万倍した標準化スコアを算出する (表 118)。

表 118 表現別・習熟度別接続法産出 (標準化スコア)

コーパス	PLE						PEAPL2									
	A1-A2		B1-B2		C1-C2		A1		A2		B1		B2		C1	
語数	32872		31568		12855		15452		20478		67015		11474		6622	
	TLU	誤用	TLU	誤用	TLU	誤用	TLU	誤用	TLU	誤用	TLU	誤用	TLU	誤用	TLU	誤用
1 願望・希 求表現	24.34	9.13	12.67	0.00	15.56	0.00	0.00	0.00	9.77	0.00	71.63	7.46	61.01	8.72	181.21	15.10
2 許可表現	0.00	0.00	0.00	0.00	7.78	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	1.49	0.00	8.72	0.00	0.00	0.00
3 命令・使 役表現	6.08	0.00	15.84	0.00	54.45	0.00	19.41	0.00	4.88	0.00	26.86	1.49	17.43	0.00	60.40	0.00
4 目的表現	9.13	0.00	12.67	0.00	46.67	0.00	0.00	0.00	9.77	0.00	32.83	1.49	17.43	0.00	15.10	0.00
5 当為評価 表現	9.13	0.00	9.50	0.00	23.34	0.00	0.00	0.00	4.88	0.00	13.43	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
6 心配表現	0.00	0.00	0.00	0.00	7.78	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	2.98	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
7 可能性 表現	12.17	0.00	25.34	0.00	7.78	0.00	0.00	0.00	4.88	0.00	22.38	0.00	26.15	0.00	30.20	0.00
8 疑念表現	3.04	0.00	6.34	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	7.46	1.49	0.00	0.00	0.00	0.00
9 否定表現	0.00	0.00	3.17	3.17	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	5.97	0.00	8.72	8.72	15.10	0.00
10 仮定想像 表現	0.00	0.00	6.34	3.17	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	1.49	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
11 時間表現	9.13	12.17	12.67	3.17	7.78	0.00	6.47	0.00	0.00	4.88	37.31	25.37	17.43	17.43	15.10	15.10
12 条件表現	6.08	6.08	28.51	3.17	101.13	0.00	0.00	0.00	4.88	0.00	26.86	7.46	61.01	0.00	30.20	0.00
13 反実仮想 表現	18.25	3.04	38.01	0.00	38.90	0.00	0.00	0.00	19.53	0.00	83.56	1.49	61.01	0.00	45.30	0.00
14 陳述表現	9.13	0.00	25.34	3.17	31.12	0.00	0.00	0.00	9.77	9.77	2.98	8.95	17.43	17.43	0.00	0.00
15 真偽判断	3.04	3.04	6.34	0.00	15.56	0.00	0.00	0.00	4.88	0.00	5.97	7.46	0.00	0.00	30.20	0.00



評価表現																
16	factive 感情表現	0.00	0.00	6.34	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	4.88	0.00	1.49	0.00	0.00	0.00	0.00
17	譲歩表現	15.21	3.04	38.01	6.34	46.67	0.00	0.00	0.00	4.88	0.00	79.09	0.00	69.72	0.00	166.11
18	様態表現	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	1.49	0.00	0.00	0.00	0.00
19	非指示関係詞	6.08	0.00	22.17	0.00	54.45	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	10.45	0.00	17.43	0.00	0.00
20	一般関係詞	3.04	0.00	19.01	9.50	31.12	31.12	0.00	0.00	0.00	0.00	7.46	5.97	26.15	0.00	15.10
21	ou seja	9.13	0.00	22.17	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	4.88	0.00	22.38	0.00	43.58	0.00	15.10
22	列挙	3.04	0.00	9.50	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	20.89	0.00	0.00	0.00	0.00
23	quer queiramos	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	15.10
24	主節	0.00	42.59	0.00	28.51	0.00	0.00	0.00	19.41	0.00	14.65	0.00	25.37	0.00	8.72	0.00
25	指示関係詞	0.00	0.00	0.00	12.67	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	14.65	0.00	19.40	0.00	34.86	0.00
26	不定詞	0.00	0.00	0.00	6.34	0.00	0.00	0.00	12.94	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
27	理由	0.00	0.00	0.00	6.34	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	1.49	0.00	0.00	0.00
28	比較表現	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	4.88	0.00	2.98	0.00	0.00	0.00
29	quer dizer que	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	1.49	0.00	0.00	0.00
30	結果	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	8.72	0.00	0.00

全体的には産出数が多い意味表現ほど初級学習者から使用が見られる。また、当為判断モダリティや真偽判断モダリティといった大枠ではなく、個々の意味表現ごとに習得のしやすい表現、習得のしにくい表現の傾向が見られる。願望・希求表現での接続法使用は、特に PLE において初級学習者に偏っている。また、命令・使役表現、目的表現、当為判断評価表現といった当為判断モダリティの表現は初級から多くの産出が見られるが、中級以降で倍以上に産出が増加している。一方、真偽判断モダリティの表現でも時間表現、条件

表現、反実仮想表現において、また、その他では譲歩表現において初級から接続法使用が多く見られ、やはり中級以降爆発的に倍増していく傾向がある。

各種誤用に関しては、習熟度と反比例しているわけではなく、初級に集中しているものと中級に集中しているものが見られる。PLE における主節での接続法形式の誤用、及び PEAPL2 における不定詞を用いるべき文脈での接続法形式の誤用は、初級の A1-A2 レベルで多くなっているが、その他では中級に誤用が集中している。すなわち、ある程度接続法が定着して以降、誤用も増加する傾向にあると言え、この点では習得と後退を繰り返す Sanz (2003a) の「非直線的な」習得像を支持していると言える。

このように、コーパスによって該当する意味表現が異なるが、初級から産出が多く見られるもの、中級から産出が始まるものが見られ、さらに初級から中級、上級へと段階的に産出が増えていくもの、初級または中級をピークに習熟度が上がるにつれ産出が少なくなるもの、初級から上級まで一貫して産出が少ないものに分類できる。この予測を受け、各表現における接続法産出 (TLU、誤用) をクラスター分析<sup>79</sup>にかけて客観的に実証する。まずは PLE のデータを分析する。

---

<sup>79</sup> 早狩進氏が公開する統計アドイン集 *Seagull-Stat* の有償版を使用した。詳細は同氏のウェブサイトを参照されたい。

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~hayakari/> (2015 年 5 月 2 日閲覧)

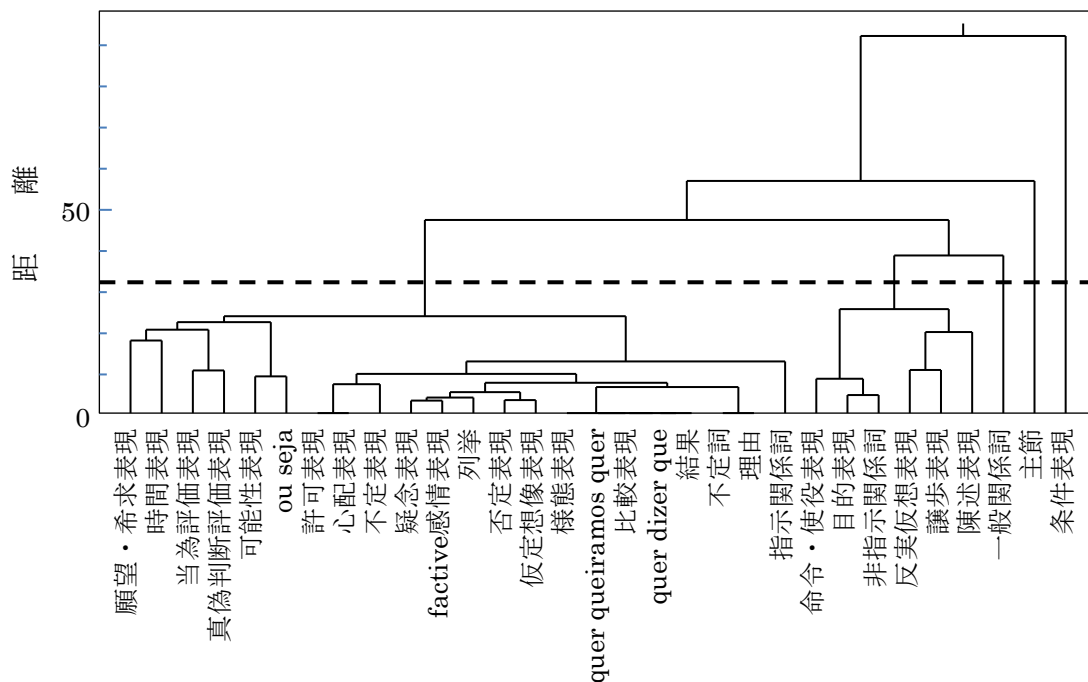


図 20 PLE 標準化スコアのクラスター分析結果 (樹形図)

PLE のクラスター群は樹形図 (上図 27) より 5 分割した。各クラスターにおける習熟度別 TLU と誤用の平均値は下表 119 の通りである。表中濃色の網掛は最大値が観測されたクラスター、淡色の網掛は最小値が観測されたクラスターである。

表 119 PLE 標準化スコアのクラスター分析結果 (クラスター平均値)

	第 1 クラスター	第 2 クラスター	第 3 クラスター	第 4 クラスター	第 5 クラスター
A TLU	3.477	10.647	3.042	0.000	6.084
A 誤用	1.159	1.014	0.000	42.589	6.084
B TLU	5.732	25.342	19.007	0.000	28.510
B 誤用	1.659	1.584	9.503	28.510	3.168
C TLU	4.075	45.378	31.116	0.000	101.128
C 誤用	0.000	0.000	31.116	0.000	0.000
群内項目	1 願望・希求表現	3 命令・使役表現	20 一般関係詞	25 主節	12 条件表現

	2 許可表現	4 目的表現		
	5 当為評価表現	13 反実仮想表現		
	...	14 陳述表現		
	その他 18 表現	17 譲歩表現		
		19 非指示関係詞		

大多数の意味表現における接続法産出が第一クラスターに分類されている。第一クラスターの平均値から考察すると、初級から上級まで TLU の値が低く、伸びが見られない。従って、接続法習得に劇的な成長が見られないグループである。ただし、願望・希求表現、可能性表現、時間表現は他の表現と比較して相対的に産出数が高いため、初級からコンスタントに産出が続いている表現であると考察される。なお、誤用は主節における誤用以外すべてここに含まれる。命令・使役、目的、反実仮想、陳述、譲歩、非指示関係詞表現が含まれる第二クラスターでは、初級から上級まで緩やかながら TLU の平均が上昇している。すなわち、習熟度に沿って習得が見られるグループである。一般関係詞表現が分類されている第三クラスターでも初級から上級まで緩やかに TLU が上昇しているが、誤用も上昇している。主節における誤用は第四クラスターに分類されている。これは初級、中級とも同水準の誤用が見られることから、中級まで改善が見られない誤用である。第五クラスターでは中級から上級へと急激に TLU が増えている。

続いて PEAPL2 のデータを分析する。

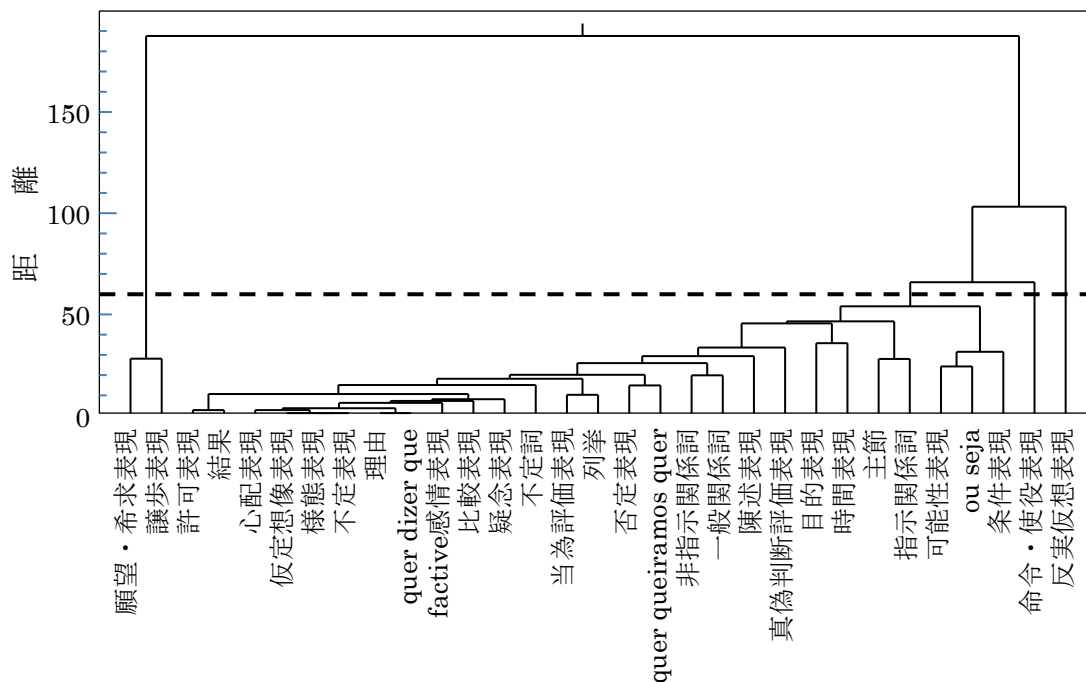


図 21 PEAPL2 標準化スコアのクラスター分析結果 (樹形図)

こちらは樹形図 (上図 28) より 4 つのクラスター群に分割した。各クラスターにおける習熟度別 TLU と誤用の平均値は下表 120 の通りである。

表 120 PEAPL2 標準化スコアのクラスター分析結果 (クラスター平均値)

	第 1 クラスター	第 2 クラスター	第 3 クラスター	第 4 クラスター
A1 TLU	0.000	0.249	19.415	0.000
A1 誤用	0.000	1.245	0.000	0.000
A2 TLU	7.325	1.878	4.883	19.533
A2 誤用	0.000	1.878	0.000	0.000
B1 TLU	75.356	8.666	26.860	83.563
B1 誤用	3.731	4.190	1.492	1.492
B2 TLU	65.365	9.721	17.431	61.007
B2 誤用	4.358	3.352	0.000	0.000
C1 TLU	173.664	6.970	60.405	45.304

C1 誤用	7.551	1.742	0.000	0.000
群内項目	1 願望・希求表現 17 譲歩表現	2 許可表現 4 目的表現 5 当為評価表現 … その他 23 表現	3 命令・使役表現	13 反実仮想表現

第一クラスターには願望希求表現と譲歩表現が分類されている。これらは初級 (A2) から産出が見られ、PLE の第五クラスターと同様、中級から上級にかけて急激に習得が見られるグループである。B1 から TLU が急激に増えるが、B2、C1 で減少し、かつ誤用が増えてくるグループである。すなわち、中級で一度表現を習得しながらも上級で停滞する、spiral effect (Sanz 2003a) に陥っている事例である。第二クラスターは PLE における第一クラスターと同様、初級から産出が見られるが、上級まで劇的な向上が見られず、かつ誤用も一貫して多いグループであり、誤用も含め大多数の意味表現における接続法産出がここに分類されている。第三クラスターはやや特殊であり、初級から多くの産出が見られ、A2、B2 と TLU が落ち込むが上級に向けてなだらかな習得が見られる。また、一貫して誤用が少ない。第四クラスターは B1 レベルから急激に産出が増えるが、その後習熟度が上がるにつれてやや TLU が落ち込んでゆくグループである。ただし、全体を通じて誤用が少ないため、PLE の第四クラスターのように上級で停滞するととらえるより、PLE の第二クラスターのようになだらかに習得が続いているととらえるほうが適切であると見られる。両コーパスで傾向が異なるが特殊な習得傾向を見せた意味表現を下表 121 にまとめる。

表 121 意味機能別接続法習得順序

初級から産出が見られ、上級にかけて段階的に産出増	中級以降から急激に産出	中級以降から産出、上級で停滞
命令・使役表現		
反実仮想表現		

PLE	PEAPL2	PLE	PEAPL2	PLE	PEAPL2
目的表現		条件表現	願望・希求表現	一般関係詞表現	
陳述表現			譲歩表現		
譲歩表現					
非指示関係詞表現					

両コーパスで共通した特徴を持っていたのは、命令・使役表現と反実仮想表現で、ともに初級から上級までなだらかな接続法習得の傾向を示している。その他、目的表現、陳述表現、譲歩表現、非指示関係詞表現が、PLE のみで同様の傾向を示している。中級から産出が見られ、上級にかけて急激に使用が多くなるのが、PLE では条件表現、PEAPL2 では願望・希求表現と譲歩表現である。また、PLE のみであるが、一般関係詞表現が中級から使用が見られながら、上級から使用が停滞し、かつ誤用も増えるという傾向を見せている。

## 8.2. 接続法未来の習得

他のロマンス語では見られない、現代ポルトガル語に独特な文法のひとつとして接続法未来が挙げられる (Fleischman 1982)。先行研究の多くを占めるスペイン語接続法習得研究では接続法未来の習得や誤用についての検証ができず、従って、接続法未来の習得研究はポルトガル語習得研究独特の関心であると言える。

本論 1.2.2.2 にて先述の通り、接続法未来は形態的に接続法現在とは大きく異なる上、用法も限定的である。一方で、ポルトガル語での接続法未来表現は、他の言語では接続法現在や直説法未来、その他表現などによって表現されるため、それらとの使い分けの理解が難しく、混同が多く生じてしまうことも想定される。

本節では接続法未来の使用及び誤用を、習熟度と意味機能ごとに検証する。まず、接続法未来の習熟度別の産出及び誤用をまとめる (表 122)。

表 122 接続法未来の産出 (習熟度別)

被験者習熟度	PLE		PEAPL2	
	TLU	エラー	TLU	エラー
A1	5	1	1	
A2			1	3
B1	14	5	41	7
B2			11	1
C1	14		3	1
合計	33	6	57	12

両コーパスの被験者とも、初級から接続法未来を産出している。また、特に中級では TLU だけでなく誤用も多くなっている。ただし、各サブコーパスのサイズが異なるため、粗頻度の比較では正確な産出、習得像を見ることができない。そこで、粗頻度での絶対値が小さいため参考値ではあるが、各被験者集団における総語数当たりの産出を 100000 倍して標準化する。

表 123 接続法未来の産出(習熟度別、標準化スコア)

被験者習熟度 (総語数あたり)	PLE		PEAPL2	
	TLU	エラー	TLU	エラー
A1	15.21	3.04	64.72	
A2			4.88	14.65
B1	44.35	15.84	61.18	10.45
B2			95.87	8.72
C1	108.91		45.30	15.10

標準化したスコアを見ると中級以降の TLU が劇的に増加し、PLE では上級でさらに増加、PEAPL2 でも C1 でやや落ち込むものの、高い水準を保っていることがわかる。PEAPL2 では初級からの産出値も高いが、粗頻度が 1 であるために過剰評価となっていると言える。以上より、接続法未来の産出は初級から見られるが、誤用を含む習得が活発化していくの



は中級以降であるということが考察される。

次に学習者の母語別の産出を見ていく（表 124）。

表 124 接続法未来の産出（母語別）

被験者母語	PLE		PEAPL2	
	TLU	エラー	TLU	エラー
ドイツ語	3		11	2
ブルガリア語			1	
中国語			4	1
チェコ語			3	
朝鮮語	10			
スペイン語		1	2	1
スロヴァキア語		1		
フィンランド語			1	1
フランス語			4	
イタリア語	8	2		1
英語	1	1	19	4
日本語			4	1
コンカニ語	1			
オランダ語			2	
ポーランド語	4		6	
ポルトガル語	3			
ルーマニア語	3	1		
トルコ語				1
全体	33	6	57	12

全体で 18 の母語話者集団に産出されている。コーパス間で突出した産出を見せている被験者集団が異なっており、両コーパスで共通して産出が見られる被験者集団もドイツ語、スペイン語（PLE では誤用のみ）、英語、ポーランド語母語学習者に限られていることから、接続法未来の使用への母語からの積極的な影響は小さいと考えられる。コーパス別に見ると、PLE で朝鮮語とイタリア語母語学習者に、PEAPL2 では英語とドイツ語母語学習者に

産出が集中している。ただし、いずれももう一方のコーパスでは TLU が少ないか全く見られない。

地域別に見ると、先述の朝鮮語に加え日本語、中国語といった東アジア言語を母語とする学習者による産出が多い。また、産出数は少ないが、ポーランド語に加えてチェコ語、ブルガリア語など東欧言語母語話者による産出も見られる。一方で、接続法未来以外の接続法表現を共有するロマンス言語を母語とする学習者については、PLE におけるイタリア語母語学習者による産出こそ多いが、フランス語やルーマニア語といったその他のロマンス諸語母語話者による産出はアジア言語と比較して少なく、ポルトガル語が属するイベロロマンス語もスペイン語母語話者による数例となっている。

最後に、接続法未来が用いられている表現をまとめる (表 125)。

表 125 接続法未来の産出 (表現別)

接続法表現	PLE		PEAPL2	
	TLU	エラー	TLU	エラー
時間表現	7		24	
条件表現	22	1	23	
様態表現			1	
譲歩表現(定型表現)	1	1	5	
一般関係詞表現	3		4	
主節		1		1
指示関係詞表現				2
不定詞		2		
願望・希求表現				5
反実仮想表現		1		
陳述表現				3
真偽判断評価表現				1
全体	33	6	55	12

非常に多くなっているのが *se* (if) に導入される条件表現(346)と *quando* (when) に導入さ

れる時間表現(347)で、TLU はそれぞれ両コーパス合計 45 例、31 例となっている。

(346) Se eu tiver a possibilidade um dia irei ao Brasil.

if I have<sup>-SBJV-FUT-1SG</sup> ART.DEF possibility one day go<sup>-FUT-1SG</sup> to:ART.DEF Brasil

‘Some day I will go to Brazil if I have the opportunity.’

(PEAPL2, ALEMÃOFRANCÊS.ER.A2.45.1.1A)

(347) Não fica sozinha e quando você quiser tem sempre

alguem com quem pode falar.

not become<sup>-IMP</sup> lonely and when you want<sup>-SBJV-FUT-3SG</sup> have<sup>-PRES-3SG</sup> always

someone with REL can<sup>-PRES-3SG</sup> talk

‘Avoid being alone so that when you want to, you will always have someone with whom to talk.’

(PLE, HU\_1\_02\_6.1B)

これらの表現は接続法未来が導入される際の例として挙げられることが多く (e.g. トイダ, ネーヴェス & 大野 1997; 浜岡 2009; Coimbra & Coimbra 2012; 彌永 2011)、接続法未来のインプットとなる機会が最も多いことが影響していると考えられる。

これらと比べると産出が少なくなっているのが一般的関係詞表現 (7 例)(348)、譲歩の定型表現 (6 例)(349)、様態表現 (誤用 1 例) である。

(348) ... agora eu tenho muito mais tempo para fazer o que quiser.

now I have<sup>-PRES-1SG</sup> much more time to do what want<sup>-SBJV-FUT-1SG</sup>

‘... now I have much more time to do what I want.’

(PEAPL2, INGLÊS.ER.B1.82.33.1J)

(349) Seja como for, cada contacto com outras civilizações ou vida do universo seria um desafio para a humanidade.

be-SBJV-PRES-3SG how be-SBJV-FUT-3SG each contact with other-PL civilizations or life of:ART.DEF universe be-COND-3SG ART.IDEF challenge to ART.DEF humanity

‘However it occurs, every contact with another culture or life presents an encounter with humanity.’

(PLE, VA\_3\_02\_3.1A)

誤用で比較的多くなっているのが願望・希求表現や陳述表現などの動詞補語節内で用いる事例である。

(350) Espero que o gripe suína não \*for grave naquele momento.

hope-PRES-1SG that ART.DEF influenza swine not be-SBJV-FUT-3SG serious in:that moment

‘At that moment, I hope that the Swine Influenza will not be serious.’

(PEAPL2, CHINÊS.CA.B1.02.33.1J)

(351) ... acho que às solteiras nem \*quiserem encontrar os seus homens dos sonhos, ...

think that to:ART.DEF-PL unmarried-PL nor want-SBJV-FUT-3PL meet ART.DEF-PL their men of:ART.DEF-PL dreams

‘... I think that unmarried women have no intention of finding their lovers.’

(PEAPL2, FINLANDÊS.ER.B2.08.50.2L)

(350)、(351)のいずれも動詞補語節表現であるため構造的に接続法未来が許容されず、接続法現在が用いられるべきである。これらの誤用では命題内容の後時性によって、「未来」時制形態が用いられてしまっているものと推測される。

また、反実仮想の文脈で接続法未来が用いられている事例も見られた。

(352) Sería        melhor se tiver                dois o tres    máis locais para ir  
do        compas.  
be-COND-3SG better    if    have-SBJV-FUT-3SG two or three more places to go-INF  
of:ART.DEF shopping

‘It would be better if there were two or more places to go shopping.’

(PLE, ED\_1\_06\_50.2L)

(352)は「もし買い物ができるような場所がもう2、3か所あればよいのだけれど」という反実仮想の表現であり、接続詞 *se* で導入される副詞節内では接続法未来の *tiver* ではなく、接続法未完了過去の *tivesse* となるべきである。これは条件表現、反実仮想表現ともに接続詞 *se* を用いる構造的類似性が影響していると考えられる。

また、(人称)不定詞と混同している事例も見受けられる。

(353) ... queria        fazer um        pequeno trabalho na        Espanha por  
\*puder        pagar um        apartamento ...  
want-IPFV-1SG do-INF ART.IDEF small work in:ART.DEF Spain for  
can-SBJV-FUT-1SG pay ART.IDEF apartment

‘... I wanted to take a temporary job in Spain to be able to pay for an apartment ...’

(PLE, PA\_2\_33\_5.1B)

(353)のような例では、接続法未来の語幹が規則的な動詞は不定詞と同形になることから、形式的な混同をしていることが考えられる。また、前置詞の後に不定詞を続ける表現と、前置詞句による接続詞表現の後に接続法未来を続ける表現を混同する、構造的な混同をしている場合も考えられる。

以上をまとめると、まず、接続法未来は初級から産出が見られる形式であるが、TLU、誤用ともに中級から急激に産出が増える。接続法未来の産出に被験者の母語からの強い影響は考えにくく、被験者の習熟度の影響の方が強いものとみられる。表現別では、各教材で接続法未来の導入で用いられることの多い条件表現や時間表現での産出が圧倒的に多く、一般関係詞表現や様態表現、譲歩定型表現での使用は相対的に少なかった。また、誤用も比較的多く、動詞補語節や主節における誤用、不定詞との混同も見られ、中級以降でも接続法未来が用いられる表現を構造的にも意味的にも理解できていない学習者がいることが確認された。

### 8.3. 直説法未来・過去未来と接続法

ポルトガル語及びロマンス諸語では *irrealis* を表現する動詞形態素として接続法各形式に加え、直説法未来と過去未来も挙げられる。英語ではポルトガル語で接続法が用いられるような表現において直説法過去未来に相当する形式が用いられ、ロマンス諸語でも表現によっては接続法形式から直説法未来・過去未来へと交替が起こっている言語もあるとされる (Giacalone Ramat 1993, Bybee et al. 1994)。本論筆者もポルトガル語学習者として両者の使い分けの理解に苦労した経験があり、実際に日本語母語話者学習者やフランス語母語話者学習者に接続法表現で直説法未来・過去未来を用いてしまう傾向があるという報告もある (福嶋 2005)。

本節では、日本語母語話者に限らず、PLE、PEAPL2 の幅広い言語の母語話者集団によ

る接続法と直説法未来・過去未来との混同をコーパスデータから分析し、学習者の母語、習熟度、及び混同されている表現などを考察していく。

まずは接続法使用において、誤用されていると思わしき事例を挙げる。ただし、直説法未来・過去未来が要求される文脈と直説法現在が要求される文脈の違いは表現構造ではなく、話者の命題への *irrealis* の態度による。従って、明確に非接続法表現によって *irrealis* を表現しようとしている文脈での接続法誤用は判別がしづらい。そのため、ここでは文脈的に直説法未来・過去未来と誤用していると思わしき例を見るにとどめ、集計や統計分析はしない。

(354) A meu ver, leccionar inglês em os países onde ha  
o problema da pobreza \*seja mais importante em  
comparicao com muito dinheiro...

at my see<sup>-INF</sup> teach<sup>-INF</sup> English in ART.DEF-PL countries REL have<sup>-PRES-3SG</sup>  
ART.DEF problem of:ART.DEF poverty be<sup>-SBJV-PRES-3SG</sup> more important in  
comparison with much money

'In my opinion, teaching English in countries that have problem with poverty is more important than providing considerable money ...'

(PLE, ED\_1\_11\_22.1G)

(354)は従属表現ではなく主節における推測、真偽判断の表現である。ここでは動詞は接続法現在の *seja* ではなく直説法未来の *será* または過去未来の *seria* となるべきである。

続いて接続法が用いられる文脈で直説法未来、過去未来が用いられている例を見ていく。まずは各コーパスで産出された直説法未来、過去未来の TLU<sup>80</sup>、及び接続法要求表現別の

---

<sup>80</sup> ただし、非接続法要求表現という点についてのみを判断基準としており、時制面などにおい

誤用をまとめていく（表 126）。

表 126 文脈別直説法未来と過去未来の産出

文脈	PLE		PEAPL2	
	未来	過去未来	未来	過去未来
TLU	90	167	84	157
願望・希求表現			4	2
命令使役表現		1		
仮定想像表現	2			
当為判断評価表現			1	
可能性表現	1	1		
譲歩表現				1
時間表現	4	1	2	2
条件表現	1			
反実仮想		1		1
非指示関係詞		4		
一般関係詞	3	1		2
形態混同		1		
分類不能				1
小計	11	10	7	9
合計	101	177	91	166

直説法未来、過去未来ともに、それぞれが求められる文脈で用いられている事例（TLU）が圧倒的に多く、接続法表現で誤用されている例はそれぞれ各コーパスで 10 例ほど確認できる。両コーパスで共通して多く見られるのは、*quando* (when) に導入される時間表現における直説法未来、過去未来表現である(355)(356)。同表現では習慣的現実的な内容でない限り、接続法未来の使用が求められる。なお、この表現では接続法現在が誤用される例も多く、接続法未来が要求される特殊性を理解できていないものと考えられる（7.3.11 参照）。

て、直説法未来・過去未来以外の直説法形式の使用が適切であるかについての厳密な判断は割愛している。



(355) Quando \*acabarei os cinco meses de bolsa vou volver  
na Romenia.  
when end-IND-FUT-1SG ART.DEF-PL five months of scholarship go-PRES-1SG return-INF  
in;ART.DEF Romania

‘When I complete this five-month scholarship, I will return to Romania.’

(PLE, BU\_2\_39\_7.1B)

(356) ... quando \*seria mais grande gostaria antes da cidade, para ir  
ao cinema, ...  
when be-COND-1SG more big like-COND-1SG before of;ART.DEF city to  
go-INF to;ART.DEF cinema

‘... when I grow up I would like to go to the cinema, before(?) I go to the city, ...’

(PEAPL2, FRANCÊS.ER.B1.155.69.3Q)

PEAPL2 で誤用が多くなっている願望希求表現(357)(358)(359)や、命令使役表現(360)の  
当為判断モダリティの動詞補語節表現は接続法現在が要求される表現であり、明確な誤用  
である。

(357) ... porque quero que \*será um viagem que posso  
remembrar por toda a vida.  
because want-PRES-1SG that be-IND-FUT-3SG ART.IDEF trip REL can-PRES-1SG  
remember-INF for all ART.DEF life

‘... because I want it to be a trip that I will remember all of my life.’

(PEAPL2, ITALIANO.ER.A2.96.75.3S)

(358) Desejo,<sup>81</sup> que tu \*poderias-me visitar.

desire-PRES-1SG that you can-COND-2SG:me visit-IND

'I hope that you can visit me.'

(PEAPL2, ALEMÃO.ER.B1.123.6.1B)

(359) O meu namorado trabalha como dentista e sempre

diz-me que \*teria de comer menos comidas doces ...

ART.DEF my lover work-PRES-3SG as dentist and always

say-PRES-3SG:me-ACC that have-COND-1SG of eat-INF less foods sweet-PL

'My lover works as dentist and always tells me that I should eat less sweets ...'

(PLE, VE\_1\_12\_55.2M)

これは命題内容の後時性や、非現実性 (irrealis) に影響され、推測の意味を持つ直説法未来・過去未来の形式を当てていると考えられる。また、両表現とも指示時間に関わらず直説法未来が用いられている例や過去未来が用いられている例があり、時制の側面からも誤用に統一性は見られない。

一方、仮定想像の動詞補語表現は接続法要求表現とされるが、直説法未来・過去未来が用いられる傾向もある (鳥越 2010, Torigoe 2013)。この表現では PLE で直説法未来・過去未来を用いている例が 2 例見られた(360)(361)。

(360) Me imagino que o Caribe será o máximo...

REFL imagine that ART.DEF Caribbean be-IND-FUT-3SG ART.DEF maximum

'I imagine that the Caribbean Sea would be the largest ...'

(PLE, SA\_1\_05\_25.1H)

---

<sup>81</sup> カンマは元データの記述より。

(361) ..., se imaginarmos que algum dia será descoberta uma civiliza outra civilização no cosmo o que aconteceria.

if imagine-SBJV-FUT-1PL that some day be-IND-FUT-3SG discover-PTCP ART.IDEF civilization other civilization in:ART.DEF cosmo what happen-COND-3SG

‘... if we consider that someday other civilizations in the universe will be discovered, what will happen?’

(PLE, VA\_3\_02\_3.1A)

接続法が用いられるべき *talvez* に続く可能性表現(362)、当為判断評価表現(363)、譲歩の表現(364)でも直説法未来・過去未来が用いられている例が見られた。

(362) Talvez \*será um curso de soziolinguística porque acho que isso é muito interessante.

perhaps be-IND-FUT-3SG ART.IDEF course of sociolinguistics because think-PRES-1SG that it be-PRES-3SG very interesting

‘Maybe it will be the sociolinguistic course because it is very interesting.’

(PLE, HU\_1\_12\_15.1D)

(363) ... é indispensável \*falaremos.

be-PRES-3SG indispensable speak-IND-FUT-1PL

‘... it is imperative to speak.’

(PEAPL2, ALEMÃO.ER.A2.99.75.3S)

(364) Embora não \*gostaria de nie um bocadinho de morar lá ..., há muita festa e são muito divertidas.

although not like-COND-1SG of nothing ART.IDEF little of live-INF there

have<sup>-PRES-3SG</sup> many party and be<sup>-PRES-3PL</sup> very fun<sup>-PL</sup>

‘Although I did not like living there ... there were many parties and they were very fun.’

(PEAPL2, ESPANHOL.ER.B1.62.77.3T)

可能性表現では推測の意味に、当為判断表現では願望・希求表現や命令・使役表現と同様に命題内容の後時性からそれぞれ直説法未来・過去未来が用いられていると考えられる。また、譲歩表現は文脈によっては命題内容が現実にも関わらず接続法が用いられる特殊な表現であるが、ここで直説法未来・過去未来が誤用されている点が興味深い。すなわち、譲歩表現に *irrealis* の形式を用いることが理解できているうえでの誤用であると考えられる。

接続詞 *se* に導入され、接続法未来を要求する条件表現や、接続法未完了過去を要求する反実仮定の表現でも数例、直説法未来・過去未来が用いられている。

(365) Eu penso de viajar muito si o meu desejo de trabalhar  
na África ou na América do Sul \*terá realidade: ...  
I think<sup>-PRES-1SG</sup> of travel<sup>-INF</sup> very.much if ART.DEF my desire of work<sup>-INF</sup>  
in:ART.DEF Africa or in:ART.DEF South America have<sup>-IND-FUT-3SG</sup> reality

‘I will travel if my desire to work in Africa or South America will be realised.’

(PLE, PA\_1\_03\_1.1A)

(366) Se nós teria muito dinheiro, iríamos ao restaurante francês.  
if we have<sup>-COND</sup> much money go<sup>-COND-3PL</sup> to:ART.DEF restaurant French

‘If we had plenty of money, we would go to a French restaurant.’

(PEAPL2, COREANO.CA.A2.90.75.3S)

誤用例を見ると、条件表現では非過去の直説法未来、反実仮想では過去形式の直説法過去未来と、時制面での形式は揃っている。(365)では *se* (*si* と誤記) は非現実的なものではなく、将来実現の可能性が考えられる文脈であるため、接続法未来が標準的には用いられる。(366)は「もしお金があったら」という反実仮想の文脈であるため、接続法未完了過去が用いられるべきである。なお、英語や一部のロマンス語では反実仮想の条件節内に接続法から条件法への交替が見られ (cf. Giacalone Ramat 1993)、また、反実仮想のマーカ―として過去の形式を用いることは言語普遍的な現象であるため (cf. Lyons 1977)、母語や既習言語知識などの影響を受けた誤用であることが考えられる。

接続法現在や接続法未来が用いられるべき非指示または一般関係詞表現で直説法未来・過去未来が使用されている例も散見される。

(367) ... eles necessitam de algo que lhes \*daria direção.

they need-PRES-3PL of something REL ACC-PL give-COND-3SG direction

‘... they need something to give them direction.’

(PLE, SO\_2\_02\_4.1A)

(368) Quería mudar noutra casa que \*ficaria mais lugar silêncio e  
perto da igreja.

want-IPFV-1SG move-INF in;another house REL exist-COND-3SG more place silence and  
near of:ART.DEF church

‘I wanted to move to another house that was in a calmer location and near a church.’

(PEAPL2, UCRANIANO.CA.A1.06.77.3T)

(369) As informações encontradas no internet me ajudam somente a

sonhar o momento da minha partida, o que eu verei  
o que eu comerei ...

ART.DEF-PL informations meet-PTCP in;ART.DEF Internet me help only to  
dream-INF ART.DEF moment of;ART.DEF my belongings what-REL I see-IND-FUT-1SG  
what-REL I eat-IND-FUT-1SG

'The information found on the Internet only allows me to dream momentarily about my belongings, what I would like to see, or what I would like to eat ...'

(PLE, PA\_2\_16\_48.2L)

(370) Sonhava de viver no campo, onde teria podido correr por todos os lados, construir pequenas casas com ramos de arvores e observar a vida dos animais.

dream-IPFV-1SG of live-INF in;ART.DEF country REL can-COND-PFV-3SG run-INF around all-PL  
ART.DEF-PL sides construct-INF small-PL house with branches of woods and  
observe-INF ART.DEF life of;ART.DEF-PL animals

'I dreamt of living in the countryside where I would be able to run around, build a small house with branches, and observe animal life.'

(PEAPL2, FRANCÊS.ER.B1.155.69.3Q)

関係詞節内で直説法未来・過去未来が用いられるのは、先行詞が指示的 (referential) であるが先行詞を修飾する関係詞の内容が *irrealis* の場合である (鳥越 2013a)。(367)(368)は先行詞が不特定・非指示であるために接続法現在が用いられるべきである。また、(369)(370)は定冠詞を伴っているが、解釈的には指示的ではなく一般的であるため、接続法未来が用いられるべきである (cf. Comrie & Holmback 1984)。

全体的に願望表現や命令表現などの当為判断モダリティの表現では、命題内容の後時性

から直説法「未来」が誤用されていることが考えられる。一方、可能性表現や条件表現などの真偽判断モダリティの表現では、接続法と直説法未来・過去未来に共通する *irrealis* の機能から、両形式を混同しているものと考えられる。

次に学習者の習熟度別に見る (表 127)。

表 127 直説法未来・過去未来の産出 (習熟度別)

習熟度	PLE				PEAPL2			
	未来		過去未来		未来		過去未来	
	TLU	エラー	TLU	エラー	TLU	エラー	TLU	エラー
A1	10		60	1	1		6	1
A2					11	2	18	1
B1	4	7	93	14	54	5	110	7
B2					12		14	
C1	25	7	14		6		10	
合計	39	14	167	15	84	7	158	9

これを(被験者集団別産出数) / (被験者集団別総語数) × 100000 で標準化したものが表 128 である。

表 128 習熟度別直説法未来・過去未来の産出 (習熟度別, 標準化スコア)

習熟度 (標準化)	PLE				PEAPL2			
	未来		過去未来		未来		過去未来	
	TLU	エラー	TLU	エラー	TLU	エラー	TLU	エラー
A1					6.47		38.83	6.47
A2	30.42		182.53	3.04	53.72	9.77	87.90	4.88
B1					80.58	7.46	164.14	10.45
B2	12.67	22.17	294.60	44.35	104.58		122.01	
C1	194.48	54.45	108.91		90.61		151.01	

粗頻度（表 125）より、初級での誤用はわずかであることがわかる。さらに標準化した数値（表 126）を見ると、PLE の直説法未来で上級でも誤用が増えているが、全体的には中級（B1 レベル）に誤用が集中している。以上より、初級で直説法未来・過去未来の表現と接続法要求表現を導入された後、中級でそれら进行操作、実践していく中で誤用が増えていることが考えられる。なお、TLU に関して、PLE において直説法未来は上級で産出数が大幅に増え、直説法過去未来は初級から産出が多く、上級では若干落ち込んでいる。これに対し、PEAPL2 ではいずれも中級をピークに産出が落ち着いている。

最後に TLU と接続法要求表現で直説法未来・過去未来を用いている誤用例を被験者の母語別に見ていく（表 129）。

表 129 直説法未来・過去未来の産出（母語別）

母語	PLE				PEAPL2			
	未来		過去未来		未来		過去未来	
	TLU	エラー	TLU	エラー	TLU	エラー	TLU	エラー
ドイツ語			18		14	2	27	4
ドイツ語・スペイン語							3	
ドイツ語・フランス語					2			
バオレ語					1			
バスク語・スペイン語							1	
ブルガリア語	2		1					
カタルーニャ語			1		1			
カタルーニャ語 (バレンシア語)							3	
チェコ語			1		1		9	
中国語					4		3	
中国語(広東語)							3	
朝鮮語		5	8				2	1
クロアチア語							1	
スロヴァキア語					1		1	
スペイン語			29	1	10		14	1
スペイン語・カタルーニャ語							2	



スペイン語・ガリシア語							2	
フィンランド語							2	
フランス語			2		4		15	2
フランス語・ポルトガル語			1				1	
ガリシア語					8		2	
ギリシア語					4			
ヒンディー語							2	
英語	5	1	24	1	17	4	29	
イタリア語	15		29	7	7	1	18	
日本語							1	
コンカニ語			2					
リトアニア語							1	
オランダ語					6		4	
不明			1					
ポーランド語	17		6		1		6	
ポルトガル語	3	5	0	1				
ポルトガル語・スペイン語			2					
ルーマニア語			33		1			
ルワンダ語			2					
ロシア語			7		2		4	
スウェーデン語							1	
ウクライナ語							1	1
合計	42	11	167	10	84	7	158	9

誤用が見られるグループは限られており、各コーパス間での誤用の共通性も見出しにくい。すなわち、母語からの強い影響は考えられにくいと言える。全体的に産出 (TLU) が多いほど誤用も多くなり、ドイツ語、英語、イタリア語母語学習者がこれに当たる。一方で、朝鮮語とポルトガル語 (継承語) 母語話者学習者は TLU が少ないものの誤用が目立っている。また、ルーマニア語やポーランド語は産出が多い一方で誤用が見られない。なお、接続法と直説法未来・過去未来がポルトガル語とほぼ同じ振る舞いをするスペイン語の母語話者学習者も誤用が少ない。

#### 8.4. 日本人学習者の接続法使用と習得

最後に日本語母語話者データから日本人学習者によるポルトガル語接続法習得を考察していく。日本語母語話者データは PEAPL2 にのみ含まれている。被験者は全 12 名で、接続法産出は 10 名による 18 例が確認されている。まずは表現別に見ていく (表 130)。

表 130 日本語母語話者学習者の接続法産出 (表現別)

接続法表現	PEAPL2	
	TLU	エラー
願望・希求表現	2	
陳述表現		1
否定表現	1	
時間表現	3	1
条件表現	1	
真偽判断評価表現	1	
譲歩表現	6	
<i>ou seja</i>	1	
主節		1
合計	15	3

全体的には時間表現、譲歩表現などの副詞節表現が多い。最も多く産出されているのが譲歩の表現である。接続法形式の誤用が見られず、接続表現も *embora*、*mesmo que*、*ainda que* (although, even if) と豊富である。

(371) Quando cheguei cá, embora eu não conhecesse, outras pessoas  
aproximavam-me e fizeram beijinhos para mim.  
when arrive-PFV-1SG here although I not know-SBJV-IPFV-1SG other-PL persons  
approach-IPFV-3PL:me-ACC and do-PFV-3PL kisses to me-ACC

‘Although I did not know them, when I arrived here, people came up to me and kissed me.’

(PEAPL2, JAPONÊS.CA.B1.08.52.2L)

(372) Essas coisas fazem-me sentir melhor mesmo que tenha mau tempo.

these things make-PRES-3PL;me-ACC feel-INF better even that have-SBJV-PRES-3SG bad weather

‘These make me feel better even in the bad weather.’

(PEAPL2, JAPONÊS.CA.B1.50.33.1J)

(373) Ainda que as pessoas de Portugal joguem muito bonito, eles disseram: ...

even that ART.DEF-PL persons of Portugal play-SBJV-PRES-1SG very beautiful they say-PFV-3PL

‘Even though the Portuguese people played very beautifully, they said: ...’

(PEAPL2, JAPONÊS.CA.C1.06.6.1B)

譲歩の *embora* 表現については既習言語として想定される英語の *although* からの影響が考えられるが、*mesmo que* の表現が多く、かつ英語の譲歩表現では叙法対立が発生しないことから、ポルトガル語独特の文法知識として習得がされやすいと考えられる。

次いで、願望・希求表現(374)や時間表現(375)の産出が複数見られる。両表現は全体的に産出、習得がされやすい傾向にあり、日本語母語学習者もその傾向に従っている。

(374) Espero que venhas aqui em Coimbra bebamos Super Bock, uma cerveja de Portugal.

hope-PRES-1SG that come-SBJV-PRES-2SG here in Coimbra and drink-SBJV-PRES-1SG Super

Bock ART.IDEF beer of Portugal

‘I hope that you can come to Portugal and drink SuperBock, a Portuguese beer, with me.’

(PEAPL2, JAPONÊS.CA.C1.06.6.1B)

(375) Quando ter tempolivro e estiver sozinha, vou a café.

when have-INF tempo free and be-FUT-PRES-2SG alone go-PRES-1SG to coffee.shop

‘When I have time and I am alone, I go to the coffee shop.’

(PEAPL2, JAPONÊS.CA.B1.04.33.1J)

時間表現はすべて *quando* (when) に導入される接続法未来表現であった。なお、1 例のみ接続法現在を誤用している例が見られた(376)。

(376) Queria sabê-los até quando \*volte ao Japão.

want-IPFV-1SG know-INF;them until when return-SBJV-PRES-1SG to;ART.DEF Japan

‘I would like to get to know them before I return to Japan.’

(PEAPL2, JAPONÊS.CA.B1.09.52.2L)

その他、全体的に産出が少なかった否定 (理由) 表現(377)や真偽判断評価表現(378)を上級学習者が産出しているが、一方で全体的に産出が多い条件表現の産出が 1 例のみとなっている(379)。

(377) é não porque goste de animais ou de natureza, ...

be-PRES-1SG not because like-SBJV-PRES-1SG of animals or of nature

‘It is not because I like animals or nature, ...’

(PEAPL2, JAPONÊS.CA.C1.03.69.3Q)

(378) É possível que tenhamos saudade de amigos que vivem na cidade.

be<sup>-PRES-3SG</sup> possible that have<sup>-SBJV-PRES-1PL</sup> longing of friends REL live<sup>-PRES-3PL</sup>  
in<sup>ART.DEF</sup> city

‘It is likely that we will miss friends who live in the city.’

(PEAPL2, JAPONÊS.CA.C1.06.69.3Q)

(379) Além disso, se forem a Kamakura, Kanagawa, podem encontrar uma estatua ou escultura de Budda, também no templo.

beyond of:it if go<sup>-SBJV-FUT-3PL</sup> to Kamakura Kanagawa can<sup>-PRES-3PL</sup> meet<sup>-INF</sup>  
ART.IDEF statue or sculpture of Buddha also in<sup>ART.DEF</sup> temple

‘Furthermore, if you go to Kamakura city, in Kanagawa, you can also see the statue of Buddha in the temple.’

(PEAPL2, JAPONÊS.CA.C1.12.50.2L)

誤用は接続法未来に関係するものが前述と合わせて 2 例、主節で接続法現在が用いられているものが 1 例確認された。

(380) Acho que eles \*gostarem muito.

think<sup>-PRES-1SG</sup> that they like<sup>-SBJV-FUT-3PL</sup> very.much

‘I think that they really like it.’

(PEAPL2, JAPONÊS.CF.A2.11.33.1J)

(381) Quando posso apanha o Sol, \*goste de ir ao Parque Verde ...

when can-PRES-1SG catch-IND ART.DEF Sun like-SBJV-PRES-1SG of go-INF to:ART.DEF Park  
Green

‘If it is sunny, I would like to go to Parque Verde.’

(PEAPL2, JAPONÊS.CA.B1.50.33.1J)

(380)は動詞の補語節となる名詞節内で接続法未来が用いられている例で、直説法現在 *gostam* が用いられなければならない<sup>82</sup>。このような陳述の動詞補語節での接続法未来の使用は、命題内容の後時性に影響されて「未来時制」の形式を用いてしまっていることが考えられる。(381)は願望の表現で、直説法現在の *gosto* が用いられるべきである例である。主節での接続法現在の使用については、Terrell et al. (1987) が指摘するように -ar 動詞と -er 動詞、-ir 動詞活用を混同しているか (本論 3.1.2.13.1.2.1 参照)、または願望の意を強調する過去未来を同じ *irrealis* 表現である接続法と混同している可能性が推測される (本論 8.3 参照)。

その他、全体としては産出数の多い表現である願望・希求表現や反実仮想表現の産出が少ない。また、関係詞節における接続法産出は一例も見られない。

次に時制形式別の産出を見る (表 131)。

表 131 日本語母語話者学習者の接続法使用 (時制形式別)

時制形式	PEAPL2	
	TLU	エラー
接続法現在	9	2
接続法未来	4	1
接続法未完了過去	2	
合計	15	3

<sup>82</sup> 主節動詞語彙 (e.g. *acreditar* [believe], *julgar* [judge] など) によっては接続法現在も許容される (Mateus, et al. 2003)。

誤用も含めて接続法現在に産出が集中しているのは、コーパスの学習者全体の傾向に従う結果となっている。これに対し、接続法未来の産出 (*quando* 時間表現、*se* 条件表現) が比較的多くなっている点特徴的である。また、接続法未完了過去はいずれも過去時制として用いられており、反実仮想表現の産出はない。

続いて習熟度別の接続法産出を見る (表 132)。

表 132 日本語母語話者学習者の接続法産出 (習熟度別)

学習者習熟度	PEAPL2	
	TLU	エラー
A1		
A2		1
B1	4	2
B2	1	
C1	10	
合計	15	3

初級から接続法産出が 1 例のみ見られるが誤用となっており、TLU が産出されるのは B1 レベルからである。全体的には上級の C1 レベルに圧倒的に集中している。また、上級では誤用が見られない。

## 8.5. まとめ

本章では分析結果を整理し、5 章で挙げた研究設問に対する考察を行った。表現別の接続法習得傾向については、多くの表現において初級から上級まで接続法産出が大きくは増えない中、命令・使役の表現と反実仮想の表現に緩やかな習得の傾向が見られた。また、各コーパス別の傾向ではあるが、目的表現と非指示関係詞表現になだらかな習得の傾向が、条件表現に中級からの急激な習得の傾向が、一般関係詞表現に中級からの使用開始後、上級での停滞の傾向が見られた。なお、譲歩表現はなだらかな習得の傾向と中級からの急激

な習得の傾向に分かれた。

接続法未来の習得については中級からの急激な使用の傾向と、*se* 条件表現と *quando* 時間表現での産出の集中の傾向が見られた。なお、母語による産出への積極的な傾向は見られないと考えるが、ロマンス語話者による使用頻度が低いことから、使用回避への影響の可能性が推測される。

接続法要求表現への直説法未来・過去未来の誤用については、*quando* 時間表現や、願望・希求などの当為判断表現、さらに非指示的關係詞節表現と一般關係詞節表現に誤用が見られた。ただし、直説法未来・過去未来の使用は大部分が TLU である。また、誤用への母語による強い影響は考えられないと見られる。

最後に日本人学習者による接続法使用について、譲歩表現に多く見られ、接続法未来の産出がコーパス全体と比較すると多く、また、上級学習者に極端に集中していた。ただし、サブコーパスデータが小さすぎるため、データを拡充した上での追調査が必要である。

本論の結果はデータ駆動型の研究であり、問題提起型研究であると言える。今後は各研究設問をより深く考察するために専用のデータを収集し、量質ともに追調査を行う必要がある。



## 第9章 結論にかえて

### 9. 結論にかえて

本論文では第二言語ポルトガル語学習者による接続法習得について、習熟度別の学習者書き言葉コーパスを分析することで疑似的に習得像を考察してきた。また、これに先立ち、ポルトガル語接続法について、形態論的視点による直説法との二項対立ではなく、叙法とモダリティの観点から類似する意味を表現する形式との関係性を交えてまとめてきた。本章では本論の結果をまとめていく。また、本論の方法論での限界や今後の課題を踏まえ、研究テーマの今後の展望を述べる。

#### 9.1. 本論のまとめ

##### 9.1.1. 叙法とモダリティ論から見るポルトガル語接続法

本論前半は主に先行研究からのまとめであるが、ポルトガル語文法では意識されることが少ない、モダリティ研究の知見からの接続法の再考を行った。第1章ではポルトガル語の接続法を時制形式、使用される表現の構造、表現の意味機能の面から多元的に考察した。特に意味機能面における複雑さは、接続法の定義を「心の中で思ったことを表現する形式」など、曖昧なものにとどめさせる要因となっている。これを一元的なモデルで説明するために、スペイン語接続法研究において様々な仮説が提唱されてきたが、多くが直説法と接続法を対等な二項対立として、また時制を束ねる動詞体系の最上位概念として扱う、伝統的な形態主義に基づく考え方に則っていることを確認した。このような二項対立的考え方では、例えば Terrell & Hooper (1974) が批判された疑問文などの中間的な表現における接続法の不使用や、直説法未来・過去未来や法的動詞との違いについての説明に行き詰まってしまう。

そこで第2章ではポルトガル語文法内にとどまらず、一般言語学や対照言語学における叙法とモダリティの研究の観点を援用し、より広い視点から接続法をとらえることを試みた。叙法を動詞形態素の頂点として位置付けていた形態主義的接続法観とは異なり、モダ

リティ研究においては、接続法は一部の動詞語彙や副詞語彙、直説法未来など他の動詞形態素などとともにモダリティを表現する形式の最下位カテゴリーとして分類される。モダリティの意味カテゴリーは、伝統的には命題内容の実現性に関わる真偽判断のモダリティと、命題内容の評価に関わる当為判断のモダリティに二分され、いずれにおいても意味概念が *irrealis* を表現する際に用いられる形式のひとつが接続法である。さらに、主に日本語のモダリティ研究で提唱され、近年ではスペイン語文法でも導入されている、発話・伝達のモダリティと命題めあてのモダリティからなる二段構えのモダリティ理論を援用すると、接続法とは一部表現を除き、命題めあてのモダリティを受ける命題内で *irrealis* のマーカーとして機能する形式であると定義することができる。

関連して第 4 章では、接続法と混同されやすいとされる直説法未来と過去未来を叙法とモダリティの観点から位置づけた。直説法未来と過去未来は歴史的に条件法などの叙法として区分されたこともあり、現代語においても直説法時制ではなく接続法とも異なる第三の叙法であるという主張がなされることもある。本論では第三叙法説の是非には立ち入らないが、両形式をモダリティ研究の視点から考察した。直説法未来・過去未来は接続法と同様、真偽判断モダリティや当為判断モダリティの表現における *irrealis* のマーカーとして機能する。ただし、関係する表現は接続法と比べると狭い。一方で、二段構えのモダリティの考え方から考察すると、両形式は述べ立てや推測、丁寧など発話・伝達のモダリティとしても機能することができる点で、接続法とは大きく異なっている。発話・伝達のモダリティが文を構成する上で不可欠な要素である点を考慮すると、直説法未来・過去未来は発話にとって接続法よりもより本質的な動詞形式であることが考えられる。

以上のように、叙法とモダリティの研究の視点を援用することで、接続法を拡大解釈することなく再定義し、かつ、直説法未来・過去未来、あるいはその他の類似する意味概念を表現する言語形式との差異を機能的にも構造的にも比較することができる。これにより、「心の中で思ったことを表現する形式」のような曖昧な定義を克服することができる。

### 9.1.2. 第二言語ポルトガル語学習者の接続法習得

第7章では2つの書き言葉コーパス、Corpora do Português como Língua Estrangeira と Corpus de Produção Escrita de Português Língua Segunda から得られたデータに基づき、学習者の接続法産出、及び習得について詳細に記述、考察した。接続法はスペイン語、イタリア語、ルーマニア語などのロマンス言語母語話者だけでなく、ポーランド語やチェコ語の東欧言語、ブルガリア語、ギリシア語のバルカン言語、さらには中国語、朝鮮語、日本語などの東アジア言語母語話者にも比較的多く使用が見られた。習熟度別に見ると、初級 (CEFR, A1 レベル) から産出が見られたが、急激に産出が増加するのは中級 (B1 レベル) で、以降上級までは緩やかに増減していた。なお、作文テーマによるバイアスは認められなかった。時制形式別には接続法現在の産出が接続法未来、未完了過去を圧倒しており、時間指示的無標性と表現的な豊かさが影響しているものと考えられる。

第8章では第3章でレビューした接続法習得先行研究から得られた4つの研究設問について、分析結果から考察した。まず、表現別の接続法習得を考察した結果、初級から上級まで緩やかに習得する表現、中級から産出が見られて上級まで産出が伸びる表現、初中級で産出が伸びるが上級で産出が停滞して誤用も増える表現が見られた。

二点目に、ポルトガル語特有の形態素である接続法未来の習得について考察した。中級から大きく産出が増え、母語による産出への積極的な影響は見られなかったが、ロマンス語母語話者による産出回避の傾向が考察された。表現別に見ると、接続法未来学習の際に導入で扱われることが多い *quando* 時間表現や *se* 条件表現で多く用いられていた。一方で、関係詞表現における使用も比較的多く見られた。誤用については主節での誤用や不定詞との混同、さらに願望表現などの動詞補語名詞節内で未来時制として誤用されている例が多く見られた。

三点目に、直説法未来・過去未来の接続法要求表現への誤用を考察した。直説法未来・

過去未来は大多数が直説法が要求される適切な表現で用いられていた。誤用で目立っていたのは接続法未来が要求される *quando* 時間表現や、接続法現在が要求される願望・希求表現などの動詞補語名詞節表現であった。誤用産出が少ないため参考であるが、誤用は中級に多く、母語別にはドイツ語や英語、イタリア語など、規模の大きい被験者集団に見られた。

最後に日本語母語学習者の接続法産出を考察した。特徴的な点は、譲歩表現での接続法産出が多い一方、全体的に産出が多かった願望・希求表現や反実仮想表現における産出が少ない、または全く見られなかった。習熟度別には上級に産出が偏っていた。ただし、被験者数が少なく、データサイズも小さいため、結果は偶然性が強い可能性が高く、データを拡充しての追調査が求められる。

## 9.2. 本論の課題と今後の展望

本論では学習者による接続法産出を広く、詳細に記述してきたが、方法論的に様々な課題を抱えている。まず、コーパス分析などの計量的研究に根本的な課題であるが、産出頻度と学習者の母語や習熟度、文脈表現との間には精密な統計的手法を用いたとしても、相関関係などの数値的有意性までしか認めることはできず、因果関係については推定の域を出ることはできない。最終的な因果関係を求めるには被験者への内省インタビューなど、質的な研究を行って量的研究を補完していくことが望ましい。

次に、本研究ではコーパス検索によって産出された接続法の適切な使用や誤用などを考察してきたが、接続法が用いられるべき文脈で接続法が用いられなかった、「隠れた」誤用についての検証は割愛した。このような隠れた誤用を明らかにすることは、本論のような形式指向の研究を意味指向の研究 (cf. Bardovi-Harlig 2000) へと発展させていくために必須である。これについては、計量的方法論を用いても時間と労力を膨大に費やす作業になってしまうため、分析対象とする文脈を限定して追調査をしていく必要がある。

さらに、接続法習得研究の宿命とも言える、全体的な産出の少なさが挙げられる。各先

行研究とも、書き言葉に限定して収集したり (e.g. Bento 2013)、誘導的なタスクを行ったり (e.g. Stokes 1988, Sanz 2003)、さらには判断型のタスクでデータを収集する (e.g. Gudmestad 2006) など様々な工夫を凝らして接続法の産出を得てきていたが、ポルトガル語学習者コーパスとしては最大規模の PLE、PEAPL2 を用いても、表現によっては 1 例しか接続法が用いられないなど、依然として産出数の確保は課題であり続けていると言える。これは本論のみならず、文や全体の課題であり、PLE と PEAPL2、そして本論では分析対象としていないがリスボン新大学が構築する CAL2 のように、汎用のコーパス収集フォーマットに基づいて、様々なポルトガル語教育、研究機関が長期に渡って学習者コーパスを拡充していく活動、そしてそのためのネットワークの構築が必要である。

方法論的課題が多く残る本論ではあるが、ポルトガル語の分野では事例の少ない以下の二点から意義のある研究であるということを主張したい。まず、叙法とモダリティ論に基づく接続法観の提案である。ポルトガル語研究や教材、文法書における接続法の扱いは主として個別言語内のであり、意味論や対照言語学からの叙法とモダリティの研究成果を反映したものは皆無であると言える。接続法の用法を整理し、かつ直説法との対等な二項対立を排し、直説法未来など類似する意味領域を表現する形式との違いについて言及していくことで、学習者が困難を覚える同領域の理解と習得に寄与できるものとする。

二点目に、本研究には事例の少ないポルトガル語習得研究、叙法習得研究の一例としての大きな意義がある。ポルトガル語の各教材について、主に日本国内で流通するものには学習者の習得順序や誤用の傾向といった情報を考慮しているものはほとんど見られない。学習者の習得の傾向を明らかにすることにより、これを反映したボトムアップ型のシラバスや教材の開発に貢献できることが期待される。特に習得が困難とされる接続法の習得研究は、中級教材の開発に寄与できるものと期待ができる。

## 参照文献

- Alarcos Llorach, E. (1980). *Estudios de Gramática Funcional del Español* (tercera edición). Madrid: Editorial Gregos.
- Alarcos Lorach, E. (1994). *Gramática de la Lengua Española*. Madrid: Editorial Espasa Calpe.
- Andersen, W. R. & Shirai, Y. (1996). The Primacy of Aspect in First and Second Language Acquisition: The Pidgin-Creole Connection. In W. C. Ritchie. & T. K. Bhatia. (eds). *Handbook of Second Language Acquisition*, pp. 527-570. New York: Academic Press.
- Ayoun, D. (2013). *The Second Language Acquisition of French Tense, Aspect, Mood and Modality*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Ayoun, D. & Salaberry, M. R. (2005). *Tense and Aspect in Romance Languages*. Amsterdam: John Benjamin Publishing.
- Bardovi-Harlig, K. (2000). *Tense and Aspect in Second Language Acquisition: Form, Meaning, and Use*. Malden, MA: Blackwell Publishers.
- Bardovi-Harlig, K. (2002). A New Starting Point? Investigating Formulaic Use and Input in Future Expression. In *Studies in Second Language Acquisition*, 24, 189-198.
- Bardovi-Harlig, K. (2004). Monopolizing the Future: How the go-future breaks into will's territory and what it tells us about SLA. In Foster-Cohen, S. (Ed.) *EuroSLA Yearbook: volume 4*. 177-201. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Barros, J. (1971). *Gramática da Língua Portuguesa*. Lisboa: FLUL. (original work published in 1540).
- Bayley, N., Madden, C. & Krashen, S. (1974). Is There a “Natural Sequence” in Adult Second Language Learning? *Language Learning*, 21, 235-243.

- Bechara, E. (2007). *Moderna Gramática Portuguesa, 38ª edição revista e ampliada*. Rio de Janeiro: Lucerna. (original work published in 1961).
- Bello, A. (1847/1988). *Gramática de la Lengua Castellana, destinada al Uso de los Americanos (1)*. Madrid: Arco Libros.
- Bento, C. I. S. (2013). Aquisição de Português Língua não Materna –o Conjuntivo na Interlíngua de Falantes Nativos de Neerlandês. A dissertação de mestrado entregue à Universidade Nova de Lisboa.
- Bybee, J. & Fleischman, S. (eds). (1995). *Modality in Grammar and Discourse*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Bybee, J., Perkins, R., & Pagliuca, W. (1994). *The Evolution of Grammar*. The University of Chicago Press.
- Butt, J. & Benjamin, C. (2000). *A New Reference Grammar of Modern Spanish, 3rd edition*. London: Arnold
- Castronovo, B. J. (1989). The Strange History of *-ría* Form. *Hispania 72*, 378-384.
- Castronovo, B. J. (1989). The Strange History of *-ria* Form. *Hispania 72*, 378-384.
- Coimbra, I. & Coimbra, O. M. (2011). *Gramática Ativa 1*. Lisboa: Lidel.
- Coimbra, I. & Coimbra, O. M. (2012). *Gramática Ativa 2*. Lisboa: Lidel.
- Collentine, J. (1995). The Development of Complex Syntax and Mood-Selection Abilities by Intermediate-Level Learners of Spanish. *Hispania 78*, 122-135.
- Collentine, J. (2010). The Acquisition and Teaching of the Spanish Subjunctive: An Update on Current Findings. *Hispania 93*, 39-51.
- Comrie, B. (1985). *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, B. & Holmback, H. (1984). The Future Subjunctive in Portuguese: a Problem in Semantic Theory. *Lingua 63*, 213-253.

- Correa, M. (2011). Subjunctive Accuracy and Metalinguistic Knowledge of L2 Learners of Spanish. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching 2011, Vol.8, No 1*, 39-56.  
Retrieved from: e-flt.nus.edu.sg/v8n12011/correa.pdf (2015 年 5 月 31 日閱覽)
- Cunha, C. & Cintra, L. F. L. (2007). *Nova Gramática do Português Contemporâneo, 4ª edição revista e ampliada*. Rio de Janeiro: Lexikon. (original work published in 1985).
- Ellis, R. (2008). *The Study of second Language Acquisition, second edition*. Oxford University Press.
- Fleischman, S. (1982). *The Future in Thought and Language*. Cambridge University Press. (re-issued in 2009)
- Giacalone Ramat, A. (1992). Grammaticalization Processes in the area of Temporal and Modal Relations. In *Studies in Second Language Acquisition, 14 (3)*, 297-322.
- Gili Gaya, S. (1943/1961). *Curso Superior de Sintaxe Español; 8. ed.* Barcelona: Publicaciones y ediciones Spes.
- Givón, T. (1994). Irrealis and the Subjunctive. *Studies in Language, 18-2*, 265-337.
- Gudmestad, A. (2006). L2 Variation and the Spanish Subjunctive: Linguistic Features Predicting Mood Selection, in C. A. Klee & T. L. Face (Eds), *The 7th Proceedings of the conference on the Acquisition of Spanish and Portuguese as First and Second Languages*, Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project
- Gudmestad, A. & Geeslin, K. (2013). Second-Language Development of Variable Future-Time Expression in Spanish. In A. M. Carvalho. & S. Beaudrie. (eds). *Selected Proceedings of the 6th Workshop on Spanish Sociolinguistics*, 63-75. Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.
- Housen, A. (2002). A corpus-based study of the L2-acquisition of the English verb system. In S. Granger, J. Hung & S. Pitch-Tyson (Eds). *Computer Learner Corpora*,



- Second Language Acquisition and Foreign Language Teaching*, pp. 77-116.  
Amsterdam: John Benjamin Publishing
- Howard, M. (2008). Morpho-syntactic Development in the Expression of Modality: The Subjunctive in French L2 Acquisition. *Canadian Journal of Applied Linguistics*, 11 (3)
- Howard, M. (2009). Expressing Irrealis in L2 French: A Preliminary Study of the Conditional and Tense-Concordancing in L2 Acquisition. In *Issues in Applied Linguistics*, 17 (2), 113-135.
- Howard, M (2012) From Tense and Aspect to Modality - The Acquisition of Future, Conditional and Subjunctive Morphology In L2 French. In E. Labeau. & I. Saddour. (eds). *Tense, Aspect and Mood in First and Second Language Acquisition*, pp.201-223. Amsterdam: Rodopi.
- Isabelli & Nishida (2005). Development of the Spanish Subjunctive in a Nine-month Study-abroad Setting, *The 6th Proceedings of the conference on the Acquisition of Spanish and Portuguese as First and Second Languages*, Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project. Retrieved from: <http://www.lingref.com/cpp/casp/6/paper1127.pdf>
- Kiparsky, P., and Kiparsky, C. (1971). Fact, in D. D. Steinberg & L. A. Jakobovit (Eds). *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Klein-Andreu, F. (1995). The Painless Subjunctive. In P. Hashemipour, R. Maldonado, and M. van Naerssen (eds). *Studies in Language Learning and Spanish Linguistics: in Honor of Tracy D. Terrell*, pp. 419-430. New York, McGraw-Hill Inc.
- Krashen, Stephan D. (1982). *Principles and Practice in Second Language Acquisition*, Oxford: Pergamon Press
- Langacker, R. W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar: Volume II*. Stanford University Press.

- Leiria, I. (1991). A Aquisição por Falantes de Português Europeu Língua Não Materna dos Aspectos Verbais Expressos pelos Pretéritos Perfeito e Imperfeito. Tese de Mestrado entregue à Faculdade de Letras da Universidade de Lisboa.
- Lyons, J. (1977). *Semantics 2*. Cambridge University Press.
- Maeda, K. (2002). Fatores Determinantes do Subjuntivo em Cláusulas Subjuntivas do Português Brasileiro – Reflexões numa Abordagem Cognitiva e Pragmática. *ANAIS XXXIII (2000)*. 51-67.
- Maeda, K. (2005). Considerações sobre o Valor Cognitivo do Presente do Modo Subjuntivo. *ANAIS XXXV (2002)*, 39-56.
- Maeda, K. (2007). Indicativo e Três Formas de Subjuntivo em Orações Condicionais. *ANAIS XXXVII (2005-2006)*, 39-51.
- Mateus, M. H. M.; Brito, A. M.; Duarte, I.; & Faria, I. H. (eds). (2003). *Gramática da Língua Portuguesa*. Lisboa: Caminho.
- Mithun, M. (1999). *The Languages of Native North America*. Cambridge: Cambridge University Press.
- van Naerssen, M. (1980). How Similar Are Spanish as a First and Foreign Language? In S. D. Krashen & R. C. Scarcella (eds). *Research in Second Language Acquisition*, pp. 146-154. Rowley, MA: Newbury House.
- Otaola Olano, C. (1988). La Modalidad (con Especial Referencia a la Lengua Española). *Revista de Filología Española*, vol. LXVIII, 1/2, 97-117.
- Palmer, F. R. (2001). *Mood and Modality, 2<sup>nd</sup> edition*. Cambridge University Press.
- Raposo, E. B. P.; Bacelar do Nascimento, M. F.; Mota, M. A. C. da.; Segura, L. E.; & Mendes, A. (2013). *Gramática do Português*. Lisboa: Fundação Clouste Gulbenkian.
- Resnick, M. C. (1984). Spanish Verb Tenses: Their Names and Meanings. *Hispania 67*, 92-99.

- Salaberry, R. (1999). *The Development of Past Tense Morphology in L2 Spanish*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Salaberry, M. R. & Shirai, Y. (2002). *The L2 Acquisition of Tense-Aspect Morphology*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Sanz, M. (2003a). The Acquisition Process of Spanish by Native Speakers of Japanese: Non-spontaneous production and comprehension tasks. 『日本語話者のスペイン語習得に関する研究』, 35-83.
- Sanz, M. (2003b). The Acquisition Process of Spanish by Native Speakers of Japanese: Spontaneous production tasks. 『日本語話者のスペイン語習得に関する研究』, 85-162.
- Stokes, Jeffrey (1988). Some factors in the acquisition of the present subjunctive in Spanish, *Hispania* 71.
- Studerus, L. (1995b). Some unresolved issues in Spanish mood use. In *Hispania* 78, 94-104.
- Takagaki, T. (1984). Subjunctive as the Marker of Subordination. In *Hispania* 67, 248-256.
- Terrell, T. D., Baycroft, B., & Perrone, C. (1987). The Subjunctive in Spanish Interlanguage: Accuracy and Comprehensibility. In B. VanPatten, T. R. Dvorak, & J. F. Lee. (eds). *Foreign Language Learning: a Research Perspective*. New York, NY: Newbury House Publishers.
- Terrell, T. D. and Hooper, J. (1974). A Semantically Based Analysis of Mood in Spanish. *Hispania* 57, 484-494.
- Wiberg, E. (2002). Information structure in dialogic future plans: a study of Italian native speakers and Swedish pre-advanced learners of Italian. In R. Salaberry & Y. Shirai (eds.). pp. 285-322.
- Torigoe, S. (2013). Portuguese Future / Future Preterit and Present / Preterit Indicative:

A Collocational Comparison. *Procedia vol. 95*, 195-202.

荒井めぐみ. (2013). 『ブラジル・ポルトガル語文法実況中継』. 彩流社.

石川慎一郎, 前田忠彦 & 山崎誠. (2010). 『言語研究のための統計入門』. くろしお出版.

彌永史郎. (1991). 「ポルトガル語の時称体系」. 『京都外国語大学研究論叢 XXXVIII』, 317-332.

彌永史郎. (2007). 「ポルトガル語の直説法時称」. *ANAIS XXXVII (2005-2006)*, 19-37.

彌永史郎. (2008). 「ポルトガル語の接続法時称」. 『京都外国語大学研究論叢 LXXI』, 166-180.

彌永史郎. (2011). 『新版 ポルトガル語四週間』. 大学書林.

彌永史郎(編). (2013). 『ポルトガル語文法用語小辞典』. Retrieved from: <http://gelp.ciao.jp/GLOSSARIO/paginas/home.html> (2015年5月31日閲覧)

上田博人. (1988a). 「スペイン語の未来形の意味について」. 『東京外国語大学論集 no.38』, 59-72.

上田博人. (1988b). 「スペイン語の未来形の意味」.

Retrieved from: [lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~cueda/kenkyu/bunpo/miraikei.pdf](http://lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~cueda/kenkyu/bunpo/miraikei.pdf) (2015年5月10日閲覧)

香川正子. (2007). 『ニューエクスプレス ブラジルポルトガル語』. 白水社.

亀井孝, 河野六郎, & 千野栄一. (編). (1995). 『言語学大辞典 第6巻術語編』. 三省堂.

高橋都彦. (2009). 『ブラジルポルトガル語の基礎』. 白水社.

高垣敏博. (1982). 「従属標識としてのスペイン語接続法」. 『京都産業大学論集 外国語と外国文学系列 9』, 84-110

武田千香, ホナウヂ・ポリート, & 黒澤直俊. (2014). *Mar e Sol: Curso Básico de Língua Portuguesa, edição revista e ampliada*. 東京外国語大学.

竹原如是. (1984). 「ポルトガル語における接続法」. 『京都外大論叢 24』, 237-252.

- 竹原如是. (1985). 「ポルトガル語における接続法 II」. 『京都外大論叢 25』, 310-331.
- 竹原如是. (1986). 「ポルトガル語における接続法 III」. 『京都外大論叢 26』, 251-268.
- 田所清克, モイゼス・カルヴァーリョ, & ペドロ・アイレス. (2013). 『中級へのブラジル・ポルトガル語文法』. 三修社.
- 出口厚実. (1980). ムードとモード: スペイン語における法制をめぐって. *Estudios Hispánicos vol.7*, 59-71. 大阪外国語大学スペイン・イスパノアメリカ研究室編.
- 出口厚実. (1981). 接続法と陰否性: スペイン語叙法分析の一視点. 『大阪外国語大学学報 第 52 号』, 19-37.
- 出口厚実. (1982). 「スペイン語における叙法と法性」. 『大阪外国語大学学報 56 号』, 1-16.
- 出口厚実. (1986). 「スペイン語に「未来」はあるか? 同格化された法・時制概念をめざして」. *Estudios Hispánicos vol.12*, 1-10. 大阪外国語大学スペイン・イスパノアメリカ研究室編.
- 薦原亮. (2011). 「反事実性と分岐的時間」. 『スペイン語学研究 26』, 129-143.
- 寺崎英樹. (1998). 『スペイン語の構造』. 大学書林.
- 寺崎英樹. (2011). 「スペイン語の認識モダリティ副詞と法・時制の相関」. In 武内道子. & 佐藤裕美. (編). 『発話と文のモダリティ—対照研究の視点から』, pp.207-224. ひつじ書房.
- トイダ, エレーナ; マウロ・ネーヴェス Jr; & 大野隆雄. (1997). 『こうすれば話せるブラジル・ポルトガル語』. 朝日出版社.
- 富野幹雄. & 伊藤秋仁. (2013). 『総合ブラジル・ポルトガル語文法』. 朝日出版社.
- 豊島哲太郎. (1978). 「ポルトガル語の叙実法と叙想法について」. 『上智大学外国語学部 紀要第 13 号』, 111-140.
- 鳥居怜奈. (2000). 「ポルトガル語における人称不定詞の起源」. *ANAIS XXXII (1999)*, 67-78.
- 鳥居怜奈. (2013). 「幹母音」. 彌永史郎 (編) 『ポルトガル語文法用語小辞典』 . Retrieved

- from: [http://gelp.ciao.jp/GLOSSARIO/paginas/KA\\_KO/vogal\\_tem.html](http://gelp.ciao.jp/GLOSSARIO/paginas/KA_KO/vogal_tem.html) (2015年5月31日閲覧)
- 西川喬. (1988). 『スペイン語時制研究史 (1492-1870)』. 神戸市外国語大学外国学研究所.
- 仁田義雄 (1991). 『日本語のモダリティと人称』. ひつじ書房.
- 仁田義雄 & 益岡隆志. (1989). 『日本語のモダリティ』. くろしお出版.
- 野村忠央. (2007). 「英語教育における仮定法教育の問題点」. 『立命館言語文化研究 18 巻 4 号』, 79-94.
- 秦隆昌. (1994). スペイン語の「条件法」相当語形のいくつかの問題について. 『ロマンス語研究 27』, 17-24.
- 浜岡究. (2009). 『明解ブラジル・ポルトガル語 —文法と表現—』. 同学社.
- 浜岡究. (2012). 『ゼロから話せる ブラジル・ポルトガル語[改訂版]』. 三修社.
- 坂東照啓. (1993). 「ポルトガル語の接続法未来に関する基礎的研究」. 『ロマンス語研究 26』, 149-160.
- 福寫教隆. (1990). 「イスパニア語の叙法対立に関する一試論」. 『神戸外大論叢 41(2)』, 51-66.
- 福寫教隆. (2005). ¿Cómo Enseñar el Subjuntivo? 『より良いスペイン語教育をめざして』, 65-88.
- 福寫教隆. (2013). 「日西モダリティ対照研究史(1)」. 神戸外大論叢, 63, 3, 3-11.
- 福寫教隆. (2014). 「日西モダリティ対照研究史(2)」. 神戸外大論叢, 64, 5, 3-18.
- 益岡隆志 (1987). 『命題の文法』. くろしお出版.
- 益岡隆志 (1991). 『モダリティの文法』. くろしお出版.
- 森山卓郎, 仁田義雄 & 工藤浩. 『日本語の文法 3 モダリティ』. 岩波書店.
- 和佐敦子. (2005). 『スペイン語と日本語のモダリティ: 叙法とモダリティの接点』. くろしお出版.

- 渡邊淳也. (2008). 「分岐的時間の表象を用いた時制・モダリティの関連の説明の試み」. 『文藝言語研究・言語篇 54』, 15-44.
- 鳥越慎太郎. (2010). ポルトガル語の直説法未来と過去未来の非直説法性についての考察. 『ロマンス語研究 43号』, 69-74.
- 鳥越慎太郎. (2011). 共起語から見るポルトガル語の直説法未来/過去未来と直説法現在/過去. 『ロマンス語研究 44号』, 39-48.
- 鳥越慎太郎. (2013a). 「ポルトガル語の関係詞表現における叙法選択についての考察」. 『ロマンス語研究第 46号』, 97-102.
- 鳥越慎太郎. (2013b). 「日本人学者によるポルトガル語の直説法未来と過去未来の使用について」. *ANAIS XLII (2012)*, 17-35.
- 鳥越慎太郎 & 大本淳代. (2010). 日本人ポルトガル語学習者の現在分詞使用についての調査と第 3 言語としてのポルトガル語. 『外国語教育研究 第 13号』, 52-65.

## 謝辞

本論文は東京外国語大学外国語学部在学時より学習者として疑問を抱いていた接続法の習得に関する研究の集大成です。ポルトガル語学、第二言語習得研究、各種方法論に関して多くの先生方からのご指導と、同窓の学生の皆様との意見交換の末に、本論文へとたどり着くことができました。

まず、本論筆者の主任指導教官であり、ポルトガル語の世界に誘ってくださった東京外国語大学総合国際学研究院の黒澤直俊先生には研究者としての心構えを、優しく、時には厳しくご指導賜りました。殊に、ポルトガル語を対象とした第二言語習得やコーパス研究など、日本国内ではほとんど関心が寄せられない分野に踏み込んでしまい、孤独な研究を強いられた私を照らし、導いて下さいました。心より感謝申し上げます。

続いて、東京外国語大学総合国際学研究院の吉富朝子先生は、学部生時代以来長きにわたって第二言語習得という研究分野の面白さ、奥深さを教わっただけでなく、卒業論文と修士論文の指導教官として、論文作成や研究発表の基礎技術を鍛えていただきました。特に、博士後期課程時代の的一对一での授業は最新の方法論をご教授いただいた、とても貴重なお時間でした。吉富先生への感謝の思いは筆舌に尽くせません。

また、副指導教官を引き受けて下さいました、東京外国語大学総合国際学研究院の川口祐司先生には、外国語教育学会の活動を通して、本論文の着想に至る研究の機会を多く与えていただきました。心より感謝いたします。

日本国内で数少ないコーパスに基づくポルトガル語文法研究や教材開発に取り組まれている京都外国語大学教授の彌永史郎先生には、玉稿や教材資料のご提供をいただいただけでなく、京都外国語大学における研究会にもお誘いいただき、ご助言や意見交換をいただきました。深く謝意を表します。

また、スペイン語における接続法、及び接続法指導の分野において、常に最先端で研究なされている神戸市外国語大学の福嶋教隆先生からは、学会での発表をお気にかけていた



だき、ご指導やご助言のみならず、玉稿や貴重な資料を賜りました。これらは本研究の先行研究データとして大変重宝いたしました。深く感謝申し上げます。

東京外国語大学総合国際学研究院の投野由紀夫先生からはコーパス研究に関する方法論や関連ツールに関して多くを教わりました。本論文で用いた分析ツールやタグ付けソフトウェアなどのほとんどは、投野先生の授業で出会ったものです。また、ご専門の英語以外の言語である、ポルトガル語での第二言語コーパス研究に関心をお寄せいただき、励ましのお言葉を賜りましたこと、お礼申し上げます。加えて、投野ゼミの精鋭の皆様と学び合えたことも大きな財産です。ポルトガル語学にだけ身を置いてはこの論文は完成し得なかったと言えます。深く感謝申し上げます。

そして、様々な仕事でお世話になっている東京外国語大学客員准教授の Pichitelli Eliseu 先生には、本論例文のネイティブチェックを快諾していただきました。日頃からの感謝の気持ちも込めて、お礼申し上げます。

結びに、企業への就職をせずに大学院生として研究を続けることで、長きにわたり経済的に迷惑をかけ続けた私に対し、不満の言葉を漏らさずに尊重し続けてくれた両親、妹たち、病床の祖母、そして元同窓としても私の人生を理解し、支え合ってくれている妻に、心からの感謝の言葉を贈ります。ありがとうございました。

付録 1 Corpora do PLE / Corpus de PEAPL2 作文テーマ<sup>83</sup>

O Indivíduo		個人
1.1A	Escreva um texto em que se apresente, em que fale das suas características físicas, da sua vida familiar, da sua casa, dos seus gostos e dos seus desejos. Se não quiser falar de si, pode inventar!	あなたの身体的特徴、家庭生活、家族、趣味や願望について紹介する文章を書いてください。もしそれらについて書きたくないようであれば創作しても結構です。
3.1A	Ao longo dos tempos, o Homem já se interrogou várias vezes sobre a possibilidade de não estar só no universo. Os extraterrestres existem? Há quem garanta que já os viu e há quem nem acredite nessa possibilidade. Dê a sua opinião sobre o assunto.	長きにわたって人類は何度もこの宇宙に唯一の存在ではない可能性を思索してきた。地球外生命体は存在するのか。もうすでにそれを見たことがある人、またはそれらを全く信じない人はいますか。あなたの意見を書いてください。
4.1A	São muitas as pessoas que diariamente abrem o jornal para ler a secção do horóscopo. Procuram o seu signo e lêem atentamente as previsões para aquele dia. E você? Também gosta de ler o seu horóscopo? Fale sobre isso, justificando a sua opinião.	多くの人々が毎日星占いを見るために新聞を開く。自分の星座を探し、その日の運勢を注意深く読む。あなたはとうですか。星占いを読むのは好きですか。あなたの意見を添えて書いてください。
5.1B	Fale um pouco de como ocupava o tempo quando era mais pequeno, dos seus amigos e das vossas brincadeiras.	小さかった頃にどうやって過ごしてきたか、幼馴染みや遊びについて書いてください。
6.1B	Escreva uma carta a um amigo que não vê há muito tempo. Recorde momentos passados em conjunto e fale-lhe da sua vida pessoal e profissional actuais.	何年も会っていない友人への手紙を書いてください。一緒に過ごした時間を思い出したり、現在の私生活や仕事についても話してください。
7.1B	Imagine que mudou de casa, de cidade ou de país. Escreva a um amigo seu falando-lhe do assunto, das razões que motivaram essa mudança, das pessoas novas que conheceu, e das modificações que ela trouxe à sua vida.	町や国から引っ越したと想像してください。友人に引っ越しとその動機、引っ越し先で知り合った人や引っ越しによる人生の変化について触れつつ手紙を書いてください。
8.1B	O poeta António Gedeão, num dos seus poemas, escreveu: “O sonho comanda a vida e sempre que o homem sonha o mundo pula e avança.” Concorda com o poeta? Tem algum sonho que gostasse muito de realizar? Como e quando pensa fazê-lo?	詩人の António Gedeão は「夢は人生を導き、夢を見ることで世界は動く」と書いた。これを支持しますか。実現したい夢はありますか。どうやって、また、いつそれを叶えますか。
10.1C	Há certamente uma pessoa, um amigo, uma amiga ou	慕っている、あるいは嫌な人、友人、有名人とい

<sup>83</sup> 和訳は本論筆者による

	alguém famoso, que admira ou que detesta. Trace aqui, por palavras, o seu retrato.	うはいるものです。そのような人物を言葉によって表してください。
<b>15.1D</b>	Imagine que ganhava uma bolsa de estudo para estudar no estrangeiro. Diga que país, que escola e que curso escolheria. Diga também como imagina que iria ser a sua vida nesse novo espaço.	国外留学の奨学金を得たと想像してください。どの国の、どんな学校の、どのコースを選びますか。そこであなたの人生がどのようになっていくかも教えてください。
<b>18.1F</b>	"Quando for grande, quero ser..." Esta é uma frase que ouvimos dizer a muitas crianças e que, provavelmente, você também já disse... Fale sobre este assunto.	「大きくなったら、～になりたい」、子供たちがこういうのを聞きますし、恐らくあなたも言った言葉でしょう。このことについて書いてください。
<b>22.1G</b>	"O dinheiro não dá felicidade, mas ajuda..." Diga aquilo que pensa sobre este assunto.	「お金は幸せをくれないが、助けになる」ということについてどう思いますか。
<b>24.1H</b>	Escreva um texto falando das melhores férias da tua vida. Se nunca teve nenhuma de que tivesse gostado realmente, imagine aquelas que gostaria de ter.	あなたの人生で最も良かった休暇についての文章を書いてください。現実の良いものがなかった場合は、想像してください。
<b>25.1H</b>	Imagine que ganhou muito dinheiro e que tem um mês de férias para gozar. Escreva a um(a) amigo(a) apresentando o seu plano de férias e convidando-o /-a para as passar consigo.	たくさんのお金を稼いで、1か月の休暇を得たと想像してください。友人に休暇の計画を教えつつ、一緒に過ごすよう誘ってみてください。
<b>26.1H</b>	Imagine que uma revista de turismo está a solicitar textos para integrar o espaço "A capital dos meus sonhos!". Descreva a cidade - capital que mais gostou de visitar ou que gostaria de visitar e explique porquê.	とある旅行雑誌が「私の夢の町」という文章を募集していると想像してください。一番お気に入りだった町、または訪れたい町を書き、何故かを説明してください。
<b>31.1I</b>	Em todos os países há festas tradicionais em que muitos de nós gostamos de participar. Fale de uma festa tradicional a que costuma ir.	すべての国々に参加したくなるような伝統的なお祭りがあるものです。いつも参加しているお祭りについて書いてください。
<b>34.1J</b>	Conte um filme ou um espectáculo a que tenha assistido e de que se recorde. Diga porque o escolheu e porque gostou ou não dele.	今までに見て、覚えている映画や演劇について書いてください。何故選んだのか、何故それを気に入っているのか、また好きでないのかを説明してください。
<b>35.1J</b>	Imagine que lê um anúncio de jornal sobre um concurso em que oferecem a possibilidade de participar numa produção cinematográfica. Para concorrer basta descrever o filme de que mais gostou até hoje, explicando porquê. Responda a este anúncio, descrevendo o filme da sua vida e especificando que tipo de papel gostaria de ter no filme caso vença o concurso.	映画制作に参加できるようなコンクールについて伝える新聞記事を想像してください。合格のために、今までに見てお気に入りの映画を書き、何故かを説明してください。あなたの人生の映画についての描写と、合格した場合どんな役を演じたいかについて明らかにしつつ、投稿してください。

<b>37.1J</b>	Nos últimos tempos temos ouvido falar da utilização de livros electrónicos. Diga o que pensa sobre o assunto, indicando as diferenças entre o tradicional livro impresso e o mais recente livro electrónico.	昨今、電子書籍の利用についてよく耳にします。これについてどう思うか、伝統的な紙媒体の本との違いを示しながら説明してください。
<b>39.1J</b>	Há pessoas que não viajam sem um livro como companhia. Para si ler um livro constitui um momento de prazer ou de aprendizagem? Considera que um livro nos pode proporcionar esses dois momentos simultaneamente? Fale sobre o que gosta ou costuma ler.	本を携帯せずには旅行ができないという人がいます。あなたにとって本を読むということは喜びでしょうか、学びでしょうか。それともその両方を与えてくれるものでしょうか。好きな本や定期的と呼んでいるものについて書いてください。
<b>A Sociedade</b>		社会
<b>44.2L</b>	"Em vez do cãozinho, deviam era adoptar uma criança!" Ouve-se muitas vezes esta frase quando alguém passa com um animal de estimação. O que pensa sobre ter animais de estimação, por vezes, até mesmo em pequenos apartamentos na cidade.	「犬を飼う代わりに、養子を受け入れるべきだった」などとペットを飼う人から聞くことがあります。ペットについて、都市部の小さなアパートで飼うことも考慮して、どのように思いますか。
<b>45.2L</b>	O uso do telemóvel, em certas sociedades, transformou-se num vício. Fale das vantagens e desvantagens de ter telemóvel e das circunstâncias que fizeram dele, para muita gente, um produto de primeira necessidade.	ある社会においては携帯電話を使うことは禁忌されている。多くの人にとって最も必要とされる製品である携帯電話を持つことと、その状況がもたらす利点と欠点について書いてください。
<b>48.2L</b>	Com o acesso à Internet cada vez mais facilitado a todos, ouve-se dizer que as pessoas já não precisam de viajar para conhecer outros países e outras culturas. Agora basta um computador ligado à <i>net</i> e a vontade de pesquisar durante horas. Concorda com esta afirmação? Fale-nos sobre o assunto e sobre a sua relação com a <i>Internet</i> .	より容易になっているインターネットへの接続によって、人々は他国や他文化を知るために旅をする必要がなくなったと言われている。現在ではネットに接続したコンピューターと数時間検索する意欲があれば十分である。これに賛成しますか。これについて、またはインターネットとの関係について書いてください。
<b>50.2L</b>	Todos os países são diferentes a nível cultural e geográfico. Descreva o seu país, observando as particularidades das suas regiões, os principais monumentos e saliente alguns dos hábitos mais frequentes da sua cultura.	すべての国々は文化レベルや地理レベルにおいて異なっている。あなたの国を、あなたの地域の特徴、主なモニュメントや見どころ、また最も頻繁な慣習を考察しながら描写してください。
<b>53.2L</b>	As pessoas dão cada vez mais importância à aparência e frequentam centros de estética, salões de cabeleireiros e ginásios. Este cuidado não é reservado só às mulheres,	人々はより外見に重きを置くようになり、エステや美容室、ジムに通うようになっている。この関心は女性に限られたことではなく、男性も自身の

	vemos cada vez mais homens preocupados com o seu corpo. Fale sobre o assunto dando a sua opinião.	体に気を遣うようになってきている。このことについてあなたの意見を書いてください。
<b>54.2L</b>	Nos últimos anos os ginásios encheram-se de gente e o seu número multiplicou-se. Desde os desportos mais comuns às novas alternativas, a oferta é muito variada. Discuta o tema, indicando se frequenta o ginásio, o que pratica e porquê.	近年、トレーニングジムは盛況しており、ジムの件数も増えてきている。昔ながらの種目から新しい種目まで、様々な種目が提供されている。ジムに通っているかどうか、何を、何故練習しているのかを含め、このことについて意見を書いてください。
<b>55.2M</b>	Há, certamente, comidas de que gosta muito e há outras que detesta. Fale disto e daquilo que pensam os seus familiares e amigos sobre o assunto.	好きな食べ物と嫌いな食べ物というものはあるものです。これらについて家族や友人どう思っているかを書いてください。
<b>57.2M</b>	Muitas doenças são motivadas pela alimentação, pela falta ou pelo excesso. Fale desta questão e do desafio que, em todo o mundo, as autoridades enfrentam.	多くの病気は食糧の不足、過剰の問題に動機づけられている。世界じゅうお当局が直面しているこのテーマについて書いてください。
<b>59.2M</b>	Imagine que leu num jornal um anúncio sobre um curso de cozinha mediterrânica, chinesa ou outra. Seria capaz de se inscrever num curso de cozinha ou não? Explique as suas motivações.	新聞を読んで、地中海や中国、その他の料理についての知らせを見たと想像してください。料理教室に入学しますか。あなたの動機を書いてください。
<b>60.2M</b>	Actualmente as grandes cidades propõem-nos tantas ofertas de restaurantes que às vezes é difícil escolher. Dos internacionais restaurantes chineses, japoneses, italianos aos alternativos restaurantes vegetarianos ou <i>fast-food</i> , subsistem ainda os nossos tradicionais restaurantes típicos. Fale sobre o assunto, manifestando as suas preferências.	大都市にはたくさんのレストランの選択肢があり、中にはなかなかお目にかかれないものもある。中華、日本、イタリア料理など国際的なものからベジタリアンレストラン、ファストフード、果ては私たちの伝統料理も今日まで続いている。このことについて、あなたの好みも示したうえで書いてください。
<b>65.2O</b>	Antigamente, cada país tinha a sua economia e consumia os produtos que produzia. Uma das consequências da globalização é o facto de termos à nossa disposição o mesmo produto por um preço muito mais baixo do que aquele que é produzido no nosso país, causando graves problemas de desemprego. Discuta esta questão e sugira formas de atenuar este problema.	かつてはそれぞれの国がそれぞれの経済を持ち、それぞれで生産した製品を消費していた。グローバル化の結果として、同じ製品を自国産出したものよりも少しよりも安いものを求める現実があり、深刻な雇用問題を引き起こしている。このテーマを議論し、問題を軽減できるような案を示してください。
<b>66.2O</b>	Muitas pessoas vêem na emigração uma saída para a sua vida, no entanto, em muitos casos, ao emigrarem, descobrem que a realidade não corresponde ao sonho. Recorde tipos de problemas que se podem encontrar	多くの人は移民することに自分の追い求める人生を見るが、一方で多くにおいて、移民するに際し、理想とは異なる現実に直面する。外国で起こり得る問題を思い起こして下さい。もしよければ、知

	num país estrangeiro. Se quiser, pode ilustrar com um caso que conheça.	っている例を挙げてください。
<b>67.2P</b>	São hoje raros os países em que não há imigrantes. Muitos são explorados e sujeitos a várias formas de discriminação. Aborde esta questão.	今日、移民流入者がいない国というのは稀である。多くの人は詮索され、様々な差別の対象となる。この問題について述べてください。
<b>O Meio Ambiente</b>		環境
<b>69.3Q</b>	Gosta de viver na cidade? Acha que, se pudesse, gostaria mais de vir no campo? Pense em vantagens e desvantagens de viver na cidade ou no campo. Escreva sobre isso.	都会で生活するのは好きですか。もし可能だったら地方の方がいいですか。都会で生活することと地方で生活することの利点と欠点をそれぞれ考え、書いてください。
<b>70.3Q</b>	Actualmente, em muitos países, os habitantes das grandes cidades começam a preferir viver em espaços não urbanos, alegando que aí têm muito mais qualidade de vida. Qual é a sua opinião sobre este assunto? Também trocaria a cidade pelo campo?	多くの国々では大都市の住民たちは都市以外で生活することを求め、非都市部により質の高い生活があると訴えます。このことについてどう思いますか。都市圏から田園地域に移りたいですか。
<b>71.3Q</b>	Nos últimos tempos ouvimos falar muito de agricultura biológica. Diga qual é a sua opinião sobre o assunto.	ここ最近、ビオ農業についてよく耳にします。このことについてどう思いますか。
<b>73.3R</b>	O aquecimento global é um problema que preocupa todos os cidadãos independentemente do país em que vivem. O certo é que cada um de nós pode contribuir para minimizar esse problema. Discuta a questão e sugira pequenos gestos que podem fazer a diferença.	地球温暖化の問題は居住国に関わらず懸念されている問題です。確かなことは、私たち一人一人が温暖化の軽減に貢献できるということです。この問題について議論し、何かを提案してください。
<b>74.3R</b>	O tema Reciclagem é frequente na televisão e nos jornais. Escreva um texto para uma campanha publicitária, convencendo as pessoas a reciclarem os objectos e a colocá-los nos respectivos contentores, indicando os benefícios dessa atitude para o ambiente.	リサイクル問題はテレビや新聞に良く出てきます。人々にリサイクルの環境への利点を示しながら、リサイクルに参加するよう、キャンペーンの文を書いてください。
<b>75.3S</b>	Fale de meios de transporte. Fale daqueles em que já viajou e daqueles em que gostaria de viajar. Se quiser, pode contar uma viagem que tenha feito.	交通手段について書いてください。既に利用したことがあるものや気に入ったものについて書いてください。よろしければ旅行そのものについても書いてください。
<b>78.3T</b>	Qualquer cidade é constituída por bairros com características muito diferentes: antigos, modernos, simpáticos, antipáticos, bonitos, feios, para ricos, para pobres, etc. Fale da sua cidade e descreva o bairro dos seus sonhos.	すべての町は、古かったり近代的だったり、親切だったり不親切だったり、綺麗だったり汚かったり、豊かだったり貧しかったりと、異なる性格の地域からなっている。あなたの町と、理想の町について書いてください。

<p><b>80.3U</b></p>	<p>"Os centros comerciais são um mal necessário!" Actualmente, mais tarde ou mais cedo, qualquer cidade vê nascer centros comerciais ao mesmo tempo que vai desaparecendo o comércio tradicional. Num texto de uma página, diga o que pensa sobre este assunto.</p>	<p>「ショッピングセンターは必要悪である」。どんな街でも早かれ遅かれ、ショッピングセンターが建設され、伝統的な商業が消えていきます。このことへの意見を書いてください。</p>
<p><b>83.3V</b></p>	<p>Actualmente, temos consciência de que a qualidade de um produto é menos importante do que a fama que a publicidade lhe confere. Fale do papel da publicidade no mundo de hoje.</p>	<p>製品の品質は宣伝での文句ほど高くないという意識は誰でも持っているはずです。今日における広告の役割について書いてください。</p>

## 付録 2 作文テーマと接続法産出の回帰分析結果より

### 残差検討

付録 2- 1 PLE 作文テーマと接続法産出の回帰検定残差

サンプル	観測値	推定値	残 差	正規偏差	<2.13	<.222	<.666	.666~1.33
					student 残差	Hii	DFFits	CovRatio
1.1A	39	37.6816	1.3184	0.4206	0.6760	0.6260*	0.8744*	2.8646*
5.1B	10	2.8162	7.1838	2.2920	2.9275 *	0.0970	0.9598*	0.5103
6.1B	12	6.9180	5.0820	1.6214	1.7869	0.0638	0.4665	0.8262
7.1B	15	15.1216	-0.1216	-0.0388	-0.0390	0.0737	-0.011013	1.2281
8.1B	7	8.9689	-1.9689	-0.6282	-0.6346	0.0567	-0.1556	1.1440
10.1C	4	4.8671	-0.8671	-0.2766	-0.2796	0.0772	-0.080888	1.2203
24.1H	13	17.1725	-4.1725	-1.3312	-1.4437	0.0921	-0.4598	0.9661
25.1H	3	4.8671	-1.8671	-0.5957	-0.6078	0.0772	-0.1759	1.1745
34.1J	1	0.7652	0.2348	0.0749	0.0775	0.1232	0.029038	1.2966
37.1J	8	4.8671	3.1329	0.9996	1.0434	0.0772	0.3019	1.0718
45.2L	27	23.3253	3.6747	1.1724	1.3299	0.1854	0.6345	1.1177
50.2L	9	11.0198	-2.0198	-0.6444	-0.6512	0.0560	-0.1587	1.1400
55.2M	5	8.9689	-3.9689	-1.2663	-1.3353	0.0567	-0.3275	0.9635
69.3Q	9	8.9689	0.0311	0.0099	0.0099	0.0567	0.002427	1.2062
70.3Q	9	11.0198	-2.0198	-0.6444	-0.6512	0.0560	-0.1587	1.1400
73.3R	5	6.9180	-1.9180	-0.6119	-0.6202	0.0638	-0.1619	1.1553
75.3S	2	2.8162	-0.8162	-0.2604	-0.2660	0.0970	-0.087189	1.2483
80.3U	6	6.9180	-0.9180	-0.2929	-0.2939	0.0638	-0.076739	1.2015



付録 2- 2 PEAPL2 作文テーマと接続法産出の回帰検定残差

					<2.44	<.444	<.942	.333~1.66
サンプル	観測値	推定値	残 差	正規偏差	Student 残差	Hii	DFFits	CovRatio
1.1A	15	15.1879	-0.1879	-0.0170	-0.0177	0.2046	-0.008971	1.7110
33.1J	141	134.2	6.7579	0.6128	0.7323	0.3462	0.5329	1.7543
50.2L	34	46.1420	-12.1420	-1.1010	-1.2134	0.1211	-0.4505	0.9985
52.2L	36	31.8555	4.1445	0.3758	0.3818	0.1491	0.1598	1.5247
55.2M	1	-1.4796	2.4796	0.2248	0.2473	0.2845	0.1560	1.8640
6.1B	120	131.9	-11.8610	-1.0755	-1.4032	0.3311	-0.9873	1.1536
69.3Q	88	96.1448	-8.1448	-0.7386	-0.7858	0.1649	-0.3492	1.3399
75.3S	4	5.6636	-1.6636	-0.1509	-0.1613	0.2472	-0.092448	1.7925
77.3T	112	91.3826	20.6174	1.8695	2.9279*	0.1512	1.2359	0.2718